

川上憲人教授
退職記念集

令和4年3月

東京大学大学院医学系研究科
精神保健学分野・精神看護学分野

目次

1. 川上 憲人教授 略歴書	1
2. 精神衛生・看護学教室の沿革	5
3. 精神保健学分野・精神看護学分野年表	6
4. 学位取得者	9
5. 研究業績 原著・欧文	24
6. 研究業績 原著・和文	53
7. 研究業績 総説・欧文	56
8. 研究業績 総説・和文	56
9. 研究業績 著書・欧文	65
10. 研究業績 著書・和文	65
11. お祝いのメッセージ（国内）	70
12. お祝いのメッセージ（海外）	215
13. 写真アルバム	246
14. 大学院生企画	266
15. 奥付	

略 歴

氏名 川上憲人 (かわかみのりと)

生年月日 昭和32 (1957)年3月2日 (岡山県生まれ)

学 歴

昭和56年 3月 岐阜大学医学部卒業
 昭和60年 3月 東京大学大学院医学系博士課程 (社会医学専攻) 単位取得済み退学

資 格 ・ 免 許

昭和56年 6月 医師免許取得 (第261811号)
 昭和60年 5月 医学博士 (東京大学医博598号)

職 歴

昭和60年 4月 東京大学医学部 助手 (公衆衛生学講座)
 平成 3年 9月 東京大学医学部 客員研究員 (公衆衛生学講座)
 平成 4年 9月 東京大学医学部 助手 (公衆衛生学講座)
 平成 4年10月 岐阜大学医学部 助教授 (公衆衛生学講座)
 平成12年 7月 岡山大学医学部 教授 (衛生学講座)
 平成13年 4月 岡山大学大学院医歯学総合研究科 教授 (衛生学・予防医学分野)
 平成15年 4月 岡山大学医学部学部長補佐 (兼務、平成17年3月まで)
 平成16年 4月 岡山大学医学部副医学部長 (兼務、平成17年3月まで)
 平成17年 4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 教授 (衛生学・予防医学分野)
 平成18年 4月 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻 教授 (精神保健学分野)
 平成19年 4月 東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻 教授 (精神保健学分野)
 平成25年 4月 東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻 専攻長 (兼務、平成30年3月まで)
 平成25年 4月 東京大学大学院医学系研究科 副研究科長・副医学部長 (兼務、令和3年3月まで)

海 外 渡 航 歴

平成 2年 1月～平成 3年 8月 米国テキサス大学公衆衛生大学院 (客員研究員) 休職研修

委員・役員など

(審議会・委員会歴)

平成11年 4月 1日 労働省「労働者のメンタルヘルス対策に関する検討委員会」委員 (平成12年5月まで)
 同 13年 4月 1日 厚生労働省「自殺防止対策有識者懇談会」委員 (平成14年12月まで)
 同 15年 7月 1日 厚生労働省「地域におけるうつ対策検討会」構成員 (平成16年3月まで)
 同 18年 4月 1日 人事院心の健康づくり研修専門家会議委員 (平成18年9月30日まで)
 同 21年 4月28日 総務省人事・恩給局福祉厚生施策の在り方に関する研究会構成員 (平成22年3月31日まで)
 同 22年 5月31日 厚生労働省労働基準局職場におけるメンタルヘルス対策検討会参集者 (平成23年3月31日まで)
 同 23年 7月11日 厚生労働省労働基準局職場のいじめ・嫌がらせ問題に関する円卓会議・ワーキンググループ委員 (平成24年1月31日まで)
 同 26年 7月 7日 厚生労働省労働基準局ストレスチェック項目等に関する専門検討会参集者 (平成26年9月9日まで)

同 26年10月 3日 厚生労働省労働基準局ストレスチェック制度に関わる情報管理及び不利益取扱い等に関する専門検討会参集者 (平成26年12月15日まで)
 同 26年10月10日 厚生労働省労働基準局ストレスチェックと面接指導の実施方法等に関する専門検討会参集者 (平成26年12月15日まで)
 同 27年 9月25日 厚生労働省労働基準局 産業医の在り方に関する検討会参集者 (平成28年10月6日まで)
 同 29年 5月19日 厚生労働省労働基準局 職場のパワーハラスメント防止対策についての検討会委員 (平成30年3月27日まで)
 同 30年 1月24日 厚生労働省厚生労働科学研究費障害者政策総合研究事業 (精神障害分野) 評価委員
 令和元年11月 9日 厚生労働省厚生労働科学研究費障害者政策総合研究事業 (精神障害分野) 事前評価委員 (令和3年11月8日まで)
 同 3年 2月 1日 厚生労働省厚生労働科学研究費障害者政策総合研究事業 (精神障害分野) 中間事後評価委員 (令和5年1月31日まで)
 同 3年 6月 7日 警察庁長官官房教養厚生課 令和3年度警察職員の職場環境に関する調査研究委員会 委員長 (令和4年3月31日まで)
 同 3年 6月28日 みずほリサーチ&テクノロジーズ(株) (厚生労働省委託) ストレスチェック制度の効果検証に係わる調査等事業 検討委員会座長 (令和4年3月15日まで)
 同 3年10月 1日 (株) インテージリサーチ (厚生労働省委託) 新型コロナウイルス感染症に係わるメンタルヘルスとその影響に関する調査 検討会委員・委員長 (令和4年3月31日まで)
 同 3年11月 9日 厚生労働省厚生労働科学研究費障害者政策総合研究事業 (精神障害分野) 事前評価委員 (令和5年11月8日まで)

(地方公共団体 会議・委員等役員歴)

平成19年10月 1日 静岡県自殺対策連絡協議会委員 (令和元年9月30日まで)
 同 20年10月 1日 日本学術会議連携会員 (現在に至る)
 同 20年10月 1日 江戸川区自殺防止連絡協議会委員 (平成23年3月31日まで)
 同 29年 6月29日 東京都産業労働局就業施策担当部職場のメンタルヘルス対策推進事業検討会議委員・委員長 (現在に至る)
 令和 2年 2月 The World Health Organization. Guideline Development Group (GDG) for Mental Health and Work メンバー
 令和 3年 3月10日 東京都政策企画局 「東京都と大学との共同事業」 審査委員会 委員 (令和3年3月31日まで) (現在に至る)

(学会等・民間役員歴)

平成 4年10月 1日 日本行動医学会理事 (現在に至る)
 同 4年10月 1日 日本産業ストレス学会理事 (現在に至る)
 同 9年 4月 1日 日本ストレス学会理事 (現在に至る)
 同 16年 1月 1日 日本疫学会理事 (平成30年1月まで)
 同 18年 4月 1日 大阪商工会議所メンタルヘルス・マネジメント検定委員会委員 (現在に至る)
 同 18年 5月25日 中央労働災害防止協会事業場におけるメンタルヘルス対策評価検討委員会委員 (平成19年3月31日まで)
 同 19年 7月 2日 中央労働災害防止協会事業場内メンタルヘルス推進者テキスト編集委員会委員 (平成20年3月31日まで)
 同 19年 7月17日 (社) 全国労働衛生団体連合会検診機関用マニュアル作成委員会委員 (平成20年3月31日まで)

同	20年 1月 1日	中央労働災害防止協会働く人の健康保持増進推進会議「THP指導者養成専門研修カリキュラム・テキスト検討専門部会」委員 (平成20年3月31日まで)
同	20年 3月 1日	(独)労働安全衛生研究所労働安全衛生重点研究推進協議会委員 (平成21年3月31日まで)
同	20年 4月 1日	中央労働災害防止協会事業場内メンタルヘルス推進者テキスト編集委員会委員 (平成21年3月31日まで)
同	20年 4月 1日	(社)全国労働衛生団体連合会全衛連メンタルヘルス専門委員会(仮称)の特別委員 (平成22年3月31日まで)
同	20年 4月 1日	(財)精神・神経科学振興財団厚労科研:こころの健康科学研究事業「戦略研究課題(自殺対策のための戦略研究)」進捗管理委員会委員 (平成22年3月31日まで)
同	20年 6月 1日	(社)全国労働衛生団体連合会メンタルヘルス復職支援検討委員会(仮称)委員長 (平成21年3月31日まで)
同	20年 6月18日	中央労働災害防止協会心の健康問題により休業した労働者の職場復帰支援のための方法等に関する検討委員会委員
同	21年 3月	国際産業保健学会(International Commission on Occupational Health)理事 (平成27年3月まで)
同	21年 5月	日本産業衛生学会 理事 (平成23年5月まで)
同	21年 6月25日	中央労働災害防止協会メンタルヘルス教育研修担当養成研修テキスト検討委員会委員 (平成22年3月31日まで)
同	21年 7月22日	産業医科大学メンタルヘルスサービス認定委員会委員 (現在に至る)
同	21年12月 1日	(独)労働安全衛生総合研究所外部評価委員 (平成23年10月30日まで)
同	22年 8月24日	国際行動医学会 (International Society of Behavioral Medicine) 理事長 (平成24年8月23日まで)
同	25年 5月14日	日本産業衛生学会 理事(現在に至る)
同	26年11月30日	日本産業ストレス学会 理事長(令和2年12月5日まで)
同	29年 5月11日	日本産業衛生学会 理事長(令和3年5月18日まで)
令和	3年 6月30日	日本医学会 幹事(令和5年6月まで)
同	3年 7月 2日	国立研究開発法人国立がん研究センター研究開発費運営委員会委員 (令和5年3月31日まで)
同	3年10月10日	国立研究開発法人国立がん研究センター研究所テニュア付与審査委員会に係わる評価委員 (令和4年3月31日まで)
同	3年12月 1日	国立研究開発法人国立がん研究センターがん対策研究所外部評価委員会委員 (令和5年11月30日まで)

賞罰

平成21年10月 1日	中央労働災害防止協会緑十字賞
同 25年11月16日	日本産業ストレス学会 学会賞
同 25年 5月15日	日本産業衛生学会 学会賞
同 25年11月 1日	日本医師会 医学賞
令和元年 7月 5日	厚生労働省大臣表彰 功績賞
令和 2年 4月29日	紫綬褒章
同 3年 6月 7日	国際行動医学会 (International Society of Behavioral Medicine) Lifetime Achievement Award
同 3年10月27日	中央労働災害防止協会 顕功賞

東京大学大学院医学系研究科・医学部
精神保健学分野、精神看護学分野、精神衛生・看護学教室の沿革
(教室開設から川上 憲人教授着任まで)

1953年(昭和28年)	4月	医学部所属として衛生看護学科が設置される
1956年(昭和31年)	4月	臨床医学看護学第四講座が開設される
1957年(昭和32年)	4月	笠松 章教授着任
1958年(昭和33年)	5月	東京大学医学部創立百年式典が行われる
1961年(昭和36年)	3月	医学部図書館が竣工
1964年(昭和39年)	4月	生物系研究科に衛生看護学専門課程修士課程が設置される
1965年(昭和40年)	4月	衛生看護学科より保健学科に改組 精神衛生学講座と名称変更。大学院も生物系研究科から医学系研究科へと改組、保健学専門課程が新設
1967年(昭和42年)	2月	医学部3号館竣工に伴い、一部屋を確保して主に分院にて活動した。教室の修士論文修了者が2名誕生
1968年(昭和43年)	1月	医学部紛争が始まる。10月に医学部3号館が一部の学生に封鎖される
1969年(昭和44年)	1月	医学部3号館の封鎖解除、安田講堂も攻防の末、解除
1970年(昭和45年)	11月	教室初の論文博士取得者誕生
1971年(昭和46年)	4月	土居 健郎教授着任。分院から全面的に医学部3号館に移転
1976年(昭和51年)	3月	教室初の課程博士取得者誕生
1977年(昭和52年)	4月	東京大学創立百周年
1980年(昭和55年)	10月	逸見 武光教授着任
1981年(昭和56年)	10月	医学部3号館別棟完成
1985年(昭和60年)	3月	保健学科創立20周年記念式典
	4月	佐々木 雄司教授着任
1992年(平成4年)	4月	栗田 廣教授着任。健康科学・看護学科となり、精神衛生・看護学教室と名称変更。精神看護学も担当することとなる。
1996年(平成8年)	4月	大学院重点化のため、保健学専攻が健康科学・看護学専攻に改組、それに伴って、精神保健学分野および精神看護学分野となる。
2003年(平成15年)	6月	学科50周年記念式典を開催
	7月	同窓会メーリングリストの運用開始
2006年(平成18年)	4月	川上 憲人教授着任(2005年10月から兼担)
2007年(平成19年)	4月	公共健康医学専攻(専門職大学院)が設置される
	7月	教室50周年記念式典・シンポジウムを開催(山上会館)

(注：教室50周年記念誌から転載)

精神保健学分野・精神看護学分野 年表
(川上憲人教授在任期間)

2006(平成18)年	
4月1日	川上 憲人教授が岡山大学医歯薬学総合研究科から着任
	大島 巖准教授が日本社会福祉事業大学教授に転出
8月1日	熊耳(上原) 彩事務補佐員を採用(～2011年7月;2011年9月～2017年6月、特任専門職員)
10月1日	島津 明人准教授が広島大学から着任
2007(平成19)年	
4月1日	東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻が設置される
5月16日	上田 香子事務補佐員を採用(～2010年5月;2010年6月～2012年5月、2012年10月～2013年3月、学術支援職員)
7月7日	東京大学精神衛生・看護学教室50周年記念シンポジウム「精神保健の100年:50年の到達点と今後50年の挑戦」開催(東京大学山上会館)
8月	医学部3号館の耐震工事のため一時2号館に移転(～平成20年8月)
2008(平成20)年	
8月	医学部3号館の耐震工事の一時移転から3号館に復帰
10月1日	上田 英基子学術支援職員を採用(～2009年1月;2009年2月～2010年5月事務補佐員;2010年6月～2012年6月、2017年10月～2019年7月、学術支援職員)
12月5～6日	第16回日本産業ストレス学会大会「産業ストレス対策の国際標準」開催(東京大学医学部教育研究棟鉄門記念講堂)
2009(平成21)年	
1月16日	菅 知絵美事務補佐員を採用(～2009年2月;2009年2月～2011年6月、学術支援職員)
4月	オランダ・ユトレヒト大学 Wilmar B. Schaufeli 教授滞在
7月5日	土居 健郎元教授ご逝去(享年89歳)
6～7月	オランダ・アイントホーヘン工科大学 Jan de Jonge 教授が滞在、講演
9月	平成21～25年度 文部科学省科学研究費新学術領域研究(研究領域提案型)「現代社会の階層化の機構理解と格差の制御:社会科学と健康科学の融合」(略称名「社会階層と健康」)発足(領域代表 川上憲人)
10月12日	「土居 健郎先生を偲ぶ会」開催(東京プリンスホテル)
11月	オランダ・ユトレヒト大学大学院 Laura Krulder さんが短期研究生として滞在(～2010年4月)
2010(平成22)年	
9～12月	インドネシア・ユダヤナ大学 医学部の Susy Purnawati 講師が客員研究員として滞在
2011(平成23)年	
2月1日	二上 恵子学術支援職員を採用(～2014年3月)
3月11日	東日本大震災
3月11～12日	第17回日本行動医学会学術総会「～ソーシャルインクルージョンの行動科学～」開催(東京大学医学部教育研究棟鉄門記念講堂)(初日午後のプログラム中に東日本大震災が発生し避難し、学会中止となる)
4月1日	井上 彰臣特任研究員(精神保健学分野)が着任
7月1日	井上 彰臣特任研究員が産業医科大学助教に転出
7月1日	菅 知絵美特任研究員(精神保健学分野)が着任(～2015年3月)
2012(平成24)年	
4月	次の5年間に向けての教室の活動指針を公表
4月1日	関屋 裕希特任研究員(精神保健学分野)が着任(～2019年3月)

	環境省原子力災害影響調査等事業（放射線の健康影響に係る研究調査事業）による福島県住民の放射線健康不安と心の健康との関係に関する研究を開始
4月29日～5月1日	国連大学、国連経済社会局、東京大学による「心の健康、障害および開発に関する専門家会議」をクアラルンプール（マレーシア）で開催
5月	陸前高田市消防団員および消防署員への震災後サポート（東京大学救援・復興支援室登録プロジェクト）開始
5月19日	カナダ・アカディア大学 Michael Leiter 教授による講演会
9～10月	公開講座「職場のメンタルヘルス専門家養成プログラム」（TOMH）基礎コース第1回を開催
11月	（公財）日本生産性本部と共同で「健康いきいき職場づくりフォーラム」を設立
2013（平成25）年	
4月1日	今村 幸太郎特任研究員（精神保健学分野）が着任（～2019年3月） 梅田 麻希特任助教（精神保健学分野）が着任
10月	「世界精神保健日本調査セカンド」調査開始（2013～2015年）
12月18日	東京大学国際精神保健レクチャーシリーズ(UTokyo Global Mental Health & Well-being Lecture Series) の第1回を開催
2014（平成26）年	
4月26日	日本産業衛生学会関東地方会第265回例会を開催（東京大学医学部教育研究棟鉄門記念講堂）
6月16日	北川 砂織学術支援職員を採用（2012年6月～2017年6月）
10月30日	ロンドン大学 Vikram Patel 教授（現在ハーバード大学医学部教授）による講演会とシンポジウム
11月26日	米国・クレアモント大学 Mihaly Csikszentmihalyi 教授による講演会
2015（平成27）年	
1月13日	「マンガを使ったインターネット認知行動療法がうつ病のリスクを1/5に減らす」ことをプレスリリース
3月17日	森 俊夫助教がご逝去（享年57歳）
4月1日	今村 幸太郎特任助教（精神保健学分野）が着任
	梅田 麻希特任助教が聖路加看護大学大学院看護学研究科・准教授（地域看護学）に転出
	足立 英彦特任研究員（精神保健学分野）が着任（～2016年4月）
6月1日	酒井 理花学術支援職員を採用（～2017年3月）
10月1日	高野 歩特任助教（精神保健学分野）が着任
11月1日	宮本 有紀講師が准教授（精神看護学分野）に昇進
2016（平成28）年	
2月	米国・アイオワ大学大学院 Daniel Denton Goering さんが特別研究学生として滞在（～2017年1月）
3月	オランダ・ユトレヒト大学 Wilmar B. Schaufeli 教授滞在、シンポジウム開催
4月1日	馬場 俊明助教（精神保健学分野）が着任
	石川 華子特任研究員（精神保健学分野）が着任（～2017年3月）
	横山 佳奈子学術支援職員を採用（～2017年3月）
7月1日	中川 由美子学術支援職員を採用（～2019年3月）
8月1日	深澤 舞子特任研究員（精神保健学分野）が着任
11月1日	渡辺 真弓学術支援職員を採用（～2017年3月）
2017（平成29）年	
3～7月	オランダ・ユトレヒト大学大学院 Vos Joeri さんが特別研究学生として滞在
4月1日	今村 幸太郎特任助教が特任講師（精神保健学分野）に昇任
	島津 明人准教授が北里大学一般教育部人間科学教育センター教授に転出
6月1日	南澤 三恵子学術支援職員を採用（～現在に至る）

9月	「スマホゲームアプリ Pokémon GO は労働者の心の健康の保持・増進に有効」をプレスリリース
2018年（平成30）年	
1月1日	呉 心之学術支援職員を採用（～現在に至る）
4月1日	西 大輔准教授（精神保健学分野）が着任
	高野 歩特任助教が横浜市立大学医学部看護学科精神看護学准教授に転出
	馬場 俊明助教が国立精神神経医療研究センター精神保健研究所室長に転出
	渡辺 和広特任助教（精神保健学分野）、稲垣晃子特任助教（精神看護学分野）が着任
	清水 悦子学術支援職員を採用（～現在に至る）
4月16日	渡辺 和広特任助教が助教に着任
2019（平成31/令和元）年	
1月	中嶋 美喜子技術専門職員が退職
2020（令和2）年	
3月	新型コロナウイルス感染症に関わる全国労働者オンライン調査(E-COCO-J)を開始
4月1日	澤田 宇多子特任助教が着任
4月	新型コロナウイルス感染症流行のため教室ゼミ、スタッフ会議などがオンラインでの実施に
5月	新型コロナウイルス感染症流行のため増加している労働者・地域住民に向けたストレスマネジメントのウェブサイト「いまここケア」を公開
2021（令和3）年	
4月1日	渡辺 和広助教が北里大学医学部講師として転出
	稲垣 晃子特任助教が東京医療保健大学講師として転出
	深澤 舞子特任研究員が福島県立医科大学健康増進センター准教授に転出
	帯包 エリカ特任助教が着任
5月1日	西 大輔准教授が、国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所公共精神健康医療研究部の部長を兼務（クロスアポイントメント）
6月18日～8月31日	職場のメンタルヘルスガイドライン作成のための系統的レビュー作業の委託契約をWHOと締結（Systematic reviews relating to organizational interventions for the development of the WHO mental health and work guideline）
7月3日	D&I 科学研究会（保健医療福祉における普及と実装科学研究会）第6回学術集会「デジタル予防介入とD&I科学」主催（オンライン）
2022（令和4）年	
2月	社会連携講座「デジタルメンタルヘルス講座」設置が教授総会で承認される
3月4日	川上 憲人教授最終講義

修士論文	氏名	題名	指導教員
2006 年度	松長 麻美	精神障害者のセルフスティグマに関連する要因 Factors relating self-stigma among people with mental illness	川上 憲人
	笥田 進一	家族機能が親子間での子どもの問題行動評価の差に与える影響 Effects of Family Functioning on Discrepancy in Assessment of Adolescent Problem Behaviors between Adolescents and Their Parents	川上 憲人
	須藤 杏寿	日本の一般地域住民における外傷体験および外傷後ストレス障害の頻度とリスクファクター：WHO 世界精神保健疫学日本調査から Traumatic Events and Post-traumatic Stress Disorder in Community Residents in Japan: From the World Mental Health Japan Survey 2002-2003	川上 憲人
	深澤 舞子	日本の都市部における自殺率と精神科医療に関する生態学的研究 Suicide Rate in Relation to Psychiatric Care in Japanese Urban Areas: An Ecological Study	川上 憲人
	佐々木 和之	八丈島における統合失調症患者の長期予後に関する研究—町立八丈病院精神神経科外来患者を対象として— Long-term outcome of schizophrenic patients in the HACHIJHO—Island A study of outpatients	川上 憲人
2007 年度	井上 快	社会経済的要因と自殺との関連：心理学的剖検による症例・対照研究 Socioeconomic Factors Associated with Suicide in Japan: A Psychological Autopsy Case-Control Study	川上 憲人
	井上 彰臣	The Relationship between Job Stressors and Oxidative DNA Damage: Using Urinary 8-hydroxy-2'-deoxyguanosine as a Biomarker 職業性ストレス要因と DNA の酸化的損傷との関連に関する研究—尿中 8-ヒドロキシ-2'-デオキシグアノシンを指標として—	川上 憲人
	小川 雅代	外来通院中の統合失調症および2型糖尿病を有する人の血糖コントロールと糖尿病セルフケアに影響する要因 Factors associated with glycemic control and diabetes self-care among outpatient individuals with schizophrenia and type 2 diabetes	川上 憲人
	島田 恭子	Balancing work and family among Japanese dual-earner couples with preschool children: Evidence from large cross-sectional study 未就学児を持つ共働き夫婦のワーク・ライフ・バランス：大規模横断研究のエビデンスから	島津 明人
	宮中 大介	An Item Response Theory analysis of the Utrecht Work Engagement Scale among Dutch and Japanese workers ユトレヒトワークエンゲージメント尺度のオランダ人労働者と日本人労働者間の項目反応理論を用いた検討	島津 明人

	Miller Tamara Ruth	Brief Psychotherapy, Neuro Linguistic Programming: an invisible Public Health Resource ブリーフサイコセラピー神経言語プログラミング：公衆衛生の目に見えないリソース	川上 憲人
2008 年度	北詰 晃子	Effects of behavioral therapy on sleep of people with schizophrenia in the community: A randomized controlled trial 地域で生活する統合失調症患者への睡眠行動療法の効果：無作為化比較試験	川上 憲人
	千葉 理恵	Reliability and validity of the Japanese version of the Recovery Assessment Scale for people with chronic mental illness 慢性精神疾患を有する人を対象とした、日本語版リカバリー評価尺度の信頼性・妥当性の検討	川上 憲人
	窪田 和巳	Association between workaholism and sleep quality among Japanese nurses 看護師におけるワーカホリズムと睡眠の質との関連	川上 憲人
2009 年度	木戸 芳史	Social capital and stigma toward people with mental illness in Tokyo 東京都におけるソーシャルキャピタルと精神疾患を持つ人々に対するスティグマ	川上 憲人
	今村 幸太郎	職場用双極性障害スクリーニング尺度の作成 Development of Workplace Bipolar Inventory	川上 憲人
	津野 香奈美	Reliability and Validity of the Japanese Version of the Negative Acts Questionnaire 職場のいじめ日本語版尺度の開発における信頼性・妥当性の検証	川上 憲人
	黒田 光代	上司・部下間のクロスオーバー効果に関する検討 Crossover of Work Engagement among supervisors and subordinates	島津 明人
	桜井 桂子	The impact of subjective and objective social status on psychological distress among men and women in Japan 日本の男女における主観的または客観的社会階層と心理的ストレス反応との関連	川上 憲人
2010 年度	高野 歩	Reliability and validity of the Japanese version of the Drug and Drug Problems Perception Questionnaire for nurses. 看護師の薬物使用者に対する仕事における態度評価尺度日本語版の信頼性・妥当性の検討	川上 憲人
	永野 拓馬	建設業における労働者のワーカホリズムとパフォーマンスとの関連 Relationship between workaholism and job performance among Japanese workers in the construction industry	島津 明人
2011 年度	西本 真寛	共働き夫婦におけるワーク・ライフ・バランスとその関連要因の検討 Examining Antecedents of Work Life Balance among Japanese Dual-earner Couples	島津 明人

	吉村 健佑	職場におけるメンタルヘルスの第一次予防対策に関する費用便益分析 Cost-benefit analysis of primary prevention programs for workplace mental health	川上 憲人
	岡本 真澄	How does child abuse have an impact on adulthood household income in the U.S., Japan, Colombia?: Findings from the World Mental Health Surveys アメリカ、日本、コロンビアにおいて、児童虐待の経験は成人期の家計収入にどれほど影響を与えるのか? ~世界精神保健調査の解析からわかったこと~	川上 憲人
	江口 のぞみ	性同一性障害を有する人の自殺念慮が消失または軽減していくプロセスに関する質的研究 The relieving process of suicidal ideation among people with gender identity disorder: A qualitative study	川上 憲人
2012 年度	時田 征人	気分障害により休職中の労働者における電子メールセルフ・モニタリング支援の効果: 予備的研究 Effects of e-mailed support for self-monitoring among workers on sick due to mood disorder: A pilot study	川上 憲人
	後藤 恭平	日本の養護教諭における仕事から家庭への葛藤と就業状況との関連 Relations between Work Interference with Family and the employment conditions among Japanese school nurses	川上 憲人
	山岸 みずほ	事業場におけるメンタルヘルス対策の実施状況 —事業場規模および産業保健スタッフの有無との関連性の検討— Current Status of Worksite Mental Health Care: Relevance of Worksite Size and The Presence of Occupational Health Staff	川上 憲人
	下田 陽樹	被災地における K6 尺度の心理測定的特性および属性別得点分布の特徴: 被災地データおよび一般国民データの二次解析による比較 Psychometric properties and distribution of scores of K6 in disaster victims: A secondary analysis comparison of data from affected areas and the national populations in Japan	川上 憲人
2013 年度	杉本 隆	Aftershocks Associated With Impaired Health Caused by the Great East Japan Disaster Among Youth Across Japan: A National Cross-Sectional Survey 余震と東日本大震災による若者の不調との関連: 日本全国における横断調査	川上 憲人
	安藤 絵美子	The association of involuntary non-regular employment status and psychological distress in Japan 不本意型非正規雇用と抑うつとの関連	川上 憲人
	石川 華子	The impact of having a family member with mental illness on personal mental health: Data from the National Comorbidity Study Replication 家族に精神疾患をもつことによるメンタルヘルスへの影響	川上 憲人

	三木 貴子	Dietary intake of magnesium and other minerals in relation to depressive symptoms in Japanese employees 日本人労働者におけるマグネシウム、その他のミネラル摂取とうつ症状との関連	川上 憲人
	金原 明子	Barriers to mental health care: results from the World Mental Health Japan Survey メンタルヘルスカケアを受ける上で妨げになるもの: 世界精神保健調査日本調査の結果	川上 憲人
	月森 彩乃	東京都在住の精神障害をもつ人における地域のソーシャルキャピタルと地域生活状況との関連	川上 憲人
2014 年度	栗林 一人	Effects of an internet-based cognitive behavioral therapy (iCBT) intervention on depressive symptoms, dysfunctional attitude, and work engagement among new graduate nurses: A pilot study 新卒看護師に対するインターネット認知行動療法 (iCBT) による抑うつ症状、非機能的態度、ワーク・エンゲイジメント改善効果: 予備的調査	川上 憲人
	菅 真理子	The association of mindfulness with recovery from mental illness and quality of life among mental health service users living in the community 地域精神保健施設に通所する人におけるマインドフルネスと精神障がいからのリカバリーおよび QOL との関連	川上 憲人
	佐藤 融司	日本における性的指向と自殺関連行動の関係	川上 憲人
2015 年度	小竹 理紗	Reliability and validity of Japanese version of the INSPIRE measure of staff support for personal recovery by community mental health service users in Japan. 地域精神保健福祉サービス利用者を対象としたリカバリー支援評価尺度日本語版の信頼性・妥当性の検討	川上 憲人
	澤田 宇多子	The effects of Civility, Respect, and Engagement in the Workplace (CREW) program on social climate and work engagement in psychiatric ward CREW プログラムの精神科病棟における病棟風土とワーク・エンゲイジメントへの効果	川上 憲人
	堀尾 奈津紀	Development of the scale of the motivation for competitive employment among persons with severe mental illness 重度精神障害者の一般就労への動機尺度の作成	川上 憲人
	櫻谷 あすか	Effects of a job crafting intervention program on work engagement among Japanese employees: A pretest-posttest study 日本人労働者を対象としたジョブ・クラフティング介入プログラムのワーク・エンゲイジメントに対する効果: 前後比較試験	島津 明人

	浅井 裕美	Association of job stressors with panic attack and panic disorder in a working population in Japan: A cross sectional study 日本人労働者における職業性ストレスとパニック発作との関連：横断研究	川上 憲人
2016年度	岩永 麻衣	Twelve-month use of natural products for complementary health approaches among psychiatric outpatients in Japan: A cross-sectional study 日本の精神科外来に通院する患者における過去12ヶ月間の補完的健康アプローチとしての天然産物の利用に関する横断研究	川上 憲人
	任 喜史	Development of a scale for LINE addiction: Internal consistency and construct validity LINE依存の評価尺度の開発：内的整合性と構成概念妥当性の検討	川上 憲人
	蔡 佩穎	Association between scholarships as the main source of financial support and psychological distress among Chinese international students in Japan 在日中国語系留学生の主な収入源としての奨学金と心理的ストレスとの関連性に関する研究	川上 憲人
	佐官 俊一	Effects of a self-help web-based intervention program on return to work for sick leave workers with depression: A randomized controlled trial うつ病による休職者に対するインターネットを用いた復職支援自助プログラムの効果：無作為化比較試験	島津 明人
	帯包 エリカ	Estimating Impact of Childhood Abuse on Suicide-Related Behaviors Using Marginal Structural Models 小児期虐待が成人期の自殺関連行動に与える影響に関する周辺構造モデルを用いた推定	川上 憲人
	竹内 慎哉	新しい診断推論能力評価モデルについて模擬症例を用いた信頼性の検討	川上 憲人
2017年度	坂井 隆太郎	Effects of recovery college on personal recovery among participants in Japan: pretest-posttest study 日本におけるリカバリーカレッジのパーソナルリカバリーに対する効果：前後比較研究	川上 憲人
	松井 周	精神障害者就労支援の関わりの中で支援職員が感じる困難：質的研究 Difficulty felt among employment support workers through their supports for people with mental disabilities: A qualitative study	川上 憲人
	森田 康子	Reliability and validity of the Japanese version of the Mental Health Self-management Questionnaire among people with mental illness living in the community 精神疾患を抱える地域住民におけるこころの健康のためのセルフマネジメント質問票日本語版の信頼性妥当性の検証	川上 憲人
	松本 衣美	初めてピアスタッフを雇用する精神医療福祉施設で働く専門職スタッフはピアスタッフの雇用が決まってからどのような体験をするのか：質的研究	川上 憲人

2018年度	駒瀬 優	Effects of a newly developed gratitude intervention program on work engagement among Japanese workers: A pre-and post-test study 日本人労働者において、新しく開発された感謝法プログラムがワーク・エンゲイジメントに及ぼす影響：前後比較試験	川上 憲人
	佐瀬 満雄	薬物乱用防止教室における当事者講演活動に対する薬物依存症者の視点 Drug dependents' perspective on lecture activities in drug abuse prevention education: qualitative study	川上 憲人
	杉野 敦	精神科病棟における隔離・身体拘束を減らす取り組みの定着プロセス The process at which efforts to reduce seclusion and restraints are established in Japanese psychiatric wards: qualitative study	宮本 有紀
	日高 結衣	Effects of a transdiagnostic preventive intervention on anxiety and depression among workers in Japan: a pre-and post-test study 日本の労働者における疾患横断予防介入プログラムの不安と抑うつに対する効果	川上 憲人
	山口 雄大	ストレスチェック受検時の労働者の回答の信憑性とこれに関連する要因	川上 憲人
2019年度	飯田 真子	Development and validation of the team job crafting scale for nurses 看護師向けチーム・ジョブ・クラフティング尺度の開発と妥当性の検証	川上 憲人
	桑原 未来	Research on Living Conditions of Persons with Disabilities in Deprived Areas in Muntinlupa City, the Philippines フィリピン・ムンティンルパ市の貧困地域における障害者の生活状況に関する研究	川上 憲人
	徳重 誠	精神健康に困難を抱える人が農業を通じて体験することー質的調査 Experiences through agriculture in people with mental health difficulties- Qualitative study	宮本 有紀
	須藤 美恵	とじてひらいてむすんで他者とのあいだで自己を生みなおす「私」成人期の精神障害における格闘と自己命名行為：探索的質的研究 Disabled identity struggles of Adults' mental health and Self-naming: An exploratory qualitative study of the Process of Reproducing "My-self" among Others	宮本 有紀
2020年度	片岡 真由美	日本の児童相談所職員におけるトラウマティックイベントへの累積暴露と心的外傷後ストレス症状との関連	西 大輔 川上 憲人
	旭 紘史	The association between personalized values in adolescence and smoking behavior 思春期の主体価値とその後の喫煙行動との関連について	川上 憲人

	降旗 理花	Association between overtime working and psychological and physical symptoms of Japanese elementary and junior high school teachers: A large-scale cross-sectional questionnaire survey 公立小中学校教員における超過勤務と精神・身体症状との関連：大規模横断研究	川上 憲人
	佐藤 菜々	Mediating effects of eudemonic well-being at work for the association between psychosocial work environment and eudemonic well-being in general among Japanese workers: a cross-sectional study 日本人労働者の心理社会的職場環境と人生全般のユーダイモニック・ウェルビーイングの関係における仕事のユーダイモニック・ウェルビーイングの媒介効果：横断研究	川上 憲人
	大野 昂紀	The effects of family-based therapies among people with gaming addiction and their families: A scoping review ゲーム依存を有する者およびその家族における家族療法の効果：スコーピング・レビュー	川上 憲人
	浅岡 紘季	Posttraumatic stress symptoms among healthcare professionals exposed to emergency response activities for COVID-19 outside hospitals in Japan 所属病院外において新型コロナウイルス感染症の支援活動を行った医療従事者の心的外傷後ストレス症状	宮本 有紀
2021 年度	小野 章子	Case dealing style and burnout among attorneys in Japan: a cross-sectional study 日本の弁護士における事件処理方式とバーンアウトの関連：横断研究	川上 憲人
	大藪 佑莉	The relationship between social support from spouse and work engagement among Japanese dual earner couples: A longitudinal study using structural equation modeling 日本人共働き夫婦におけるソーシャルサポートとワークエンゲイジメントとの関連について：構造方程式モデリングを用いた縦断研究	川上 憲人
	友永 遥	Qualitative research on experiences of employees with mental health conditions who received support to return to work from occupational health professionals 産業保健職から復職支援を受けたメンタルヘルス不調の従業員の体験に関する質的研究	川上 憲人
	秋山 浩杜	Projecting the preventive effect on major depressive disorders of combined interventions for child abuse and associated impairment in Japan: a microsimulation study 日本における大うつ病性障害の発症予防に対する小児虐待対策の効果の予測：マイクロシミュレーション研究	川上 憲人 西 大輔
	池山 萌香	Reliability and validity of the Japanese version of the Mental Health Literacy Scale (MHLS) among undergraduate and graduate students in the medical field 医療系の大学生・大学院生を対象とした日本語版メンタルヘルスリテラシー尺度の信頼性・妥当性の検証	川上 憲人
	辻 利佳子	Association between meal frequency with others and psychological distress during the COVID-19 pandemic: A cross-sectional study. COVID-19 パンデミック下における共食頻度と精神的苦痛との関連：横断研究	川上 憲人 西 大輔

東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻 精神保健学分野／精神看護学分野 博士論文

年度	課程/ 論文	博士	氏名	題名	題名	指導教員
2006 年度	課程 博士	保健学	吉田 光爾	中学生を対象とした精神保健における援助希求行動の増進を目的とする教育体験プログラムの開発とその効果評価	英文標題なし	大島 巖
	課程 博士	保健学	小山 智典	正常知能を有する広汎性発達障害児における認知・症状プロフィール	Cognitive and Symptom Profiles in Normally Intellectual Children with Pervasive Developmental Disorders	川上 憲人
2007 年度	課程 博士	保健学	長沼 洋一	コミュニティ精神保健の観点からみた精神保健サービス利用と関連要因：地域疫学調査と大学コミュニティでの実践活動からの分析	英文標題なし	大島 巖
	課程 博士	保健学	沢村 香苗	Factors Related to Interception of Potential Adverse Drug Events in Long-term Psychiatric Care Units.	精神科病棟における誤薬の回避に関連する要因の検討	大島 巖
	課程 博士	保健学	立石(松浦) 彩美	病院に勤務する看護職のアサーションと組織コミットメントが職場のメンタルヘルスに与える影響	英文標題なし	川上 憲人
	課程 博士	保健学	蟄川 信幸	Effects on therapeutic attitudes of staff by introducing family psychoeducation programs into psychiatric hospitals according to implementation guidelines and their toolkits: One-year follow-up study	心理教育普及ガイドライン・ツールキットの活用が1年後の精神科スタッフの治療的態度に及ぼす影響の検討	川上 憲人

2008年度	課程博士	保健学	鈴木 麻揚	高機能広汎性発達障害児のスクリーニング尺度の開発～東京小児発達スケジュールおよび東京小児自閉行動尺度を用いて～	英文標題なし	栗田 廣
	課程博士	保健学	園 環樹	Family Support in Assertive Community Treatment: To support family members who care for clients or to support clients instead of family members	包括型地域生活支援における家族支援：利用者を支える家族を支えるか、家族に代わって利用者を支えるか	川上 憲人
2009年度	課程博士	保健学	篁 宗一	援助希求行動促進による早期介入を目的とした中学生の精神保健教育プログラムの効果評価	英文標題なし	川上 憲人
2010年度	課程博士	保健学	船越 明子	Study of Parental Difficulties in Families With Hikikomori Syndrome Children (Social Withdrawal)	ひきこもり青年の親が抱く困難感に関する研究	川上 憲人
	課程博士	保健学	角田(沢田) 秋	統合失調症を有する人への訪問看護ケアの分析：ケアを規定する患者特性と患者群の類型化の検討	英文標題なし	川上 憲人
	課程博士	保健学	井上 彰臣	Organizational justice and psychological distress among Japanese employees: findings from a prospective cohort study	企業における組織の公正性と心理的ストレス反応との関連：前向きコホート研究	川上 憲人
	課程博士	保健学	馬ノ段 梨乃	Development and evaluation of a computer-based stress management program for workers: A cluster randomized controlled trial	労働者を対象としたコンピュータによるストレスマネジメントプログラムの作成および評価：クラスター無作為化比較試験	川上 憲人
	課程博士	保健学	國江 慶子	Relationship between manager communication behaviors and mental health among hospital nurses in Japan	看護師長のコミュニケーション行動と看護師の精神健康との関連	川上 憲人

2011年度	課程博士	保健学	磯谷 悠子	The association between gaze detection accuracy and personality such as neuroticism.	他者の視線に対する知覚精度と神経症傾向に代表される性格特性との相関	川上 憲人
	課程博士	保健学	秋山 美紀	Burden, health-related quality of life, and gain of social support among family caregivers of stroke patients	脳卒中患者の家族介護者の負担感、健康関連 QOL(クオリティオブライフ)、公的・私的支援獲得について	川上 憲人
	課程博士	保健学	木村 美枝子	Nondirective and Directive Support Survey 日本語版 (NDSS-J)の開発および Nondirective support と Directive support の糖尿病患者の不安・抑うつに対する影響の検討	英文標題なし	川上 憲人
	課程博士	保健学	窪田 和巳	Workaholism and sleep quality among Japanese employees: A prospective cohort study	労働者におけるワーカホリズムと睡眠の質との関連：前向きコホート研究による検討	島津 明人
	課程博士	保健学	千葉 理恵	Effectiveness of the program to facilitate recovery focused on enhancing benefit-finding, personal meaning, and well-being for people with chronic mental illness: a randomized controlled trial	慢性精神疾患をもつ人を対象とした、ベネフィット・ファインディング、人生の意味、ウェルビーイングを高めることに焦点をあてたりカバリー促進プログラムの効果検討：無作為化比較試験	川上 憲人
2012年度	課程博士	保健学	富永 眞由美	特別支援教育フリースクールにおける広汎性発達障害生徒の対人関係発達に関する研究	英文標題なし	川上 憲人
	課程博士	保健学	今村 幸太郎	Effects of an internet-based cognitive behavioral therapy (iCBT) intervention for improving depression among workers: A randomized controlled trial	労働者に対するインターネット認知行動療法(iCBT)による抑うつ症状改善効果：無作為化比較試験	川上 憲人

	課程博士	保健学	梅田 麻希	Marital Violence and Access to Health Care: How Does Socioeconomic Status Affect the Association?	配偶者間暴力と医療アクセス：社会経済的要因の相互作用に焦点を当てて	川上 憲人
	課程博士	保健学	津野 香奈美	Supervisor Leadership Style and Workplace Bullying among Japanese Civil Servants: A Six-month Follow-up Study	日本人公務員における上司のリーダーシップ形態と職場のいじめ・ハラスメントとの関連：6ヶ月間の追跡調査	川上 憲人
	課程博士	保健学	ヨンキムフオンロザリン	The reliability and validity of three Internet addiction instruments in the Japanese population	日本人集団における3つのインターネット依存症尺度の信頼性と妥当性	川上 憲人
2013年度	課程博士	保健学	稲垣 晃子	Effects of adherence therapy by psychiatric nurses for people with schizophrenia in Japan: A randomized controlled trial	統合失調症を持つ人に対する精神科看護師によるアドヒアランス・セラピーの効果：無作為化比較試験	川上 憲人
2014年度	課程博士	保健学	Bimala Panthee	Assessment of work engagement, workaholism, and recovery experience, and their role in well-being among hospital nurses in Nepal.	和文標題なし	川上 憲人
	課程博士	保健学	島田 恭子	Longitudinal effects of work-family spillover on psychological distress among Japanese dual-earner couples with preschool children: Dyadic data analysis using multilevel models	未就学児を持つ共働き夫婦におけるワーク・ライフ・バランスの精神的健康影響：夫婦間の関連を考慮したマルチレベルモデルによる検討	島津 明人

2015年度	課程博士	保健学	木戸 芳史	Comparison of services by psychiatric multidisciplinary outreach teams with and without consumer-providers in terms of service content, hospital admission and other outcomes.	(精神科ピアサポーターの有無による、精神科多職種アウトリーチチームが提供するサービス間におけるサービス内容、入院およびその他のアウトカムと比較)	川上 憲人
	論文博士	保健学	田島 美幸	うつ病等休職者に対する低強度認知行動療法を中心とした心理療法の効果～集団認知行動療法およびInternet CBTについての検討～.	英文標題なし	川上 憲人 (紹介教員)
2017年度	課程博士	保健学	安藤 絵美子	The association of workplace social capital with psychological distress: A prospective study	職場のソーシャル・キャピタルと心理的ストレス反応の関連：前向き縦断研究	川上 憲人
	課程博士	保健学	高野 歩	Web-based relapse prevention program for Japanese drug users: Program development and results of an intervention trial	日本の薬物使用者に対するウェブ版再発予防プログラム：開発と介入試験実施結果	川上 憲人
	課程博士	保健学	渡辺 和広	Effects of a multi-component workplace intervention program with environmental changes on physical activity among Japanese white-collar employees: a cluster randomized controlled trial	複数の要因からなる環境調整を伴う職場介入プログラムが日本人ホワイトカラー労働者の身体活動に及ぼす影響：クラスター無作為化比較試験	川上 憲人
2018年度	課程博士	保健学	三木 貴子	Longitudinal adherence to a dietary pattern derived by reduced rank regression (RRR) and risk of depressive symptoms in Japanese employees	縮小ランク回帰による日本人の食事パターン抽出と抑うつ症状発症に関する職域疫学研究	川上 憲人

	課程博士	保健学	櫻谷 あすか	Effects of a job crafting intervention program on work engagement among Japanese employees: a randomized controlled trial	日本人労働者を対象としたジョブ・クラフティング介入プログラムのワーク・エンゲイジメントに対する効果：無作為化比較試験	川上 憲人
	課程博士	医学	石川 華子	精神疾患患者の受診率の性差に関する国際比較研究	英文標題なし	川上 憲人
	論文博士	保健学	深澤 舞子	Relationships among regional radiation levels, residents' radiation anxiety, and psychological and physical symptoms in Fukushima five years after the Great East Japan Earthquake	東日本大震災から5年後の福島県住民における放射線レベルと放射線不安、精神症状および身体症状との関係	川上 憲人
	課程博士	保健学	下田 陽樹	東日本大震災に被災した仮設住宅住民における気分・不安障害および物質関連障害の有病率、罹患率、心理的ストレスおよび関連要因	英文標題なし	川上 憲人
	課程博士	保健学	江口 のぞみ	性別違和を有する当事者に対する性別違和の緩和を目的とした治療が当事者の生活の質および精神的健康に与える影響：後ろ向きコホート研究	英文標題なし	川上 憲人
	課程博士	保健学	浅井 裕美	Association of job stressors with panic attack and panic disorder in a working population in Japan: a 2-years prospective cohort study	日本人労働者における職業性ストレス要因とパニック発作およびパニック障害との関連：2年間の前向きコホート研究	川上 憲人

2019年度	課程博士	保健学	澤田 宇多子	The effects of the Civility, Respect, and Engagement in the Workplace (CREW) program on work engagement among Japanese employees: a Cluster-Randomized Controlled Trial	日本人労働者を対象としたCREWプログラムのワーク・エンゲイジメントに対する介入効果：クラスター無作為化比較試験	宮本 有紀
	課程博士	医学	Khine Lae Win	Effects of Cognitive Behavioral Therapy Led by Peer Counselor on Depressive Symptoms and ART Adherence among People Living with HIV in Yangon, Myanmar: a Cluster-Randomized Controlled Trial	ミャンマーのHIV感染者におけるピアカウンセラーによる認知行動療法の抑うつ症状および抗レトロウイルス薬服用遵守に与える影響：クラスターランダム化比較試験	川上 憲人
	課程博士	保健学	Oraphan Thata	The Effect of Job Demands, Job Resources, and Off-Job Recovery on Mental and Physical Health among Registered Nurses in Thailand	タイの登録看護師の精神的および身体的健康に対する仕事の要求度、仕事の資源、および仕事外のリカバリーの影響	川上 憲人
2020年度	課程博士	医学	杉浦 寛奈	精神科強制入院と患者の意思決定に関する研究	英文標題なし	川上 憲人
	課程博士	保健学	TRAN THI THU THUY	Effects of a smartphone-based stress management program on depression and anxiety among hospital nurses in Vietnam	ベトナム病院看護師におけるスマートフォンベースのストレスマネジメントプログラムの抑うつおよび不安に対する効果	川上 憲人

	課程博士	医学	帯包 エリカ	Association between perinatal mood disorders of parents and child health outcomes: analysis using an administrative claims database	両親の周産期気分障害と子どもの健康の関連：レセプトデータを用いた検討	川上 憲人
2021年度	課程博士	医学	佐々木 那津	The effect of internet-based Acceptance and Commitment Therapy (iACT) on psychological well-being among working women with a pre-school child: a randomized controlled trial	未就学児を育てる働く女性に対するインターネットアクセプタンス&コミットメントセラピーの心理的ウェルビーイング向上の効果：ランダム化比較試験	川上 憲人
	課程博士	医学	安間 尚徳	統合失調症のある当事者をケアする家族に対する精神科訪問看護師による簡易的な家族心理教育の効果：クラスター無作為化比較試験による検討	英文標題なし	川上 憲人
	課程博士	保健学	野沢 恭介	The effectiveness of an online peer gatekeeper training program for students on suicide prevention: a randomized controlled trial	オンライン学生ピアゲートキーパー育成プログラムの効果検証：無作為化比較対照試験	宮本 有紀
	課程博士	保健学	駒瀬 優	Effects of a gratitude intervention program on work engagement among Japanese workers: a cluster randomized controlled trial	日本人労働者を対象とした感謝法プログラムのワーク・エンゲイジメントに対する効果：クラスター無作為化比較試験	川上 憲人
	課程博士	保健学	岩永 麻衣	Effect of bullying at school-age on life satisfaction in adulthood in a 50-year prospective study of the 1958 British Birth Cohort: The buffering role of social support and differences by sex and age of victimization	1958年英国出生コホートの50年間の前向き研究における学齢期のおじめが成人期の人生満足度に及ぼす影響：社会的支援の緩衝作用と性別および被害年齢による差	川上 憲人

研究業績

原著・欧文

1. [Kawakami N](#), Haratani T, Kaneko T, Araki S. Perceived job-stress and blood pressure increase among Japanese blue collar workers: a one-year follow-up study. *Ind Health*, 1989; 27: 71-81.
2. [Kawakami N](#), Araki S, Hayashi T, Masumoto T. Relationship between perceived job-stress and glycosylated hemoglobin in white-collar workers. *Ind Health* 1989; 27: 149-154.
3. [Kawakami N](#), Araki S, Haratani T, Kaneko T, Masumoto T, Hayashi T. Job-stress and medical consultation rates for physical illness among blue collar workers of an electric factory in Japan: A four-year prospective follow-up study. *Ind Health*, 1990; 128: 1-7.
4. [Kawakami N](#), Araki S, Kawashima M. Effects of perceived job-stress on occurrence of major depression in Japanese industry: a nested case-control study. *J Occup Med* 1990; 32: 722-725.
5. Niino N, Imaizumi T, [Kawakami N](#). A Japanese translation of the Geriatric Depression Scale. *Clinical Gerontologist* 1991; 10: 85-87.
6. Murata K, Araki S, [Kawakami N](#), Saito Y, Hino E. Central nervous system effects and visual fatigue in VDT workers. *Int Arch Occup Environ Health* 1991; 63: 109-113.
7. [Kawakami N](#), Haratani T, Hemmi T, Araki S. Prevalence and demographic correlates of alcohol-related problems in Japanese employees. *Soc Psychiatr Psychiatr Epidemiol* 1992; 27: 198-202.
8. [Kawakami N](#), Haratani T, Araki S. Effects of perceived job stress on depressive symptoms in blue-collar workers of an electrical factory in Japan. *Scand J Work Environ Health* 1992; 18:195-200.
9. Ezoe S, Araki S, Ono Y, [Kawakami N](#), Murata K. Work stress in Japanese computer engineers: effects of computer work or bioeducational factors. *Environ Res* 1993; 63: 148-156.
10. [Kawakami N](#), Araki S, Haratani T, Hemmi T. Relations of work stress to alcohol use and drinking problems in male and female employees of a computer factory in Japan. *Environ Res* 1993; 62: 314-324.
11. Hu YH, Shimizu H, [Kawakami N](#), Takatsuka N, Ido M, Hirose H. Increasing trends in mortality rate of aortic aneurysms in Japan, 1955-90. *Tohoku J Exp Med* 1993; 171: 221-228.
12. Jin HQ, Araki S, Wu XK, Zhang YW, [Kawakami N](#), Duan LL. The relationship between certain climate factors and traffic accidents: An epidemiological analysis in China. *Chinese J Epidemiol* 1994; 15: 9-16.
13. Ezoe S, Araki S, Ono Y, [Kawakami N](#), Murata K. Assessment of personality traits and psychiatric symptoms in workers in a computer manufacturing plant in Japan. *Am J Ind Med* 1994; 25: 187-196.
14. Ezoe S, Araki S, Ono Y, [Kawakami N](#), Murata K. Effects of marital status and position on personality traits in engineers of a computer manufacturing plant. *Ind Health* 1995; 33: 77-82.
15. Iwata N, Roberts CR, [Kawakami N](#). Japan-U.S. comparison of responses to depression scale items among adult workers. *Psychiatry Res* 1995; 58: 237-245.
16. [Kawakami N](#), Roberts RE, Lee ES, Araki S. Changes in rates of depressive symptoms in a Japanese working population: life-table analysis from a 4-year follow-up study. *Psychol Med* 1995; 25: 1181-1190.
17. [Kawakami N](#), Araki S, Ohtsu T, Hayashi T, Masumoto T. Effects of mood states, smoking and urinary catecholamine excretion on hemoglobin A1c in male Japanese workers. *Ind Health* 1995; 33: 153-162.
18. [Kawakami N](#), Kobayashi F, Araki S, Haratani T, Furui H. Assessment of job stress dimensions based on the Job Demands-Control model of employees of telecommunication and electric power companies in Japan: reliability and validity of the Japanese version of Job Content Questionnaire. *Int J Behav Med*, 1995; 2: 358-375.
19. Hayashi T, [Kawakami N](#), Kondo N, Agata H, Fukutomi O, Shimizu H, Orii T. Prevalence of and risk factors for allergic diseases - comparison of two cities in Japan. *Annal Allergy Asthma Immunology* 1995; 75: 525-529.
20. Takatsuka N, [Kawakami N](#), Ohwaki A, Ito Y, Matsushita Y, Ido M, Shimizu H. Frequent hard physical activity lowered serum beta-carotene level in a population study of a rural city of Japan. *Tohoku J Exp Med* 1995; 176: 131-135.
21. [Kawakami N](#), Fujigaki Y. Reliability and validity of the Japanese version of Job Content Questionnaire: replication and extension in computer company employees. *Ind Health* 1996; 34: 295-306.
22. Takatsuka N, [Kawakami N](#), Kawai K, Okamoto Y, Ishiwata K, Shimizu H. Validation of recalled food intake in the past in a Japanese population. *J Epidemiol* 1996; 6: 9-13.
23. Aoki R, Ohno Y, Tamakoshi A, [Kawakami N](#), Nagai M, Hashimoto S, Ikari A, Shimizu H, Sakata K, Kawamura T, Wakai K, Senda M. Life style determinants for social activity levels among the Japanese elderly. *Arch Gerontol Geriatr* 1996; 22: 261-269.
24. Ido M, Nagata C, [Kawakami N](#), Shimizu H, Yoshida Y, Nomura T, Mizoguchi H. A case-control study of myelodysplastic syndromes among Japanese men and women. *Leukemia Res* 1996; 20: 727-731.

25. [Kawakami N](#), Iwata N, Tanigawa T, Oga H, Araki S, Fujihara S, Kitamura T. Prevalence of mood and anxiety disorders in a working population in Japan. *J Occup Environ Med* 1996; 38: 899-905.
26. [Kawakami N](#), Takatsuka N, Shimizu H. Occupational factors, smoking habits and tobacco withdrawal symptoms among male Japanese employees. *Ind Health* 1997;35: 9-15.
27. Takatsuka N, Kurisu Y, Nagata C, Owaki A, [Kawakami N](#), Shimizu H. Validation of simplified diet history questionnaire. *J Epidemiol* 1997;7: 33-41.
28. Nagata C, [Kawakami N](#), Shimizu H. Trends in the incidence rate and risk factors for breast cancer in Japan. *Breast Cancer Res Treat* 1997; 44: 75-82.
29. Nagata C, Matsushita Y, Inaba S, [Kawakami N](#), Shimizu H. Unapproved use of high-dose combined pills in Japan: a community study on prevalence and health characteristics of the users. *Preventive Med* 1997;26: 565-569.
30. [Kawakami N](#), Araki S, Kawashima M, Masumoto T, Hayashi T. Effects of work-related stress reduction on depressive symptoms in Japanese blue-collar workers. *Scand J Work Environ Health* 1997; 23: 54-59.
31. [Kawakami N](#), Tanigawa T, Araki S, Nakai A, Sakurai S, Yokoyama K, Morita Y. Effects of job strain on helper-inducer (CD4+CD29+) and suppressor-inducer (CD4+CD45RA+) T cells in Japanese industrial workers. *Psychother Psychosom* 1997; 66: 192-198.
32. Suzuki I, [Kawakami N](#), Shimizu H. Accuracy of calorie counter method to assess daily energy expenditure and physical activities in athletes and nonathletes. *J Sport Med Phys Fitness* 1997; 37: 131-136.
33. [Kawakami N](#), Takatsuka N, Shimizu H, Ishibashi H. Effects of smoking on the incidence of non-insulin-dependent diabetes mellitus. Replication and extension in a Japanese cohort of male employees. *Am J Epidemiol* 1997; 145: 103-109.
34. Inaba S, Kurisu Y, Nagata C, Naoyoshi, Takatsuka, [Kawakami N](#), Shimizu H. Associations of individuals' health-related behavior with their own or their spouses' smoking status. *J Epidemiol* 1998;8: 42-46.
35. [Kawakami N](#), Takatsuka N, Shimizu H, Takai A. Life-time prevalence and risk factors of tobacco/nicotine dependence in male ever-smokers in Japan. *Addiction* 1998;93: 1023-1032.
36. Nagata C, Takatsuka N, Inaba S, [Kawakami N](#), Shimizu H. Association of diet and other lifestyle with onset of menopause in Japanese women. *Maturitas* 1998;29: 105-113.
37. Suzuki I, Yamada H, Sugiura T, [Kawakami N](#), Shimizu H. Cardiovascular fitness, physical activity and selected coronary heart disease risk factors in adults. *J Sports Med Phys Fitness* 1998; 38: 149-157.
38. Suzuki I, [Kawakami N](#), Shimizu H. Reliability and validity of a questionnaire for assessment of energy expenditure and physical activity in epidemiological studies. *J Epidemiol* 1998; 8: 152-159.
39. Takatsuka N, [Kawakami N](#), Ito Y, Kabuto M, Shmizu H. Effects of passive smoking on serum levels of carotenoids and alpha-tocopherol. *J Epidemiol* 1998; 8: 146-151.
40. [Kawakami N](#), Haratani T, Araki S. Job strain and arterial blood pressure, serum cholesterol, and smoking as risk factors for coronary heart disease in Japan. *Int Arch Occup Environ Health* 1998;71: 429-432.
41. Karasek R, Brisson C, [Kawakami N](#), Houtman I, Bongers P, Amick B. The Job Content Questionnaire (JCQ): An instrument for internationally comparative assessments of psychosocial job characteristics. *J Occup Health Psychol* 1998;3: 322-355.
42. Nagata C, Takatsuka N, Inaba S, [Kawakami N](#), Shimizu H. Effect of soymilk consumption on serum estrogen concentrations in premenopausal Japanese women. *J Natl Cancer Inst* 1998; 90: 1830-1835.
43. [Kawakami N](#), Iwata N, Fujihara S, Kitamura T. Prevalence of chronic fatigue syndrome in a community population in Japan. *Tohoku J Exp Med* 1998; 186: 33-41.
44. [Kawakami N](#), Takatsuka N, Inaba S, Shimizu H. Development of a screening questionnaire for tobacco/nicotine dependence according to ICD-10, DSM-III-R and DSM-IV. *Addict Behav* 1999; 24: 155-166.
45. [Kawakami N](#), Araki S, Takatsuka N, Shimizu H, Ishibashi H. Overtime, psychosocial working conditions, and occurrence of non-insulin dependent diabetes mellitus in Japanese men. *J Epidemiol Comm Health* 1999; 53: 359-363.
46. Inaba S, Hattori H, Nagata C, Kurisu Y, Takatsuka N, [Kawakami N](#), Shimizu H. Evaluation of a screening program on reduction of gastric cancer mortality in Japan: preliminary results from a cohort study. *Prevent Med* 1999; 29: 102-106.
47. Agata H, [Kawakami N](#), Kondo N, Hayashi T, Fukutomi O, Shimizu H, Orii T. Differences of genetic effects for the development of allergic diseases in two cities of Japan. *Ann Allergy Asthma Immunol* 1999; 82: 586-590
48. [Kawakami N](#), Takatsuka N, Shimizu H, Ishibashi H. Depressive symptoms and occurrence of type 2 diabetes among Japanese men. *Diabetes Care* 1999; 22: 1071-1076
49. [Kawakami N](#), Haratani T, Iwata N, Imanaka Y, Murata K, Araki S. Effects of mailed advice on stress reduction among employees in Japan: a randomized controlled trial. *Ind Health* 1999;37: 237-242
50. Shimizu H, Ohwaki A, Kurisu Y, Takatsuka N, Ido M, [Kawakami N](#), Nagata C, Inaba S: Validity and reproducibility of a quantitative food frequency questionnaire for a cohort study in Japan. *Jpn J Clin Oncol* 1999; 29: 38-44
51. Iwata N, [Kawakami N](#), Haratani T, Murata K, Araki S. Job stressor-mental health associations in a sample of Japanese working adults: artifacts of positive and negative questions? *Ind Health* 1999; 37: 263-270
52. Nagata C, Takatsuka N, [Kawakami N](#), Shimizu H. Total and monounsaturated fat intake and serum estrogen concentrations in premenopausal Japanese women. *Nutr Cancer*. 2000; 38: 37-39.
53. Nagata C, Takatsuka N, [Kawakami N](#), Shimizu H. Relationships between types of fat consumed and serum estrogen and androgen concentrations in Japanese men. *Nutr Cancer*. 2000; 38: 163-167.
54. Nagata C, Takatsuka N, [Kawakami N](#), Shimizu H. Association of diet with the onset of menopause in Japanese women. *Am J Epidemiol*. 2000; 152: 863-867.
55. [Kawakami N](#), Akachi K, Shimizu H, Haratani T, Kobayashi F, Ishizaki M, Hayashi T, Fujita O, Aizawa Y, Miyazaki S, Hiro H, Hashimoto S, Araki S. Job strain, social support in the workplace, and haemoglobin A1c in Japanese men. *Occup Environ Med*. 2000; 57: 805-809.
56. Takatsuka N, Nagata C, Kurisu Y, Inaba S, [Kawakami N](#), Shimizu H. Hypocholesterolemic effect of soymilk supplementation with usual diet in premenopausal normolipidemic Japanese women. *Prevent Med*. 2000; 31: 308-314.
57. [Kawakami N](#), Takai A, Takatsuka N, Shimizu H. Eysenck's personality and tobacco/nicotine dependence in male ever-smokers in Japan. *Addict Behav*. 2000; 25: 585-591.
58. Murata K, [Kawakami N](#), Amari N. Does job stress affect injury due to labor accident in Japanese male and female blue-collar workers? *Ind Health* 2000; 38: 246-251.
59. Nagata C, Inaba S, [Kawakami N](#), Kakizoe T, Shimizu H. Inverse association of soy product intake with serum androgen and estrogen concentrations in Japanese men. *Nutr Cancer*. 2000; 36: 14-18.
60. Terada K, [Kawakami N](#), Inaba S, Takatsuka N, Shimizu H. Rationality/antiemotionality personality and selected chronic diseases in a community population in Japan. *J Psychosom Res*. 2000; 48: 31-35.
61. Nakata A, Araki S, Tanigawa T, Miki A, Sakurai S, [Kawakami N](#), Yokoyama K, Yokoyama M. Decrease of suppressor-inducer (CD4+ CD45RA) T lymphocytes and increase of serum immunoglobulin G due to perceived job stress in Japanese nuclear electric power plant workers. *J Occup Environ Med*. 2000; 42: 143-150.
62. Nakata A, Haratani T, [Kawakami N](#), Miki A, Kurabayashi L, Shimizu H. Sleep problems in white-collar male workers in an electric equipment manufacturing company in Japan. *Ind Health*. 2000; 38: 62-68.
63. Nagata C, Takatsuka N, [Kawakami N](#), Shimizu H. Soy product intake and hot flashes in Japanese women: results from a community-based prospective study. *Am J Epidemiol* 2001; 153: 790-793.
64. Ishizaki M, Martikainen P, Nakagawa H, Marmot M, The Japan Work Stress and Health Cohort Study Group. Socioeconomic status, workplace characteristics and plasma fibrinogen level of Japanese male employees. *Scand J Work Environ Health* 2001; 27: 287-291.
65. Shimizu S, Kawata Y, [Kawakami N](#), Aoyama H. Effects of changes in obesity and exercise on the development of diabetes and return to normal fasting plasma glucose levels at one-year follow-up in middle-aged subjects with impaired fasting glucose. *Environ Health Prev Med* 2001; 6: 127-131.
66. Nagata C, Takatsuka N, [Kawakami N](#), Shimizu H. Soy product intake and premenopausal hysterectomy in a follow-up study of Japanese women. *Eur J Clin Nutr* 2001; 55: 773-777.
67. Nakata A, Haratani T, Takahashi M, [Kawakami N](#), Arito H, Fujioka Y, Shimizu H, Kobayashi F, Araki S. Job stress, social support at work, and insomnia in Japanese shift workers. *J Hum Ergol* 2001; 30: 203-209.
68. Sakami S, Ishikawa T, [Kawakami N](#), Haratani T, Fukui A, Kobayashi F, Fujita O, Araki S, Kawamura N. Coemergence of insomnia and a shift in the Th1/Th2 balance toward Th2 dominance. *Neuroimmunomodulation*. 2002-2003; 10: 337-343.
69. Sakami T, Ishikawa T, Asukai N, Haratani T, Kobayashi F, Fujita O, [Kawakami N](#), Araki S, Fukui A, Iimori H, Kawamura N. Suppression of cellular immunity and readjustment problems in subjects with a past history of posttraumatic stress disorder. *Jpn J Stress Science* 2002;16: 233-240.
70. Kitamura T, [Kawakami N](#), Sakamoto S, Tanigawa T, Ono Y, Fujihara S. Quality of life and its correlates in a community population in a Japanese rural area. *Psychiatry Clin Neurosci* 2002; 56: 431-441.
71. Ota A, Mino Y, Mikouchi H, [Kawakami N](#). Nicotine dependence and smoking cessation after hospital discharge among inpatients with coronary heart attacks. *Environmental Health and Preventive Medicine* 2002; 7: 74-78.
72. Nagata C, Takatsuka N, [Kawakami N](#), Shimizu H. A prospective cohort study of soy product intake and stomach cancer death. *Br J Cancer* 2002; 87: 31-36.

73. Nagata C, Takatsuka N, Kawakami N, Shimizu H. Weight change in relation to natural menopause and other reproductive and behavioral factors in Japanese women. *Ann Epidemiol* 2002; 12: 237-241.
74. Takao S, Kawakami N, Ohtsu T, The Japan Work Stress and Health Cohort Study Group. Occupational class and physical activity among Japanese employees. *Soc Sci Med* 2003; 57: 2281-2289.
75. Fujiwara K, Tsukishima E, Tsutsumi A, Kawakami N, Kishi R. Interpersonal conflict, social support, and burnout among home care workers in Japan. *J Occup Health* 2003; 45: 313-320.
76. Andrade L, Caraveo-Anduaga JJ, Berglund P, Bijl RV, De Graaf R, Vollebergh W, Dragomirecka E, Kohn R, Keller M, Kessler RC, Kawakami N, Kilic C, Offord D, Ustun TB, Wittchen HU. The epidemiology of major depressive episodes: results from the International Consortium of Psychiatric Epidemiology (ICPE) Surveys. *Int J Methods Psychiatr Res.* 2003; 12: 3-21.
77. Nakata A, Haratani T, Takahashi T, Kawakami N, Arito H, Kobayashi F, Araki S. Association of sickness absence with poor sleep and depressive symptoms in shift workers. *Chronobiology International* 2004; 21: 899-912.
78. Kawakami N, Haratani T, Kobayashi F, Ishizaki M, Hayashi T, Fujita O, Aizawa Y, Miyazaki S, Hiro H, Masumoto T, Hashimoto S, Araki S. Occupational class and exposure to job stressors among employed men and women in Japan. *J Epidemiol* 2004; 14: 204-211.
79. Sato K, Kawakami N, Ohtsu T, Tsutsumi A, Miyazaki S, Masumoto T, Horie S, Haratani T, Kobayashi F, Araki S. Broccoli consumption and chronic atrophic gastritis among Japanese males: an epidemiological investigation. *Acta Med Okayama.* 2004; 58: 127-133.
80. Tsuda K, Tsutsumi A, Kawakami N. Work-related factors associated with visiting a doctor for a medical diagnosis after a worksite screening for diabetes mellitus in Japanese male employees. *J Occup Health* 2004; 46: 374-381.
81. Kawakami N, Shimizu H, Haratani T, Iwata N, Kitamura T. Lifetime and six-month Prevalence of DSM-III-R Psychiatric disorders in an urban community in Japan. *Psychiat Res* 2004; 121: 293-301.
82. Nakata A, Haratani T, Takahashi T, Kawakami N, Arito H, Kobayashi F, Araki S. Job stress, social support, and prevalence of insomnia in a population of Japanese daytime workers. *Soc Sci Med* 2004; 59: 1719-1730
83. Ota A, Yasuda N, Okamoto Y, Kobayashi Y, Sugihara Y, Koda S, Kawakami N, Ohara H. Relationship of job stress with nicotine dependence of smokers - a cross-sectional study for female nurses in a general hospital. *J Occup Health* 2004; 46: 220-224.
84. WHO World Mental Health Survey Consortium. Prevalence, severity, and unmet need for treatment of mental disorders in the World Health Organization World Mental Health Surveys. *JAMA* 2004; 29: 2581-90.
85. Fujiwara K, Tsukishima E, Kasai S, Masuchi A, Tsutsumi A, Kawakami N, Miyake H, Kishi R. Urinary catecholamines and salivary cortisol on workdays and days off in relation to job strain among female health care providers. *Scand J Work Environ Health* 2004; 30: 129-138.
86. Ishizaki M, Morikawa Y, Nakagawa H, Honda R, Kawakami N, Haratani T, Kobayashi F, Araki S, Yamada Y. The influence of work characteristics on body mass index and waist to hip ratio in Japanese employees. *Ind Health* 2004; 42: 41-49.
87. Kawakami N, Takatsuka N, Shimizu H. Sleep disturbance and onset of type 2 diabetes. *Diabetes Care.* 2004; 27: 282-283.
88. Nakata A, Haratani T, Takahashi M, Kawakami N, Arito H, Kobayashi F, Fujioka Y, Fukui S, Araki S. Association of sickness absence with poor sleep and depressive symptoms in shift workers. *Chronobiol Int.* 2004; 21(6): 899-912.
89. Sato K, Kawakami N, Ohtsu T, Tsutsumi A, Miyazaki S, Masumoto T, Horie S, Haratani T, Kobayashi F, Araki S. Broccoli consumption and chronic atrophic gastritis among Japanese males: an epidemiological investigation. *Acta Med Okayama.* 2004; 58(3): 127-133.
90. Tsuda K, Tsutsumi A, Kawakami N. Work-related factors associated with visiting a doctor for a medical diagnosis after a worksite screening for diabetes mellitus in Japanese male employees. *J Occup Health.* 2004; 46(5): 374-381.
91. Kawakami N, Kobayashi Y, Takao S, Tsutsumi A. Effects of web-based supervisor training on supervisor support and psychological distress among workers: a randomized controlled trial. *Prev Med.* 2005; 41(2): 471-478.
92. Kawakami N, Takeshima T, Ono Y, Uda H, Hata Y, Nakane Y, Nakane H, Iwata N, Furukawa TA, Kikkawa T. Twelve-month prevalence, severity, and treatment of common mental disorders in communities in Japan: preliminary finding from the World Mental Health Japan Survey 2002-2003. *Psychiatry Clin Neurosci.* 2005; 59(4): 441-452.
93. Kobayashi Y, Hirose T, Tada Y, Tsutsumi A, Kawakami N. Relationship between two job stress models and coronary risk factors among Japanese part-time female employees of a retail company. *J Occup Health.* 2005; 47(3): 201-210.
94. Ochiai H, Ohtsu T, Tsuda T, Kagawa H, Kawashita T, Takao S, Tsutsumi A, Kawakami N. Clostridium perfringens foodborne outbreak due to braised chop suey supplied by chafing dish. *Acta Med Okayama.* 2005; 59(1): 27-32.
95. Shimazu A, Kawakami N, Irimajiri H, Sakamoto M, Amano S. Effects of web-based psychoeducation on self-efficacy, problem solving behavior, stress responses and job satisfaction among workers: a controlled clinical trial. *J Occup Health.* 2005; 47(5): 405-413.
96. Tsutsumi A, Takao S, Mineyama S, Nishiuchi K, Komatsu H, Kawakami N. Effects of a supervisory education for positive mental health in the workplace: a quasi-experimental study. *J Occup Health.* 2005; 47(3): 226-235.
97. Yorifuji T, Yamamoto E, Tsuda T, Kawakami N. Health impact assessment of particulate matter in Tokyo, Japan. *Arch Environ Occup Health.* 2005; 60(4): 179-185.
98. Honjo K, Kawakami N, Takeshima T, Tachimori H, Ono Y, Uda H, Hata Y, Nakane Y, Nakane H, Iwata N, Furukawa TA, Watanabe M, Nakamura Y, Kikkawa T. Social class inequalities in self-rated health and their gender and age group differences in Japan. *J Epidemiol.* 2006; 16(6): 223-232.
99. Honjo K, Tsutsumi A, Kawachi I, Kawakami N. What accounts for the relationship between social class and smoking cessation? Results of a path analysis. *Soc Sci Med.* 2006; 62(2): 317-328.
100. Ishizaki M, Kawakami N, Honda R, Nakagawa H, Morikawa Y, Yamada Y. Psychosocial work characteristics and sickness absence in Japanese employees. *Int Arch Occup Environ Health.* 2006; 79(8): 640-646.
101. Kawakami N, Takao S, Kobayashi Y, Tsutsumi A. Effects of web-based supervisor training on job stressors and psychological distress among workers: a workplace-based randomized controlled trial. *J Occup Health.* 2006; 48(1): 28-34.
102. Kawakami N, Tsutsumi A, Haratani T, Kobayashi F, Ishizaki M, Hayashi T, Fujita O, Aizawa Y, Miyazaki S, Hiro H, Masumoto T, Hashimoto S, Araki S. Job strain, worksite support, and nutrient intake among employed Japanese men and women. *J Epidemiol.* 2006; 16(2): 79-89.
103. Kondo K, Kobayashi Y, Hirokawa K, Tsutsumi A, Kobayashi F, Haratani T, Araki S, Kawakami N. Job strain and sick leave among Japanese employees: a longitudinal study. *Int Arch Occup Environ Health.* 2006; 79(3): 213-219.
104. Naganuma Y, Tachimori H, Kawakami N, Takeshima T, Ono Y, Uda H, Hata Y, Nakane Y, Nakane H, Iwata N, Furukawa TA, Kikkawa T. Twelve-month use of mental health services in four areas in Japan: findings from the World Mental Health Japan Survey 2002-2003. *Psychiatry Clin Neurosci.* 2006; 60(2): 240-248.
105. Takao S, Tsutsumi A, Nishiuchi K, Mineyama S, Kawakami N. Effects of the job stress education for supervisors on psychological distress and job performance among their immediate subordinates: a supervisor-based randomized controlled trial. *J Occup Health.* 2006; 48(6): 494-503.
106. Fukutome A, Watashi K, Kawakami N, Ishikawa H. Mathematical modeling of severe acute respiratory syndrome nosocomial transmission in Japan: the dynamics of incident cases and prevalent cases. *Microbiol Immunol.* 2007; 51(9): 823-832.
107. Geshi M, Hirokawa K, Taniguchi T, Fujii Y, Kawakami N. Effects of alcohol-related health education on alcohol and drinking behavior awareness among Japanese junior college students: a randomized controlled trial. *Acta Med Okayama.* 2007; 61(6): 345-354.
108. Hiro H, Kawakami N, Tanaka K, Nakamura K. Association between job stressors and heavy drinking: age differences in male Japanese workers. *Ind Health.* 2007; 45(3): 415-425.
109. Kessler RC, Angermeyer M, Anthony JC, R DEG, Demyttenaere K, Gasquet I, G DEG, Gluzman S, Gureje O, Haro JM, Kawakami N, Karam A, Levinson D, Medina Mora ME, Oakley Browne MA, Posada-Villa J, Stein DJ, Adley Tsang CH, Aguilar-Gaxiola S, Alonso J, Lee S, Heeringa S, Pennell BE, Berglund P, Gruber MJ, Petukhova M, Chatterji S, Ustun TB. Lifetime prevalence and age-of-onset distributions of mental disorders in the World Health Organization's World Mental Health Survey Initiative. *World Psychiatry.* 2007; 6(3): 168-176.
110. Mineyama S, Tsutsumi A, Takao S, Nishiuchi K, Kawakami N. Supervisors' attitudes and skills for active listening with regard to working conditions and psychological stress reactions among subordinate workers. *J Occup Health.* 2007; 49(2): 81-87.
111. Nishiuchi K, Tsutsumi A, Takao S, Mineyama S, Kawakami N. Effects of an education program for stress reduction on supervisor knowledge, attitudes, and behavior in the workplace: a randomized controlled trial. *J Occup Health.* 2007; 49(3): 190-198.
112. Ormel J, Von Korff M, Burger H, Scott K, Demyttenaere K, Huang YQ, Posada-Villa J, Pierre Lepine J, Angermeyer MC, Levinson D, de Girolamo G, Kawakami N, Karam E, Medina-Mora ME, Gureje O, Williams D, Haro JM, Bromet EJ, Alonso J, Kessler R. Mental disorders among persons with heart disease - results from World Mental Health surveys. *Gen Hosp Psychiatry.* 2007; 29(4): 325-334.
113. Taniguchi T, Hirokawa K, Tsuchiya M, Kawakami N. The immediate effects of 10-minute relaxation training on salivary immunoglobulin A (s-IgA) and mood state for Japanese female medical co-workers. *Acta Med*

- Okayama. 2007; 61(3): 139-145.
114. Tsutsumi A, Kayaba K, Ojima T, Ishikawa S, [Kawakami N](#). Low control at work and the risk of suicide in Japanese men: a prospective cohort study. *Psychother Psychosom*. 2007; 76(3): 177-185.
 115. Tsutsumi A, Umehara K, Ono H, [Kawakami N](#). Types of psychosocial job demands and adverse events due to dental mismanagement: a cross sectional study. *BMC Oral Health*. 2007; 7): 3.
 116. Umehara K, Ohya Y, [Kawakami N](#), Tsutsumi A, Fujimura M. Association of work-related factors with psychosocial job stressors and psychosomatic symptoms among Japanese pediatricians. *J Occup Health*. 2007; 49(6): 467-481.
 117. Yorifuji T, Tsuda T, [Kawakami N](#). Age standardized cancer mortality ratios in areas heavily exposed to methyl mercury. *Int Arch Occup Environ Health*. 2007; 80(8): 679-688.
 118. Choi B, [Kawakami N](#), Chang S, Koh S, Bjorner J, Punnett L, Karasek R. A cross-national study on the multidimensional characteristics of the five-item psychological demands scale of the Job Content Questionnaire. *Int J Behav Med*. 2008; 15(2): 120-132.
 119. Fukuoka E, Hirokawa K, [Kawakami N](#), Tsuchiya M, Haratani T, Kobayashi F, Araki S, Doi H. Job strain and smoking cessation among Japanese male employees: a two-year follow-up study. *Acta Med Okayama*. 2008; 62(2): 83-91.
 120. Furukawa TA, [Kawakami N](#), Saitoh M, Ono Y, Nakane Y, Nakamura Y, Tachimori H, Iwata N, Uda H, Nakane H, Watanabe M, Naganuma Y, Hata Y, Kobayashi M, Miyake Y, Takeshima T, Kikkawa T. The performance of the Japanese version of the K6 and K10 in the World Mental Health Survey Japan. *Int J Methods Psychiatr Res*. 2008; 17(3): 152-158.
 121. Ishizaki M, Nakagawa H, Morikawa Y, Honda R, Yamada Y, [Kawakami N](#). Influence of job strain on changes in body mass index and waist circumference--6-year longitudinal study. *Scand J Work Environ Health*. 2008; 34(4): 288-296.
 122. Kobayashi Y, Kaneyoshi A, Yokota A, [Kawakami N](#). Effects of a worker participatory program for improving work environments on job stressors and mental health among workers: a controlled trial. *J Occup Health*. 2008; 50(6): 455-470.
 123. Ono Y, [Kawakami N](#), Nakane Y, Nakamura Y, Tachimori H, Iwata N, Uda H, Nakane H, Watanabe M, Naganuma Y, Furukawa TA, Hata Y, Kobayashi M, Miyake Y, Tajima M, Takeshima T, Kikkawa T. Prevalence of and risk factors for suicide-related outcomes in the World Health Organization World Mental Health Surveys Japan. *Psychiatry Clin Neurosci*. 2008; 62(4): 442-449.
 124. Ormel J, Petukhova M, Chatterji S, Aguilar-Gaxiola S, Alonso J, Angermeyer MC, Bromet EJ, Burger H, Demyttenaere K, de Girolamo G, Haro JM, Hwang I, Karam E, [Kawakami N](#), Lepine JP, Medina-Mora ME, Posada-Villa J, Sampson N, Scott K, Ustun TB, Von Korff M, Williams DR, Zhang M, Kessler RC. Disability and treatment of specific mental and physical disorders across the world. *Br J Psychiatry*. 2008; 192(5): 368-375.
 125. Suzuki E, Tsuchiya M, Hirokawa K, Taniguchi T, Mitsuhashi T, [Kawakami N](#). Evaluation of an internet-based self-help program for better quality of sleep among Japanese workers: a randomized controlled trial. *J Occup Health*. 2008; 50(5): 387-399.
 126. Takasaki Y, [Kawakami N](#), Tsuchiya M, Ono Y, Nakane Y, Nakamura Y, Tachimori H, Iwata N, Uda H, Nakane H, Watanabe M, Naganuma Y, Furukawa T, Hata Y, Kobayashi M, Miyake Y, Takeshima T, Kikkawa T. Heart disease, other circulatory diseases, and onset of major depression among community residents in Japan: results of the World Mental Health Survey Japan 2002-2004. *Acta Med Okayama*. 2008; 62(4): 241-249.
 127. Tsutsumi A, Iwata N, Wakita T, Kumagai R, Noguchi H, [Kawakami N](#). Improving the measurement accuracy of the effort-reward imbalance scales. *Int J Behav Med*. 2008; 15(2): 109-119.
 128. Tsutsumi A, Nagami M, Morimoto K, [Kawakami N](#). Motivation, overcommitment and psychological health at work: a path analytic approach. *J UOEH*. 2008; 30(3): 279-292.
 129. Chen J, Tsuchiya M, [Kawakami N](#), Furukawa TA. Non-fearful vs. fearful panic attacks: a general population study from the National Comorbidity Survey. *J Affect Disord*. 2009; 112(1-3): 273-278.
 130. Inoue A, [Kawakami N](#), Ishizaki M, Tabata M, Tsuchiya M, Akiyama M, Kitazume A, Kuroda M, Shimazu A. Three job stress models/concepts and oxidative DNA damage in a sample of workers in Japan. *J Psychosom Res*. 2009; 66(4): 329-334.
 131. Inoue A, [Kawakami N](#), Tsutsumi A, Shimazu A, Tsuchiya M, Ishizaki M, Tabata M, Akiyama M, Kitazume A, Kuroda M, Kivimaki M. Reliability and validity of the Japanese version of the Organizational Justice Questionnaire. *J Occup Health*. 2009; 51(1): 74-83.
 132. Kinoshita Y, Tsuchiya M, [Kawakami N](#), Furukawa TA, Kingdon D. Hallucinations in visually impaired individuals: an analysis of the National Comorbidity Survey Replication. *Soc Psychiatry Psychiatr Epidemiol*. 2009; 44(2): 104-108.
 133. Lee S, Tsang A, Breslau J, Aguilar-Gaxiola S, Angermeyer M, Borges G, Bromet E, Bruffaerts R, de Girolamo G, Fayyad J, Gureje O, Haro JM, [Kawakami N](#), Levinson D, Oakley Browne MA, Ormel J, Posada-Villa J, Williams DR, Kessler RC. Mental disorders and termination of education in high-income and low- and middle-income countries: epidemiological study. *Br J Psychiatry*. 2009; 194(5): 411-417.
 134. Nock MK, Hwang I, Sampson N, Kessler RC, Angermeyer M, Beautrais A, Borges G, Bromet E, Bruffaerts R, de Girolamo G, de Graaf R, Florescu S, Gureje O, Haro JM, Hu C, Huang Y, Karam EG, [Kawakami N](#), Kovess V, Levinson D, Posada-Villa J, Sagar R, Tomov T, Viana MC, Williams DR. Cross-national analysis of the associations among mental disorders and suicidal behavior: findings from the WHO World Mental Health Surveys. *PLoS Med*. 2009; 6(8): e1000123.
 135. Oishi J, Doi H, [Kawakami N](#). Nutrition and depressive symptoms in community-dwelling elderly persons in Japan. *Acta Med Okayama*. 2009; 63(1): 9-17.
 136. Tominaga M, [Kawakami N](#), Ono Y, Nakane Y, Nakamura Y, Tachimori H, Iwata N, Uda H, Nakane H, Watanabe M, Naganuma Y, Furukawa TA, Hata Y, Kobayashi M, Miyake Y, Takeshima T, Kikkawa T. Prevalence and correlates of illicit and non-medical use of psychotropic drugs in Japan: findings from the World Mental Health Japan Survey 2002-2004. *Soc Psychiatry Psychiatr Epidemiol*. 2009; 44(9): 777-783.
 137. Tsuchiya M, [Kawakami N](#), Ono Y, Nakane Y, Nakamura Y, Tachimori H, Iwata N, Uda H, Nakane H, Watanabe M, Naganuma Y, Furukawa TA, Hata Y, Kobayashi M, Miyake Y, Takeshima T, Kikkawa T, Kessler RC. Lifetime comorbidities between phobic disorders and major depression in Japan: results from the World Mental Health Japan 2002-2004 Survey. *Depress Anxiety*. 2009; 26(10): 949-955.
 138. Tsuno K, [Kawakami N](#), Inoue A, Ishizaki M, Tabata M, Tsuchiya M, Akiyama M, Kitazume A, Kuroda M, Shimazu A. Intragroup and intergroup conflict at work, psychological distress, and work engagement in a sample of employees in Japan. *Ind Health*. 2009; 47(6): 640-648.
 139. Tsutsumi A, Iwata N, Watanabe N, de Jonge J, Pikhart H, Fernandez-Lopez JA, Xu L, Peter R, Knutsson A, Niedhammer I, [Kawakami N](#), Siegrist J. Application of item response theory to achieve cross-cultural comparability of occupational stress measurement. *Int J Methods Psychiatr Res*. 2009; 18(1): 58-67.
 140. Tsutsumi A, Nagami M, Yoshikawa T, Kogi K, [Kawakami N](#). Participatory intervention for workplace improvements on mental health and job performance among blue-collar workers: a cluster randomized controlled trial. *J Occup Environ Med*. 2009; 51(5): 554-563.
 141. Umanodan R, Kobayashi Y, Nakamura M, Kitaoka-Higashiguchi K, [Kawakami N](#), Shimazu A. Effects of a worksite stress management training program with six short-hour sessions: a controlled trial among Japanese employees. *J Occup Health*. 2009; 51(4): 294-302.
 142. Chiba R, [Kawakami N](#), Miyamoto Y, Andresen R. Reliability and validity of the Japanese version of the Self-Identified Stage of Recovery for people with long term mental illness. *Int J Ment Health Nurs*. 2010; 19(3): 195-202.
 143. Chiba R, Miyamoto Y, [Kawakami N](#). Reliability and validity of the Japanese version of the Recovery Assessment Scale (RAS) for people with chronic mental illness: scale development. *Int J Nurs Stud*. 2010; 47(3): 314-322.
 144. Inoue A, [Kawakami N](#). Interpersonal conflict and depression among Japanese workers with high or low socioeconomic status: findings from the Japan Work Stress and Health Cohort Study. *Soc Sci Med*. 2010; 71(1): 173-180.
 145. Inoue A, [Kawakami N](#), Haratani T, Kobayashi F, Ishizaki M, Hayashi T, Fujita O, Aizawa Y, Miyazaki S, Hiro H, Masumoto T, Hashimoto S, Araki S. Job stressors and long-term sick leave due to depressive disorders among Japanese male employees: findings from the Japan Work Stress and Health Cohort study. *J Epidemiol Community Health*. 2010; 64(3): 229-235.
 146. Inoue A, [Kawakami N](#), Ishizaki M, Shimazu A, Tsuchiya M, Tabata M, Akiyama M, Kitazume A, Kuroda M. Organizational justice, psychological distress, and work engagement in Japanese workers. *Int Arch Occup Environ Health*. 2010; 83(1): 29-38.
 147. Inoue A, [Kawakami N](#), Tsuchiya M, Sakurai K, Hashimoto H. Association of occupation, employment contract, and company size with mental health in a national representative sample of employees in Japan. *J Occup Health*. 2010; 52(4): 227-240.
 148. Kessler RC, McLaughlin KA, Green JG, Gruber MJ, Sampson NA, Zaslavsky AM, Aguilar-Gaxiola S, Alhamzawi AO, Alonso J, Angermeyer M, Benjet C, Bromet E, Chatterji S, de Girolamo G, Demyttenaere K, Fayyad J, Florescu S, Gal G, Gureje O, Haro JM, Hu CY, Karam EG, [Kawakami N](#), Lee S, Lepine JP, Ormel J, Posada-Villa J, Sagar R, Tsang A, Ustun TB, Vassilev S, Viana MC, Williams DR. Childhood adversities and adult psychopathology in the WHO World Mental Health Surveys. *Br J Psychiatry*. 2010; 197(5): 378-385.
 149. Koyama A, Miyake Y, [Kawakami N](#), Tsuchiya M, Tachimori H, Takeshima T. Lifetime prevalence, psychiatric comorbidity and demographic correlates of "hikikomori" in a community population in Japan. *Psychiatry Res*. 2010; 176(1): 69-74.

150. Kubota K, Shimazu A, [Kawakami N](#), Takahashi M, Nakata A, Schaufeli WB. Association between workaholism and sleep problems among hospital nurses. *Ind Health*. 2010; 48(6): 864-871.
151. Levinson D, Lakoma MD, Petukhova M, Schoenbaum M, Zaslavsky AM, Angermeyer M, Borges G, Bruffaerts R, de Girolamo G, de Graaf R, Gureje O, Haro JM, Hu C, Karam AN, [Kawakami N](#), Lee S, Lepine JP, Browne MO, Okoliyski M, Posada-Villa J, Sagar R, Viana MC, Williams DR, Kessler RC. Associations of serious mental illness with earnings: results from the WHO World Mental Health surveys. *Br J Psychiatry*. 2010; 197(2): 114-121.
152. Saito M, Iwata N, [Kawakami N](#), Matsuyama Y, Ono Y, Nakane Y, Nakamura Y, Tachimori H, Uda H, Nakane H, Watanabe M, Naganuma Y, Furukawa TA, Hata Y, Kobayashi M, Miyake Y, Takeshima T, Kikkawa T. Evaluation of the DSM-IV and ICD-10 criteria for depressive disorders in a community population in Japan using item response theory. *Int J Methods Psychiatr Res*. 2010; 19(4): 211-222.
153. Sakurai K, [Kawakami N](#), Yamaoka K, Ishikawa H, Hashimoto H. The impact of subjective and objective social status on psychological distress among men and women in Japan. *Soc Sci Med*. 2010; 70(11): 1832-1839.
154. Shibaoka M, Takada M, Watanabe M, Kojima R, Kakinuma M, Tanaka K, [Kawakami N](#). Development and validity of the Japanese version of the organizational justice scale. *Ind Health*. 2010; 48(1): 66-73.
155. Shikata K, Haneda M, Koya D, Suzuki Y, Tomino Y, Yamada K, Maeda S, [Kawakami N](#), Uzu T, Nishimura M, Sato C, Ogawa D, Makino H. Diabetic Nephropathy Remission and Regression Team Trial in Japan (DNETT-Japan): Rationale and study design. *Diabetes Res Clin Pract*. 2010; 87(2): 228-232.
156. Shimada K, Shimazu A, Bakker AB, Demerouti E, [Kawakami N](#). Work-family spillover among Japanese dual-earner couples: a large community-based study. *J Occup Health*. 2010; 52(6): 335-343.
157. Tsuno K, [Kawakami N](#), Inoue A, Abe K. Measuring workplace bullying: reliability and validity of the Japanese version of the negative acts questionnaire. *J Occup Health*. 2010; 52(4): 216-226.
158. Bakker AB, Shimazu A, Demerouti E, Shimada K, [Kawakami N](#). Crossover of work engagement among Japanese couples: Perspective taking by both partners. *J Occup Health Psychol*. 2011; 16(1): 112-125.
159. Bruffaerts R, Demyttenaere K, Hwang I, Chiu WT, Sampson N, Kessler RC, Alonso J, Borges G, de Girolamo G, de Graaf R, Florescu S, Gureje O, Hu C, Karam EG, [Kawakami N](#), Kostyuchenko S, Kovess-Masfety V, Lee S, Levinson D, Matschinger H, Posada-Villa J, Sagar R, Scott KM, Stein DJ, Tomov T, Viana MC, Nock MK. Treatment of suicidal people around the world. *Br J Psychiatry*. 2011; 199(1): 64-70.
160. Chiba R, [Kawakami N](#), Miyamoto Y. Quantitative relationship between recovery and benefit-finding among persons with chronic mental illness in Japan. *Nurs Health Sci*. 2011; 13(2): 126-132.
161. Coe CL, Love GD, Karasawa M, [Kawakami N](#), Kitayama S, Markus HR, Tracy RP, Ryff CD. Population differences in proinflammatory biology: Japanese have healthier profiles than Americans. *Brain Behav Immun*. 2011; 25(3): 494-502.
162. Fujiwara T, [Kawakami N](#). Association of childhood adversities with the first onset of mental disorders in Japan: results from the World Mental Health Japan, 2002-2004. *J Psychiatr Res*. 2011; 45(4): 481-487.
163. Ogawa M, Miyamoto Y, [Kawakami N](#). Factors associated with glycemic control and diabetes self-care among outpatients with schizophrenia and type 2 diabetes. *Arch Psychiatr Nurs*. 2011; 25(1): 63-73.
164. Orui M, [Kawakami N](#), Iwata N, Takeshima T, Fukao A. Lifetime prevalence of mental disorders and its relationship to suicidal ideation in a Japanese rural community with high suicide and alcohol consumption rates. *Environ Health Prev Med*. 2011; 16(6): 384-389.
165. Sado M, Yamauchi K, [Kawakami N](#), Ono Y, Furukawa TA, Tsuchiya M, Tajima M, Kashima H, Nakane Y, Nakamura Y, Fukao A, Horiguchi I, Tachimori H, Iwata N, Uda H, Nakane H, Watanabe M, Oorui M, Funayama K, Naganuma Y, Hata Y, Kobayashi M, Ahiko T, Yamamoto Y, Takeshima T, Kikkawa T. Cost of depression among adults in Japan in 2005. *Psychiatry Clin Neurosci*. 2011; 65(5): 442-450.
166. Sakurai K, Nishi A, Kondo K, Yanagida K, [Kawakami N](#). Screening performance of K6/K10 and other screening instruments for mood and anxiety disorders in Japan. *Psychiatry Clin Neurosci*. 2011; 65(5): 434-441.
167. Shimazu A, Demerouti E, Bakker AB, Shimada K, [Kawakami N](#). Workaholism and well-being among Japanese dual-earner couples: a spillover-crossover perspective. *Soc Sci Med*. 2011; 73(3): 399-409.
168. Yoshimasu K, [Kawakami N](#). Epidemiological aspects of intermittent explosive disorder in Japan; prevalence and psychosocial comorbidity: findings from the World Mental Health Japan Survey 2002-2006. *Psychiatry Res*. 2011; 186(2-3): 384-389.
169. Ando S, [Kawakami N](#). Utility of self-reported sleep disturbances as a marker for major depressive disorder (MDD): findings from the World Mental Health Japan Survey 2002-2006. *Psychiatry Res*. 2012; 198(1): 146-153.
170. Cheng Y, Park J, Kim Y, [Kawakami N](#). The recognition of occupational diseases attributed to heavy workloads: experiences in Japan, Korea, and Taiwan. *Int Arch Occup Environ Health*. 2012; 85(7): 791-799.
171. Eguchi H, Tsuda Y, Tsukahara T, Washizuka S, [Kawakami N](#), Nomiyama T. The effects of workplace occupational mental health and related activities on psychological distress among workers: a multilevel cross-sectional analysis. *J Occup Environ Med*. 2012; 54(8): 939-947.
172. Furukawa TA, Horikoshi M, [Kawakami N](#), Kadota M, Sasaki M, Sekiya Y, Hosogoshi H, Kashimura M, Asano K, Terashima H, Iwasa K, Nagasaki M, Grothaus LC. Telephone cognitive-behavioral therapy for subthreshold depression and presenteeism in workplace: a randomized controlled trial. *PLoS One*. 2012; 7(4): e35330.
173. Hirokawa K, Taniguchi T, Tsuchiya M, [Kawakami N](#). Effects of a stress management program for hospital staffs on their coping strategies and interpersonal behaviors. *Ind Health*. 2012; 50(6): 487-498.
174. Hirokawa S, [Kawakami N](#), Matsumoto T, Inagaki A, Eguchi N, Tsuchiya M, Katsumata Y, Akazawa M, Kameyama A, Tachimori H, Takeshima T. Mental disorders and suicide in Japan: a nation-wide psychological autopsy case-control study. *J Affect Disord*. 2012; 140(2): 168-175.
175. Hirokawa S, Matsumoto T, Katsumata Y, Kitani M, Akazawa M, Takahashi Y, [Kawakami N](#), Watanabe N, Hirayama M, Kameyama A, Takeshima T. Psychosocial and psychiatric characteristics of suicide completers with psychiatric treatment before death: a psychological autopsy study of 76 cases. *Psychiatry Clin Neurosci*. 2012; 66(4): 292-302.
176. [Kawakami N](#), Abdulghani EA, Alonso J, Bromet EJ, Bruffaerts R, Caldas-de-Almeida JM, Chiu WT, de Girolamo G, de Graaf R, Fayyad J, Ferry F, Florescu S, Gureje O, Hu C, Lakoma MD, Leblanc W, Lee S, Levinson D, Malhotra S, Matschinger H, Medina-Mora ME, Nakamura Y, Oakley Browne MA, Okoliyski M, Posada-Villa J, Sampson NA, Viana MC, Kessler RC. Early-life mental disorders and adult household income in the World Mental Health Surveys. *Biol Psychiatry*. 2012; 72(3): 228-237.
177. Lim SS, Vos T, Flaxman AD, Danaei G, Shibuya K, Adair-Rohani H, Amann M, Anderson HR, Andrews KG, Aryee M, Atkinson C, Bacchus LJ, Bahalim AN, Balakrishnan K, Balmes J, Barker-Collo S, Baxter A, Bell ML, Blore JD, Blyth F, Bonner C, Borges G, Bourne R, Boussinesq M, Brauer M, Brooks P, Bruce NG, Brunekreef B, Bryan-Hancock C, Bucello C, Buchbinder R, Bull F, Burnett RT, Byers TE, Calabria B, Carapetis J, Carnahan E, Chafe Z, Charlson F, Chen H, Chen JS, Cheng AT, Child JC, Cohen A, Colson KE, Cowie BC, Darby S, Darling S, Davis A, Degenhardt L, Dentener F, Des Jarlais DC, Devries K, Dherani M, Ding EL, Dorsey ER, Driscoll T, Edmund K, Ali SE, Engell RE, Erwin PJ, Fahimi S, Falder G, Farzadfar F, Ferrari A, Finucane MM, Flaxman S, Fowkes FG, Freedman G, Freeman MK, Gakidou E, Ghosh S, Giovannucci E, Gmel G, Graham K, Grainger R, Grant B, Gunnell D, Gutierrez HR, Hall W, Hoek HW, Hogan A, Hosgood HD, 3rd, Hoy D, Hu H, Hubbell BJ, Hutchings SJ, Ibeanusi SE, Jacklyn GL, Jasrasaria R, Jonas JB, Kan H, Kanis JA, Kassebaum N, [Kawakami N](#), Khang YH, Khatibzadeh S, Khoo JP, Kok C, Laden F, Lalloo R, Lan Q, Lathlean T, Leasher JL, Leigh J, Li Y, Lin JK, Lipshultz SE, London S, Lozano R, Lu Y, Mak J, Malekzadeh R, Mallinger L, Marcenes W, March L, Marks R, Martin R, McGale P, McGrath J, Mehta S, Mensah GA, Merriman TR, Micha R, Michaud C, Mishra V, Mohd Hanafiah K, Mokdad AA, Morawska L, Mozaffarian D, Murphy T, Naghavi M, Neal B, Nelson PK, Nolla JM, Norman R, Olives C, Omer SB, Orchard J, Osborne R, Ostro B, Page A, Pandey KD, Parry CD, Passmore E, Patra J, Pearce N, Pelizzari PM, Petzold M, Phillips MR, Pope D, Pope CA, 3rd, Powles J, Rao M, Razavi H, Rehfuss EA, Rehm JT, Ritz B, Rivara FP, Roberts T, Robinson C, Rodriguez-Portales JA, Romieu I, Room R, Rosenfeld LC, Roy A, Rushton L, Salomon JA, Sampson U, Sanchez-Riera L, Sanman E, Sapkota A, Seedat S, Shi P, Shield K, Shivakoti R, Singh GM, Sleet DA, Smith E, Smith KR, Stapelberg NJ, Steenland K, Stockl H, Stovner LJ, Straif K, Straney L, Thurston GD, Tran JH, Van Dingenen R, van Donkelaar A, Veerman JL, Vijayakumar L, Weintraub R, Weissman MM, White RA, Whiteford H, Wiersma ST, Wilkinson JD, Williams HC, Williams W, Wilson N, Woolf AD, Yip P, Zielinski JM, Lopez AD, Murray CJ, Ezzati M, AlMazroa MA, Memish ZA. A comparative risk assessment of burden of disease and injury attributable to 67 risk factors and risk factor clusters in 21 regions, 1990-2010: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2010. *Lancet*. 2012; 380(9859): 2224-2260.
178. Miyaki K, Song Y, Htun NC, Tsutsumi A, Hashimoto H, [Kawakami N](#), Takahashi M, Shimazu A, Inoue A, Kurioka S, Shimbo T. Folate intake and depressive symptoms in Japanese workers considering SES and job stress factors: J-HOPE study. *BMC Psychiatry*. 2012; 12: 33.
179. Murray CJ, Vos T, Lozano R, Naghavi M, Flaxman AD, Michaud C, Ezzati M, Shibuya K, Salomon JA, Abdalla S, Aboyans V, Abraham J, Ackerman I, Aggarwal R, Ahn SY, Ali MK, Alvarado M, Anderson HR, Anderson LM, Andrews KG, Atkinson C, Baddour LM, Bahalim AN, Barker-Collo S, Barrero LH, Bartels DH, Basanez MG, Baxter A, Bell ML, Benjamin EJ, Bennett D, Bernabe E, Bhalla K, Bhandari B, Bikbov B, Bin Abdulhak A, Birbeck G, Black JA, Blencowe H, Blore JD, Blyth F, Bolliger I, Bonaventure A, Boufous S, Bourne R, Boussinesq M, Braithwaite T, Brayne C, Bridgett L, Brooker S, Brooks P, Brugha TS, Bryan-Hancock C, Bucello C, Buchbinder R, Buckle G, Budke CM, Burch M, Burney P, Burstein R, Calabria B, Campbell B, Canter CE, Carabin H, Carapetis J, Carmona L, Cella C, Charlson F, Chen H, Cheng AT, Chou D, Chugh SS, Coffeng LE, Colan SD, Colquhoun S, Colson KE, Condon J, Connor MD, Cooper LT, Corriere M, Cortinovis M, de Vaccaro KC, Couser W, Cowie BC, Criqui MH, Cross M, Dabhadkar KC, Dahiya M, Dahodwala N,

- Damsere-Derry J, Danaei G, Davis A, De Leo D, Degenhardt L, Dellavalle R, Delossantos A, Denenberg J, Derrett S, Des Jarlais DC, Dharmaratne SD, Dherani M, Diaz-Torne C, Dolk H, Dorsey ER, Driscoll T, Duber H, Ebel B, Edmond K, Elbaz A, Ali SE, Erskine H, Erwin PJ, Espindola P, Ewoigbokhan SE, Farzadfar F, Feigin V, Felson DT, Ferrari A, Ferri CP, Fevre EM, Finucane MM, Flaxman S, Flood L, Foreman K, Forouzanfar MH, Fowkes FG, Fransen M, Freeman MK, Gabbe BJ, Gabriel SE, Gakidou E, Ganatra HA, Garcia B, Gaspari F, Gillum RF, Gmel G, Gonzalez-Medina D, Gosselin R, Grainger R, Grant B, Groeger J, Guillemin F, Gunnell D, Gupta R, Haagsma J, Hagan H, Halasa YA, Hall W, Haring D, Haro JM, Harrison JE, Havmoeller R, Hay RJ, Higashi H, Hill C, Hoen B, Hoffman H, Hotez PJ, Hoy D, Huang JJ, Ibeanusi SE, Jacobsen KH, James SL, Jarvis D, Jasrasaria R, Jayaraman S, Johns N, Jonas JB, Karthikeyan G, Kassebaum N, Kawakami N, Keren A, Khoo JP, King CH, Knowlton LM, Kobusingye O, Koranteng A, Krishnamurthi R, Laden F, Lalloo R, Laslett LL, Lathlean T, Leasher JL, Lee YY, Leigh J, Levinson D, Lim SS, Limb E, Lin JK, Lipnick M, Lipshultz SE, Liu W, Loane M, Ohno SL, Lyons R, Mabweijano J, MacIntyre MF, Malekzadeh R, Mallinger L, Manivannan S, Marcenés W, March L, Margolis DJ, Marks GB, Marks R, Matsumori A, Matzopoulos R, Mayosi BM, McAnulty JH, McDermott MM, McGill N, McGrath J, Medina-Mora ME, Meltzer M, Mensah GA, Merriman TR, Meyer AC, Miglioli V, Miller M, Miller TR, Mitchell PB, Mock C, Mocumbi AO, Moffitt TE, Mokdad AA, Monasta L, Montico M, Moradi-Lakeh M, Moran A, Morawska L, Mori R, Murdoch ME, Mwaniki MK, Naidoo K, Nair MN, Naldi L, Narayan KM, Nelson PK, Nelson RG, Nevitt MC, Newton CR, Nolte S, Norman P, Norman R, O'Donnell M, O'Hanlon S, Olives C, Omer SB, Ortblad K, Osborne R, Ozgediz D, Page A, Pahari B, Pandian JD, Rivero AP, Patten SB, Pearce N, Padilla RP, Perez-Ruiz F, Perico N, Pesudovs K, Phillips D, Phillips MR, Pierce K, Pion S, Polanczyk GV, Polinder S, Pope CA, 3rd, Popova S, Porrini E, Pourmalek F, Prince M, Pullan RL, Ramaiah KD, Ranganathan D, Razavi H, Regan M, Rehm JT, Rein DB, Remuzzi G, Richardson K, Rivara FP, Roberts T, Robinson C, De Leon FR, Ronfani L, Room R, Rosenfeld LC, Rushton L, Sacco RL, Saha S, Sampson U, Sanchez-Riera L, Sanman E, Schwebel DC, Scott JG, Segui-Gomez M, Shahraz S, Shepard DS, Shin H, Shivakoti R, Singh D, Singh GM, Singh JA, Singleton J, Sleet DA, Sliwa K, Smith E, Smith JL, Stapelberg NJ, Steer A, Steiner T, Stolk WA, Stovner LJ, Sudfeld C, Syed S, Tamburlini G, Tavakkoli M, Taylor HR, Taylor JA, Taylor WJ, Thomas B, Thomson WM, Thurston GD, Tleyjeh IM, Tonelli M, Towbin JA, Truelsen T, Tsilimbaris MK, Ubeda C, Undurraga EA, van der Werf MJ, van Os J, Vavilala MS, Venketasubramanian N, Wang M, Wang W, Watt K, Weatherall DJ, Weinstock MA, Weintraub R, Weisskopf MG, Weissman MM, White RA, Whiteford H, Wiersma ST, Wilkinson JD, Williams HC, Williams SR, Witt E, Wolfe F, Woolf AD, Wulf S, Yeh PH, Zaidi AK, Zheng ZJ, Zonies D, Lopez AD, Murray CJ, AlMazroa MA, Memish ZA. Years lived with disability (YLDs) for 1160 sequelae of 289 diseases and injuries 1990-2010: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2010. *Lancet*. 2012; 380(9859): 2163-2196.
185. Inoue A, Kawakami N, Tsuno K, Shimazu A, Tomioka K, Nakanishi M. Job demands, job resources, and work engagement of Japanese employees: a prospective cohort study. *Int Arch Occup Environ Health*. 2013; 86(4): 441-449.
186. Inoue A, Kawakami N, Tsuno K, Tomioka K, Nakanishi M. Organizational justice and major depressive episodes in Japanese employees: a cross-sectional study. *J Occup Health*. 2013; 55(2): 47-55.
187. Inoue A, Kawakami N, Tsuno K, Tomioka K, Nakanishi M. Organizational justice and psychological distress among permanent and non-permanent employees in Japan: a prospective cohort study. *Int J Behav Med*. 2013; 20(2): 265-276.
188. Ishizaki M, Kawakami N, Honda R, Yamada Y, Nakagawa H, Morikawa Y. A prospective study of psychosocial work characteristics and long sick leave of Japanese male employees in multiple workplaces. *Ind Health*. 2013; 51(4): 398-405.
189. Kido Y, Kawakami N. Sociodemographic determinants of attitudinal barriers in the use of mental health services in Japan: findings from the World Mental Health Japan Survey 2002-2006. *Psychiatry Clin Neurosci*. 2013; 67(2): 101-109.
190. Kido Y, Kawakami N, Miyamoto Y, Chiba R, Tsuchiya M. Social capital and stigma toward people with mental illness in Tokyo, Japan. *Community Ment Health J*. 2013; 49(2): 243-247.
191. Miyaki K, Song Y, Taneichi S, Tsutsumi A, Hashimoto H, Kawakami N, Takahashi M, Shimazu A, Inoue A, Kurioka S, Shimbo T. Socioeconomic status is significantly associated with dietary salt intakes and blood pressure in Japanese workers (J-HOPE Study). *Int J Environ Res Public Health*. 2013; 10(3): 980-993.
192. Miyaki K, Song Y, Taneichi S, Tsutsumi A, Hashimoto H, Kawakami N, Takahashi M, Shimazu A, Inoue A, Kurioka S, Shimbo T. Socioeconomic status is significantly associated with the dietary intakes of folate and depression scales in Japanese workers (J-HOPE Study). *Nutrients*. 2013; 5(2): 565-578.
193. Miyamoto Y, Boylan JM, Coe CL, Curhan KB, Levine CS, Markus HR, Park J, Kitayama S, Kawakami N, Karasawa M, Love GD, Ryff CD. Negative emotions predict elevated interleukin-6 in the United States but not in Japan. *Brain Behav Immun*. 2013; 34: 79-85.
194. Moreno MP, Beltran CA, Tsuno K, Inoue A, Kawakami N. Assessing psychological violence and harassment at work: reliability and validity of the Japanese version of the Inventory of Violence and Psychological Harassment (IVAPT) comparing NAQ-R and LIPT. *J Occup Health*. 2013; 55(2): 108-119.
195. Okamoto M, Kawakami N, Kido Y, Sakurai K. Social capital and suicide: an ecological study in Tokyo, Japan. *Environ Health Prev Med*. 2013; 18(4): 306-312.

196. Oshio T, Umeda M, [Kawakami N](#). Impact of interpersonal adversity in childhood on adult mental health: how much is mediated by social support and socio-economic status in Japan? *Public Health*. 2013; 127(8): 754-760.
197. Park J, Kitayama S, Karasawa M, Curhan K, Markus HR, [Kawakami N](#), Miyamoto Y, Love GD, Coe CL, Ryff CD. Clarifying the links between social support and health: culture, stress, and neuroticism matter. *J Health Psychol*. 2013; 18(2): 226-235.
198. Park J, Kitayama S, Markus HR, Coe CL, Miyamoto Y, Karasawa M, Curhan KB, Love GD, [Kawakami N](#), Boylan JM, Ryff CD. Social status and anger expression: the cultural moderation hypothesis. *Emotion*. 2013; 13(6): 1122-1131.
199. Shimazu A, [Kawakami N](#), Kubota K, Inoue A, Kurioka S, Miyaki K, Takahashi M, Tsutsumi A. Psychosocial mechanisms of psychological health disparity in Japanese workers. *Ind Health*. 2013; 51(5): 472-81.
200. Shimazu A, Kubota K, Bakker A, Demerouti E, Shimada K, [Kawakami N](#). Work-to-family conflict and family-to-work conflict among Japanese dual-earner couples with preschool children: a spillover-crossover perspective. *J Occup Health*. 2013; 55(4): 234-243.
201. Suzuki T, Miyaki K, Tsutsumi A, Hashimoto H, [Kawakami N](#), Takahashi M, Shimazu A, Inoue A, Kurioka S, Kakehashi M, Sasaki Y, Shimbo T. Japanese dietary pattern consistently relates to low depressive symptoms and it is modified by job strain and worksite supports. *J Affect Disord*. 2013; 150(2): 490-498.
202. Takaoka Y, [Kawakami N](#). Fruit and vegetable consumption in adolescence and health in early adulthood: a longitudinal analysis of the statistics Canada's National Population Health Survey. *BMC Public Health*. 2013; 13(13): 1206.
203. Chiba R, Miyamoto Y, [Kawakami N](#), Harada N. Effectiveness of a program to facilitate recovery for people with long-term mental illness in Japan. *Nurs Health Sci*. 2014; 16(3): 277-283.
204. Curhan KB, Levine CS, Markus HR, Kitayama S, Park J, Karasawa M, [Kawakami N](#), Love GD, Coe CL, Miyamoto Y, Ryff CD. Subjective and objective hierarchies and their relations to psychological well-being: A U.S./Japan comparison. *Soc Psychol Personal Sci*. 2014; 5(8): 855-864.
205. Curhan KB, Sims T, Markus HR, Kitayama S, Karasawa M, [Kawakami N](#), Love GD, Coe CL, Miyamoto Y, Ryff CD. Just how bad negative affect is for your health depends on culture. *Psychol Sci*. 2014; 25(12): 2277-2280.
206. Honjo K, [Kawakami N](#), Tsuchiya M, Sakurai K. Association of subjective and objective socioeconomic status with subjective mental health and mental disorders among Japanese men and women. *Int J Behav Med*. 2014; 21(3): 421-429.
207. Imamura K, [Kawakami N](#), Furukawa TA, Matsuyama Y, Shimazu A, Umanodan R, Kawakami S, Kasai K. Effects of an Internet-based cognitive behavioral therapy (iCBT) program in Manga format on improving subthreshold depressive symptoms among healthy workers: a randomized controlled trial. *PLoS One*. 2014; 9(5): e97167.
208. Inoue A, [Kawakami N](#), Shimomitsu T, Tsutsumi A, Haratani T, Yoshikawa T, Shimazu A, Odagiri Y. Development of a short version of the new brief job stress questionnaire. *Ind Health*. 2014; 52(6): 535-540.
209. Inoue A, [Kawakami N](#), Shimomitsu T, Tsutsumi A, Haratani T, Yoshikawa T, Shimazu A, Odagiri Y. Development of a short questionnaire to measure an extended set of job demands, job resources, and positive health outcomes: the new brief job stress questionnaire. *Ind Health*. 2014; 52(3): 175-189.
210. Inoue A, [Kawakami N](#), Tsutsumi A, Shimazu A, Miyaki K, Takahashi M, Kurioka S, Eguchi H, Tsuchiya M, Enta K, Kosugi Y, Sakata T, Totsuzaki T. Association of job demands with work engagement of Japanese employees: comparison of challenges with hindrances (J-HOPE). *PLoS One*. 2014; 9(3): e91583.
211. Kan C, [Kawakami N](#), Karasawa M, Love GD, Coe CL, Miyamoto Y, Ryff CD, Kitayama S, Curhan KB, Markus HR. Psychological resources as mediators of the association between social class and health: comparative findings from Japan and the USA. *Int J Behav Med*. 2014; 21(1): 53-65.
212. Karam EG, Friedman MJ, Hill ED, Kessler RC, McLaughlin KA, Petukhova M, Sampson L, Shahly V, Angermeyer MC, Bromet EJ, de Girolamo G, de Graaf R, Demyttenaere K, Ferry F, Florescu SE, Haro JM, He Y, Karam AN, [Kawakami N](#), Kovess-Masfety V, Medina-Mora ME, Browne MA, Posada-Villa JA, Shalev AY, Stein DJ, Viana MC, Zarkov Z, Koenen KC. Cumulative traumas and risk thresholds: 12-month PTSD in the World Mental Health (WMH) surveys. *Depress Anxiety*. 2014; 31(2): 130-142.
213. Kassebaum NJ, Bertozzi-Villa A, Coggeshall MS, Shackelford KA, Steiner C, Heuton KR, Gonzalez-Medina D, Barber R, Huynh C, Dicker D, Templin T, Wolock TM, Ozgoren AA, Abd-Allah F, Abera SF, Abubakar I, Achoki T, Adelekan A, Ademi Z, Adou AK, Adsuar JC, Agardh EE, Akena D, Alasfoor D, Alemu ZA, Alfonso-Cristancho R, Alhabib S, Ali R, Al Khabouri MJ, Alla F, Allen PJ, AlMazroa MA, Alsharif U, Alvarez E, Alvis-Guzman N, Amankwa AA, Amare AT, Amini H, Ammar W, Antonio CA, Anwari P, Arnlov J, Arsenijevic VS, Artaman A, Asad MM, Asghar RJ, Assadi R, Atkins LS, Badawi A, Balakrishnan K, Basu A, Basu S, Beardsley J, Bedi N, Bekele T, Bell ML, Bernabe E, Beyene TJ, Bhutta Z, Bin Abdulhak A, Blore JD, Basara BB, Bose D, Breitborde N, Cardenas R, Castaneda-Orjuela CA, Castro RE, Catala-Lopez F, Cavlin A, Chang JC, Che X, Christophi CA, Chugh SS, Cirillo M, Colquhoun SM, Cooper LT, Cooper C, da Costa Leite I, Dandona L, Dandona R, Davis A, Dayama A, Degenhardt L, De Leo D, del Pozo-Cruz B, Deribe K, Dessalegn M, deVeber GA, Dharmaratne SD, Dilmen U, Ding EL, Dorrington RE, Driscoll TR, Ermakov SP, Esteghamati A, Faraon EJ, Farzadfar F, Felicio MM, Fereshtehnejad SM, de Lima GM, Forouzanfar MH, Franca EB, Gaffikin L, Gambashidze K, Gankpe FG, Garcia AC, Geleijnse JM, Gibney KB, Giroud M, Glaser EL, Goginashvili K, Gona P, Gonzalez-Castell D, Goto A, Gouda HN, Gughani HC, Gupta R, Hafezi-Nejad N, Hamadeh RR, Hammami M, Hankey GJ, Harb HL, Havmoeller R, Hay SI, Pi IB, Hoek HW, Hosgood HD, Hoy DG, Husseini A, Idrisov BT, Innos K, Inoue M, Jacobsen KH, Jahangir E, Jee SH, Jensen PN, Jha V, Jiang G, Jonas JB, Juel K, Kabagambe EK, Kan H, Karam NE, Karch A, Karema CK, Kaul A, [Kawakami N](#), Kazanjan K, Kazi DS, Kemp AH, Kengne AP, Kereselidze M, Khader YS, Khalifa SE, Khan EA, Khang YH, Knibbs L, Kokubo Y, Kosen S, Defo BK, Kulkarni C, Kulkarni VS, Kumar GA, Kumar K, Kumar RB, Kwan G, Lai T, Lalloo R, Lam H, Lansingh VC, Larsson A, Lee JT, Leigh J, Leinsalu M, Leung R, Li X, Li Y, Liang J, Liang X, Lim SS, Lin HH, Lipshultz SE, Liu S, Liu Y, Lloyd BK, London SJ, Lotufo PA, Ma J, Ma S, Machado VM, Mainoo NK, Majdan M, Mapoma CC, Marcenis W, Marzan MB, Mason-Jones AJ, Mehndiratta MM, Mejia-Rodriguez F, Memish ZA, Mendoza W, Miller TR, Mills EJ, Mokdad AH, Mola GL, Monasta L, de la Cruz Monis J, Hernandez JC, Moore AR, Moradi-Lakeh M, Mori R, Mueller UO, Mukaigawara M, Naheed A, Naidoo KS, Nand D, Nangia V, Nash D, Nejjari C, Nelson RG, Neupane SP, Newton CR, Ng M, Nieuwenhuijsen MJ, Nisar MI, Nolte S, Norheim OF, Nyakarahuka L, Oh IH, Ohkubo T, Olusanya BO, Omer SB, Opio JN, Orisakwe OE, Pandian JD, Papachristou C, Park JH, Caicedo AJ, Patten SB, Paul VK, Pavlin BI, Pearce N, Pereira DM, Pesudovs K, Petzold M, Poenaru D, Polanczyk GV, Polinder S, Pope D, Pourmalek F, Qato D, Quistberg DA, Rafay A, Rahimi K, Rahimi-Movaghar V, ur Rahman S, Raju M, Rana SM, Refaat A, Ronfani L, Roy N, Pimenta TG, Sahraian MA, Salomon JA, Sampson U, Santos IS, Sawhney M, Sayinzoga F, Schneider IJ, Schumacher A, Schwebel DC, Seedat S, Sepanlou SG, Servan-Mori EE, Shakh-Nazarova M, Sheikhbahaei S, Shibuya K, Shin HH, Shiue I, Sigfusdottir ID, Silberberg DH, Silva AP, Singh JA, Skirbekk V, Sliwa K, Soshnikov SS, Sposato LA, Sreeramareddy CT, Stroumpoulis K, Sturua L, Sykes BL, Tabb KM, Talongwa RT, Tan F, Teixeira CM, Tenkorang EY, Terkawi AS, Thorne-Lyman AL, Tirschwell DL, Towbin JA, Tran BX, Tsilimbaris M, Uchendu US, Ukwaja KN, Undurraga EA, Uzun SB, Valley AJ, van Gool CH, Vasankari TJ, Vavilala MS, Venketasubramanian N, Villalpando S, Violante FS, Vlassov VV, Vos T, Waller S, Wang H, Wang L, Wang X, Wang Y, Weichenthal S, Weiderpass E, Weintraub RG, Westerman R, Wilkinson JD, Woldeyohannes SM, Wong JQ, Wordofa MA, Xu G, Yang YC, Yano Y, Yentur GK, Yip P, Yonemoto N, Yoon SJ, Younis MZ, Yu C, Jin KY, El Sayed Zaki M, Zhao Y, Zheng Y, Zhou M, Zhu J, Zou XN, Lopez AD, Naghavi M, Murray CJ, Lozano R. Global, regional, and national levels and causes of maternal mortality during 1990-2013: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2013. *Lancet*. 2014; 384(9947): 980-1004.
214. [Kawakami N](#), Tsuchiya M, Umeda M, Koenen KC, Kessler RC. Trauma and posttraumatic stress disorder in Japan: results from the World Mental Health Japan Survey. *J Psychiatr Res*. 2014; 53(3): 157-165.
215. Kayama M, Akiyama T, Ohashi A, Horikoshi N, Kido Y, Murakata T, [Kawakami N](#). Experiences of municipal public health nurses following Japan's earthquake, tsunami, and nuclear disaster. *Public Health Nurs*. 2014; 31(6): 517-525.
216. Kessler RC, Rose S, Koenen KC, Karam EG, Stang PE, Stein DJ, Heeringa SG, Hill ED, Liberzon I, McLaughlin KA, McLean SA, Pennell BE, Petukhova M, Rosellini AJ, Ruscio AM, Shahly V, Shalev AY, Silove D, Zaslavsky AM, Angermeyer MC, Bromet EJ, de Almeida JM, de Girolamo G, de Jonge P, Demyttenaere K, Florescu SE, Gureje O, Haro JM, Hinkov H, [Kawakami N](#), Kovess-Masfety V, Lee S, Medina-Mora ME, Murphy SD, Navarro-Mateu F, Piazza M, Posada-Villa J, Scott K, Torres Y, Carmen Viana M. How well can post-traumatic stress disorder be predicted from pre-trauma risk factors? An exploratory study in the WHO World Mental Health Surveys. *World Psychiatry*. 2014; 13(3): 265-274.
217. Kodaka M, Matsumoto T, Katsumata Y, Akazawa M, Tachimori H, [Kawakami N](#), Eguchi N, Shirakawa N, Takeshima T. Suicide risk among individuals with sleep disturbances in Japan: a case-control psychological autopsy study. *Sleep Med*. 2014; 15(4): 430-435.
218. Kubota K, Shimazu A, [Kawakami N](#), Takahashi M. Workaholism and sleep quality among Japanese employees: a prospective cohort study. *Int J Behav Med*. 2014; 21(1): 66-76.
219. Murray CJ, Ortblad KF, Guinovart C, Lim SS, Wolock TM, Roberts DA, Dansereau EA, Graetz N, Barber RM, Brown JC, Wang H, Duber HC, Naghavi M, Dicker D, Dandona L, Salomon JA, Heuton KR, Foreman K, Phillips DE, Fleming TD, Flaxman AD, Phillips BK, Johnson EK, Coggeshall MS, Abd-Allah F, Abera SF, Abraham JP, Abubakar I, Abu-Raddad LJ, Abu-Rmeileh NM, Achoki T, Adeyemo AO, Adou AK, Adsuar JC, Agardh EE, Akena D, Al Khabouri MJ, Alasfoor D, Albittar MI, Alcalá-Cerra G, Alegretti MA, Alemu ZA, Alfonso-Cristancho R, Alhabib S, Ali R, Alla F, Allen PJ, Alsharif U, Alvarez E, Alvis-Guzman N, Amankwa

- AA, Amare AT, Amini H, Ammar W, Anderson BO, Antonio CA, Anwari P, Arnlov J, Arsenijevic VS, Artaman A, Asghar RJ, Assadi R, Atkins LS, Badawi A, Balakrishnan K, Banerjee A, Basu S, Beardsley J, Bekele T, Bell ML, Bernabe E, Beyene TJ, Bhala N, Bhalla A, Bhutta ZA, Abdulhak AB, Binagwaho A, Blore JD, Basara BB, Bose D, Brainin M, Breitborde N, Castaneda-Orjuela CA, Catala-Lopez F, Chadha VK, Chang JC, Chiang PP, Chuang TW, Colomar M, Cooper LT, Cooper C, Courville KJ, Cowie BC, Criqui MH, Dandona R, Dayama A, De Leo D, Degenhardt L, Del Pozo-Cruz B, Deribe K, Des Jarlais DC, Dessalegn M, Dharmaratne SD, Dilmen U, Ding EL, Driscoll TR, Durrani AM, Ellenbogen RG, Ermakov SP, Esteghamati A, Faraon EJ, Farzadfar F, Fereshtehjad SM, Fijabi DO, Forouzanfar MH, Fra Paleo U, Gaffikin L, Gamkrelidze A, Gankpe FG, Geleijnse JM, Gessner BD, Gibney KB, Ginawi IA, Glaser EL, Gona P, Goto A, Gouda HN, Gughani HC, Gupta R, Hafezi-Nejad N, Hamadeh RR, Hammami M, Hankey GJ, Harb HL, Haro JM, Havmoeller R, Hay SI, Hedayati MT, Pi IB, Hoek HW, Hornberger JC, Hosgood HD, Hotez PJ, Hoy DG, Huang JJ, Iburg KM, Idrisov BT, Innos K, Jacobsen KH, Jeemon P, Jensen PN, Jha V, Jiang G, Jonas JB, Juel K, Kan H, Kankindi I, Karam NE, Karch A, Karema CK, Kaul A, [Kawakami N](#), Kazi DS, Kemp AH, Kengne AP, Keren A, Kereselidze M, Khader YS, Khalifa SE, Khan EA, Khang YH, Khonelidze I, Kinfu Y, Kinge JM, Knibbs L, Kokubo Y, Kosen S, Defo BK, Kulkarni VS, Kulkarni C, Kumar K, Kumar RB, Kumar GA, Kwan GF, Lai T, Balaji AL, Lam H, Lan Q, Lansingh VC, Larson HJ, Larsson A, Lee JT, Leigh J, Leinsalu M, Leung R, Li Y, De Lima GM, Lin HH, Lipshultz SE, Liu S, Liu Y, Lloyd BK, Lotufo PA, Machado VM, Maclachlan JH, Magis-Rodriguez C, Majdan M, Mapoma CC, Marcenes W, Marzan MB, Masci JR, Mashal MT, Mason-Jones AJ, Mayosi BM, Mazorodze TT, McKay AC, Meaney PA, Mehndiratta MM, Mejia-Rodriguez F, Melaku YA, Memish ZA, Mendoza W, Miller TR, Mills EJ, Mohammad KA, Mokdad AH, Mola GL, Monasta L, Montico M, Moore AR, Mori R, Moturi WN, Mukaigawara M, Murthy KS, Naheed A, Naidoo KS, Naldi L, Nangia V, Narayan KM, Nash D, Nejjari C, Nelson RG, Neupane SP, Newton CR, Ng M, Nisar MI, Nolte S, Norheim OF, Nowaseb V, Nyakarahuka L, Oh IH, Ohkubo T, Olusanya BO, Omer SB, Opio JN, Orisakwe OE, Pandian JD, Papachristou C, Caicedo AJ, Patten SB, Paul VK, Pavlin BI, Pearce N, Pereira DM, Pervaiz A, Pesudovs K, Petzold M, Pourmalek F, Qato D, Quezada AD, Quistberg DA, Rafay A, Rahimi K, Rahimi-Movaghar V, Ur Rahman S, Raju M, Rana SM, Razavi H, Reilly RQ, Remuzzi G, Richardus JH, Ronfani L, Roy N, Sabin N, Saeedi MY, Sahraian MA, Samonte GM, Sawhney M, Schneider IJ, Schwebel DC, Seedat S, Sepanlou SG, Servan-Mori EE, Sheikhabaei S, Shibuya K, Shin HH, Shiue I, Shivakoti R, Sigfusdottir ID, Silberberg DH, Silva AP, Simard EP, Singh JA, Skirbekk V, Sliwa K, Soneji S, Soshnikov SS, Sreeramareddy CT, Stathopoulou VK, Stroumpoulis K, Swaminathan S, Sykes BL, Tabb KM, Talongwa RT, Tenkorang EY, Terkawi AS, Thomson AJ, Thorne-Lyman AL, Towbin JA, Traebert J, Tran BX, Dimbuene ZT, Tsilimbaris M, Uchendu US, Ukwaja KN, Uzun SB, Valley AJ, Vasankari TJ, Venketasubramanian N, Violante FS, Vlassov VV, Vollset SE, Waller S, Wallin MT, Wang L, Wang X, Wang Y, Weichenthal S, Weiderpass E, Weintraub RG, Westerman R, White RA, Wilkinson JD, Williams TN, Woldeyohannes SM, Wong JQ, Xu G, Yang YC, Yano Y, Yentur GK, Yip P, Yonemoto N, Yoon SJ, Younis M, Yu C, Jin KY, El Sayed Zaki M, Zhao Y, Zheng Y, Zhou M, Zhu J, Zou XN, Lopez AD, Vos T. Global, regional, and national incidence and mortality for HIV, tuberculosis, and malaria during 1990-2013: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2013. *Lancet*. 2014; 384(9947): 1005-1070.
220. Nakagawa Y, Inoue A, [Kawakami N](#), Tsuno K, Tomioka K, Nakanishi M, Mafune K, Hiro H. Job demands, job resources, and job performance in Japanese workers: a cross-sectional study. *Ind Health*. 2014; 52(6): 471-9.
221. Nakagawa Y, Inoue A, [Kawakami N](#), Tsuno K, Tomioka K, Nakanishi M, Mafune K, Hiro H. Effect modification by coping strategies on the association of organizational justice with psychological distress in Japanese workers. *J Occup Health*. 2014; 56(2): 111-123.
222. Niitsu T, Takaoka K, Uemura S, Kono A, Saito A, [Kawakami N](#), Nakazato M, Shimizu E. The psychological impact of a dual-disaster caused by earthquakes and radioactive contamination in Ichinoseki after the Great East Japan Earthquake. *BMC Res Notes*. 2014; 7): 307.
223. Ochi M, Fujiwara T, Mizuki R, [Kawakami N](#). Association of socioeconomic status in childhood with major depression and generalized anxiety disorder: results from the World Mental Health Japan Survey 2002-2006. *BMC Public Health*. 2014; 14): 359.
224. Panthee B, Shimazu A, [Kawakami N](#). Validation of Nepalese version of Utrecht Work Engagement Scale. *J Occup Health*. 2014; 56(6): 421-429.
225. Scott KM, Al-Hamzawi AO, Andrade LH, Borges G, Caldas-de-Almeida JM, Fiestas F, Gureje O, Hu C, Karam EG, [Kawakami N](#), Lee S, Levinson D, Lim CC, Navarro-Mateu F, Okoliyski M, Posada-Villa J, Torres Y, Williams DR, Zakhosha V, Kessler RC. Associations between subjective social status and DSM-IV mental disorders: results from the World Mental Health surveys. *JAMA Psychiatry*. 2014; 71(12): 1400-1408.
226. Shimazu A, de Jonge J, Kubota K, [Kawakami N](#). Psychological detachment from work during off-job time: predictive role of work and non-work factors in Japanese employees. *Ind Health*. 2014; 52(2): 141-146.
227. Shimoda H, Inoue A, Tsuno K, [Kawakami N](#). One-year test-retest reliability of a Japanese web-based version of the WHO Composite International Diagnostic Interview (CIDI) for major depression in a working population. *Int J Methods Psychiatr Res*. 2015; 24(3): 204-212.
228. Song Y, Miyaki K, Suzuki T, Sasaki Y, Tsutsumi A, [Kawakami N](#), Shimazu A, Takahashi M, Inoue A, Kan C, Kurioka S, Shimbo T. Altered DNA methylation status of human brain derived neurotrophin factor gene could be useful as biomarker of depression. *Am J Med Genet B Neuropsychiatr Genet*. 2014; 165B(4): 357-364.
229. Stein DJ, Aguilar-Gaxiola S, Alonso J, Bruffaerts R, de Jonge P, Liu Z, Miguel Caldas-de-Almeida J, O'Neill S, Viana MC, Al-Hamzawi AO, Angermeyer MC, Benjet C, de Graaf R, Ferry F, Kovess-Masfety V, Levinson D, de Girolamo G, Florescu S, Hu C, [Kawakami N](#), Maria Haro J, Piazza M, Posada-Villa J, Wojtyniak BJ, Xavier M, Lim CC, Kessler RC, Scott KM. Associations between mental disorders and subsequent onset of hypertension. *Gen Hosp Psychiatry*. 2014; 36(2): 142-149.
230. Stein DJ, McLaughlin KA, Koenen KC, Atwoli L, Friedman MJ, Hill ED, Maercker A, Petukhova M, Shahly V, van Ommeren M, Alonso J, Borges G, de Girolamo G, de Jonge P, Demyttenaere K, Florescu S, Karam EG, [Kawakami N](#), Matschinger H, Okoliyski M, Posada-Villa J, Scott KM, Viana MC, Kessler RC. DSM-5 and ICD-11 definitions of posttraumatic stress disorder: investigating "narrow" and "broad" approaches. *Depress Anxiety*. 2014; 31(6): 494-505.
231. Suzuki T, Miyaki K, Sasaki Y, Song Y, Tsutsumi A, [Kawakami N](#), Shimazu A, Takahashi M, Inoue A, Kurioka S, Shimbo T. Optimal cutoff values of WHO-HPQ presenteeism scores by ROC analysis for preventing mental sickness absence in Japanese prospective cohort. *PLoS One*. 2014; 9(10): e111191.
232. Takagaki K, Okamoto Y, Jinnin R, Mori A, Nishiyama Y, Yamamura T, Takebayashi Y, Ogata A, Miyake Y, Shimoda H, [Kawakami N](#), Yamawaki S. Behavioral characteristics of subthreshold depression. *J Affect Disord*. 2014; 168): 472-475.
233. Takahashi M, Tsutsumi A, Kurioka S, Inoue A, Shimazu A, Kosugi Y, [Kawakami N](#). Occupational and socioeconomic differences in actigraphically measured sleep. *J Sleep Res*. 2014; 23(4): 458-462.
234. Umanodan R, Shimazu A, Minami M, [Kawakami N](#). Effects of computer-based stress management training on psychological well-being and work performance in Japanese employees: a cluster randomized controlled trial. *Ind Health*. 2014; 52(6): 480-491.
235. Umeda M, [Kawakami N](#). Cross-cultural measurement equivalence of the Japanese version of Revised Conflict Tactics Scales Short Form among Japanese men and women. *Psychiatry Clin Neurosci*. 2014; 68(11): 804-811.
236. Yokoyama Y, Otsuka K, [Kawakami N](#), Kobayashi S, Ogawa A, Tanno K, Onoda T, Yaegashi Y, Sakata K. Mental health and related factors after the Great East Japan earthquake and tsunami. *PLoS One*. 2014; 9(7): e102497.
237. Hino A, Inoue A, [Kawakami N](#), Tsuno K, Tomioka K, Nakanishi M, Mafune K, Hiro H. Buffering effects of job resources on the association of overtime work hours with psychological distress in Japanese white-collar workers. *Int Arch Occup Environ Health*. 2015; 88(5): 631-640.
238. Imamura K, [Kawakami N](#), Furukawa TA, Matsuyama Y, Shimazu A, Kasai K. Effects of an internet-based cognitive behavioural therapy intervention on preventing major depressive episodes among workers: a protocol for a randomised controlled trial. *BMJ Open*. 2015; 5(5): e007590.
239. Imamura K, [Kawakami N](#), Furukawa TA, Matsuyama Y, Shimazu A, Umanodan R, Kawakami S, Kasai K. Effects of an internet-based cognitive behavioral therapy intervention on improving work engagement and other work-related outcomes: an analysis of secondary outcomes of a randomized controlled trial. *J Occup Environ Med*. 2015; 57(5): 578-584.
240. Imamura K, [Kawakami N](#), Furukawa TA, Matsuyama Y, Shimazu A, Umanodan R, Kawakami S, Kasai K. Does Internet-based cognitive behavioral therapy (iCBT) prevent major depressive episode for workers? A 12-month follow-up of a randomized controlled trial. *Psychol Med*. 2015; 45(9): 1907-1917.
241. Imamura K, [Kawakami N](#), Naganuma Y, Igarashi Y. Development of screening inventories for bipolar disorder at workplace: a diagnostic accuracy study. *J Affect Disord*. 2015; 178): 32-38.
242. Kawasaki S, Nishimura Y, Takizawa R, Koike S, Kinoshita A, Satomura Y, Sakakibara E, Sakurada H, Yamagishi M, Nishimura F, Yoshikawa A, Inai A, Nishioka M, Eriguchi Y, Kakiuchi C, Araki T, Kan C, Umeda M, Shimazu A, Hashimoto H, [Kawakami N](#), Kasai K. Using social epidemiology and neuroscience to explore the relationship between job stress and frontotemporal cortex activity among workers. *Soc Neurosci*. 2015; 10(3): 230-242.
243. Kitayama S, Park J, Boylan JM, Miyamoto Y, Levine CS, Markus HR, Karasawa M, Coe CL, [Kawakami N](#), Love GD, Ryff CD. Expression of anger and ill health in two cultures: an examination of inflammation and cardiovascular risk. *Psychol Sci*. 2015; 26(2): 211-220.
244. Miki T, Kochi T, Eguchi M, Kuwahara K, Tsuruoka H, Kurotani K, Ito R, Akter S, Kashino I, Pham NM, Kabe I, [Kawakami N](#), Mizoue T, Nanri A. Dietary intake of minerals in relation to depressive symptoms in Japanese employees: the Furukawa Nutrition and Health Study. *Nutrition*. 2015; 31(5): 686-690.

245. Ryff CD, Miyamoto Y, Boylan JM, Coe CL, Karasawa M, Kawakami N, Kan C, Love GD, Levine C, Markus HR, Park J, Kitayama S. Culture, inequality, and health: evidence from the MIDUS and MIDJA comparison. *Cult Brain*. 2015; 3(1): 1-20.
246. Shimazu A, Schaufeli WB, Kamiyama K, Kawakami N. Workaholism vs. work engagement: the two different predictors of future well-being and performance. *Int J Behav Med*. 2015; 22(1): 18-23.
247. Suzuki T, Miyaki K, Song Y, Tsutsumi A, Kawakami N, Shimazu A, Takahashi M, Inoue A, Kurioka S. Relationship between sickness presenteeism (WHO-HPQ) with depression and sickness absence due to mental disease in a cohort of Japanese workers. *J Affect Disord*. 2015; 180): 14-20.
248. Tsuno K, Kawakami N. Multifactor leadership styles and new exposure to workplace bullying: a six-month prospective study. *Ind Health*. 2015; 53(2): 139-51.
249. Tsuno K, Kawakami N, Tsutsumi A, Shimazu A, Inoue A, Odagiri Y, Yoshikawa T, Haratani T, Shimomitsu T, Kawachi I. Socioeconomic determinants of bullying in the workplace: a national representative sample in Japan. *PLoS One*. 2015; 10(3): e0119435.
250. Eguchi H, Shimazu A, Kawakami N, Inoue A, Nakata A, Tsutsumi A. Work engagement and high-sensitivity C-reactive protein levels among Japanese workers: a 1-year prospective cohort study. *Int Arch Occup Environ Health*. 2015;88(6):651-658.
251. GBD 2013 Risk Factors Collaborators. Global, regional, and national comparative risk assessment of 79 behavioural, environmental and occupational, and metabolic risks or clusters of risks in 188 countries, 1990-2013: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2013. *Lancet*. 2015;386(10010):2287-2323.
252. Hayasaka Y, Furukawa TA, Sozu T, Imai H, Kawakami N, Horikoshi M; GENKI Project. Enthusiasm for homework and improvement of psychological distress in subthreshold depression during behavior therapy: secondary analysis of data from a randomized controlled trial. *BMC Psychiatry*. 2015;15: 302.
253. Inoue A, Kawakami N, Eguchi H, Miyaki K, Tsutsumi A. Organizational justice and physiological coronary heart disease risk factors in Japanese employees: a cross-sectional study. *Int J Behav Med*. 2015;22(6):775-785.
254. Kan C, Kawakami N, Umeda M. Mediating role of psychological resources on the association between childhood socioeconomic status and current health in the community adult population of Japan. *Int J Behav Med*. 2015;22(6):764-774.
255. Kanehara A, Umeda M, Kawakami N, The WMHJS Group. Barriers to mental health care in Japan: Results from the World Mental Health Japan Survey. *Psychiatry Clin Neurosci*. 2015;69(9):523-533.
256. Miki T, Kochi T, Kuwahara K, Eguchi M, Kurotani K, Tsuruoka H, Ito R, Kabe I, Kawakami N, Mizoue T, Nanri A. Dietary patterns derived by reduced rank regression (RRR) and depressive symptoms in Japanese employees: The Furukawa nutrition and health study. *Psychiatry Research*. 2015;229(1-2):214-219.
257. GBD 2013 DALYs and HALE Collaborators, Murray CJ, Barber RM, Foreman KJ, Abbasoglu Ozgoren A, Abd-Allah F, Abera SF, Aboyans V, Abraham JP, Abubakar I, Abu-Raddad LJ, Abu-Rmeileh NM, Achoki T, Ackerman IN, Ademi Z, Adou AK, Adsuar JC, Afshin A, Agardh EE, Alam SS, Alasfoor D, Albittar MI, Alegretti MA, Alemu ZA, Alfonso-Cristancho R, Alhabib S, Ali R, Alla F, Allebeck P, Almazroa MA, Alsharif U, Alvarez E, Alvis-Guzman N, Amare AT, Ameh EA, Amini H, Ammar W, Anderson HR, Anderson BO, Antonio CA, Anwar P, Arnlov J, Arsic Arsenijevic VS, Artaman A, Asghar RJ, Assadi R, Atkins LS, Avila MA, Awuah B, Bachman VF, Badawi A, Bahit MC, Balakrishnan K, Banerjee A, Barker-Collo SL, Barquera S, Barregard L, Barrero LH, Basu A, Basu S, Basulaiman MO, Beardesley J, Bedi N, Beghi E, Bekele T, Bell ML, Benjet C, Bennett DA, Bensenor IM, Benzian H, Bernabé E, Bertozzi-Villa A, Beyene TJ, Bhalal N, Bhalla A, Bhutta ZA, Bienhoff K, Bikbov B, Biryukov S, Blore JD, Blosser CD, Blyth FM, Bohensky MA, Bolliger IW, Bora Başara B, Bornstein NM, Bose D, Boufous S, Bourne RR, Boyers LN, Brainin M, Brayne CE, Brazinova A, Breitborde NJ, Brenner H, Briggs AD, Brooks PM, Brown JC, Brugha TS, Buchbinder R, Buckle GC, Budke CM, Bulchis A, Bulloch AG, Campos-Nonato IR, Carabin H, Carapetis JR, Cárdenas R, Carpenter DO, Caso V, Castañeda-Orjuela CA, Castro RE, Catalá-López F, Cavalleri F, Çavlin A, Chadha VK, Chang JC, Charlson FJ, Chen H, Chen W, Chiang PP, Chimed-Ochir O, Chowdhury R, Christensen H, Christophi CA, Cirillo M, Coates MM, Coffeng LE, Coggeshall MS, Colistro V, Colquhoun SM, Cooke GS, Cooper C, Cooper LT, Coppola LM, Cortinovis M, Criqui MH, Crump JA, Cuevas-Nasu L, Danawi H, Dandona L, Dandona R, Dansereau E, Dargan PI, Davey G, Davis A, Davitoiu DV, Dayama A, De Leo D, Degenhardt L, Del Pozo-Cruz B, Dellavalle RP, Deribe K, Derrett S, Des Jarlais DC, Dessalegn M, Dharmaratne SD, Dherani MK, Diaz-Torné C, Dicker D, Ding EL, Dokova K, Dorsey ER, Driscoll TR, Duan L, Duber HC, Ebel BE, Edmond KM, Elshrek YM, Endres M, Ermakov SP, Erskine HE, Eshrati B, Esteghamati A, Estep K, Faraon EJ, Farzadfar F, Fay DF, Feigin VL, Felson DT, Fereshtehnejad SM, Fernandes JG, Ferrari AJ, Fitzmaurice C, Flaxman AD, Fleming TD, Foigt N, Forouzanfar MH, Fowkes FG, Paleo UF, Franklin RC, Fürst T, Gabbe B, Gaffikin L, Gankpé FG, Geleijnse JM, Gessner BD, Gething P, Gibney KB, Giroud M, Giussani G, Gomez Dantes H, Gona P, González-Medina D, Gosselin RA, Gotay CC, Goto A, Gouda HN, Graetz N, Gughani HC, Gupta R, Gupta R, Gutiérrez RA, Haagsma J, Hafezi-Nejad N, Hagan H, Halasa YA, Hamadeh RR, Hamavid H, Hammami M, Hancock J, Hankey GJ, Hansen GM, Hao Y, Harb HL, Haro JM, Havmoeller R, Hay SI, Hay RJ, Heredia-Pi IB, Heuton KR, Heydarpour P, Higashi H, Hajar M, Hoek HW, Hoffman HJ, Hosgood HD, Hossain M, Hotez PJ, Hoy DG, Hsairi M, Hu G, Huang C, Huang JJ, Husseini A, Huynh C, Iannarone ML, Iburg KM, Innos K, Inoue M, Islami F, Jacobsen KH, Jarvis DL, Jassal SK, Jee SH, Jeemon P, Jensen PN, Jha V, Jiang G, Jiang Y, Jonas JB, Juel K, Kan H, Karch A, Karema CK, Karimkhani C, Karthikeyan G, Kassebaum NJ, Kaul A, Kawakami N, Kazanjan K, Kemp AH, Kengne AP, Keren A, Khader YS, Khalifa SE, Khan EA, Khan G, Khang YH, Kieling C, Kim D, Kim S, Kim Y, Kinfu Y, Kinge JM, Kivipelto M, Knibbs LD, Knudsen AK, Kokubo Y, Kosen S, Krishnaswami S, Kuate Defo B, Kucuk Bicer B, Kuipers EJ, Kulkarni C, Kulkarni VS, Kumar GA, Kyu HH, Lai T, Lalloo R, Lallukka T, Lam H, Lan Q, Lansingh VC, Larsson A, Lawrynowicz AE, Leasher JL, Leigh J, Leung R, Levitz CE, Li B, Li Y, Li Y, Lim SS, Lind M, Lipshultz SE, Liu S, Liu Y, Lloyd BK, Lofgren KT, Logroscino G, Looker KJ, Lortet-Tieulent J, Lotufo PA, Lozano R, Lucas RM, Lunevicius R, Lyons RA, Ma S, Macintyre MF, Mackay MT, Majdan M, Malekzadeh R, Marcenes W, Margolis DJ, Margono C, Marzan MB, Masci JR, Mashal MT, Matzopoulos R, Mayosi BM, Mazorodze TT, McGill NW, Mcgrath JJ, Mckee M, Mclain A, Meaney PA, Medina C, Mehndiratta MM, Mekonnen W, Melaku YA, Meltzer M, Memish ZA, Mensah GA, Meretoja A, Mhimbira FA, Micha R, Miller TR, Mills EJ, Mitchell PB, Mock CN, Mohamed Ibrahim N, Mohammad KA, Mokdad AH, Mola GL, Monasta L, Montañez Hernandez JC, Montico M, Montine TJ, Mooney MD, Moore AR, Moradi-Lakeh M, Moran AE, Mori R, Moschandreas J, Moturi WN, Moyer ML, Mozaffarian D, Msemburi WT, Mueller UO, Mukaigawara M, Mullany EC, Murdoch ME, Murray J, Murthy KS, Naghavi M, Naheed A, Naidoo KS, Naldi L, Nand D, Nangia V, Narayan KM, Nejjari C, Neupane SP, Newton CR, Ng M, Ngalesoni FN, Nguyen G, Nisar MI, Nolte S, Norheim OF, Norman RE, Norrving B, Nyakarahuka L, Oh IH, Ohkubo T, Ohno SL, Olusanya BO, Opio JN, Ortblad K, Ortiz A, Pain AW, Pandian JD, Panelo CI, Papachristou C, Park EK, Park JH, Patten SB, Patton GC, Paul VK, Pavlin BI, Pearce N, Pereira DM, Perez-Padilla R, Perez-Ruiz F, Perico N, Pervaiz A, Pesudovs K, Peterson CB, Petzold M, Phillips MR, Phillips BK, Phillips DE, Piel FB, Plass D, Poenaru D, Polinder S, Pope D, Popova S, Poulton RG, Pourmalek F, Prabhakaran D, Prasad NM, Pullan RL, Qato DM, Quistberg DA, Rafay A, Rahimi K, Rahman SU, Raju M, Rana SM, Razavi H, Reddy KS, Refaai A, Remuzzi G, Resnikoff S, Ribeiro AL, Richardson L, Richardus JH, Roberts DA, Rojas-Rueda D, Ronfani L, Roth GA, Rothenbacher D, Rothstein DH, Rowley JT, Roy N, Ruhago GM, Saeedi MY, Saha S, Sahraian MA, Sampson UK, Sanabria JR, Sandar L, Santos IS, Satpathy M, Sawhney M, Scarborough P, Schneider IJ, Schöttker B, Schumacher AE, Schwebel DC, Scott JG, Seedat S, Sepanlou SG, Serina PT, Servan-Mori EE, Shackelford KA, Shaheen A, Shahraz S, Shamah Levy T, Shanguan S, She J, Sheikhbaehi S, Shi P, Shibuya K, Shinohara Y, Shiri R, Shishani K, Shiue I, Shrimel MG, Sigfusdottir ID, Silberberg DH, Simard EP, Sindi S, Singh A, Singh JA, Singh L, Skirbekk V, Slepak EL, Sliwa K, Soneji S, Søreide K, Soshnikov S, Sposato LA, Sreeramareddy CT, Stanaway JD, Stathopoulou V, Stein DJ, Stein MB, Steiner C, Steiner TJ, Stevens A, Stewart A, Stovner LJ, Stroumpoulis K, Sunguya BF, Swaminathan S, Swaroop M, Sykes BL, Tabb KM, Takahashi K, Tandon N, Tanne D, Tanner M, Tavakkoli M, Taylor HR, Te Ao BJ, Tediosi F, Temesgen AM, Templin T, Ten Have M, Tenkorang EY, Terkawi AS, Thomson B, Thorne-Lyman AL, Thrift AG, Thurston GD, Tillmann T, Tonelli M, Topouzis F, Toyoshima H, Traebert J, Tran BX, Trillini M, Truelsen T, Tsilimbaris M, Tuzcu EM, Uchendu US, Ukwaja KN, Undurraga EA, Uzun SB, Van Brakel WH, Van De Vijver S, van Gool CH, Van Os J, Vasankari TJ, Venketasubramanian N, Violante FS, Vlassov VV, Vollset SE, Wagner GR, Wagner J, Waller SG, Wan X, Wang H, Wang J, Wang L, Warouw TS, Weichenthal S, Weiderpass E, Weintraub RG, Wenzhi W, Werdecker A, Westerman R, Whiteford HA, Wilkinson JD, Williams TN, Wolfe CD, Wolock TM, Woolf AD, Wulf S, Wurtz B, Xu G, Yan LL, Yano Y, Ye P, Yentür GK, Yip P, Yonemoto N, Yoon SJ, Younis MZ, Yu C, Zaki ME, Zhao Y, Zheng Y, Zonies D, Zou X, Salomon JA, Lopez AD, Vos T. Global, regional, and national disability-adjusted life years (DALYs) for 306 diseases and injuries and healthy life expectancy (HALE) for 188 countries, 1990-2013: quantifying the epidemiological transition. *Lancet*. 2015;386(10009):2145-2191.
258. GBD 2013 Mortality and Causes of Death Collaborators. Global, regional, and national age-sex specific all-cause and cause-specific mortality for 240 causes of death, 1990-2013: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2013. *Lancet*. 2015;385(9963):117-171.
259. Nakagawa Y, Inoue A, Kawakami N, Tsuno K, Tomioka K, Nakanishi M, Mafune K, Hiro H. Change in organizational justice and job performance in Japanese employees: A prospective cohort study. *J Occup Health*. 2015;57(4):388-393.
260. Shimazu A, Schaufeli WB, Kamiyama K, Kawakami N. Workaholism vs. work engagement: the two different predictors of future well-being and performance. *Int J Behav Med*. 2015;22(1):18-23.
261. Shimoda H, Inoue A, Tsuno K, Kawakami N. One-year test-retest reliability of a Japanese web-based version of the WHO Composite International Diagnostic Interview (CIDI) for major depression in a working population. *Int J Methods Psychiat Res*. 2015;24(3):204-212.

262. Stickley A, Koyanagi A, Kawakami N, Survey WWMHJ. Childhood adversities and adult-onset chronic pain: Results from the World Mental Health Survey, Japan. *Europ J Pain*. 2015;19(10):1418-1427.
263. Suzuki T, Miyaki K, Song Y, Tsutsumi A, Kawakami N, Shimazu A, Takahashi M, Inoue A, Kurioka S. Relationship between sickness presenteeism (WHO-HPQ) with depression and sickness absence due to mental disease in a cohort of Japanese workers. *J Affect Dis*. 2015;180:14-20.
264. Takano A, Kawakami N, Miyamoto Y, Matsumoto T. A Study of Therapeutic Attitudes Towards Working With Drug Abusers: Reliability and Validity of the Japanese Version of the Drug and Drug Problems Perception Questionnaire. *Arch Psychiatric Nursing*. 2015;29(5):302-308.
265. Umeda M, Kawakami N, Kessler RC, Miller E, 2002–2006 WMHJSG. Childhood adversities and adult use of potentially injurious physical discipline in Japan. *J Fam Violence*. 2015;30(4):515-527.
266. Umeda M, McMunn A, Cable N, Hashimoto H, Kawakami N, Marmot M. Does an advantageous occupational position make women happier in contemporary Japan? Findings from the Japanese Study of Health, Occupation, and Psychosocial Factors Related Equity(J-HOPE). *SSM-Population Health*. 2015;1:8-15.
267. Global Burden of Disease Study 2013 Collaborators. Global, regional, and national incidence, prevalence, and years lived with disability for 301 acute and chronic diseases and injuries in 188 countries, 1990-2013: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2013. *Lancet*. 2015;386(9995):743-800.
268. Benjet C, Bromet E, Karam EG, Kessler RC, McLaughlin KA, Ruscio AM, Shahly V, Stein DJ, Petukhova M, Hill E, Alonso J, Atwoli L, Bunting B, Bruffaerts R, Caldas-de-Almeida JM, de Girolamo G, Florescu S, Gureje O, Huang Y, Lepine JP, Kawakami N, Kovess-Masfety V, Medina-Mora ME, Navarro-Mateu F, Piazza M, Posada-Villa J, Scott KM, Shalev A, Slade T, ten Have M, Torres Y, Viana MC, Zarkov Z, Koenen KC. The epidemiology of traumatic event exposure worldwide: results from the World Mental Health Survey Consortium. *Psychol Med*. 2016 Jan;46(2):327-43.
269. Chiba R, Umeda M, Goto K, Miyamoto Y, Yamaguchi S, Kawakami N. Psychometric properties of the Japanese version of the Recovery Attitudes Questionnaire (RAQ) among mental health providers: a questionnaire survey. *BMC Psychiatry*. 2016;16: 32.
270. Eguchi H, Shimazu A, Bakker AB, Tims M, Kamiyama K, Hara Y, Namba K, Inoue A, Ono M, Kawakami N. Validation of the Japanese version of the job crafting scale. *J Occup Health*. 2016;58(3):231-240.
271. Eguchi H, Shimazu A, Fujiwara T, Iwata N, Shimada K, Takahashi M, Tokita M, Watai I, Kawakami N. The effects of workplace psychosocial factors on whether Japanese dual-earner couples with preschool children have additional children: a prospective study. *Ind Health*. 2016;54(6):498-504.
272. Eguchi H, Shimazu A, Kawakami N, Inoue A, Tsutsumi A. Source-specific workplace social support and high-sensitivity C-reactive protein levels among Japanese workers: A 1-year prospective cohort study. *Am J Ind Med*. 2016;59(8):676-684.
273. GBD 2015 Risk Factors Collaborators. Global, regional, and national comparative risk assessment of 79 behavioural, environmental and occupational, and metabolic risks or clusters of risks, 1990-2015: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2015. *Lancet*. 2016;388(10053):1659-1724.
274. Fujita S, Kawakami N, Ando E, Inoue A, Tsuno K, Kurioka S, Kawachi I. The association of workplace social capital with work engagement of employees in health care settings: a multilevel cross-sectional analysis. *J Occup Environ Med*. 2016;58(3):265-271.
275. Fujiwara T, Shimazu A, Tokita M, Shimada K, Takahashi M, Watai I, Iwata N, Kawakami N. Association between parental workaholism and body mass index of offspring: a prospective study among Japanese dual workers. *Frontiers in Public Health*. 2016;4: 41.
276. Hirokawa K, Miwa M, Taniguchi T, Tsuchiya M, Kawakami N. Moderating effects of salivary testosterone levels on associations between job demand and psychological stress response in Japanese medical workers. *Ind Health*. 2016;54(3):194-203.
277. Horikoshi N, Iwasa H, Kawakami N, Suzuki Y, Yasumura S. Residence-related factors and psychological distress among evacuees after the Fukushima Daiichi nuclear power plant accident: a cross-sectional study. *BMC Psychiatry*. 2016;16(1):420.
278. Imamura K, Kawakami N, Inoue A, Shimazu A, Tsutsumi A, Takahashi M, Totsuzaki T. Work Engagement as a Predictor of Onset of Major Depressive Episode (MDE) among Workers, Independent of Psychological Distress: A 3-Year Prospective Cohort Study. *Plos One*. 2016;11(2): e0148157.
279. Imamura K, Kawakami N, Tsuno K, Tsuchiya M, Shimada K, Namba K. Effects of web-based stress and depression literacy intervention on improving symptoms and knowledge of depression among workers: A randomized controlled trial. *J Affect Dis*. 2016;203:30-37.
280. Imamura K, Sekiya Y, Asai Y, Umeda M, Horikoshi N, Yasumura S, Yabe H, Akiyama T, Kawakami N. The effect of a behavioral activation program on improving mental and physical health complaints associated with radiation stress among mothers in Fukushima: a randomized controlled trial. *BMC Public Health*. 2016;16.
281. Inoue A, Kawakami N, Eguchi H, Tsutsumi A. Buffering effect of workplace social capital on the association of job insecurity with psychological distress in Japanese employees: a cross-sectional study. *J Occup Health*. 2016;58(5):460-469.
282. Inoue A, Kawakami N, Eguchi H, Tsutsumi A. Modifying effect of cigarette smoking on the association of organizational justice with serious psychological distress in Japanese employees: a cross-sectional study. *Int Arch Occup Environ Health*. 2016;89(6):901-910.
283. Ishikawa H, Kawakami N, Kessler RC, Collaborators WMHJS. Lifetime and 12-month prevalence, severity and unmet need for treatment of common mental disorders in Japan: results from the final dataset of World Mental Health Japan Survey. *Epidemiol Psychiatr Sci*. 2016;25(3):217-229.
284. Ishikawa H, Yasunaga H, Matsui H, Fushimi K, Kawakami N. Differences in cancer stage, treatment and in-hospital mortality between patients with and without schizophrenia: retrospective matched-pair cohort study. *Br J Psychiatry*. 2016;208(3):239-244.
285. GBD 2015 DALYs and HALE Collaborators. Global, regional, and national disability-adjusted life-years (DALYs) for 315 diseases and injuries and healthy life expectancy (HALE), 1990-2015: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2015. *Lancet*. 2016;388(10053):1603-1658.
286. Levine CS, Miyamoto Y, Markus HR, Rigotti A, Boylan JM, Park J, Kitayama S, Karasawa M, Kawakami N, Coe CL, Love GD, Ryff CD. Culture and Healthy Eating: The Role of Independence and Interdependence in the United States and Japan. *Personality and Social Psychology Bulletin*. 2016;42(10):1335-1348.
287. GBD 2015 SDG Collaborators. Measuring the health-related Sustainable Development Goals in 188 countries: a baseline analysis from the Global Burden of Disease Study 2015. *Lancet*. 2016;388(10053):1813-1850.
288. Miki T, Eguchi M, Kurotani K, Kochi T, Kuwahara K, Ito R, Kimura Y, Tsuruoka H, Akter S, Kashino I, Kabe I, Kawakami N, Mizoue T. Dietary fiber intake and depressive symptoms in Japanese employees: The Furukawa Nutrition and Health Study. *Nutrition*. 2016;32(5):584-589.
289. Otowa T, Kawamura Y, Tsutsumi A, Kawakami N, Kan C, Shimada T, Umekage T, Kasai K, Tokunaga K, Sasaki T. The First Pilot Genome-Wide Gene-Environment Study of Depression in the Japanese Population. *Plos One*. 2016;11(8).
290. Sakakibara E, Homae F, Kawasaki S, Nishimura Y, Takizawa R, Koike S, Kinoshita A, Sakurada H, Yamagishi M, Nishimura F, Yoshikawa A, Inai A, Nishioka M, Eriguchi Y, Matsuoka J, Satomura Y, Okada N, Kakiuchi C, Araki T, Kan C, Umeda M, Shimazu A, Uga M, Dan I, Hashimoto H, Kawakami N, Kasai K. Detection of resting state functional connectivity using partial correlation analysis: A study using multi-distance and whole-head probe near-infrared spectroscopy. *Neuroimage*. 2016;142:590-601.
291. Scott KM, Lim C, Al-Hamzawi A, Alonso J, Bruffaerts R, Caldas-de-Almeida JM, Florescu S, de Girolamo G, Hu C, de Jonge P, Kawakami N, Medina-Mora ME, Moskalewicz J, Navarro-Mateu F, O'Neill S, Piazza M, Posada-Villa J, Torres Y, Kessler RC. Association of mental disorders with subsequent chronic physical conditions World Mental Health Surveys from 17 countries. *JAMA Psychiatry*. 2016;73(2):150-158.
292. Takagaki K, Okamoto Y, Jinnin R, Mori A, Nishiyama Y, Yamamura T, Yokoyama S, Shiota S, Okamoto Y, Miyake Y, Ogata A, Kunisato Y, Shimoda H, Kawakami N, Furukawa TA, Yamawaki S. Behavioral activation for late adolescents with subthreshold depression: a randomized controlled trial. *Europ Child Adolescent Psychiatry*. 2016;25(11):1171-1182.
293. Takagaki K, Okamoto Y, Jinnin R, Mori A, Nishiyama Y, Yamamura T, Yokoyama S, Shiota S, Okamoto Y, Miyake Y, Ogata A, Shimoda H, Kawakami N, Furukawa TA, Yamawaki S. Mechanisms of behavioral activation for late adolescents: Positive reinforcement mediate the relationship between activation and depressive symptoms from pre-treatment to post-treatment. *J Affect Dis*. 2016;204:70-73.
294. Takano A, Miyamoto Y, Kawakami N, Matsumoto T, Shinozaki T, Sugimoto T. Web-based cognitive behavioral relapse prevention program with tailored feedback for people with methamphetamine and other drug use problems: protocol for a multicenter randomized controlled trial in Japan. *BMC Psychiatry*. 2016;16: 87.
295. Takanol A, Miyamoto Y, Kawakami N, Matsumoto T. Web-Based Cognitive Behavioral Relapse Prevention Program With Tailored Feedback for People With Methamphetamine and Other Drug Use Problems: Development and Usability Study. *JMIR Mental Health*. 2016;3(1): e1.
296. Tanaka E, Tsutsumi A, Kawakami N, Kameoka S, Kato H, You YH. Long-term psychological consequences among adolescent survivors of the Wenchuan earthquake in China: A cross-sectional survey six years after the disaster. *J Affect Dis*. 2016;204:255-261.
297. Tsuno K, Inoue A, Kawakami N. Effort-Reward Imbalance Model as a Mediator between Workplace Bullying and Psychological Distress. *International Journal of Behavioral Medicine*. 2016;23:S43-S.
298. Tsuno K, Kawakami N. The impact of work-related physical assaults on mental health among Japanese employees with different socioeconomic status: The Japan Work Stress and Health Cohort Study (JSTRESS). *SSM-Population Health*. 2016;2:572-579.

299. GBD 2015 Disease and Injury Incidence and Prevalence Collaborators. Global, regional, and national incidence, prevalence, and years lived with disability for 310 diseases and injuries, 1990-2015: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2015. *Lancet*. 2016;388(10053):1545-1602.
300. GBD 2015 Child Mortality Collaborators. Global, regional, national, and selected subnational levels of stillbirths, neonatal, infant, and under-5 mortality, 1980-2015: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2015. *Lancet*. 2016;388(10053):1725-1774.
301. GBD 2015 Mortality and Causes of Death Collaborators. Global, regional, and national life expectancy, all-cause mortality, and cause-specific mortality for 249 causes of death, 1980-2015: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2015. *Lancet*. 2016;388(10053):1459-1544.
302. GBD 2015 HIV Collaborators. Estimates of global, regional, and national incidence, prevalence, and mortality of HIV, 1980-2015: the Global Burden of Disease Study 2015. *Lancet HIV*. 2016;3(8):E361-E87.
303. Watanabe K, Imamura K, [Kawakami N](#). Working hours and the onset of depressive disorder: a systematic review and meta-analysis. *Occup Environ Med*. 2016;73(12):877-884.
304. Watanabe K, Otsuka Y, Shimazu A, [Kawakami N](#). The moderating effect of health-improving workplace environment on promoting physical activity in white-collar employees: a multi-site longitudinal study using multi-level structural equation modeling. *J Occup Environ Med*. 2016;58(2):178-184.
305. Ali AM, Ahmed A, Sharaf A, [Kawakami N](#), Abdeldayem SM, Green J. The Arabic version of The Depression Anxiety Stress Scale-21: cumulative scaling and discriminant-validation testing. *Asian J Psychiatry*. 2017;30:56-58.
306. Asai Y, Imamura K, [Kawakami N](#). Association of Job Stressors With Panic Attack and Panic Disorder in a Working Population in Japan: A Cross-Sectional Study. *J Occup Environ Med*. 2017;59(6):516-521.
307. Atwoli L, Stein DJ, King A, Petukhova M, Aguilar-Gaxiola S, Alonso J, Bromet EJ, de Girolamo G, Demyttenaere K, Florescu S, Maria Haro J, Karam EG, [Kawakami N](#), Lee S, Lepine JP, Navarro-Mateu F, O'Neill S, Pennell BE, Piazza M, Posada-Villa J, Sampson NA, Ten Have M, Zaslavsky AM, Kessler RC; WHO World Mental Health Survey Collaborators. Posttraumatic stress disorder associated with unexpected death of a loved one: Cross-national findings from the world mental health surveys. *Depression and Anxiety*. 2017;34(4):315-326.
308. Bromet EJ, Atwoli L, [Kawakami N](#), Navarro-Mateu F, Piotrowski P, King AJ, Aguilar-Gaxiola S, Alonso J, Bunting B, Demyttenaere K, Florescu S, de Girolamo G, Gluzman S, Haro JM, de Jonge P, Karam EG, Lee S, Kovess-Masfety V, Medina-Mora ME, Mneimneh Z, Pennell BE, Posada-Villa J, Salmerón D, Takeshima T, Kessler RC. Post-traumatic stress disorder associated with natural and human-made disasters in the World Mental Health Surveys. *Psychol Med*. 2017;47(2):227-241.
309. Chiba R, Umeda M, Goto K, Miyamoto Y, Yamaguchi S, [Kawakami N](#). The property of the Japanese version of the Recovery Knowledge Inventory (RKI) among mental health service providers: a cross sectional study. *Int J Mental Health Systems*. 2017;11: 71.
310. Fukasawa M, [Kawakami N](#), Umeda M, Miyamoto K, Akiyama T, Horikoshi N, Yasumura S, Yabe H, Bromet EJ. Environmental radiation level, radiation anxiety, and psychological distress of non-evacuee residents in Fukushima five years after the Great East Japan Earthquake: Multilevel analyses. *SSM Popul Health*. 2017;3:740-748.
311. GBD 2016 SDG Collaborators. Measuring progress and projecting attainment on the basis of past trends of the health-related Sustainable Development Goals in 188 countries: an analysis from the Global Burden of Disease Study 2016. *Lancet*. 2017;390(10100):1423-1459.
312. GBD 2016 Risk Factors Collaborators. Global, regional, and national comparative risk assessment of 84 behavioural, environmental and occupational, and metabolic risks or clusters of risks, 1990-2016: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2016. *Lancet*. 2017;390(10100):1345-1422.
313. GBD 2016 DALYs and HALE Collaborators. Global, regional, and national disability-adjusted life-years (DALYs) for 333 diseases and injuries and healthy life expectancy (HALE) for 195 countries and territories, 1990-2016: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2016. *Lancet*. 2017;390(10100):1260-1344.
314. Imamura K, [Kawakami N](#), Tsuno K, Tsuchiya M, Shimada K, Namba K, Shimazu A. Effects of web-based stress and depression literacy intervention on improving work engagement among workers with low work engagement: An analysis of secondary outcome of a randomized controlled trial. *J Occup Health*. 2017;59(1):46-54.
315. Iwanaga M, Iwanaga H, [Kawakami N](#), Grp WMHJS. Twelve-month use of herbal medicines as a remedy for mental health problems in Japan: A cross-national analysis of World Mental Health Survey data. *Asia-Pacific Psychiatry*. 2017;9(3):10.
316. Jinnin R, Okamoto Y, Takagaki K, Nishiyama Y, Yamamura T, Okamoto Y, Miyake Y, Takebayashi Y, Tanaka K, Sugiura Y, Shimoda H, [Kawakami N](#), Furukawa TA, Yamawaki S. Detailed course of depressive symptoms and risk for developing depression in late adolescents with subthreshold depression: a cohort study. *Neuropsychiatric Disease Treatment*. 2017;13:25-33.
317. Global Burden of Disease Child and Adolescent Health Collaboration, Kassebaum N, Kyu HH, Zoeckler L, Olsen HE, Thomas K, Pinho C, Bhutta ZA, Dandona L, Ferrari A, Ghiwot TT, Hay SI, Kinfu Y, Liang X, Lopez A, Malta DC, Mokdad AH, Naghavi M, Patton GC, Salomon J, Sartorius B, Topor-Madry R, Vollset SE, Werdecker A, Whiteford HA, Abate KH, Abbas K, Damte SA, Ahmed MB, Akseer N, Al-Raddadi R, Alemayohu MA, Altirkawi K, Abajobir AA, Amare AT, Antonio CAT, Arnlov J, Artaman A, Asayesh H, Avokpaho EFGA, Awasthi A, Ayala Quintanilla BP, Bacha U, Betsu BD, Barac A, Bärnighausen TW, Baye E, Bedi N, Bensenor IM, Berhane A, Bernabe E, Bernal OA, Beyene AS, Biadgilign S, Bikbov B, Boyce CA, Brazinova A, Hailu GB, Carter A, Castañeda-Orjuela CA, Catalá-López F, Charlson FJ, Chittheer AA, Choi JJ, Ciobanu LG, Crump J, Dandona R, Dellavalle RP, Deribew A, deVeber G, Dicker D, Ding EL, Dubey M, Endries AY, Erskine HE, Faraon EJA, Faro A, Farzadfar F, Fernandes JC, Fijabi DO, Fitzmaurice C, Fleming TD, Flor LS, Foreman KJ, Franklin RC, Fraser MS, Frostad JJ, Fullman N, Gebregers GB, Gebru AA, Geleijnse JM, Gibney KB, Gidey Yihdego M, Ginawi IAM, Gishu MD, Gizachew TA, Glaser E, Gold AL, Goldberg E, Gona P, Goto A, Gughani HC, Jiang G, Gupta R, Tesfay FH, Hankey GJ, Havmoeller R, Hijar M, Horino M, Hosgood HD, Hu G, Jacobsen KH, Jakovljevic MB, Jayaraman SP, Jha V, Jibat T, Johnson CO, Jonas J, Kasaeian A, [Kawakami N](#), Keiyoro PN, Khalil I, Khang YH, Khubchandani J, Ahmad Kiadaliri AA, Kieling C, Kim D, Kissoon N, Knibbs LD, Koyanagi A, Krohn KJ, Kuate Defo B, Kucuk Bicer B, Kulikoff R, Kumar GA, Lal DK, Lam HY, Larson HJ, Larsson A, Laryea DO, Leung J, Lim SS, Lo LT, Lo WD, Looker KJ, Lotufo PA, Magdy Abd El Razek H, Malekzadeh R, Markos Shifti D, Mazidi M, Meaney PA, Meles KG, Memiah P, Mendoza W, Abera Mengistie M, Mengistu GW, Mensah GA, Miller TR, Mock C, Mohammadi A, Mohammed S, Monasta L, Mueller U, Nagata C, Naheed A, Nguyen G, Nguyen QL, Nsoesie E, Oh IH, Okoro A, Olusanya JO, Olusanya BO, Ortiz A, Paudel D, Pereira DM, Perico N, Petzold M, Phillips MR, Polanczyk GV, Pourmalek F, Qorbani M, Rafay A, Rahimi-Movaghar V, Rahman M, Rai RK, Ram U, Rankin Z, Remuzzi G, Renzaho AMN, Roba HS, Rojas-Rueda D, Ronfani L, Sagar R, Sanabria JR, Kedir Mohammed MS, Santos IS, Satpathy M, Sawhney M, Schöttker B, Schwebel DC, Scott JG, Sepanlou SG, Shaheen A, Shaikh MA, She J, Shiri R, Shiue I, Sigfusdottir ID, Singh J, Silpakit N, Smith A, Sreeramareddy C, Stanaway JD, Stein DJ, Steiner C, Sufiyan MB, Swaminathan S, Tabarés-Seisdedos R, Tabb KM, Tadese F, Tavakkoli M, Taye B, Teeple S, Tegegne TK, Temam Shifa G, Terkawi AS, Thomas B, Thomson AJ, Tobe-Gai R, Tonelli M, Tran BX, Troeger C, Ukwaja KN, Uthman O, Vasankari T, Venketasubramanian N, Vlassov VV, Weiderpass E, Weintraub R, Gebrehiwot SW, Westerman R, Williams HC, Wolfe CDA, Woodbrook R, Yano Y, Yonemoto N, Yoon SJ, Younis MZ, Yu C, Zaki MES, Zegeye EA, Zuhlke LJ, Murray CJL, Vos T. Child and Adolescent Health From 1990 to 2015 Findings From the Global Burden of Diseases, Injuries, and Risk Factors 2015 Study. *JAMA Pediatrics*. 2017;171(6):573-592.
318. Kessler RC, Aguilar-Gaxiola S, Alonso J, Benjet C, Bromet EJ, Cardoso G, Degenhardt L, de Girolamo G, Dinolova RV, Ferry F, Florescu S, Gureje O, Haro JM, Huang Y, Karam EG, [Kawakami N](#), Lee S, Lepine JP, Levinson D, Navarro-Mateu F, Pennell BE, Piazza M, Posada-Villa J, Scott KM, Stein DJ, Ten Have M, Torres Y, Viana MC, Petukhova MV, Sampson NA, Zaslavsky AM, Koenen KC. Trauma and PTSD in the WHO World Mental Health Surveys. *European Journal of Psychotraumatology*. 2017; 8(sup5):1353383.
319. Koenen KC, Ratanatharathorn A, Ng L, McLaughlin KA, Bromet EJ, Stein DJ, Karam EG, Meron Ruscio A, Benjet C, Scott K, Atwoli L, Petukhova M, Lim CCW, Aguilar-Gaxiola S, Al-Hamzawi A, Alonso J, Bunting B, Ciutan M, de Girolamo G, Degenhardt L, Gureje O, Haro JM, Huang Y, [Kawakami N](#), Lee S, Navarro-Mateu F, Pennell BE, Piazza M, Sampson N, Ten Have M, Torres Y, Viana MC, Williams D, Xavier M, Kessler RC. Posttraumatic stress disorder in the World Mental Health Surveys. *Psychol Med*. 2017;47(13):2260-2274.
320. Kovess-Masfety V, Evans-Lacko S, Williams D, Andrade LH, Benjet C, Ten Have M, Wardenaar K, Karam EG, Bruffaerts R, Abdumalik J, Haro Abad JM, Florescu S, Wu B, De Jonge P, Altwaijri Y, Hinkov H, [Kawakami N](#), Caldas-de-Almeida JM, Bromet E, de Girolamo G, Posada-Villa J, Al-Hamzawi A, Huang Y, Hu C, Viana MC, Fayyad J, Medina-Mora ME, Demyttenaere K, Lepine JP, Murphy S, Xavier M, Takeshima T, Gureje O. The role of religious advisors in mental health care in the World Mental Health surveys. *Social Psychiatry Psychiatric Epidemiology*. 2017;52(3):353-367.
321. Kunie K, [Kawakami N](#), Shimazu A, Yonekura Y, Miyamoto Y. The relationship between work engagement and psychological distress of hospital nurses and the perceived communication behaviors of their nurse managers: A cross-sectional survey. *Int J Nursing Studies*. 2017;71:115-124.
322. Liu H, Petukhova MV, Sampson NA, Aguilar-Gaxiola S, Alonso J, Andrade LH, Bromet EJ, de Girolamo G, Haro JM, Hinkov H, [Kawakami N](#), Koenen KC, Kovess-Masfety V, Lee S, Medina-Mora ME, Navarro-Mateu F, O'Neill S, Piazza M, Posada-Villa J, Scott KM, Shahly V, Stein DJ, Ten Have M, Torres Y, Gureje O, Zaslavsky AM, Kessler RC; World Health Organization World Mental Health Survey Collaborators. Association of DSM-

- IV Posttraumatic stress disorder with traumatic experience type and history in the World Health Organization World Mental Health Surveys. *JAMA Psychiatry*. 2017;74(3):270-281.
323. Liu YC, Meguro K, Nakamura K, Akanuma K, Nakatsuka M, Seki T, Nakaaki S, Mimura M, [Kawakami N](#). Depression and dementia in old-old population: history of depression may be associated with dementia onset. *The Tome Project. Frontiers in Aging Neuroscience*. 2017;9: 335.
324. McGrath JJ, Saha S, Lim CCW, Aguilar-Gaxiola S, Alonso J, Andrade LH, Bromet EJ, Bruffaerts R, Caldas de Almeida JM, Cardoso G, de Girolamo G, Fayyad J, Florescu S, Gureje O, Haro JM, [Kawakami N](#), Koenen KC, Kovess-Masfety V, Lee S, Lepine JP, McLaughlin KA, Medina-Mora ME, Navarro-Mateu F, Ojagbemi A, Posada-Villa J, Sampson N, Scott KM, Tachimori H, Ten Have M, Kendler KS, Kessler RC; WHO World Mental Health Survey Collaborators. Trauma and psychotic experiences: transnational data from the World Mental Health Survey. *Br J Psychiatry*. 2017; Dec;211(6):373-380.
325. McLaughlin KA, Koenen KC, Bromet EJ, Karam EG, Liu H, Petukhova M, Ruscio AM, Sampson NA, Stein DJ, Aguilar-Gaxiola S, Alonso J, Borges G, Demyttenaere K, Dinolova RV, Ferry F, Florescu S, de Girolamo G, Gureje O, [Kawakami N](#), Lee S, Navarro-Mateu F, Piazza M, Pennell BE, Posada-Villa J, Ten Have M, Viana MC, Kessler RC. Childhood adversities and post-traumatic stress disorder: evidence for stress sensitisation in the World Mental Health Surveys. *Br J Psychiatry*. 2017;211(5):280-288.
326. GBD 2016 Causes of Death Collaborators. Global, regional, and national age-sex specific mortality for 264 causes of death, 1980-2016: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2016. *Lancet*. 2017;390(10100):1151-1210.
327. Nomura S, Sakamoto H, Glenn S, Tsugawa Y, Abe SK, Rahman MM, Brown JC, Ezoe S, Fitzmaurice C, Inokuchi T, Kassebaum NJ, [Kawakami N](#), Kita Y, Kondo N, Lim SS, Maruyama S, Miyata H, Mooney MD, Naghavi M, Onoda T, Ota E, Otake Y, Roth GA, Saito E, Tabuchi T, Takasaki Y, Tanimura T, Uechi M, Vos T, Wang H, Inoue M, Murray CJL, Shibuya K. Population health and regional variations of disease burden in Japan, 1990-2015: a systematic subnational analysis for the Global Burden of Disease Study 2015. *Lancet*. 2017;390(10101):1521-1538.
328. Panthee B, Panthee S, Gyawali S, [Kawakami N](#). Prevalence and correlates of substance use among health care students in Nepal: a cross sectional study. *BMC Public Health*. 2017;17(1): 950.
329. Sakuraya A, Imamura K, Inoue A, Tsutsumi A, Shimazu A, Takahashi M, Totsuzaki T, [Kawakami N](#). Workplace social capital and the onset of major depressive episode among workers in Japan: a 3-year prospective cohort study. *J Epidemiol Community Health*. 2017;71(6):606-612.
330. Sakuraya A, Shimazu A, Eguchi H, Kamiyama K, Hara Y, Namba K, [Kawakami N](#). Job crafting, work engagement, and psychological distress among Japanese employees: a cross-sectional study. *Biopsychosocial Medicine*. 2017;11: 6.
331. Sakuraya A, Watanabe K, [Kawakami N](#), Imamura K, Ando E, Asai Y, Eguchi H, Kobayashi Y, Nishida N, Arima H, Shimazu A, Tsutsumi A. Work-related psychosocial factors and onset of metabolic syndrome among workers: a systematic review and meta-analysis protocol. *BMJ Open*. 2017;7(6): e016716.
332. Suzuki Y, Yabe H, Horikoshi N, Yasumura S, [Kawakami N](#), Ohtsuru A, Mashiko H, Maeda M; Mental Health Group of the Fukushima Health Management Survey. Diagnostic accuracy of Japanese posttraumatic stress measures after a complex disaster: The Fukushima Health Management Survey. *Asia-Pacific Psychiatry*. 2017;9(1). doi: 10.1111/appy.12248.
333. Thornicroft G, Chatterji S, Evans-Lacko S, Gruber M, Sampson N, Aguilar-Gaxiola S, Al-Hamzawi A, Alonso J, Andrade L, Borges G, Bruffaerts R, Bunting B, de Almeida JM, Florescu S, de Girolamo G, Gureje O, Haro JM, He Y, Hinkov H, Karam E, [Kawakami N](#), Lee S, Navarro-Mateu F, Piazza M, Posada-Villa J, de Galvis YT, Kessler RC. Undertreatment of people with major depressive disorder in 21 countries. *Br J Psychiatry*. 2017;210(2):119-124.
334. Tsuno K, [Kawakami N](#), Shimazu A, Shimada K, Inoue A, Leiter MP. Workplace incivility in Japan: reliability and validity of the Japanese version of the modified Work Incivility Scale. *J Occup Health*. 2017;59(3):237-246.
335. Umeda M, [Kawakami N](#), Miller E. Effect of socioeconomic conditions on health care utilization in marital violence: a cross-sectional investigation from the Japanese Study on Stratification, Health, Income, and Neighborhood. *International Journal for Equity in Health*. 2017;16(1): 41.
336. GBD 2016 Disease and Injury Incidence and Prevalence Collaborators. Global, regional, and national incidence, prevalence, and years lived with disability for 328 diseases and injuries for 195 countries, 1990-2016: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2016. *Lancet*. 2017;390(10100):1211-1259.
337. GBD 2016 Mortality Collaborators. Global, regional, and national under-5 mortality, adult mortality, age-specific mortality, and life expectancy, 1970-2016: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2016. *Lancet*. 2017;390(10100):1084-1150.
338. Watanabe K, [Kawakami N](#). Effects of a multicomponent workplace intervention programme with environmental changes on physical activity among Japanese white collar employees: a protocol for a cluster randomised controlled trial. *BMJ Open*. 2017;7(10): e017688.
339. Watanabe K, [Kawakami N](#), Adachi H, Inoue S, Meyer MRU. Internal consistency, convergent validity, and structural validity of the Japanese version of the Physical Activity Self-Regulation scale (PASR-12) among Japanese workers: A validation study. *J Occup Health*. 2017;59(1):24-32.
340. Watanabe K, [Kawakami N](#), Imamura K, Inoue A, Shimazu A, Yoshikawa T, Hiro H, Asai Y, Odagiri Y, Yoshikawa E, Tsutsumi A. Pokemon GO and psychological distress, physical complaints, and work performance among adult workers: a retrospective cohort study. *Scientific Reports*. 2017;7(1): 10758.
341. Watanabe K, Tabuchi T, [Kawakami N](#). Improvement of the work environment and work-related stress a cross-sectional multilevel study of a nationally representative sample of Japanese workers. *J Occup Environ Med*. 2017;59(3):295-303.
342. Watanabe M, Shimazu A, Bakker AB, Demerouti E, Shimada K, [Kawakami N](#). The impact of job and family demands on partner's fatigue: A study of Japanese dual-earner parents. *Plos One*. 2017;12(2).
343. Yong RKF, Inoue A, [Kawakami N](#). The validity and psychometric properties of the Japanese version of the Compulsive Internet Use Scale (CIUS). *BMC Psychiatry*. 2017;17: 201.
344. Alonso J, Liu Z, Evans-Lacko S, Sadikova E, Sampson N, Chatterji S, Abdulmalik J, Aguilar-Gaxiola S, Al-Hamzawi A, Andrade LH, Bruffaerts R, Cardoso G, Cia A, Florescu S, de Girolamo G, Gureje O, Haro JM, He Y, de Jonge P, Karam EG, [Kawakami N](#), Kovess-Masfety V, Lee S, Levinson D, Medina-Mora ME, Navarro-Mateu F, Pennell BE, Piazza M, Posada-Villa J, Ten Have M, Zarkov Z, Kessler RC, Thornicroft G; WHO World Mental Health Survey Collaborators. Treatment gap for anxiety disorders is global: Results of the World Mental Health Surveys in 21 countries. *Depression and Anxiety*. 2018;35(3):195-208.
345. Ando E, Kachi Y, [Kawakami N](#), Fukuda Y, Kawada T. Associations of non-standard employment with cardiovascular risk factors: findings from nationwide cross-sectional studies in Japan. *Ind Health*. 2018;56(4):336-345.
346. GBD 2017 Mortality Collaborators. Global, regional, and national age-sex-specific mortality and life expectancy, 1950-2017: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2017. *Lancet*. 2018;392(10159):1684-1735.
347. Eguchi H, Watanabe K, [Kawakami N](#), Ando E, Arima H, Asai Y, Inoue A, Inoue R, Iwanaga M, Imamura K, Kobayashi Y, Nishida N, Otsuka Y, Sakuraya A, Tsuno K, Shimazu A, Tsutsumi A. Psychosocial factors at work and inflammatory markers: protocol for a systematic review and meta-analysis. *BMJ Open*. 2018;8(8): e022612.
348. Evans-Lacko S, Aguilar-Gaxiola S, Al-Hamzawi A, Alonso J, Benjet C, Bruffaerts R, Chiu WT, Florescu S, de Girolamo G, Gureje O, Haro JM, He Y, Hu C, Karam EG, [Kawakami N](#), Lee S, Lund C, Kovess-Masfety V, Levinson D, Navarro-Mateu F, Pennell BE, Sampson NA, Scott KM, Tachimori H, Ten Have M, Viana MC, Williams DR, Wojtyniak BJ, Zarkov Z, Kessler RC, Chatterji S, Thornicroft G. Socio-economic variations in the mental health treatment gap for people with anxiety, mood, and substance use disorders: results from the WHO World Mental Health (WMH) surveys. *Psychol Med*. 2018;48(9):1560-1571.
349. GBD 2016 Healthcare Access and Quality Collaborators. Measuring performance on the Healthcare Access and Quality Index for 195 countries and territories and selected subnational locations: a systematic analysis from the Global Burden of Disease Study 2016. *Lancet*. 2018;391(10136):2236-2271.
350. GBD 2016 Alcohol Collaborators. Alcohol use and burden for 195 countries and territories, 1990-2016: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2016. *Lancet*. 2018;392(10152):1015-1035.
351. Imamura K, Asai Y, Watanabe K, Tsutsumi A, Shimazu A, Inoue A, Hiro H, Odagiri Y, Yoshikawa T, Yoshikawa E, [Kawakami N](#). Effect of the National Stress Check Program on mental health among workers in Japan: A 1-year retrospective cohort study. *J Occup Health*. 2018;60(4):298-306.
352. Imamura K, Furukawa TA, Matsuyama Y, Shimazu A, Kuribayashi K, Kasai K, [Kawakami N](#). Differences in the Effect of Internet-Based Cognitive Behavioral Therapy for Improving Nonclinical Depressive Symptoms Among Workers by Time Preference: Randomized Controlled Trial. *J Med Internet Res*. 2018;20(8): e10231.
353. Inoue A, [Kawakami N](#), Eguchi H, Tsutsumi A. Interaction effect of job insecurity and role ambiguity on psychological distress in Japanese employees: a cross-sectional study. *Int Arch Occup Environ Health*. 2018;91(4):391-402.
354. Ishikawa H, Tachimori H, Takeshima T, Umeda M, Miyamoto K, Shimoda H, Baba T, [Kawakami N](#). Prevalence, treatment, and the correlates of common mental disorders in the mid 2010's in Japan: The results of the world mental health Japan 2nd survey. Prevalence, treatment, and the correlates of common mental disorders in the mid 2010's in Japan: The results of the world mental health Japan 2nd survey. *J Affect Dis*. 2018;241:554-562.
355. Iwanaga M, Imamura K, Shimazu A, [Kawakami N](#). The impact of being bullied at school on psychological distress and work engagement in a community sample of adult workers in Japan. *Plos One*. 2018;13(5).
356. GBD 2017 Disease and Injury Incidence and Prevalence Collaborators. Global, regional, and national incidence,

- prevalence, and years lived with disability for 354 diseases and injuries for 195 countries and territories, 1990-2017: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2017. *Lancet*. 2018;392(10159):1789-1858.
357. Karyotaki E, Ebert DD, Donkin L, Riper H, Twisk J, Burger S, Rozent A, Lange A, Williams AD, Zarski AC, Geraedts A, van Straten A, Kleiboer A, Meyer B, Ünlü Ince BB, Buntrock C, Lehr D, Snoek FJ, Andrews G, Andersson G, Choi I, Ruwaard J, Klein JP, Newby JM, Schröder J, Laferton JAC, Van Bastelaar K, Imamura K, Vermark K, Boß L, Sheeber LB, Kivi M, Berking M, Titov N, Carlbring P, Johansson R, Kenter R, Perini S, Moritz S, Nobis S, Berger T, Kaldo V, Forsell Y, Lindfors N, Kraepelien M, Björkelund C, Kawakami N, Cuijpers P. Do guided internet-based interventions result in clinically relevant changes for patients with depression? An individual participant data meta-analysis. *Clinical Psychology Review*. 2018;63:80-92.
358. Kessler RC, Aguilar-Gaxiola S, Alonso J, Bromet EJ, Gureje O, Karam EG, Koenen KC, Lee S, Liu H, Pennell BE, Petukhova MV, Sampson NA, Shahly V, Stein DJ, Atwoli L, Borges G, Bunting B, de Girolamo G, Gluzman SF, Haro JM, Hinkov H, Kawakami N, Kovess-Masfety V, Navarro-Mateu F, Posada-Villa J, Scott KM, Shalev AY, Ten Have M, Torres Y, Viana MC, Zaslavsky AM; WHO World Mental Health Survey Collaborators. The associations of earlier trauma exposures and history of mental disorders with PTSD after subsequent traumas. *Molecular Psychiatry*. 2018;23(9): 1892-1899.
359. Kido Y, Kawakami N, Kayama M. Comparison of hospital admission rates for psychiatric patients cared for by multidisciplinary outreach teams with and without peer specialist: a retrospective cohort study of Japanese Outreach Model Project 2011-2014. *BMJ Open*. 2018;8(8).
360. Kitayama S, Park J, Miyamoto Y, Date H, Boylan JM, Markus HR, Karasawa M, Kawakami N, Coe CL, Love GD, Ryff CD. Behavioral adjustment moderates the link between neuroticism and biological health risk: a US-Japan comparison study. *Personality Social Psychology Bulletin*. 2018;44(6):809-822.
361. Kovess-Masfety V, Saha S, Lim CCW, Aguilar-Gaxiola S, Al-Hamzawi A, Alonso J, Borges G, de Girolamo G, de Jonge P, Demyttenaere K, Florescu S, Haro JM, Hu C, Karam EG, Kawakami N, Lee S, Lepine JP, Navarro-Mateu F, Stagnaro JC, Ten Have M, Viana MC, Kessler RC, McGrath JJ; WHO World Mental Health Survey Collaborators. Psychotic experiences and religiosity: data from the WHO World Mental Health Surveys. *Acta Psychiatrica Scandinavica*. 2018;137(4):306-315.
362. GBD 2017 DALYs and HALE Collaborators. Global, regional, and national disability-adjusted life-years (DALYs) for 359 diseases and injuries and healthy life expectancy (HALE) for 195 countries and territories, 1990-2017: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2017. *Lancet*. 2018;392(10159):1859-1922.
363. GBD 2017 SDG Collaborators. Measuring progress from 1990 to 2017 and projecting attainment to 2030 of the health-related Sustainable Development Goals for 195 countries and territories: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2017. *Lancet*. 2018;392(10159):2091-2138.
364. Miki T, Eguchi M, Akter S, Kochi T, Kuwahara K, Kashino I, Hu H, Kabe I, Kawakami N, Nanri A, Mizoue T. Longitudinal adherence to a dietary pattern and risk of depressive symptoms: the Furukawa Nutrition and Health Study. *Nutrition*. 2018;48:48-54.
365. Miyamoto Y, Yoo J, Levine CS, Park J, Boylan JM, Sims T, Markus HR, Kitayama S, Kawakami N, Karasawa M, Coe CL, Love GD, Ryff CD. Culture and social hierarchy: self- and other-oriented correlates of socioeconomic status across cultures. *J Personality Social Psychology*. 2018;115(3):427-445.
366. GBD 2017 Population and Fertility Collaborators. Population and fertility by age and sex for 195 countries and territories, 1950-2017: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2017. *Lancet*. 2018;392(10159):1995-2051.
367. Obikane E, Shinozaki T, Takagi D, Kawakami N. Impact of childhood abuse on suicide-related behavior: Analysis using marginal structural models. *J Affect Disord*. 2018;234:224-230.
368. Rosellini AJ, Liu H, Petukhova MV, Sampson NA, Aguilar-Gaxiola S, Alonso J, Borges G, Bruffaerts R, Bromet EJ, de Girolamo G, de Jonge P, Fayyad J, Florescu S, Gureje O, Haro JM, Hinkov H, Karam EG, Kawakami N, Koenen KC, Lee S, Lépine JP, Levinson D, Navarro-Mateu F, Oladeji BD, O'Neill S, Pennell BE, Piazza M, Posada-Villa J, Scott KM, Stein DJ, Torres Y, Viana MC, Zaslavsky AM, Kessler RC. Recovery from DSM-IV post-traumatic stress disorder in the WHO World Mental Health surveys. *Psychol Med*. 2018;48(3):437-450.
369. Sasaki N, Sato S, Yamaguchi S, Shimodaira M, Kawakami N. Development of a scale to assess motivation for competitive employment among persons with severe mental illness. *Plos One*. 2018;13(10).
370. Shimazu A, Schaufeli WB, Kubota K, Watanabe K, Kawakami N. Is too much work engagement detrimental? Linear or curvilinear effects on mental health and job performance. *Plos One*. 2018;13(12).
371. GBD 2017 Risk Factor Collaborators. Global, regional, and national comparative risk assessment of 84 behavioural, environmental and occupational, and metabolic risks or clusters of risks for 195 countries and territories, 1990-2017: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2017. *Lancet*. 2018;392(10159):1923-1994.
372. Takagaki K, Okamoto Y, Jinnin R, Mori A, Nishiyama Y, Yamamura T, Yokoyama S, Shiota S, Okamoto Y, Miyake Y, Ogata A, Kunisato Y, Shimoda H, Kawakami N, Furukawa TA, Yamawaki S. Enduring effects of a 5-week behavioral activation program for subthreshold depression among late adolescents: an exploratory randomized controlled trial. *Neuropsychiatric Disease Treatment*. 2018;14:2633-2641.
373. Takano A, Sase M, Matsumoto T, Kawakami N. Smartphone-based self-monitoring application for drug users: co-production with targeted users. *Alcoholism-Clinical Experimental Research*. 2018;42:63a-a.
374. Tsuno K, Kawachi I, Kawakami N, Miyashita K. Workplace bullying and psychological distress a longitudinal multilevel analysis among Japanese employees. *J Occup Environ Med*. 2018;60(12):1067-1072.
375. Tsutsumi A, Shimazu A, Eguchi H, Inoue A, Kawakami N. A Japanese Stress Check Program screening tool predicts employee long-term sickness absence: a prospective study. *J Occup Health*. 2018;60(1):55-63.
376. Watanabe K, Kawakami N. Effects of a multi-component workplace intervention program with environmental changes on physical activity among Japanese white-collar employees: a cluster-randomized controlled trial. *International Journal of Behavioral Medicine*. 2018;25(6):637-648.
377. Watanabe K, Kawakami N, Otsuka Y, Inoue S. Associations among workplace environment, self-regulation, and domain-specific physical activities among white-collar workers: a multilevel longitudinal study. *International Journal of Behavioral Nutrition and Physical Activity*. 2018;15(1): 47.
378. Watanabe K, Kawakami N, Shiotani T, Adachi H, Matsumoto K, Imamura K, Matsumoto K, Yamagami F, Fusejima A, Muraoka T, Kagami T, Shimazu A, L Kern M. The Japanese Workplace PERMA-Profiler: A validation study among Japanese workers. *J Occup Health*. 2018;60(5):383-393.
379. Watanabe K, Sakuraya A, Kawakami N, Imamura K, Ando E, Asai Y, Eguchi H, Kobayashi Y, Nishida N, Arima H, Shimazu A, Tsutsumi A. Work-related psychosocial factors and metabolic syndrome onset among workers: a systematic review and meta-analysis. *Obesity Reviews*. 2018;19(11):1557-1568.
380. Xu Q, Fukasawa M, Kawakami N, Baba T, Sakata K, Suzuki R, Tomita H, Nemoto H, Yasumura S, Yabe H, Horikoshi N, Umeda M, Suzuki Y, Shimoda H, Tachimori H, Takeshima T, Bromet EJ. Cumulative incidence of suicidal ideation and associated factors among adults living in temporary housing during the three years after the Great East Japan Earthquake. *J Affect Dis*. 2018;232:1-8.
381. Imamura K, Tran TTT, Nguyen HT, Kuribayashi K, Sakuraya A, Nguyen AQ, Bui TM, Nguyen QT, Nguyen KT, Nguyen GTH, Tran XTN, Truong TQ, Zhang MWB, Minas H, Sekiya Y, Sasaki N, Tsutsumi A, Kawakami N. Effects of two types of smartphone-based stress management programmes on depressive and anxiety symptoms among hospital nurses in Vietnam: a protocol for three-arm randomised controlled trial. *BMJ Open*. 2019 Apr 8;9(4):e025138.
382. Umeda M, Shimoda H, Miyamoto K, Ishikawa H, Tachimori H, Takeshima T, Kawakami N. Comorbidity and sociodemographic characteristics of adult autism spectrum disorder and attention deficit hyperactivity disorder: epidemiological investigation in the World Mental Health Japan 2nd Survey. *International Journal of Developmental Disabilities*. 2019:1-9.
383. Yasuma N, Watanabe K, Nishi D, Ishikawa H, Tachimori H, Takeshima T, Umeda M, Sampson L, Galea S, Kawakami N. Urbanization and Internet addiction in a nationally representative sample of adult community residents in Japan: A cross-sectional, multilevel study. *Psychiatry Research*. 2019;273:699-705.
384. GBD 2019 Diseases and Injuries Collaborators. Global burden of 369 diseases and injuries in 204 countries and territories, 1990-2019: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2019. *Lancet*. 2020;396(10258):1204-1222.
385. Adachi H, Sekiya Y, Imamura K, Watanabe K, Kawakami N. The effects of training managers on management competencies to improve their management practices and work engagement of their subordinates: A single group pre- and post-test study. *J Occup Health*. 2020;62(1): e12085.
386. Coe CL, Miyamoto Y, Love GD, Karasawa M, Kawakami N, Kitayama S, Ryff CD. Cultural and life style practices associated with low inflammatory physiology in Japanese adults. *Brain Behavior Immunity*. 2020;90:385-392.
387. GBD 2016 Occupational Risk Factors Collaborators. Global and regional burden of disease and injury in 2016 arising from occupational exposures: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2016. *Occupational and Environmental Medicine*. 2020;77(3):133-141.
388. Fukasawa M, Kawakami N, Umeda M, Akiyama T, Horikoshi N, Yasumura S, Yabe H, Suzuki Y, Bromet EJ. Long-lasting effects of distrust in government and science on mental health eight years after the Fukushima nuclear power plant disaster. *Soc Sci Med*. 2020;258: 113108.
389. Fukasawa M, Kawakami N, Umeda M, Akiyama T, Horikoshi N, Yasumura S, Yabe H, Suzuki Y, Bromet EJ. Longitudinal associations of radiation risk perceptions and mental health among non-evacuee residents of Fukushima prefecture seven years after the nuclear power plant disaster. *SSM-Population Health*. 2020;10: 100523.

390. Fukasawa M, Watanabe K, Nishi D, [Kawakami N](#). Longitudinal association between adolescent work values and mental health and well-being in adulthood: a 23-year prospective cohort study. *Scientific Reports*. 2020;10(1): 13547.
391. Hidaka Y, Imamura K, Sekiya Y, Watanabe K, [Kawakami N](#). Effects of a transdiagnostic preventive intervention on anxiety and depression among workers in Japan a pre- and posttest study. *J Occup Environ Med* 2020;62(2):e52-e58.
392. Iida M, Watanabe K, Ando E, Tsuno K, Inoue A, Kurioka S, [Kawakami N](#). The association between unit-level workplace social capital and intention to leave among employees in health care settings: a cross-sectional multilevel study. *J Occup Environ Med*. 2020;62(5):E186-E91.
393. Inoue A, Tsutsumi A, Kachi Y, Eguchi H, Shimazu A, [Kawakami N](#). psychosocial work environment explains the association of job dissatisfaction with long-term sickness absence: a one-year prospect study of Japanese employees. *J Epidemiol*. 2020;30(9):390-395.
394. Kachi Y, Inoue A, Eguchi H, [Kawakami N](#), Shimazu A, Tsutsumi A. Occupational stress and the risk of turnover: a large prospective cohort study of employees in Japan. *BMC Public Health*. 2020;20(1):174.
395. [Kawakami N](#), Fukasawa M, Sakata K, Suzuki R, Tomita H, Nemoto H, Yasumura S, Yabe H, Horikoshi N, Umeda M, Suzuki Y, Shimoda H, Tachimori H, Takeshima T, Bromet EJ. Onset and remission of common mental disorders among adults living in temporary housing for three years after the triple disaster in Northeast Japan: comparisons with the general population. *BMC Public Health*. 2020;20(1): 1271.
396. [Kawakami N](#), Inoue A, Tsuchiya M, Watanabe K, Imamura K, Iida M, Nishi D. Construct validity and test-retest reliability of the World Mental Health Japan version of the World Health Organization Health and Work Performance Questionnaire Short Version: a preliminary study. *Ind Health*. 2020;58(4):375-387.
397. [Kawakami N](#), Tran TTT, Watanabe K, Imamura K, Nguyen HT, Sasaki N, Kuribayashi K, Sakuraya A, Nguyen QT, Nguyen NT, Bui TM, Nguyen GTH, Minas H, Tsutsumi A. Internal consistency reliability, construct validity, and item response characteristics of the Kessler 6 scale among hospital nurses in Vietnam. *Plos One*. 2020;15(5) :e0233119.
398. [Kawakami N](#), Yasuma N, Watanabe K, Ishikawa H, Tachimori H, Takeshima T, Umeda M, Shimoda H, Nishi D. Association of response rate and prevalence estimates of common mental disorders across 129 areas in a nationally representative survey of adults in Japan. *Social Psychiatry Psychiatric Epidemiology*. 2020;55(10):1373-1382.
399. Kobayashi Y, Watanabe K, Otsuka Y, Eguchi H, [Kawakami N](#), Imamura K, van Dierendonck D. Servant leadership in Japan: a validation study of the Japanese Version of the Servant Leadership Survey (SLS-J). *Frontiers in Psychology*. 2020;11: 1711.
400. Komase Y, Watanabe K, Sasaki N, [Kawakami N](#). Reliability and validity of the Japanese version of the Gratitude at Work Scale (GAWS). *J Occup Health*. 2020;62(1).
401. Kotake R, Kanehara A, Miyamoto Y, Kumakura Y, Sawada U, Takano A, Chiba R, Ogawa M, Kondo S, Kasai K, [Kawakami N](#). Reliability and validity of the Japanese version of the INSPIRE measure of staff support for personal recovery in community mental health service users in Japan. *BMC Psychiatry*. 2020;20(1).
402. McGrath JJ, Lim CCW, Plana-Ripoll O, Holtz Y, Agerbo E, Momen NC, Mortensen PB, Pedersen CB, Abdulmalik J, Aguilar-Gaxiola S, Al-Hamzawi A, Alonso J, Bromet EJ, Bruffaerts R, Bunting B, de Almeida JMC, de Girolamo G, De Vries YA, Florescu S, Gureje O, Haro JM, Harris MG, Hu C, Karam EG, [Kawakami N](#), Kiejna A, Kovess-Masfety V, Lee S, Mneimneh Z, Navarro-Mateu F, Orozco R, Posada-Villa J, Roest AM, Saha S, Scott KM, Stagnaro JC, Stein DJ, Torres Y, Viana MC, Ziv Y, Kessler RC, de Jonge P. Comorbidity within mental disorders: a comprehensive analysis based on 145 990 survey respondents from 27 countries. *Epidemiology and Psychiatric Sciences*. 2020;29:e153.
403. Nishi D, Imamura K, Watanabe K, Ishikawa H, Tachimori H, Takeshima T, [Kawakami N](#). Psychological distress with and without a history of depression: Results from the World Mental Health Japan 2nd Survey (WMHJ2). *J Affect Dis*. 2020;265:545-551.
404. Obikane E, Yamana H, Yasunaga H, [Kawakami N](#). Cumulative visits for care of minor injuries are associated with traumatic brain injury in young children. *Acta Paediatrica*. 2020;109(12):2775-2782.
405. Orui M, Fukasawa M, Horikoshi N, Suzuki Y, [Kawakami N](#). Development and evaluation of a gatekeeper training program regarding anxiety about radiation health effects following a nuclear power plant accident: a single-arm intervention pilot trial. *International Journal of Environmental Research and Public Health*. 2020;17(12):4594.
406. Panthee B, Panthee S, Shimazu A, [Kawakami N](#). Validation of the Nepalese version of Recovery Experience Questionnaire. *Heliyon*. 2020;6(4):e03645.
407. Sakuraya A, Imamura K, Watanabe K, Asai Y, Ando E, Eguchi H, Nishida N, Kobayashi Y, Arima H, Iwanaga M, Otsuka Y, Sasaki N, Inoue A, Inoue R, Tsuno K, Hino A, Shimazu A, Tsutsumi A, [Kawakami N](#). What kind of intervention is effective for improving subjective well-being among workers? a systematic review and meta-analysis of randomized controlled trials. *Frontiers in Psychology*. 2020;11:528656.
408. Sasaki N, Imamura K, Thuy TTT, Watanabe K, Huong NT, Kuribayashi K, Sakuraya A, Thu BM, Quynh NT, Kien NT, Nga NT, Giang NTH, Tien TQ, Minas H, Zhang M, Tsutsumi A, [Kawakami N](#). Validation of the Job Content Questionnaire among hospital nurses in Vietnam. *J Occup Health*. 2020;62(1):e12086.
409. Sasaki N, Kuroda R, Tsuno K, [Kawakami N](#). Exposure to media and fear and worry about COVID-19. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*. 2020;74(9):501-502.
410. Sasaki N, Kuroda R, Tsuno K, [Kawakami N](#). Workplace responses to COVID-19 associated with mental health and work performance of employees in Japan. *J Occup Health*. 2020;62(1):e12134.
411. Sasaki N, Kuroda R, Tsuno K, [Kawakami N](#). The deterioration of mental health among healthcare workers during the COVID-19 outbreak: A population-based cohort study of workers in Japan. *Scandinavian Journal of Work Environment & Health*. 2020;46(6):639-644.
412. Sasaki N, Watanabe K, [Kawakami N](#). Personal values in adolescence and their associations with metabolic biomarkers in adulthood: a Japanese population-based study. *Biopsychosocial Medicine*. 2020; 7;14:26.
413. Scott KM, de Vries YA, Aguilar-Gaxiola S, Al-Hamzawi A, Alonso J, Bromet EJ, Bunting B, Caldas-de-Almeida JM, Cia A, Florescu S, Gureje O, Hu CY, Karam EG, Karam A, [Kawakami N](#), Kessler RC, Lee S, McGrath J, Oladeji B, Posada-Villa J, Stein DJ, Zarkov Z, de Jonge P; World Mental Health Surveys collaborators. Intermittent explosive disorder subtypes in the general population: association with comorbidity, impairment and suicidality. *Epidemiology and Psychiatric Sciences*. 2020;29:e138.
414. Shimazu A, Bakker AB, Demerouti E, Fujiwara T, Iwata N, Shimada K, Takahashi M, Tokita M, Watai I, [Kawakami N](#). Workaholism, Work engagement and child well-being: a Test of the spillover-crossover model. *International Journal of Environmental Research and Public Health*. 2020;17(17):6213.
415. Takano A, Miyamoto Y, Shinozaki T, Matsumoto T, [Kawakami N](#). Effect of a web-based relapse prevention program on abstinence among Japanese drug users: A pilot randomized controlled trial. *Journal of Substance Abuse Treatment*. 2020;111:37-46.
416. Tran TTT, Watanabe K, Imamura K, Nguyen HT, Sasaki N, Kuribayashi K, Sakuraya A, Nguyen NT, Bui TM, Nguyen QT, Truong TQ, Nguyen GTH, Minas H, Tsutsumi A, Shimazu A, [Kawakami N](#). Reliability and validity of the Vietnamese version of the 9-item Utrecht Work Engagement Scale. *J Occup Health*. 2020;62(1) :e12157.
417. Tsutsumi A, Sasaki N, Komase Y, Watanabe K, Inoue A, Imamura K, [Kawakami N](#). Implementation and effectiveness of the Stress Check Program, a national program to monitor and control workplace psychosocial factors in Japan: a systematic review. Translated secondary publication. *International Journal of Workplace Health Management*. 2020;13(6):649-670.
418. GBD 2019 Demographics Collaborators. Global age-sex-specific fertility, mortality, healthy life expectancy (HALE), and population estimates in 204 countries and territories, 1950-2019: a comprehensive demographic analysis for the Global Burden of Disease Study 2019. *Lancet*. 2020;396(10258):1160-1203.
419. Watanabe K, Imamura K, Inoue A, Otsuka Y, Shimazu A, Eguchi H, Adachi H, Sakuraya A, Kobayashi Y, Arima H, [Kawakami N](#). Measuring eudemonic well-being at work: a validation study for the 24-item the University of Tokyo Occupational Mental Health (TOMH) well-being scale among Japanese workers. *Ind Health*. 2020;58(2):107-131.
420. Watanabe K, [Kawakami N](#), Nishi D. Association between personal values in adolescence and mental health and well-being in adulthood: a cross-cultural study of working populations in Japan and the United States. *Annals of General Psychiatry*. 2020;19(1):7.
421. Xu QY, Jia SH, Fukasawa M, Lin L, Na J, Mu Z, Li B, Li NN, Zhao T, Ju ZS, He M, Yu LZ, [Kawakami N](#), Li YJ, Jiang C. A cross-sectional study on associations of physical symptoms, health self-efficacy, and suicidal ideation among Chinese hospitalized cancer patients. *BMC Psychiatry*. 2020; 20(1): 544.
422. Yasuma N, Narita Z, Sasaki N, Obikane E, Sekiya J, Inagawa T, Nakajima A, Yamada Y, Yamazaki R, Matsunaga A, Saito T, Watanabe K, Imamura K, [Kawakami N](#), Nishi D. Antenatal psychological intervention for universal prevention of antenatal and postnatal depression: a systematic review and meta-analysis. *J Affect Dis*. 2020; 273: 231-239.
423. Yasuma N, Sato S, Yamaguchi S, Matsunaga A, Shiozawa T, Tachimori H, Watanabe K, Imamura K, Nishi D, Fujii C, [Kawakami N](#). Effects of brief family psychoeducation for caregivers of people with schizophrenia in Japan provided by visiting nurses: protocol for a cluster randomised controlled trial. *BMJ Open*. 2020;10(4): e034425.
424. Yue JL, Yan W, Sun YK, Yuan K, Su SZ, Han Y, Ravindran AV, Kosten T, Everall I, Davey CG, Bullmore E, [Kawakami N](#), Barbui C, Thornicroft G, Lund C, Lin X, Liu L, Shi L, Shi J, Ran MS, Bao YP, Lu L. Mental

- health services for infectious disease outbreaks including COVID-19: a rapid systematic review. *Psychol Med*. 2020;50(15):2498-2513.
425. Fukasawa M, [Kawakami N](#), Umeda M, Akiyama T, Horikoshi N, Yasumura S, Yabe H, Suzuki Y, Bromet EJ. Distrust in government and its relationship with mental health after the Fukushima nuclear power plant accident. *Int J Soc Psychiatry*. 2020;10(4):e034425.
426. Obikane E, Watanabe K, Nishi D, [Kawakami N](#). Association between personal values in adolescence and impaired bonding relationship with children. *BMC Psychol*. 2020 Sep 11;8(1):98.
427. de Vries YA, Harris MG, Vigo D, Chiu WT, Sampson NA, Al-Hamzawi A, Alonso J, Andrade LH, Benjet C, Bruffaerts R, Bunting B, Caldas de Almeida JM, de Girolamo G, Florescu S, Gureje O, Haro JM, Hu C, Karam EG, [Kawakami N](#), Kovess-Masfety V, Lee S, Moskalewicz J, Navarro-Mateu F, Ojagbemi A, Posada-Villa J, Scott K, Torres Y, Zarkov Z, Nierenberg A, Kessler RC, de Jonge P; WHO World Mental Health Survey collaborators. Perceived helpfulness of treatment for specific phobia: findings from the World Mental Health Surveys. *J Affect Dis*. 2021; 288: 199-209.
428. Fukasawa M, [Kawakami N](#), Nakayama C, Yasumura S. Relationship Between use of media and radiation anxiety among the residents of Fukushima 5.5 years after the nuclear power plant accident. *Disaster Medicine and Public Health Preparedness*. 2021;15(1):42-49.
429. Hidaka Y, Imamura K, Watanabe K, Tsutsumi A, Shimazu A, Inoue A, Hiro H, Odagiri Y, Asai Y, Yoshikawa T, Yoshikawa E, [Kawakami N](#). Associations between work-related stressors and QALY in a general working population in Japan: a cross-sectional study. *Int Arch Occup Environ Health*. 2021;94(6):1375-1383.
430. Iida M, Watanabe K, Imamura K, Sakuraya A, Asaoka H, Sato N, Nozawa K, [Kawakami N](#). Development and validation of the Japanese version of the team job crafting scale for nurses. *Research in Nursing & Health*. 2021;44(2):329-343.
431. Imamura K, Tran TTT, Nguyen HT, Sasaki N, Kuribayashi K, Sakuraya A, Bui TM, Nguyen AQ, Nguyen QT, Nguyen NT, Nguyen KT, Nguyen GTH, Tran XTN, Truong TQ, Zhang MW, Minas H, Sekiya Y, Watanabe K, Tsutsumi A, [Kawakami N](#). Effect of smartphone-based stress management programs on depression and anxiety of hospital nurses in Vietnam: a three-arm randomized controlled trial. *Scientific Reports*. 2021;11(1) :11353.
432. [Kawakami N](#), Sasaki N, Kuroda R, Tsuno K, Imamura K. The Effects of Downloading a Government-Issued COVID-19 Contact Tracing App on psychological distress during the pandemic among employed adults: prospective study. *JMIR Mental Health*. 2021;8(1): e23699.
433. Obikane E, Baba T, Shinozaki T, Obata S, Nakanishi S, Murata C, Ushio E, Suzuki Y, Shirakawa N, Honda M, Sasaki N, Nishi D, O'Mahen H, [Kawakami N](#). Internet-based behavioural activation to improve depressive symptoms and prevent child abuse in postnatal women (SmartMama): a protocol for a pragmatic randomized controlled trial. *BMC Pregnancy Childbirth*. 2021;21(1): 314
434. Reins JA, Buntrock C, Zimmermann J, Grund S, Harrer M, Lehr D, Baumeister H, Weisel K, Domhardt M, Imamura K, [Kawakami N](#), Spek V, Nobis S, Snoek F, Cuijpers P, Klein JP, Moritz S, Ebert DD. Efficacy and moderators of Internet-based interventions in adults with subthreshold depression: an individual participant data meta-analysis of randomized controlled trials. *Psychotherapy Psychosomatics*. 2021;90(2):94-106.
435. Sakakibara E, Satomura Y, Matsuoaka J, Koike S, Okada N, Sakurada H, Yamagishi M, [Kawakami N](#), Kasai K. Abnormality of resting-state functional connectivity in major depressive disorder: a study with whole-head near-infrared spectroscopy. *Frontiers in Psychiatry*. 2021;12: 664859.
436. Sasaki N, Asaoka H, Kuroda R, Tsuno K, Imamura K, [Kawakami N](#). Sustained poor mental health among healthcare workers in COVID-19 pandemic: a longitudinal analysis of the four-wave panel survey over 8 months in Japan. *J Occup Health*. 2021;63(1): e12227.
437. Sasaki N, Imamura K, Tran TTT, Nguyen HT, Kuribayashi K, Sakuraya A, Bui TM, Nguyen QT, Nguyen NT, Nguyen GTH, Zhang MW, Minas H, Sekiya Y, Watanabe K, Tsutsumi A, Shimazu A, [Kawakami N](#). Effects of smartphone-based stress management on improving work engagement among nurses in Vietnam: secondary analysis of a three-arm randomized controlled trial. *J Med Internet Res*. 2021;23(2): e20445.
438. Sasaki N, Kuroda R, Tsuno K, Imamura K, [Kawakami N](#). Deterioration in mental health under repeated COVID-19 outbreaks greatest in the less educated: a cohort study of Japanese employees. *J Epidemiol*. 2021;31(1):93-96.
439. Sasaki N, Imamura K, Kataoka M, Kuroda R, Tsuno K, Sawada U, Asaoka H, Iida M, [Kawakami N](#). COVID-19 measurements at the workplace in various industries and company sizes: a 2-month follow-up cohort study of full-time employees in Japan. *Environmental and Occupational Health Practice*, 2021; 3 (1): <https://doi.org/10.1539/eohp.2020-0017-OA>
440. Sato N, Watanabe K, Nishi D, [Kawakami N](#). Associations between personal values and work engagement a cross-sectional study using a representative community sample. *J Occup Environ Med*. 2021;63(6):e335-e40.
441. Sawada U, Shimazu A, [Kawakami N](#), Miyamoto Y, Speigel L, Leiter MP. The Effects of the Civility, Respect, and Engagement in the Workplace (CREW) Program on social climate and work engagement in a psychiatric ward in Japan: a pilot study. *nursing reports*. 2021;11(2):320-330.
442. Takano A, Fukasawa M, Watanabe K, Nishi D, [Kawakami N](#). Adolescent work values and drug use in adulthood: a longitudinal prospective cohort study. *Substance Use Misuse*. 2021;56(10):1483-1492.
443. Umeda M, Shimoda H, Miyamoto K, Ishikawa H, Tachimori H, Takeshima T, [Kawakami N](#). Comorbidity and sociodemographic characteristics of adult autism spectrum disorder and attention deficit hyperactivity disorder: epidemiological investigation in the World Mental Health Japan 2nd Survey. *International Journal of Developmental Disabilities*. 2021;67(1):58-66.
444. Yasuma N, Imamura K, Watanabe K, Nishi D, [Kawakami N](#), Takano A. Association between energy drink consumption and substance use in adolescence: A systematic review of prospective cohort studies. *Drug Alcohol Depend*. 2021;219:108470.
445. Yasuma N, Watanabe K, Nishi D, Ishikawa H, Tachimori H, Takeshima T, Umeda M, [Kawakami N](#). psychotic experiences and hikikomori in a nationally representative sample of adult community residents in Japan: a cross-sectional study. *Frontiers in Psychiatry*. 2021;11:602678.
446. Yang CC, Lee KW, Watanabe K, [Kawakami N](#). The association between shift work and possible obstructive sleep apnea: a systematic review and meta-analysis. *Int Arch Occup Environ Health*. 2021 Nov;94(8):1763-1772.
447. Yasuma N, Yamaguchi S, Ogawa M, Shiozawa T, Abe M, Igarashi M, Kawaguchi T, Sato S, Nishi D, [Kawakami N](#), Fujii C. Care difficulties and burden during COVID-19 pandemic lockdowns among caregivers of people with schizophrenia: A cross-sectional study. *Neuropsychopharmacol Rep*. 2021 Jun;41(2):242-247.
448. Sato N, Watanabe K, [Kawakami N](#). Mediating Effects of work eudemonic well-being for the association between psychosocial work environment and overall eudemonic well-being among Japanese workers: a cross-sectional study. *J Occup Environ Med*. 2021 Aug 1;63(8):e542-e548.
449. Hidaka Y, Sasaki N, Imamura K, Tsuno K, Kuroda R, [Kawakami N](#). Changes in fears and worries related to COVID-19 during the pandemic among current employees in Japan: a 5-month longitudinal study. *Public Health*. 2021 Sep;198:69-74.
450. Ysuma N, Nishi D, Watanabe K, Ishikawa H, Tachimori H, Takeshima T, Umeda M, [Kawakami N](#). Association between urban upbringing and compulsive internet use in Japan: a cross-sectional, multilevel study with retrospective recall. *Int J Environ Res Public Health*. 2021 Sep 20;18(18):9890.
451. [Kawakami N](#), Imamura K, Watanabe K, Sekiya Y, Sasaki N, Sato N; SMART-CBT Project Team. Effectiveness of an Internet-based machine-guided stress management program based on cognitive behavioral therapy for improving depression among workers: protocol for a randomized controlled trial. *JMIR Res Protoc*. 2021 Sep 29;10(9):e30305
452. Watanabe K, [Kawakami N](#). Association between sitting time at work and the onset of major depressive episode: a 1-year prospective cohort study using the Bayesian regression. *BMC Public Health*. 2021 Oct 29;21(1):1960.
453. Orui M, Fukasawa M, Horikoshi N, Suzuki Y, [Kawakami N](#). The ongoing activities of livelihood support counselors following nuclear disaster under the COVID-19 restrictions: A preliminary survey. *Public Health Pract (Oxf)*. 2021 Nov;2:100107.
454. Hidaka Y, Watanabe K, Imamura K, Tatha O, [Kawakami N](#). Reliability and validity of the Chinese version of the New Brief Job Stress Questionnaire (New BJSQ) among workers in China. *Ind Health*. 2021 Nov 1. doi: 10.2486/indhealth.2021-0027.
455. Sasaki N, Kuroda R, Tsuno K, Imamura K, [Kawakami N](#). Increased suicidal ideation in the COVID-19 pandemic: an employee cohort in Japan. *BJPsych Open*. 2021 Oct 29;7(6):e199.
456. Sasaki N, Obikane E, Vedanthan R, Imamura K, Cuijpers P, Shimazu T, Kamada M, [Kawakami N](#), Nishi D. Implementation Outcome Scales for Digital Mental Health (iOSDMH): scale development and cross-sectional study. *JMIR Form Res*. 2021 Nov 23;5(11):e24332.
457. Komase Y, Watanabe K, Hori D, Nozawa K, Hidaka Y, Iida M, Imamura K, [Kawakami N](#). Effects of gratitude intervention on mental health and well-being among workers: A systematic review. *J Occup Health*. 2021 Jan;63(1):e12290.
458. Yang CC, Watanabe K, [Kawakami N](#). The associations between job strain, workplace perma profiler, and work engagement. *J Occup Environ Med*. 2021 Dec 6. doi: 10.1097/JOM.0000000000002455.
459. Asaoka H, Sasaki N, Imamura K, Kuroda R, Tsuno K, [Kawakami N](#). Changes in COVID-19 measures in the workplace: 8-month follow-up in a cohort study of full-time employees in Japan. *J Occup Health*. 2021 Jan;63(1):e12273.

460. Iida M, Sasaki N, Kuroda R, Tsuno K, Kawakami N. Increased COVID-19-related workplace bullying during its outbreak: a 2-month prospective cohort study of full-time employees in Japan. *Environmental and Occupational Health Practice*, 2021; 3 (1): <https://doi.org/10.1539/eohp.2021-0006-OA>
461. Sasaki N, Akiyama H, Kawakami N, Nishi D. Preconception menstrual cycle disorder and antenatal depression: a cross-sectional study with prerecorded information. *J Psychosom Obstet Gynaecol*. 2021 Dec 9;1-8.
462. Asaoka H, Sasaki N, Kuroda R, Tsuno K, Kawakami N. Workplace bullying and patient aggression related to COVID-19 and its association with psychological distress among health care professionals during the COVID-19 pandemic in Japan. *Tohoku J Exp Med* 2021; 255(4):283-289.
463. Degenhardt L, Bharat C, Chiu WT, Harris MG, Kazdin AE, Vigo DV, Sampson NA, Alonso J, Andrade LH, Bruffaerts R, Bunting B, Cardoso G, de Girolamo G, Florescu S, Gureje O, Haro JM, Hu C, Karam AN, Karam EG, Kovess-Masfety V, Lee S, Makanjuola V, McGrath JJ, Medina-Mora ME, Moskalewicz J, Navarro-Mateu F, Posada-Villa J, Rapsey C, Stagnaro JC, Tachimori H, Ten Have M, Torres Y, Williams DR, Zarkov Z, Kessler RC; WHO World Mental Health Survey collaborators. Perceived helpfulness of treatment for alcohol use disorders: Findings from the World Mental Health Surveys. *Drug Alcohol Depend*. 2021 Dec 1;229(Pt B):109158.
464. Iida M, Sasaki N, Imamura K, Kuroda R, Tsuno K, Kawakami N. COVID-19-related workplace bullying and customer harassment among healthcare workers over the time of the COVID-19 outbreak: A eight-month panel study of full-time employees in Japan. *J Occup Environ Med*. 2022 Feb 9. doi: 10.1097/JOM.0000000000002511.
465. Imamura K, Sasaki N, Sekiya Y, Watanabe K, Sakuraya A, Matsuyama Y, Nishi D, Kawakami N. Effect of the Imacoco Care psychoeducation website on improving psychological distress among workers under COVID-19 pandemic: a randomized controlled trial. *JMIR Form Res*. 2022 Jan 19. doi: 10.2196/33883. Epub ahead of print.
466. Sakuraya A, Shimazu A, Imamura K, Kawakami N. Effects of a job crafting intervention program on work performance among Japanese employees: an analysis of secondary outcomes of a randomized controlled trial. *J Occup Environ Med*. 2022 Jan 11. doi: 10.1097/JOM.0000000000002480. Epub ahead of print.
467. Wu CW, Chuang HY, Watanabe K, Wu PS, Pan HC, Wang CL, Yang CC, Hung CH, Dai CY, Ho CK, Kawakami N. Association between secondhand smoke and peripheral arterial disease: a meta-analysis of cross-sectional studies. *Int Arch Occup Environ Health*. 2022 Jan 26. doi: 10.1007/s00420-022-01837-9. Epub ahead of print.
468. Kessler RC, Kazdin AE, Aguilar-Gaxiola S, Al-Hamzawi A, Alonso J, Altwaijri YA, Andrade LH, Benjet C, Bharat C, Borges G, Bruffaerts R, Bunting B, Caldas de Almeida JM, Cardoso G, Chiu WT, Cía A, Ciutan M, Degenhardt L, de Girolamo G, de Jonge P, de Vries YA, Florescu S, Gureje O, Haro JM, Harris MG, Hu C, Karam AN, Kara, EG, Karam G, Kawakami N, Kiejna A, Kovess-Masfety V, Lee S, Makanjuola V, McGrath JJ, Medina-Mora ME, Moskalewicz J, Navarro-Mateu F, Nierenberg AA, Nishi D, Ojagbemi A, Oladeji BD, O'Neill S, Posada-Villa J, Puac-Polanco V, Rapsey C, Ruscio AM, Sampson NA, Scott KM, Slade T, Stagnaro JC, Stein DJ, Tachimori H, ten Have M, Torres Y, Viana MC, Vigo DV, Williams DR, Wojtyniak B, Xavier M, Zarkov Z, Ziobrowski HN, and the WHO WMH survey collaborators. Patterns and correlates of patient-reported helpfulness of treatment for common mental and substance use disorders in the WHO World Mental Health Surveys. *World Psychiatry* (in press).

原著・和文

1. 中野明德, 竹村道夫, 川上憲人, 広瀬徹也, 風祭 元. Major affective disorders (DSM-III)の入院経過の分析. *社会精神医学* 1984; 7: 235-242.
2. 川上憲人, 黒滝淳一. アルコール症外患者の通院継続状況について. *社会精神医学* 1984; 7: 338-347.
3. 川上憲人, 小泉 明. 職場における自己評価式抑うつ尺度の妥当性について. *産業医学* 1986; 28: 360-361.
4. 川上憲人, 竹村道夫, 斉藤高雅, 利田周太, 高沢紀子, 柏田 勉. 初診時の医師-患者関係と治療からの脱落. *臨床精神医学* 1986; 15: 1689-1698.
5. 川上憲人, 竹村道夫, 斉藤高雅, 利田周太, 高沢紀子, 柏田 勉. 総合病院精神科外来における治療からの脱落. *臨床精神医学* 1986; 15: 1377-1388.
6. 金子哲也, 川上憲人, 原谷 隆. ライフスタイル, 作業環境因子と心身健康影響の相関からみた健康行動決定因子の解析. *体力研究* 1987; 65: 46-54.
7. 川上憲人, 原谷隆史, 金子哲也, 小泉 明. 企業従業員における健康習慣と抑うつ症状の関連性. *産業医学* 1987; 29: 55-63.

8. 川上憲人, 櫻村博康, 小泉 明. 職場におけるうつ病者の経過と予後. *産業医学* 1987; 29: 375-383.
9. 川上憲人, 金子哲也, 星 且二, 小泉 明. 勤労者の喫煙中断行動に關与する要因について. *日本公衛誌* 1987; 34: 63-71.
10. 原谷隆史, 逸見武光, 川上憲人. 先端産業従業員の職業性ストレスと抑うつ傾向との関連. *産業医学ジャーナル* 1988; 11(5): 34-39.
11. 新野直明, 川上憲人, 森本兼曩, 小泉 明. 老人ホーム入所者の生活満足度に關連する要因について. *老年社会科学* 1988; 10: 227-233.
12. 田宮菜奈子, 荒記俊一, 七田恵子, 川上憲人. ねたきり老人の在宅死に影響を及ぼす要因. *日本公衛誌* 1990; 37: 33-38.
13. 川上憲人, 荒記俊一, 小林 薫, 中井淳仁, 小泉 明, 磯野和久, 畑 啓一. 地域の非精神科医を受診する精神障害者の頻度とその要因. *日本公衛誌* 1990; 37: 141-145.
14. 横山和仁, 荒記俊一, 川上憲人, 竹下達也. POMS (感情プロフィール検査) 日本語版の作成と信頼性および妥当性の検討. *日本公衛誌*, 1990;37: 913-918.
15. 川上憲人, 荒記俊一, 村田勝敬, 原谷隆史, 岩田 昇, 今中雄一. 職業性ストレスおよび運動が心身の健康に及ぼす相互作用の解析-精神症状および心疾患リスクファクターを指標として-. *体力研究* 1993; 83: 46-52.
16. 寺田純雄, 岩沢邦明, 清水靖仁, 川上憲人, 荒記俊一. 医学生と精神障害との社会的距離に関する研究. *公衆衛生* 1993; 57: 735-738.
17. 石橋 寛, 林 剛司, 岡部昭文, 川上憲人. 昼夜交替勤務者における血圧日内変動について-正常血圧者と軽度高血圧者の比較-. *産業医学ジャーナル* 1994; 17(5): 55-59.
18. 岩田 昇, 原谷隆史, 川上憲人, 今中雄一, 村田勝敬, 荒記俊一. 日本の一般勤労者におけるCAGEアルコール症スクリーニングテストの心理測定法的特性の検討. *産業精神保健* 1994; 12: 327-330.
19. 松下陽子, 川上憲人, 清水弘之, 松本弘子. がん検診の受診希望とそれに影響を及ぼす因子. *日本公衛誌* 1994; 41: 926-932.
20. 川上憲人, 井戸正代, 清水弘之. 地域の高齢者における大うつ病エピソードの頻度および関連要因. *日本公衛誌* 1995; 42: 792-798.
21. 三島徳雄, 永田頌史, 久保田進也, 原谷隆史, 川上憲人, 荒記俊一. 職場におけるストレスと精神健康. *心身医学* 1996; 36: 146-151.
22. 大脇淳子, 高塚直能, 川上憲人, 清水弘之. 24時間思いだし法による各種栄養素摂取量の季節変動. *栄養学雑誌* 1996; 54: 11-18.
23. 橋本修二, 青木利恵, 玉腰暁子, 柴崎智美, 永井正規, 川上憲人, 五十里明, 尾島俊之, 大野良之. 高齢者における社会活動状況の指標の開発. *日本公衛誌* 1997; 44: 760-768.
24. 井戸正代, 川上憲人, 清水弘之, 岡本祥成, 臼井曜子. 地域高齢者の活動志向性に影響を及ぼす要因および実際の社会活動との関連. *日本公衛誌* 1997; 44: 894-900.
25. 橋本修二, 青木利恵, 玉腰暁子, 永井正規, 川上憲人, 五十里明, 大野良之. 高齢者の社会活動における市町村の対策実施状況と個人の活動状況の関連. *厚生*の指標 1998;45 (2): 18-22.
26. 川上憲人, 清水弘之, 五十里明, 橋本修二, 青木利恵, 玉腰暁子, 柴崎智美, 永井正規, 尾島俊之, 大野良之. 市町村による高齢者の社会活動支援事業の評価方法の開発. *日本公衛誌* 1998;45: 893-904.
27. 加納美緒, 曹 謙次, 岩下拓司, 川上憲人, 清水弘之. 医師の喫煙とタバコ依存度. *日本公衆衛生雑誌* 1999; 46: 658-663.
28. 稲葉静代, 棚橋聡子, 操 厚, 安福嘉則, 高塚直能, 永田知里, 栗栖洋子, 川上憲人, 清水弘之. 外来診療時における禁煙指導の効果. *公衆衛生* 1999; 63: 298-301.
29. 大脇淳子, 栗栖陽子, 川上憲人, 清水弘之. 1日食事記録法による各種栄養素摂取量の月別変動. *日本食生活学雑誌* 1999; 9: 58-63.
30. 高橋美保子, 柴崎智美, 橋本修二, 川上憲人, 玉腰暁子, 尾島俊之, 永井正規. 全国市町村による高齢者の社会活動支援事業の実施状況の評価. *日本公衆衛生雑誌* 2000; 47: 47-54.
31. 高橋美保子, 柴崎智美, 橋本修二, 川上憲人, 玉腰暁子, 尾島俊之, 永井正規. 「いきいき社会活動チェック表」による地域高齢者の社会活動レベルの評価. *日本公衆衛生雑誌* 2000; 47: 936-944.
32. 中田光紀, 原谷隆史, 川上憲人, 高橋正也, 清水弘之, 三木明子, 小林章雄, 荒記俊一. 日勤女性労働者の職業性ストレスと睡眠習慣の関連-電機製造業従業員を対象とした疫学研究-. *行動医学研究* 2001; 7, 39-46.

33. 河野由理, 三木明子, 川上憲人, 栗田 広. 看護婦における喫煙習慣とタバコ依存度に関する研究. 精神科治療学 2001; 16, 835-839.
34. 河野由理, 三木明子, 川上憲人, 堤 明純. 病院勤務看護婦における職業性ストレスと喫煙習慣に関する研究 日本公衆衛生雑誌 2002; 49, 126-131.
35. 川上憲人, 堤 明純, 小林由佳, 廣川空美, 島津明人, 長見まき子, 岩田 昇, 原谷隆史. 事業場における心の健康づくりの実施状況チェックリストの開発. 産業衛生学雑誌 2005; 47: 11-32.
36. 吉川 徹, 川上憲人, 小木和孝, 堤 明純, 島津美由紀, 長見まき子, 島津明人. 職場環境改善のためのメンタルヘルスアクションチェックリストの開発. 産業衛生学雑誌 2007; 49(4): 127-142.
37. 勝又陽太郎, 松本俊彦, 高橋祥友, 川上憲人, 渡邊直樹, 平山正実, 木谷雅彦, 竹島 正. 社会・経済的要因を抱えた自殺のハイリスク者に対する精神保健的支援の可能性 心理学的剖検研究における「借金自殺」事例の分析. 精神医学 2009; 51(5): 431-440.
38. 赤澤正人, 松本俊彦, 勝又陽太郎, 木谷雅彦, 廣川聖子, 高橋祥友, 川上憲人, 渡邊直樹, 平山正実, 竹島 正. 死亡1年前にアルコール関連問題を呈した自殺既遂者の心理社会的特徴 心理学的剖検による検討. 精神医学 2010; 52(6): 561-572.
39. 鈴木友理子, 古川壽亮, 川上憲人, 堀口逸子, 石丸徑一郎, 金 吉晴. Predictors for psychological distress after the Niigata-Chuetsu earthquake in Japan using pre-disaster physical health indicators. 精神保健研究 2010(23): 89-97.
40. 島田恭子, 島津明人, 川上憲人. 未就学児を持つ共働き夫婦におけるワーク・ライフ・バランスと精神的健康 1年間の縦断データから. 厚生指標 2012; 59(15): 10-18.
41. 千葉理恵, 木戸芳史, 宮本有紀, 川上憲人. 精神障害をもつ人々と共に地域で心地よく生活するために, 地域住民が不足していると感じているもの 東京都民を対象とした調査の質的分析から. 医療と社会 2012; 22(2): 127-138.
42. 勝又陽太郎, 松本俊彦, 赤澤正人, 廣川聖子, 高橋祥友, 川上憲人, 渡邊直樹, 平山正実, 亀山晶子, 横山由香里, 竹島 正. 男性自殺既遂者におけるうつ症状の世代別特徴 心理学的剖検を用いた検討. 精神科治療学 2012; 27(4): 545-553.
43. 廣川聖子, 松本俊彦, 勝又陽太郎, 木谷雅彦, 赤澤正人, 亀山晶子, 高橋祥友, 川上憲人, 渡邊直樹, 平山正実, 竹島 正. 精神医学のフロンティア 精神科治療を受けていた自殺既遂者の心理社会的特徴 心理学的剖検による76事例の検討. 精神神経学雑誌 2013; 115(9): 923-932.
44. 吉村健佑, 川上憲人, 堤 明純, 井上彰臣, 小林由佳, 竹内文乃, 福田 敬. 日本における職場でのメンタルヘルスの第一次予防対策に関する費用便益分析. 産業衛生学雑誌 2013; 55(1): 11-24.
45. 津野香奈美, 大島一輝, 窪田和巳, 川上憲人. 東日本大震災6ヵ月後における関東地方の自治体職員のレジリエンスと心的外傷後ストレス症状との関連. 産業衛生学雑誌 2014; 56(6): 245-258.
46. 赤澤正人, 松本俊彦, 勝又陽太郎, 小高真美, 川上憲人, 江口のぞみ, 白川教人, 立森久照, 竹島 正. 過去に自殺企図歴のない成人男性における自殺のリスク要因の検討. 精神科治療学 2014; 29(4): 519-526.
47. 高野 歩, 川上憲人, 宮本有紀, 松本俊彦. 物質使用障害患者に対する認知行動療法プログラムを提供する医療従事者の態度の変化. 日本アルコール・薬物医学会雑誌 2014; 49(1): 28-38.
48. 窪田和巳, 島津明人, 川上憲人. 日本人労働者におけるワーカホリズムおよびワーク・エンゲイジメントとリカバリー経験との関連. 行動医学研究 2014; 20(2): 69-76.
49. 浅井裕美, 今村幸太郎, 堤 明純, 島津明人, 井上彰臣, 廣 尚典, 小田切優子, 吉川 徹, 吉川悦子, 川上憲人. ストレスチェック制度施行開始1年度の実施状況, 有用性および課題 労働者へのインターネット調査. 産業ストレス研究 2018; 25: 257-271.
50. 江口のぞみ, 宮本有紀, 川上憲人, 針間克己. 性同一性障害を有する患者の初診時の社会人口統計学的, 臨床的特徴と生活の質 日本の性同一性障害専門外来での調査から. GID(性同一性障害)学会雑誌 2018; 11(1): 81-89.
51. 小林由佳, 渡辺和広, 大塚泰正, 江口 尚, 川上憲人. 従業員参加型職場環境改善の準備要因の検討 Basic Organizational Development for Your workplace(BODY)チェックリストの開発. 産業衛生学雑誌 2019; 61(2): 43-58.
52. 櫻谷あすか, 今村幸太郎, 渡辺和広, 澤田宇多子, 駒瀬 優, 小松周子, 杉野 敦, 日高結衣, 岡田順二, 八木一弘, 正木宏明, 牧田広志, 川上憲人. 健康経営アウトカムとそのリスク要因に関する文献レビュー. 産業医学ジャーナル 2019; 42(3): 62-68.

53. 小林由佳, 川上憲人, 江口 尚, 大塚泰正, 難波克行, 今村幸太郎. 職場環境改善を効果的に進めるための上司のリーダーシップスタイルの評価と改善方法に関する研究. 産業医学ジャーナル 2019; 42(5): 66-70.
54. 黒木仁美(京都工場保健会), 森口次郎, 内田陽之, 大橋史子, 五十嵐千代, 小田切優子, 島 明人, 堤 明純, 錦戸典子, 原谷隆史, 吉川悦子, 吉川 徹, 川上憲人. 従業員8名の小規模零細企業における参加型職場環境改善モデル事業の2年間の取り組み. 産業衛生学雑誌 2020; 62(6): 249-260.
55. 櫻谷あすか, 今村幸太郎, 川上 憲人. 国内外の産業医学に関する文献紹介 労働者の主観的ウェルビーイング向上のための介入 系統的レビューとメタ分析. 産業医学ジャーナル 2021; 44(5): 86-91.
56. 川上憲人. 【新型コロナウイルス感染症とこころのケア】コロナ禍における在宅でできるこころのケア. 日本医師会雑誌 2021; 150(6): 997-999.
57. 飯田真子, 佐々木那津, 川上憲人. 【職域におけるハラスメント問題】コロナ禍における職場のハラスメントとその対策. 産業医学ジャーナル 2021; 44(4): 16-20.
58. 今村幸太郎, 佐々木那津, 川上 憲人. 【実装科学】スマートフォンによるベトナム看護師のメンタルヘルス対策 RE-AIM枠組みによる実装研究の評価. 精神科 2021; 39(2): 197-202.
59. 川上憲人. 【精神医療に関する疫学のトピック-記述疫学, リスク研究からコホート研究まで】日本における精神疾患の有病率に関する大規模疫学研究 成果とその意義. 精神医学 2021; 63(4): 427-436.
60. 佐々木那津, 津野香奈美, 日高結衣, 安藤絵美子, 浅井裕美, 櫻谷あすか, 日野亜弥子, 井上嶺子, 今村幸太郎, 渡辺和広, 堤 明純, 川上憲人. 日本人女性労働者の就労上課題となる生物心理社会的な要因, 制度利用状況, 期待する職場での研究テーマのニーズ: 患者・市民参画 (PPI: Patient and Public Involvement) の枠組みを用いたインターネット調査による横断研究. 産業衛生学雑誌 2021; 63(6): 275-290.
61. 小川明夏, 友永遥, 佐々木那津, 黒田玲子, 津野香奈美, 今村幸太郎, 川上憲人. 新型コロナウイルス感染症流行下におけるオンラインでの産業保健面談の経験, 満足度および課題: 労働者を対象とした横断調査. 産業衛生学雑誌 (印刷中)

総説・欧文

1. Kawakami N, Haratani T: Epidemiology of job stress and health in Japan: review of current evidence and future direction. Ind Health 1999; 37: 174-186.
2. Tsutsumi A, Kawakami N: A review of empirical studies on the model of effort-reward imbalance at work: reducing occupational stress by implementing a new theory. Soc Sci Med. 2004; 59: 2335-2359.
3. Kawakami N, Tsutsumi A. Job stress and mental health among workers in Asia and the world. J Occup Health. 2010; 52: 1-3.
4. Kasai K, Ando S, Kanehara A, Kumakura Y, Kondo S, Fukuda M, Kawakami N, Higuchi T. Strengthening community mental health services in Japan. Lancet Psychiatry. 2017;4(4):268-70.
5. Kawakami N. Reflections on the Proposed Definition and Scope of Behavioral Medicine. International Journal of Behavioral Medicine. 2017;24(1):18-20.
6. Kawakami N, Tsutsumi A. The Stress Check Program: a new national policy for monitoring and screening psychosocial stress in the workplace in Japan. J Occup Health. 2016;58(1):1-6.
7. Tsutsumi A, Sasaki N, Komase Y, Watanabe K, Inoue A, Imamura K, Kawakami N. Implementation and effectiveness of the Stress Check Program, a national program to monitor and control workplace psychosocial factors in Japan: a systematic review. International Journal of Workplace Health Management 2020; 13(6): 649-670.

総説・和文

1. 川上憲人. 健康づくりに関する意識調査とこれからの健康づくり. 厚生福祉 1985; 3450: 2-6.
2. 川上憲人. 職域精神健康管理の新しい動向. 厚生福祉 1986; 3537: 2-6.
3. 川上憲人. 新たな健康概念をめざして. 厚生福祉 1986; 3460: 2-6.
4. 川上憲人, 小泉 明. 勤労者の感情障害と職業的背景. 医学のあゆみ 1986; 138: 958-960.
5. 森本兼曩, 遠藤弘良, 川上憲人, 三浦邦彦, 丸井英二, 金子哲也, 星 旦二, 近藤忠雄, 新野直明, 今中雄一, 茂呂田七穂, 郡司篤晃, 小泉 明. 健康意識と行動(1)―面接による全国調査の解析―. 公衆衛生 1986; 50: 628-636.

6. 森本兼曩, 遠藤弘良, 川上憲人, 三浦邦彦, 丸井英二, 金子哲也, 星 且二, 近藤忠雄, 新野直明, 今中雄一, 茂呂田七穂, 郡司篤晃, 小泉 明. 健康意識と行動(2)―面接による全国調査の解析―. 公衆衛生 1986; 50: 689-697.
7. 森本兼曩, 遠藤弘良, 川上憲人, 三浦邦彦, 丸井英二, 金子哲也, 星 且二, 近藤忠雄, 新野直明, 今中雄一, 茂呂田七穂, 郡司篤晃, 小泉 明. 健康意識と行動(3)―面接による全国調査の解析―. 公衆衛生 1986; 50: 761-771.
8. 川上憲人. 職場でみられる抑うつ症状のリスクファクター. 労働の科学 1987; 42(8): 15-18.
9. 川上憲人, 村田勝敬, 荒記俊一. 産業医学における神経および心理行動機能評価[5]―主観・感情と自律神経機能. 公衆衛生 1988; 52: 766-770.
10. 川上憲人, 荒記俊一. 職場における集団の心因疾患. 産業医学ジャーナル 1988; 11: 100-103.
11. 川上憲人. 分科会まとめ: 仕事の挫折と人間関係. 月刊生徒指導 1988; 18: 46-49.
12. 川上憲人. 質疑応答: オフィス内の机の配置. 日本医事新報 1990; 3464: 140.
13. 川上憲人. 職場ストレス―疫学研究と公衆衛生学的アプローチ. こころの臨床ア・ラ・カルト 1990; 9: 7-10.
14. 夏目 誠, 川上憲人, 藤井久和. 職場のメンタルヘルス. 産業医学レビュー 1992; 5(2): 1-20.
15. 荒記俊一, 横山和仁, 村田勝敬, 川上憲人. 産業医学における神経行動障害の最近の評価法. 産業医学レビュー 1992; 5 (3): 20-43.
16. 川上憲人, 荒記俊一. 作業関連疾患―糖尿病. 公衆衛生 1992; 56: 683-686.
17. 川上憲人. 職業とストレス. 心と社会 1992; 70: 21-30.
18. 荒記俊一, 川上憲人. 職場ストレスの健康管理: 総説. 産業医学 1993; 35: 88-97.
19. 川上憲人, 荒記俊一. Karasek職業性ストレス尺度. 医学のあゆみ 1993; 166: 216.
20. 川上憲人, 伊藤弘人. EAPと米国の産業精神保健. こころの臨床ア・ラ・カルト 1993; 12(42): 110-114.
21. 川上憲人, 荒記俊一. ビジネスマンの日常生活動態と特有な病態像. 臨床と薬物治療 1993; 12(1): 42-48.
22. 川上憲人, 清水弘之. わが国と欧米における白血病の発生動向の差異. Medicina 1993; 30(4): 584-588.
23. 川上憲人. 職場のメンタルヘルス: 最近の動向―第1回精神障害の頻度とメンタルヘルス・ケアの体制. ぎふ精神保健 1994; 31(1): 57-61.
24. 川上憲人. 職場のメンタルヘルス: 最近の動向―第2回早期発見と職場復帰後の支援. ぎふ精神保健 1994; 31(2): 1-6.
25. 川上憲人. 職業別にみた生活習慣. 公衆衛生 1994; 58(12): 844-847.
26. 川上憲人. Epidemiologic Catchment Area (ECA) Project. 精神科診断学 1994; 5: 13-22.
27. 荒記俊一, 川上憲人. 労働によるストレスと健康. 公衆衛生 1995; 59: 84-88.
28. 川上憲人. 労働環境の快適化へ向けて. 安全スタッフ 1995; 1625: 7-17.
29. 川上憲人. 精神分裂病と国民保健. こころの科学 1995; 60: 18-23.
30. 川上憲人. 健康の本質をめぐって. ぎふ精神保健 1995; 32 (1): 5-16.
31. 川上憲人. 企業におけるストレス対策―職場環境および個人へのアプローチ (その2) . 労働衛生管理 1995; 6(2): 42-46.
32. 荒記俊一, 村田勝敬, 横山和仁, 川上憲人. 環境因子による非顕性の神経・精神・行動障害の評価方法と最近の知見. 日本衛生学雑誌 1995; 50: 713-729.
33. 川上憲人. 職業性ストレスの疫学研究. ストレス科学 1995; 10: 63-66.
34. 川上憲人. 職場のメンタルヘルス―第1次, 第2次および第3次予防の方法―. 産業医学ジャーナル 1996; 19(2): 20-24.
35. 荒記俊一, 川上憲人. 糖尿病の予防管理. 中央労働災害防止協会編. 職場におけるこれからの健康管理―脳血管疾患, 虚血性心疾患等の予防を中心として―. 東京: 中央労働災害防止協会 1996: 164-187.
36. 川上憲人, 伊藤弘人, 長見まき子. 従業員援助プログラム(EAP)からみた産業精神保健の将来. 産業精神保健 1997; 5: 30-36.
37. 川上憲人, 河島美枝子, 榎本 武, 大久保浩司, 廣田昌利, 渡辺直登, 林 剛司, 原谷隆史, 岩田 昇, 今中雄一, 荒記俊一, 村田勝敬. 職場におけるストレス対策―介入研究による効果評価. 産業医学ジャーナル 1997; 19(6): 49-53.
38. 川上憲人. 諸外国の精神疾患の疫学―精神分裂病, 感情障害, 神経症―. 精神医学レビュー 1997; 24: 46-53.
39. 川上憲人, 原谷隆史, 橋本修二. 職業性ストレスの健康影響の評価. 産業精神保健 1997; 5: 255-258.
40. 川上憲人. 職業性ストレスの健康影響―その定量的評価と経済的影響. 産業ストレス研究 1997; 5: 2-6.
41. 川上憲人, 清水弘之. 公衆衛生と研究のノウハウ. 公衆衛生 1997; 61: 788-794.
42. 川上憲人. Job Content Questionnaire (JCQ)の使用経験. 産業ストレス研究 1997; 4: 88-92.
43. 川上憲人. Job Content Questionnaire (JCQ). 産業衛生学雑誌 1997; 39: A129-130.
44. 川上憲人. カラセクモデルとソーシャルサポート. タイプA 1997; 8:69-70.
45. 川上憲人. わが国の人口動態と疫学. 臨床精神医学 1998; 27 (増刊号) : 7-12.
46. 川上憲人, 岩田 昇. ストレスの考え方―評価尺度の立場から. 心療内科 1998; 2: 118-124.
47. 川上憲人. 企業のメンタルヘルス―効果的な組織づくり. 健康かながわ 1998; 367: 1.
48. 川上憲人. 職業性ストレスの職種差. ストレス科学 1998; 12: 145-150.
49. 川上憲人, 清水弘之. 喫煙と糖尿病の関連について. 日本循環器管理研究協議会雑誌 1998; 33: 230-236.
50. 川上憲人, 原谷隆史. 新しい職業性ストレスの評価法―米国国立職業安全保健研究所(NIOSH)の職業性ストレス調査票. ストレス科学 1998; 13: 19-24.
51. 川上憲人. 職業性ストレスの理論の変遷と現状. ストレス科学 1999; 13: 56-63.
52. 川上憲人. 気分障害の疫学研究―最近の進歩. 最新精神医学 1999; 4: 5-10.
53. 原谷隆史, 川上憲人. 労働者のストレスの現状. 産業医学ジャーナル 1999;22(4): 23-28.
54. 川上憲人, 原谷隆史. 職業性ストレスの健康影響. 産業医学ジャーナル 1999;22(5): 51-55.
55. 川上憲人. 職業性ストレスの理論モデル. 産業衛生学雑誌 1999; 41: A91-92.
56. 川上憲人. 職場におけるストレス対策の計画の作成と進め方. 産業衛生学雑誌 2000; 42: 221-225.
57. 川上憲人, 原谷隆史. 職場のストレス対策 職場環境の改善. 産業医学ジャーナル 2000; 23 (1): 45-49.
58. 川上憲人, 原谷隆史. 職場のストレス対策 ストレス教育と健康管理. 産業医学ジャーナル 2000; 23 (2): 29-33.
59. 原谷隆史, 川上憲人. 職場のストレス対策 職場の活性化. 産業医学ジャーナル 2000; 23 (3): 48-52.
60. 川上憲人. 産業メンタルヘルス研究の現状と課題. 精神保健研究 2000; 13: 37-41.
61. 川上憲人. 職場環境等の改善と「仕事のストレス判定図」. 産業ストレス研究 2001; 8, 79-85.
62. 川上憲人. 事業場における心の健康づくり計画と進め方. 医報とやま 2001; 1299: 8-11.
63. 川上憲人. 職場におけるメンタルヘルス. 香川県医師会誌 2001; 54: 109-113.
64. 川上憲人. 労働省指針と職場のメンタルヘルスの進め方. 産業医学プラザ 2001; 2: 1-7.
65. 川上憲人. 企業における心の健康対策 第1回「メンタルヘルスのシステムづくり」. よぼういがく 2001; 31: 79-91.
66. 川上憲人. 職場のメンタルヘルス対策の進め方. 倉庫 2001; 118: 75-86.
67. 川上憲人. 事業場におけるメンタルヘルスケアの進め方. 社会保険 2001; 52: 26-29.
68. 川上憲人. メンタルヘルス相談体制の確立と教育・研修. 健康保険 2001; 55: 40-46.
69. 川上憲人. 職場環境等の改善と健康診断等の機会の活用. 健康保険 2001; 55: 58-62.
70. 川上憲人. 「仕事のストレス判定図」と職場環境等の改善. 産業保健 2 1 2001; 26: 4-9.
71. 川上憲人. 日本行動医学会の現状と展望 編集の立場から 行動医学研究 2002; 8, 13-15.
72. 川上憲人. 産業・経済変革期の職場ストレス対策の進め方 各論1.一次予防(健康障害の発生の予防) 職場環境等の改善 産業衛生学雑誌 2002; 44: 95-99.
73. 川上憲人. 職場におけるメンタルヘルス 計画づくりと進め方 日本職業・災害医学会会誌 2002; 50: 154-158.
74. 川上憲人. 職場環境等のストレス評価と対策 ストレス科学 2002; 16: 208-215.
75. 川上憲人. 職業性ストレスの健康影響とその対策 岡山医学会雑誌 2002; 114: 131-132.
76. 川上憲人. 仕事の要求度―コントロールモデル 産業精神保健 2002; 10: 342-343.
77. 川上憲人. 「職業性ストレス判定図」を活用するには 働く人の安全と健康 2002; 53: 71-73.
78. 川上憲人. 職場におけるストレスの対策 (上) 労働者のストレス対処を支援する BLOOM 2002; 8: 6-7.
79. 川上憲人. 城戸尚治, 島津美由紀, 山川和夫, 尾崎紀夫: 事業場における精神科医の産業医としての活用に関する調査研究. 産業精神保健 2003; 11: 352-354.

80. 川上憲人. わが国における自殺の現状と課題. 保健医療科学 2003; 52: 254-260.
81. 川上憲人. 生涯の間に15人に1人がうつ病に罹患—疫学的に見るうつ病の現状と対策上の課題. 公衆衛生情報 2003; 33: 34-36.
82. 川上憲人. 公衆衛生の人づくりと行動科学の視点. 公衆衛生 2003; 67: 2-3.
83. 川上憲人. 事業場における心の健康づくり対策. 季刊労働衛生管理 2003; 14: 33-43.
84. 川上憲人, 堤 明純. 職場のメンタルヘルス 総説2000-2003. 公衆衛生 2004; 68: 301-305
85. 川上憲人. 職場における調査票によるストレス評価の現状. 産業精神保健 2004; 12: 1-11.
86. 下光輝一, 小田切優子, 川上憲人. メンタルヘルスのための仕事のストレス要因などの職場環境等の改善. 産業ストレス研究 2004; 11: 87-92.
87. 川上憲人. うつ病の疫学—有病率, 危険因子, 生活への影響, 治療そして予防. ストレス科学 2004; 19: 3-12.
88. 川上憲人. 特集職場のメンタルヘルス 予防と疫学. ストレスと臨床 2004; 19: 10-13.
89. 川上憲人, 堤 明純, 小林由佳, 島津明人. 事業場の自殺予防対策の立案とその評価. 産業ストレス研究 2004; 11: 141-147.
90. 川上憲人, 廣 尚典, 高橋祥友, 永田頌史. 職場における心のケアと自殺予防. 季刊社会保障研究 2004; 40: 26-35.
91. 堤 明純, 川上憲人. 職業性ストレス. 日本医事新報 2004; 4194: 21-23.
92. 川上憲人. コラム 自殺の統計. 保健師ジャーナル 2004; 60:1161-1163.
93. 川上憲人. わが国における自殺の現状とその防止策. クリニカルプラクティス 2005; 24: 44-48.
94. 川上憲人. 国際労働衛生学会各国セクレタリー会議. 産業医学ジャーナル 2005; 28: 59-60.
95. 川上憲人. 【対応迫られるストレスによる社会問題】 対応迫られるストレスによる社会問題 職場のストレス. ストレス科学 2005; 20(3): 122-129.
96. 川上憲人. 【うつ病治療の進歩】 疫学調査. Depression Frontier 2005; 3(1): 8-13.
97. 川上憲人. 【プライマリケアにおける心のケア】 わが国における自殺の現状とその防止策. クリニカルプラクティス 2005; 24(1): 44-48.
98. 川上憲人, 堤 明純, 小林由佳, 廣川空美, 島津明人, 長見まき子, 岩田 昇, 原谷隆史. 事業場における心の健康づくりの実施状況チェックリストの開発. 産業衛生学雑誌 2005; 47(1): 11-32.
99. 竹島 正, 長沼洋一, 立森久照, 川上憲人. 【こころの健康問題への挑戦】 疫学的に見た「こころの健康問題」. 公衆衛生 2005; 69(5): 352-357.
100. 三橋利晴, 高尾総司, 堤 明純, 川上憲人. わが国の企業におけるeラーニングとこれによる労働安全衛生教育の利用状況, ニーズおよび関連要因. 産業衛生学雑誌 2006; 48(5): 183-191.
101. 川上憲人. 【うつ病のすべて】 疫学 世界のうつ病, 日本のうつ病 疫学研究の現在. 医学のあゆみ 2006; 219(13): 925-929.
102. 川上憲人. 社会疫学 その起こりと展望. 日本公衆衛生雑誌 2006; 53(9): 667-670.
103. 川上憲人. 【禁煙治療 保険診療の実際】 保険診療のポイント 保険診療上ポイントとなる点をクロージアアップ TDSスコア. 治療 2006; 88(10): 2491-2497.
104. 川上憲人. 【自殺防止を目指した薬物療法】 わが国における自殺の現状と課題. 臨床精神薬理 2006; 9(8): 1519-1524.
105. 川上憲人. 【プライマリ・ケアにおける精神疾患 generalistと精神科医のコラボレーション】 プライマリ・ケアにおける精神疾患. JIM: Journal of Integrated Medicine 2006; 16(6): 446-449.
106. 川上憲人. 実践メンタルヘルス講座 締めくくり. 産業医学ジャーナル 2006; 29(2): 26-32.
107. 川上憲人. 【ライフサイクルとうつ病】 うつ病は増えているか? 医薬ジャーナル 2006; 42(4): 1199-1204.
108. 堤 明純, 島津明人, 入交洋彦, 吉川 徹, 川上憲人. 【職場環境の改善によるメンタルヘルスの向上】 職業性ストレス調査票と職場環境改善のためのヒント集を活用した職場環境改善. 産業ストレス研究 2006; 13(4): 211-217.
109. 頼藤貴志, 川上憲人. 国内外の産業医学に関する文献紹介 職業曝露と発がん 最近の話題を中心に. 産業医学ジャーナル 2006; 29(1): 70-75.
110. 川上憲人. うつ病研究における海外の動向 大うつ病の有病率. Depression Frontier 2007; 5(2): 77-81.
111. 川上憲人. 職場のメンタルヘルスの専門家が持つべき技術. 産業ストレス研究 2007; 14(4): 157-163.
112. 川上憲人. 産業医学基本セミナー 嘱託産業医が行う職場のメンタルヘルス対策 メンタルヘルス不調への相談対応. 産業医学プラザ 2007(14): 20-27.
113. 川上憲人. 【うつ病 基礎・臨床研究の進歩】 うつ病の疫学と国際比較. 日本臨床 2007; 65(9): 1578-1584.
114. 川上憲人. 産業医学基本セミナー 嘱託産業医が行う職場のメンタルヘルス対策 教育研修と情報提供. 産業医学プラザ 2007(13): 21-29.
115. 川上憲人. 【これからのメンタルヘルス対策】 企業のメンタルヘルス対策の現状と今後の方向性. 安全と健康 2007; 58(5): 441-445.
116. 川上憲人. 【双極性障害】 双極性障害と社会 双極性障害の疫学. こころの科学 2007(131): 18-21.
117. 土屋政雄, 川上憲人. 【社会不安障害/社交恐怖】 社会不安障害の疫学. 臨床精神医学 2007; 36(12): 1495-1502.
118. 土屋政雄, 川上憲人. 【産業精神保健1次予防のエビデンス】 職場環境改善 科学的エビデンスの現状と今後の課題. 産業精神保健 2007; 15(3): 131-135.
119. 土屋政雄, 川上憲人. 【職場における高機能広汎性発達障害および注意欠陥・多動障害】 成人 ADHDの疫学と職場におけるインパクト 米国NCS-R調査から. 産業ストレス研究 2007; 14(2): 65-71.
120. 島津明人, 川上憲人. 従業員個人向けストレス対策の現状と今後の課題. 産業医学ジャーナル 2007; 30(2): 89-92.
121. 井上彰臣, 川上憲人, 廣 尚典, 宮本俊明, 堤 明純. 新指針に基づいた事業場におけるメンタルヘルス対策の状況, および改正労働安全衛生法に基づいた長時間労働者への医師面接の実施状況 事業場規模別による比較検討. 産業ストレス研究 2008; 15(2): 151-161.
122. 勝又陽太郎, 松本俊彦, 高橋祥友, 渡邊直樹, 川上憲人, 竹島 正. 自殺の背景要因に関する定性的研究 ライフチャートを用いた自殺に至るプロセスに関する予備的検討. 日本社会精神医学会雑誌 2008; 16(3): 275-288.
123. 川上憲人. 産業医学基本セミナー 嘱託産業医が行う職場のメンタルヘルス対策 職場ストレスの対策, そしてまとめ. 産業医学プラザ 2008(16): 18-25.
124. 川上憲人. 【コモディジーズとしての精神疾患-有病率と疫学・変遷】 気分障害. 精神科 2008; 13(1): 46-53.
125. 川上憲人. 【職場におけるメンタルヘルス】 職場のメンタルヘルスにおける産業医の役割. MEDICO 2008; 39(8): 281-284.
126. 川上憲人. 産業医学基本セミナー 嘱託産業医が行う職場のメンタルヘルス対策 職場復帰の支援. 産業医学プラザ 2008(15): 24-31.
127. 川上憲人. 【軽症うつ病 プライマリケア医に課せられた対応】 うつ病 疫学. 治療学 2008; 42(2): 125-128.
128. 川上憲人, 島津明人, 土屋政雄, 堤 明純. 産業ストレスの第一次予防対策 科学的根拠の現状とその応用. 産業医学レビュー 2008; 20(4): 175-196.
129. 堤 明純, 長見まき子, 森本兼曩, 川上憲人. Motivation, Overcommitment and Psychological Health at Work: A Path Analytic Approach. 産業医科大学雑誌 2008; 30(3): 279-292.
130. 川上憲人. 【総合健診におけるメンタルヘルス】 職場のメンタルヘルスの現状と展望. 総合健診 2009; 36(2): 217-222.
131. 川上憲人. 診断のピットフォール たばこ依存症スクリーニングテスト(TDS). 治療学 2009; 43(2): 208-209.
132. 川上憲人. 【精神疾患 肥満・糖尿病との関連とは?】 日本のうつ病人口は? 日本のうつ病人口について教えてください. Q&Aでわかる肥満と糖尿病 2009; 8(1): 27-28.
133. 土屋政雄, 川上憲人. 【知っておきたい小児・思春期の気分障害】 小児・思春期のうつ病は増えているのか. Progress in Medicine 2009; 29(11): 2585-2589.
134. 土屋政雄, 川上憲人. 【身体疾患とうつ病】 うつ病の有病率とリスクファクター, 特に身体疾患について. Progress in Medicine 2009; 29(10): 2347-2351.
135. 原田規章, 香山不二雄, 川上憲人, 小林章雄, 佐甲隆, そうけ島茂, 曾根智史, 津金昌一郎, 野津有司, 橋本英樹, 長谷川敏彦, 本橋豊, 矢野栄二, 實成文彦, 日本公衆衛生学会公衆衛生モニタリング・レポート委員会. 公衆衛生モニタリング・レポート 食品危機事前対応に関する提言. 日本公衆衛生雑誌 2010; 57(12): 1098-1100.

136. 原田規章, 香山不二雄, 川上憲人, 小林章雄, 佐甲 隆, そうけ島茂, 曾根智史, 津金昌一郎, 野津有司, 橋本英樹, 長谷川敏彦, 本橋 豊, 矢野栄二, 實成文彦, 日本公衆衛生学会公衆衛生モニタリング・レポート委員会. 公衆衛生モニタリング・レポート 経済変動期の自殺対策のあり方について. 日本公衆衛生雑誌 2010; 57(5): 415-418.
137. 赤澤正人, 松本俊彦, 勝又陽太郎, 木谷雅彦, 廣川聖子, 高橋祥友, 川上憲人, 渡邊直樹, 平山正実, 亀山晶子, 横山由香里, 竹島 正. 死亡時の就労状況からみた自殺既遂者の心理社会的類型について 心理学的剖検を用いた検討. 日本公衆衛生雑誌 2010; 57(7): 550-560.
138. 川上憲人. 【最新 うつ病のすべて】 疫学 世界のうつ病, 日本のうつ病 疫学研究の現在. 医学のあゆみ 2010; 別冊(最新うつ病のすべて): 42-46.
139. 川上憲人. 職場のメンタルヘルスの国際潮流と日本型枠組みの確立に向けて. 産業精神保健 2010; 18(4): 281-285.
140. 木谷雅彦, 松本俊彦, 勝又陽太郎, 赤澤正人, 廣川聖子, 川上憲人, 高橋祥友, 渡邊直樹, 平山正実, 竹島 正. 心理学的剖検データベースを活用した自殺の原因分析に関する研究. 国立精神・神経センター精神保健研究所年報 2010(22): 43-44.
141. 廣川聖子, 松本俊彦, 勝又陽太郎, 木谷雅彦, 赤澤正人, 高橋祥友, 川上憲人, 渡邊直樹, 平山正実, 竹島 正. 死亡前に精神科治療を受けていた自殺既遂者の心理社会的特徴 心理学的剖検による調査. 日本社会精神医学会雑誌 2010; 18(3): 341-351.
142. 原田規章, 香山不二雄, 川上憲人, 小林章雄, 佐甲 隆, そうけ島茂, 曾根智史, 津金昌一郎, 野津有司, 橋本英樹, 長谷川敏彦, 本橋 豊, 矢野栄二, 實成文彦, 藤野善久, 永田智久, 久保達彦, 助友裕子, 石竹達也, 近藤克則, 原 邦夫, 日本公衆衛生学会公衆衛生モニタリング・レポート委員会. 公衆衛生モニタリング・レポート 健康影響予測評価(Health Impact Assessment)の必要性和日本公衆衛生学会版ガイドランスの提案. 日本公衆衛生雑誌 2011; 58(11): 989-992.
143. 原田規章, 香山不二雄, 川上憲人, 小林章雄, 佐甲 隆, そうけ島茂, 曾根智史, 津金昌一郎, 野津有司, 橋本英樹, 長谷川敏彦, 本橋 豊, 矢野栄二, 實成文彦, 日本公衆衛生学会公衆衛生モニタリング・レポート委員会. 公衆衛生モニタリング・レポート 高齢者における健康の社会格差. 日本公衆衛生雑誌 2011; 58(7): 564-568.
144. 原田規章, 香山不二雄, 川上憲人, 小林章雄, 佐甲 隆, そうけ島茂, 曾根智史, 津金昌一郎, 野津有司, 橋本英樹, 長谷川敏彦, 本橋 豊, 矢野栄二, 實成文彦, 日本公衆衛生学会公衆衛生モニタリング・レポート委員会. 公衆衛生モニタリング・レポート 「非正規雇用の健康影響」. 日本公衆衛生雑誌 2011; 58(10): 913-918.
145. 原田規章, 香山不二雄, 川上憲人, 小林章雄, 佐甲 隆, そうけ島茂, 曾根智史, 津金昌一郎, 野津有司, 橋本英樹, 長谷川敏彦, 本橋 豊, 矢野栄二, 實成文彦, 日本公衆衛生学会公衆衛生モニタリング・レポート委員会. 公衆衛生モニタリング・レポート 福島第一原発放射線漏れ事故に対応した環境発がん対策について. 日本公衆衛生雑誌 2011; 58(8): 651-657.
146. 原田規章, 香山不二雄, 川上憲人, 小林章雄, 佐甲 隆, そうけ島茂, 曾根智史, 津金 昌一郎, 野津有司, 橋本英樹, 長谷川敏彦, 本橋 豊, 矢野栄二, 實成文彦, 日本公衆衛生学会公衆衛生モニタリング・レポート委員会. 公衆衛生モニタリング・レポート 激甚災害後の健康危機管理 情報マネジメントによる被害軽減. 日本公衆衛生雑誌 2011; 58(8): 646-650.
147. 原田規章, 香山不二雄, 川上憲人, 小林章雄, 佐甲 隆, そうけ島茂, 曾根智史, 津金昌一郎, 野津有司, 橋本英樹, 長谷川敏彦, 本橋 豊, 矢野栄二, 實成文彦, 日本公衆衛生学会公衆衛生モニタリング・レポート委員会. 公衆衛生モニタリング・レポート 子どもの健康と社会格差 低出生体重の健康影響. 日本公衆衛生雑誌 2011; 58(3): 212-215.
148. 原田規章, 香山不二雄, 川上憲人, 小林章雄, 佐甲 隆, そうけ島茂, 曾根智史, 津金昌一郎, 野津有司, 橋本英樹, 長谷川敏彦, 本橋 豊, 矢野栄二, 實成文彦, 日本公衆衛生学会公衆衛生モニタリング・レポート委員会. 公衆衛生モニタリング・レポート 環境発がん対策のあり方について. 日本公衆衛生雑誌 2011; 58(6): 474-478.
149. 赤澤正人, 松本俊彦, 勝又陽太郎, 木谷雅彦, 廣川聖子, 亀山晶子, 横山由香里, 高橋祥友, 川上憲人, 渡邊直樹, 平山正実, 竹島 正. 死亡時の職業の有無でみた自殺既遂者の心理社会的特徴 心理学的剖検による76事例の検討. 日本社会精神医学会雑誌 2011; 20(2): 82-93.
150. 千葉理恵, 宮本有紀, 川上憲人. 地域で生活する精神疾患をもつ人の, ピアサポート経験の有無によるリカバリーの比較. 精神科看護 2011; 38(2): 48-54.
151. 川上憲人. 職場のメンタルヘルスをめぐる国際動向と日本の優先課題. 産業ストレス研究 2011; 18(4): 233-240.
152. 川上憲人. 【進歩したストレスマネジメント(身体面と心理面)】 職業性ストレスに対する組織的対応 管理職者教育プログラムの効果と今後の展開. ストレス科学 2011; 26(1): 21-30.
153. 津野香奈美, 森田哲也, 井上彰臣, 安 陽子, 川上憲人. 労働者における職場のいじめの測定方法の開発とその実態, 健康影響に関する調査研究. 産業医学ジャーナル 2011; 34(3): 79-86.
154. 津野香奈美, 川上憲人, 井上彰臣. 米国心理学会(APA)が実施している心理的健康職場づくり運動 取り組みの現状とその有効性. 産業精神保健 2011; 19(4): 311-315.
155. 下田陽樹, 川上憲人, 土屋政雄. 【身体疾患と向精神薬-身体疾患に伴う精神障害治療-】 身体疾患に伴う精神障害の疫学. 日本臨床 2012; 70(1): 7-13.
156. 五十嵐千代, 川上憲人, 堀江正知. 【労働安全衛生法の一部改正をめぐって(2)】 新たなメンタルヘルス対策を考える. 健康管理 2012(701): 31-37.
157. 五十嵐千代, 川上憲人, 堀江正知. 【労働安全衛生法の一部改正をめぐって】 新たなメンタルヘルス対策を考える. 健康管理 2012(700): 30-33.
158. 五十嵐千代, 川上憲人, 堀江正知, 椎葉茂樹, 土肥誠太郎. 【労働安全衛生法の一部改正をめぐって(3)】 新たなメンタルヘルス対策を考える. 健康管理 2012(702): 19-28.
159. 時田征人, 川上憲人. 国内外の産業医学に関する文献紹介 メンタルヘルス不調により休業した労働者への復職支援 オランダにおける効果評価研究. 産業医学ジャーナル 2012; 35(2): 108-111.
160. 小田切優子, 川上憲人, 下光輝一. 【これからの職場のメンタルヘルス:ストレス対策から活性化対策へ】 職場のメンタルヘルスの新しい日本型枠組み ステークホルダー会議の成果から. 産業精神保健 2012; 20(3): 187-193.
161. 川上憲人. 【労働安全衛生法の一部改正をめぐって(3)】 健康いきいき職場とは. 健康管理 2012(702): 14-18.
162. 川上憲人. 【不安障害を見直す】 不安障害の疫学と経済的損失. 精神科 2012; 21(5): 516-521.
163. 川上憲人. 健康で持続的な働き甲斐のある労働へ 新しい仕組みをつくろう これからの職場のメンタルヘルス対策 第一次予防への新しいアプローチと職場復帰の支援. 公衆衛生 2012; 76(12): 989-992.
164. 川上憲人. 健康で持続的な働き甲斐のある労働へ 新しい仕組みをつくろう 職場のメンタルヘルスの現状と課題 わが国の課題と国際的動向の分析. 公衆衛生 2012; 76(11): 896-899.
165. 川上憲人. 【労働安全衛生法の一部改正をめぐって】 労働安全衛生法の一部改正をめぐって 新たなメンタルヘルス対策を考える. 健康管理 2012(700): 34-37.
166. 川上憲人. 世界及び日本の精神疾患の疫学 WHO世界精神保健調査から. 心と社会 2012; 43(1): 58-65.
167. 川上憲人. 【うつ病をめぐる最近の話題】 うつ病の増加 世界の動向とわが国の特徴 Pharma Medica. 2012; 30(3): 9-13.
168. 川上憲人, 井上彰臣. 【新職業性ストレス簡易調査票の解説】 開発のねらいと経緯. 産業医学ジャーナル 2012; 35(6): 4-9.
169. 川上憲人, 岡本真澄. 【保健師による全戸家庭訪問調査からみえた復興への課題-岩手県大槌町を例に-】 心の健康の確保 保健の科学. 2012; 54(1): 18-21.
170. 大野 裕, 吉内一浩, 川上憲人. 【ストレスと疾患】 疾患をストレスの視点から考える. カレントセラピー 2012; 30(2): 166-175.
171. 島津明人, 窪田和巳, 高田未里, 川上憲人. 社会格差と健康 ストレス科学の貢献 社会格差と健康の心理社会的メカニズム 仕事の要求度と資源の媒介効果の検討. ストレス科学 2012; 27(1): 60-66.
172. 井上彰臣, 川上憲人. 【これからの職場のメンタルヘルスの第一次予防】 職業性ストレス簡易調査票の開発と応用 新職業性ストレス簡易調査票の開発. 産業ストレス研究 2013; 20(2): 147-153.
173. 吉川 徹, 吉川悦子, 土屋政雄, 小林由佳, 島津明人, 堤 明純, 小田切優子, 小木和孝, 川上憲人. 【これからの職場のメンタルヘルスの第一次予防】 科学的根拠に基づいた職場のメンタルヘルスの第一次予防のガイドライン 職場のメンタルヘルスのための職場環境改善の評価と改善に関するガイドライン. 産業ストレス研究 2013; 20(2): 135-145.

174. 今村幸太郎, 川上憲人, 古川壽亮. 職場における遠隔認知行動療法プログラムの展開 労働者を対象としたインターネット認知行動療法(iCBT)の効果 無作為化比較試験. 認知療法研究 2013; 6(2): 146-150.
175. 坂上祐樹, 土屋政雄, 堀口逸子, 岩田 昇, 竹島 正, 川上憲人. 日本の大都市圏におけるこころの健康に関する疫学調査研究 WHO「世界精神保健プロジェクト」. 順天堂醫事雑誌 2013; 59(4): 347-352.
176. 川上憲人. 【神経・精神疾患診療マニュアル】 神経・精神疾患の動向 精神疾患の疫学 ,頻度. 日本医師会雑誌 2013; 142(特別2): S30-S31.
177. 土屋政雄, 川上憲人. 【精神疾患は軽症化しているのか】 精神疾患の「軽症化」の背景 疫学的視点からみえてくるもの. こころの科学 2013(168): 15-19.
178. 井上彰臣, 川上憲人, 堤 明純. 精神健康の社会格差 そのメカニズムを解明する 職業階層間の心の健康格差は職業性ストレスにより説明されるか. ストレス科学 2014; 28(4): 255-261.
179. 岡田直大, 笠井清登, 高橋 努, 鈴木道雄, 橋本亮太, 川上憲人. 日本人を対象とした生物学的精神医学研究のための教育歴をもとにした簡易社会経済状態(socioeconomic status:SES)尺度. 日本生物学的精神医学会誌 2014; 25(2): 115-117.
180. 原田規章, 青柳 潔, 矢野栄二, 川上憲人, 佐藤眞一, 實成文彦, 橋本英樹, 井上まり子, 片瀬一男, 可知悠子, 鶴ヶ野しのぶ, 錦谷まりこ, 林英恵, 福田吉治, 本庄かおり, 安藤絵美子, 日本公衆衛生学会公衆衛生モニタリング・レポート委員会. 日本公衆衛生学会公衆衛生モニタリング・レポート委員会報告 非正規雇用と健康 現状分析と今後のモニタリングおよび対策の方向性. 日本公衆衛生雑誌 2014; 61(8): 396-405.
181. 今村幸太郎, 関屋裕希, 川上憲人, 島津明人. 国内外の産業医学に関する文献紹介 労働者のワーク・エンゲイジメント向上を目的とした介入研究レビュー. 産業医学ジャーナル 2014; 37(2): 89-93.
182. 川上憲人. 職場のメンタルヘルス入門編 まとめ 職場のメンタルヘルス 私達はなすべきことをしてきたか. 産業ストレス研究 2014; 21(4): 377-378.
183. 川上憲人. 「健康いきいき職場づくり」 職場のメンタルヘルスへのポジティブ・ノンヘルスセクターアプローチ. 産業医学レビュー 2014; 26(4): 211-238.
184. 川上憲人. 地域および職場における心の健康の実態, 関連要因解明および対策に関する研究. 日本医師会雑誌 2014; 142(10): 2273-2277.
185. 石川華子, 川上憲人. 【精神科疫学入門】 日本における気分障害の疫学. 精神科 2015; 26(1): 10-13.
186. 川上憲人. 【『心理的な負担の程度を把握するための検査』の意義と活用】 検査の活用 職場環境改善の進め方. 産業精神保健 2015; 23(1): 22-26.
187. 川上憲人. 事業場におけるストレスチェック制度の義務化 概要, 経緯, 期待される効果と課題. 心と社会 2015; 46(1): 53-59.
188. 川上憲人. 【今後の産業精神保健の課題-近年の行政施策の動向をふまえて】 諸外国における職場のメンタルヘルス対策と提言. 精神医学 2015; 57(1): 49-54.
189. 浅井裕美, 今村幸太郎, 川上憲人. 国内外の産業医学に関する文献紹介 職場におけるパニック障害 頻度, 業務への影響, 対応上の課題. 産業医学ジャーナル 2015; 38(1): 102-106.
190. 島田恭子, 島津明人, 川上憲人. 未就学児を持つ共働き夫婦におけるワークホリズムとパートナーの精神的健康との関連 夫婦間コミュニケーションの媒介効果の検討. 行動医学研究 2016; 22: 076-084.
191. 五十嵐千代, 伊藤昭好, 上原正道, 梶原隆芳, 加藤 元, 川上憲人, 岸 玲子, 斉藤政彦, 柴田英治, 菅原 保, 中川秀昭, 橋本晴男, 久永直見, 廣 尚典, 松井春彦, 森口次郎, 矢野榮二, 和田耕治, 青山京子, 井奈波良一, 茅嶋康太郎, 近藤 祥, 原 俊之, 清治邦章, 立石清一郎, 田畑正司, 寺田勇人, 中平浩人, 錦戸典子, 服部 真, 宮川路子, 日本産業衛生学会政策法制度委員会. 中小企業・小規模事業場で働く人々の健康と安全を守るために 行政, 関係各機関, 各専門職に向けての提言. 産業衛生学雑誌 2017; 59 : A108-A120.
192. 今村幸太郎, 川上憲人. 最近の研究と実務への応用(第11回) 労働者を対象とした職場用双極性障害スクリーニング尺度の開発. 安全と健康 2017; 68: 1136-1138.
193. 今村幸太郎, 川上憲人. 【ストレスチェック制度-現状と課題】 ストレスチェック制度の1年目の現状と課題, 効果評価. 医学のあゆみ 2017; 263: 230-233.

194. 川上憲人. 産業現場におけるメンタルヘルス対策の新展開 ストレスチェック制度と不調者対応の接点を探るストレスチェック制度以後のメンタルヘルス不調の一次予防対策の展開. 産業ストレス研究 2017; 24: 335-336.
195. 川上憲人. 【新専門医制度をめぐって-制度創設の経緯から今後の展望まで】 産業保健からみた新専門医制度への期待とこれを実現する条件. 産業医学ジャーナル 2017; 40: 13-17.
196. 川上憲人. 【ストレスチェック制度-現状と課題】 ストレスチェック制度の特徴, 作成過程, 科学的根拠. 医学のあゆみ 2017; 263: 225-229.
197. 川上憲人, 三柴丈典, 渡辺洋一郎, 竹田 透. 【ストレスチェック制度-現状と課題】 ストレスチェック制度 課題と今後の展望. 医学のあゆみ 2017; 263: 218-224.
198. 田島佐登史, 今村幸太郎, 川上憲人. メンタルヘルス不調者の復職や就労継続に影響する上司の態度および行動に関する文献レビュー. 産業ストレス研究 2017; 24: 401-410.
199. 井上彰臣, 川上憲人, 島津明人, 堤明純. ストレスチェック制度 実施方法と制度導入に関する科学的根拠 ストレスチェック制度の効果評価 事業場調査から. ストレス科学 2018; 32: 235-246.
200. 駒瀬 優, 渡辺和広, 川上憲人. 国内外の産業医学に関する文献紹介 労働者を対象とした感謝法の効果 無作為化比較試験の系統的レビュー. 産業医学ジャーナル 2018; 41: 82-86.
201. 五十嵐千代, 伊藤昭好, 上原正道, 梶原隆芳, 加藤 元, 川上憲人, 岸 玲子, 斉藤政彦, 柴田英治, 菅原 保, 中川秀昭, 橋本晴男, 久永直見, 廣 尚典, 松井春彦, 森口次郎, 矢野栄二, 和田耕治, 荒木葉子, 彌富美奈子, 北原照代, 小橋 元, 品田佳世子, 塚田月美, 長井聡里, 錦谷まりこ, 野原理子, 原直人, 松浦真澄, 三木明子, 宮川宗之, 榎原 毅, 川上 剛, 公益社団法人日本産業衛生学会政策法制度委員会. 働く女性の健康確保を支援するために. 産業衛生学雑誌 2018; 60: A86-A114.
202. 今村幸太郎, 川上憲人. ストレスチェック制度 実施方法と制度導入に関する科学的根拠 ストレスチェック制度の効果評価 労働者インターネット調査から. ストレス科学 2018; 32: 229-234.
203. 今村幸太郎, 川上憲人. 【職域健康関連データに基づくエビデンスの構築】 産業ストレスに係る介入研究の知見から. 産業医学ジャーナル 2018; 41: 13-16.
204. 川上憲人. 職場のストレスチェック制度について. 最新医学 2018; 73: 1640-1646.
205. 川上憲人. 【職場のメンタルヘルス】 メンタルヘルス研究の課題 職場のメンタルヘルス研究の将来展望. 診断と治療 2018; 106: 639-644.
206. 津野香奈美, 川上憲人. 【推進!ハラスメント対策】 企業におけるさまざまなハラスメント問題. 安全と健康 2018; 69: 537-539.
207. 石川華子, 川上憲人. 【変わりゆくうつ病-診断と治療の現在-】 世界と日本のうつ病の疫学. 精神科治療学 2019; 34: 5-9.
208. 土肥誠太郎, 岡田邦夫, 川上憲人, 櫻井治彦, 東川麻子, 堀江正知, 山田誠二. 「産業医学のプリンシプル〜大切なこと」をめぐって. 産業医学ジャーナル 2019; 42: 21-32.
209. 土肥誠太郎, 岡田邦夫, 川上憲人, 櫻井治彦, 東川麻子, 堀江正知, 山田誠二. 「産業医学のプリンシプル〜大切なこと」をめぐって(第2回). 産業医学ジャーナル 2019; 42: 33-44.
210. 栗林一人, 今村幸太郎, 川上憲人. 国内外の産業医学に関する文献紹介 看護師におけるストレスマネジメント 認知行動療法に基づく介入研究レビュー. 産業医学ジャーナル 2019; 42: 97-101.
211. 佐々木那津, 川上憲人. 職場のメンタルヘルス ストレスチェック導入後の状況. 心と社会 2019; 50: 73-81.
212. 土肥誠太郎, 岡田邦夫, 川上憲人, 櫻井治彦, 東川麻子, 堀江正知, 山田誠二. 「産業医学のプリンシプル〜大切なこと」をめぐって(第3回). 産業医学ジャーナル 2019; 42: 41-51.
213. 川上憲人. 【ワーク・エンゲイジメントを活かした産業保健活動】 ワーク・エンゲイジメントが拓く新しい職場のメンタルヘルス対策. 産業保健 2019; 2125: 2-4.
214. 佐々木那津(東京大学 大学院医学系研究科精神保健学分野), 駒瀬優, 川上憲人. 【職場のメンタルヘルス】 ストレスチェック制度に関する最近の話題. 精神科 2019; 36: 278-282.
215. 堤 明純, 佐々木那津, 駒瀬 優, 渡辺和広, 井上彰臣, 今村幸太郎, 川上憲人. ストレスチェック制度の実施状況とその効果 システムティックレビュー. 産業医学レビュー 2019; 32(2): 65-81.
216. 川上憲人. 【日本型MPH教育の軌跡と展望-公衆衛生専門職を目指す!生かす!】 わが国のMPH教育校における教育の現状と課題. 公衆衛生 2020; 84: 698-706.
217. 飯田真子, 渡辺和広, 川上憲人. 国内外の産業医学に関する文献紹介 チーム・ジョブ・クラブティンクの関連要因に関する文献レビュー. 産業医学ジャーナル 2020; 43(4): 104-108.

218. 森 晃爾, 川上憲人. 日本産業衛生学会「100周年を見据えたミッションと重点活動事項」. 健康開発 2021; 25: 81-84.
219. 川上憲人. 【精神医療に関する疫学のトピック-記述疫学, リスク研究からコホート研究まで】日本における精神疾患の有病率に関する大規模疫学研究 成果とその意義. 精神医学 2021; 63: 427-436.
220. 佐々木那津, 川上憲人. 新型コロナウイルス感染症流行と労働者の精神健康 総説. 産業医学レビュー 2021; 34: 17-50.
221. 佐々木那津, 黒田玲子, 津野香奈美, 川上憲人. 【新型コロナウイルス感染症とメンタルヘルス】在宅勤務や変則勤務におけるメンタルヘルス対策 新型コロナウイルス感染症対策と従業員の健康・パフォーマンス. 産業精神保健 2021; 29: 36-40.
222. 川上憲人. ストレスチェック制度6年目の評価と課題. 産業医学ジャーナル 2021; 44 (6): 4-9.

著書・欧文

1. Kawakami N, Araki S, Haratani T. Assessment of indicators of work stress affecting psychosomatic and behavioral health. In Araki S, ed. Behavioral medicine: an integrated biobehavioral approach to health and illness. Amsterdam: Elsevier 1992; 165-172.
2. Ezoe S, Araki S, Ono Y, Kawakami N, Murata K. Psychiatric symptoms, work stress and personality traits in Japanese computer workers: A comparative study of the effects of age, school career and computer work. In Araki S, ed. Behavioral medicine: an integrated biobehavioral approach to health and illness. Amsterdam: Elsevier 1992; 181-188.
3. Kawakami N, Araki S, Haratani T, Hemmi T. Relations of work stress to alcohol use and drinking problems in male and female employees of a computer factory in Japan. In: Araki S, ed. Neurobehavioral methods and effects in occupational and environmental health. San Diego: Academic Press, 1994; 639-649.
4. Ezoe S, Araki S, Ono Y, Kawakami N, Murata K. Work stress in Japanese computer engineers: effects of computer work or bioeducational factors. In: Araki S, ed. Neurobehavioral methods and effects in occupational and environmental health. San Diego: Academic Press, 1994; 629-637.
5. Kawakami N, Kobayashi Y, Hashimoto H (eds.). Health and Social Disparity: Japan and Beyond. Melbourne: Trans Pacific Press, 2009.
6. Kawakami N, Takeshima T, Ono Y, Uda H, Nakane Y, Nakamura Y, Tachimori, H, Iwata N, Nakane H, Watanabe M, Naganuma Y, Furukawa TA, Hata Y, Kobayashi M, Miyake Y, Kikkawa T. Twelve-month prevalence, severity, and treatment of common mental disorders in communities in Japan: The World Mental Health Japan 2002-2004 Survey. In: Kessler RC, Ustun TB (eds). The WHO World Mental Health Surveys: Global Perspectives on the Epidemiology of Mental Disorders. New York (NY): Cambridge University Press, 2008; 474-485.
7. Ryff C, Boylan JM, Coe CL, Karasawa M, Kawakami N, Kitayama S, Kan C, Love GD, Levine C, Markus HR, Miyamoto Y, Nakahara J, Park J. Adult development in Japan and the United States: comparing theories and findings about growth, maturity, and well-being. In: Jensen LA (ed.) The Oxford Handbook of Human Development and Culture: An Interdisciplinary perspective. Oxford: Oxford University Press, 2015; 666-679.
8. Nock MK, Deming CA, Chiu WT, Hwang I, Angermeyer M, Borges G, Beautrais A, Viana MC, Karam EG, Kawakami N, Sampson N, Sudhakar TP, Kessler RC. Mental disorders, comorbidity, and suicidal behavior. In: Nock M, Borges G, Ono Y (eds.) Suicide: Global Perspectives from WHO World Mental Health Surveys. New York: Cambridge University Press, 2012; 148-163.
9. Kawakami N, Chiu WT, Chatterji S, de Graaf R, Marschinger H, LeBlanc W, Lee S, Kessler RC. Early-onset mental disorders and adult household income. In: J Alonso, S Chatterji, & Y He (Eds), The Burdens of Mental Disorders: Global Perspectives from the WHO World Mental Health Surveys. Cambridge, United Kingdom: Cambridge University Press, 2013; 110-121.
10. Ormel J, Petukhova MV, Chatterji S, Burger H, Haro JM, Kawakami N, Nock MK, Ustun TB. Disorder-specific disability and treatment of common mental and physical disorders. In: J Alonso, S Chatterji, & Y He (Eds), The Burdens of Mental Disorders: Global Perspectives from the WHO World Mental Health Surveys. Cambridge, United Kingdom: Cambridge University Press, 2013; 171-185.
11. Kawakami N, Shimazu A. Chapter 15: Mental health and wellbeing in Japan: social, cultural, and political determinants. In: Brunner E, Cable N, Iso H (Eds), Health in Japan - Social Epidemiology of Japan since the 1964 Tokyo Olympics. Oxford: Oxford University Press, 2020; 233-248.

著書・和文:

1. 森本兼曩, 川上憲人, 新野直明, 中村桂子, 小泉 明. 心身の健康. 東京: (財) 高齢者雇用促進開発協会: 1986: 1-30.

2. 川上憲人. 環境と精神衛生. 松原達哉, 宗内 敦編. 実践教職課程講座12 (精神衛生). 東京: 日本教育図書センター, 1987: 63-72.
3. 小泉 明監訳, 森本兼曩責任編集, 朝倉隆司, 今津 清, 今中雄一, 緒方 剛, 川上憲人, 近藤忠雄, 佐藤俊哉, 澤田晋一, 新村和哉, 田中慶司, 中村桂子, 新野直明, 原田美江子, 原谷隆史, 星 且二, 丸井英二, 三浦邦彦訳. プライマリ・ケア, 家庭および地域包括医療の実践—その理論的基盤. 東京: 医学書院サウンダース, 1987: 1-412. (Rakel RE. Textbook of Family Practice, 3rd ed. Philadelphia: WB Saunders Company 1984: 1-348)
4. 川上憲人, 小泉 明. 企業におけるメンタルヘルスのアセスメント. 上里一郎, 飯田 眞, 内山喜久雄, 小林重雄, 筒井末春監修. メンタルヘルスハンドブック. 京都: 同朋社, 1989: 505-515.
5. 川上憲人, 原谷隆史. 企業従業員におけるライフスタイルと抑うつ症状: 1年間の追跡調査. 森本兼曩編. ライフスタイルと健康—健康理論と実証研究. 東京: 医学書院, 1991: 188-196.
6. 川上憲人, 下光輝一, 岩根久夫. 仕事の要求度およびコントロール. 桃生寛和, 早野順一郎, 保坂 隆, 木村一博編. タイプA行動パターン. 東京: 星和書店, 1993: 197-203.
7. 川上憲人. 精神保健. 千葉百子, 中村 泉, 川名はつ子編. コンパクト公衆衛生学. 東京: 朝倉書店, 1994: 99-103.
8. 川上憲人. 精神保健と予防医学. 大野良之編. 公衆衛生・予防医学. 東京: 南山堂, 1996: 502-518.
9. 川上憲人. 従業員援助プログラム (EAP). 加藤正明監修, 産業精神保健学会編. 産業精神保健ハンドブック. 東京: 中山書店, 1998: 422-432.
10. 川上憲人. 産業保健分野. 多田羅浩三編. 新しい地域保健サービス. 東京: ぎょうせい, 1998: 271-301.
11. 川上憲人. 健康調査票. 石川高明, 妹尾 攝 (監), 高田 昂, 野見山一生 (編). 産業医活動マニュアル第3版. 東京: 医学書院, 1999: 108-112.
12. 川上憲人. 精神疾患の性差. 黒川 清, 松澤祐次 (編). 内科学 I. 東京: 文光堂, 1999: 117-119.
13. 川上憲人. 疫学的調査法. 松下正明, 浅井昌弘, 牛島定信, 倉知正佳, 小山 司, 中根允文, 三好功峰 (編). 精神医学研究方法. 東京: 中山書店 1999: 109-118.
14. 川上憲人. 第1章 職場の健康管理指導者のためのメンタルヘルスの基礎知識 (追補) ・「事業場における労働者の心の健康づくりのための指針」について—平成12年8月労働省発表—. 職場の健康管理指導者のためのメンタルヘルス研修マニュアル. 東京: 健康保険組合連合会, 2001; 16-25.
15. 川上憲人. 第1章 「事業場における労働者の心の健康づくりのための指針」の解説. 働く人の心の健康づくり—指針と解説—. 中央労働災害防止協会編, 東京: 中央労働災害防止協会, 2001; 7-54.
16. 川上憲人. 第2章 事業場の心の健康づくり計画とメンタルヘルスケアの進め方. 働く人の心の健康づくり—指針と解説—. 中央労働災害防止協会編, 東京: 中央労働災害防止協会, 2001; 55-88.
17. 川上憲人. 第1章 職場の健康管理指導者のためのメンタルヘルスの基礎知識 (追補) ・労働省の新しいストレス評価法. 職場の健康管理指導者のためのメンタルヘルス研修マニュアル. 東京: 健康保険組合連合会, 2001; 26-37.
18. 川上憲人. 第1章 職場の健康管理指導者のためのメンタルヘルスの基礎知識 (追補) ・心の健康づくりの計画と健康保険組合の役割. 職場の健康管理指導者のためのメンタルヘルス研修マニュアル. 東京: 健康保険組合連合会, 2001; 38-44.
19. 川上憲人. 第1章 職場の健康管理指導者のためのメンタルヘルスの基礎知識 (追補) ・管理監督者の教育法. 職場の健康管理指導者のためのメンタルヘルス研修マニュアル. 東京: 健康保険組合連合会, 2001; 45-53.
20. 川上憲人. 第2章 職場のメンタルヘルスの臨床・事業場外資源の紹介. 職場の健康管理指導者のためのメンタルヘルス研修マニュアル. 東京: 健康保険組合連合会, 2001; 117-126.
21. 川上憲人. 第3章 事例集・企業の健康管理指導の成功事例. 職場の健康管理指導者のためのメンタルヘルス研修マニュアル. 東京: 健康保険組合連合会, 2001; 156-162.
22. 川上憲人. 生活習慣病とメンタルヘルス. 生活習慣病予防マニュアル 改訂2版. 大野・柳川編, 東京: 南山堂, 2001; 164-169.
23. 川上憲人. 諸外国における職場の精神保健 精神保健福祉士養成講座 精神保健学. 青山英康, 川上憲人, 桑原治雄, 佐々木正美, 吉田健男, 東京: 中央法規, 2002; 257-266.
24. 川上憲人. 脳・心臓疾患予防とストレス対策 職場の健康管理指導者のためのメンタルヘルス研修マニュアル. 羽生田俊, 和田 攻, 高田 昂, 東京: 労働調査会, 2002; 102-110.

25. 川上憲人. 事業場におけるメンタルヘルスキアのすすめ方 メンタルヘルスキア実践ガイド. 岡田章, 川上憲人, 吉川武彦, 島 悟, 廣 尚典, 和田 攻, 鹿毛 明. 東京: 産業医学振興財団, 2002, 32-42.
26. 川上憲人. 生活習慣病とメンタルヘルス 生活習慣病予防マニュアル. 大野良之, 柳川 洋, 東京: 南山堂, 2002; 186-192.
27. 川上憲人. 公衆衛生学・予防医学と健康心理学 現代のエスプリ 健康心理学—拡大する社会的ニーズと領域. 島井哲志, 東京: 至文堂, 2002; 179-188.
28. 川上憲人. メンタルヘルスとは—職場におけるメンタルヘルス対策の進め方— 管理職のためのメンタルヘルスブック. 岡山: 岡山県教育委員会, 岡山県教育庁福利課, 2002; 3-11.
29. 川上憲人. 精神保健と心の働きの理解/ストレスと精神健康の破綻/精神の健康とは シンプル衛生公衆衛生学2003. 鈴木庄亮, 久道 茂, 東京: 南江堂, 2002; 287-295.
30. 川上憲人. メンタルヘルスキアの基本的考え方. 産業医の職務Q&A. 市堰英之, 梅忠洋一, 輿 重治, 庄司榮徳, 高田 昴, 中林圭一, 羽生田 俊, 堀江正知, 和田 攻, 東京: 産業医学振興財団, 2003; 172-173.
31. 川上憲人. 事業場における心の健康づくりのための指針. 産業医の職務Q&A. 市堰英之, 梅忠洋一, 輿 重治, 庄司榮徳, 高田 昴, 中林圭一, 羽生田 俊, 堀江正知, 和田 攻, 東京: 産業医学振興財団, 2003; 174-175.
32. 川上憲人. 精神保健福祉. コンパクト公衆衛生学 (第3版). 千葉百子, 川名はつ子, 小林廉毅, 東京: 朝倉書店, 2003; 96-101.
33. 川上憲人. 職場のメンタルヘルス. NEW予防医学・公衆衛生学. 岸 玲子, 古野純典, 大前和幸, 小泉昭夫, 東京: 南山堂, 2003; 251-255.
34. 川上憲人. 睡眠・休養, ストレス. 社会, 環境と健康. 田中平三, 辻一郎, 吉池信男, 大賀英史 (編), 東京: 南江堂, 2004; 146-151.
35. 川上憲人. 職場のストレスの評価方法. 心の病い—治療と予防の現在. 日本医師会 (監), 羽生田俊, 西島英利, 高田 昴 (編), 東京: 労働調査会, 2004; 76-87.
36. 川上憲人. 精神保健と心の働きの理解/ストレスと精神健康の破綻/精神の健康とは. シンプル衛生公衆衛生学2003. 鈴木庄亮, 久道 茂, 東京: 南江堂, 2004; 285-293.
37. 川上憲人. 健康科学. 臨床検査技術学3 公衆衛生学. 川上憲人, 甲田茂樹 (編), 東京: 医学書院, 2004; 38-43.
38. 川上憲人. 精神保健. 臨床検査技術学3 公衆衛生学. 川上憲人, 甲田茂樹 (編), 東京: 医学書院, 2004; 70-77.
39. 川上憲人. 生活習慣病とメンタルヘルス 生活習慣病予防マニュアル (改訂4版). 大野良之, 柳川洋, 東京: 南山堂, 2005; 198-205.
40. 野村総一郎, 高橋祥友, 川上憲人. 健康管理室で役立つところの医学. 東京: 南江堂, 2005.
41. 川上憲人, 橋本英樹, 小林廉毅 (編). 社会格差と健康—社会疫学からのアプローチ. 東京: 東大出版会, 2006.
42. 川上憲人, 篠崎典良, 島悟, 堀江正知. 働く人の心の健康の保持増進-新しい指針と解説. 東京: 中央労働災害防止協会, 2006
43. 川上憲人. 仕事のストレス判定図 (Job Stress Assessment Diagram). ストレススケールガイドブック.(財)パブリックヘルスリサーチセンター. 東京: 実務教育出版. 2006; 291-293.
44. 川上憲人:職場のメンタルヘルス. 岸玲子, 古野純典, 大前和幸, 小泉昭夫 (編).NEW予防医学・公衆衛生学—Nankodo's Essential Well-advanced Series. 東京: 南光堂, 2006: 270-274.
45. 川上憲人. 第2節 抑うつと職場のメンタルヘルス. 上里一郎 (監), 北村俊則 (編). シリーズここからだの処方箋 抑うつの現代的諸相—心理的・社会的側面から科学する—. 東京: ゆまに書房, 2006; 222-250.
46. 川上憲人, 堤 明純 (監修). 職場におけるメンタルヘルスの スペシャリストBOOK. 東京: 培風館; 2007.
47. 川上憲人: 第3章地域における自殺対策Q&A. 本橋 豊 (編著), 自殺対策ハンドブックQ&A—基本法の解説と効果的な連携の手法. 東京: ぎょうせい, 2007; 97-99.
48. 川上憲人: 第6章生活習慣の現状と対策 F.睡眠・休養, ストレス. 健康・栄養科学シリーズ社会・環境と健康(改訂第2版). 東京: 南光堂. 2008; 150-155.
49. 川上憲人. 第12章精神保健. 鈴木庄亮, 久道 茂 (監). シンプル公衆衛生学. 東京: 南光堂. 2008; 304-318.
50. 川上憲人, 木村美枝子: IV. 経過と転帰. 統合失調症治療ガイドライン第2版.監修 精神医学講座担当者会議. 佐藤光源, 丹羽真一, 井上新平 (編). 東京: 医学書院; 2008; 33-46.
51. 川上憲人. 12.精神保健福祉. コンパクト公衆衛生学[第4版], 千葉百子, 松浦賢長, 小林康毅編. 東京: 朝倉書店. 2008; 92-97.
52. 川上憲人. 職場のメンタルヘルス. NEW予防医学.公衆衛生学改訂第2版, 岸玲子, 古野純典, 大前和幸, 小泉昭夫 (編). 東京: 南光堂. 2008; 270-274.
53. 川上憲人. 職場不応症. 総編集 山口 徹, 北原光夫, 福井次矢; 2009 TODAY'S THERAPY 今日の治療指針 —私はこう治療している—. 東京: 医学書院. 2009; 760-761.
54. 川上憲人. 第4章精神保健活動の実際 第3節職場におけるメンタルヘルス. 新・精神保健福祉士養成講座2 精神保健学. 編集日本精神保健福祉士養成校協会. 東京: 中央法規出版; 2009; 219-228.
55. 川上憲人. 第6章諸外国における精神保健 第4節諸外国における職場の精神保健. 新・精神保健福祉士養成講座2 精神保健学. 編集日本精神保健福祉士養成校協会. 東京: 中央法規出版; 2009; 322-351.
56. 川上憲人: 第12章精神保健. 鈴木庄亮, 久道 茂 (監). シンプル公衆衛生学 2009. 東京. 南光堂. 2009; 299-318.
57. 川上憲人: 疫学研究. 日本社会精神医学会 (編) 社会精神医学. 東京: 医学書院. 2009; 123-136.
58. 川上憲人. 4メンタルヘルスキア 2.職場のメンタルヘルスはどのように進めれば良いでしょうか?. 櫻井治彦 (編). 産業医の職務Q&A第9版, 東京: 産業医学振興財団, 2009: 196- 198 .
59. 川上憲人. 4メンタルヘルスキア 1. メンタルヘルスキアの基本的考え方. 櫻井治彦 (編). 産業医の職務Q&A第9版,東京: 産業医学振興財団, 2009; 194-195.
60. 川上憲人. 1. 自殺の実態: 日本と世界の自殺. 高橋祥友, 竹島正 (編). 自殺予防の実際, 3-15, 永井書店, 2009. 3.川上憲人. 職場のメンタルヘルス対策と自殺. 秋田医学叢書No.1 ライブ総合自殺対策学講義. 編集本橋豊, 秋田: 秋田魁新報社. 2009; 226-252.
61. 川上憲人. 世界のうつ病, 日本のうつ病—疫学研究の現在—. 樋口輝彦 (編). 別冊・医学のあゆみ最新うつ病のすべて. 東京: 医歯薬出版. 2010; 42- 46.
62. 川上憲人. 第12章精神保健. シンプル公衆衛生学2010. 監修鈴木庄亮, 久道茂. 東京 :南光堂. 2010; 307-326.
63. 川上憲人. F睡眠・休養, ストレス. 健康・栄養科学シリーズ社会・環境と健康. 編集田中平三, 辻一郎, 東京: 南光堂, 2010; 155-161.
64. 土屋政雄, 川上憲人. III. 子どもの抑うつとその周辺 3. 抑うつの疫学 松本英夫, 傳田健三 責任編集 子どもの心の診療シリーズ 4巻 子どもの不安障害と抑うつ. 東京: 中山書店, 2010; 167-177.
65. 川上憲人. 第12章精神保健. シンプル公衆衛生学2011. 監修鈴木庄亮, 久道茂. 東京: 南光堂. 2011; 303-322.
66. 川上憲人. 10地域における心の病い—うつ病・自殺を中心に. 新訂心の健康と 病理. 編著者 齋藤高雅. 東京: 放送大学教育振興会. 2011; 143-157.
67. 川上憲人. 9働く人の心の健康と病理-職場の精神保健. 新訂心の健康と病理. 編著者 齋藤高雅. 東京: 放送大学教育振興会. 2011; 127-142.
68. 川上憲人. 12. 精神保健福祉. コンパクト公衆衛生学. 千葉百子, 松浦賢長, 小林康毅編. 東京: 朝倉書店. 2011; 92-97.
69. 川上憲人. F睡眠・休養, ストレス. 健康・栄養科学シリーズ社会・環境と健康. 編集田中平三, 辻一郎, 東京: 南光堂. 2011; 155-161.
70. 川上憲人. 職域における自殺対策. 精神保健福祉白書編集委員会 (編). 精神保健福祉2014年版. 東京: 中央法規出版, 2013; 34.
71. 川上憲人. 精神疾患の疫学, 頻度. 日本医師会 (編). 神経・精神疾患診療マニュアル. 東京: 南山堂, 2013 (日本医師会雑誌142 特別号(2)); S30-S31.
72. 川上憲人. 精神保健. 鈴木庄亮, 久道 茂 (監), 小山 洋, 辻 一郎 (編). シンプル衛生公衆衛生学 2014, 東京: 南山堂, 2014; 311-330.
73. 川上憲人. 4. メンタルヘルスキア Q98 事業場でメンタルヘルスキアを進める上で念頭におきべきポイントは何か. 産業医の職務Q&A編集委員会. 産業医の職務Q&A第10版, 東京: 産業医学振興財団, 2014; 204-206.

74. 川上憲人. 4. メンタルヘルスケア Q102 事業場のメンタルヘルス不調の第一次予防に関する現状と進め方について教えてください。産業医の職務Q&A編集委員会. 産業医の職務Q&A第10版, 東京: 産業医学振興財団, 2014; 210-213.
75. 川上憲人. 4. メンタルヘルスケア Q104 災害時等におけるPTSDなどへの対応はどのようにしたらよいでしょうか。産業医の職務Q&A編集委員会. 産業医の職務Q&A第10版, 東京: 産業医学振興財団, 2014; 215-217.
76. 川上憲人. 第5章F. 睡眠・休養, ストレス. 田中平三, 徳留信寛, 辻 一郎, 吉池信男. 社会・環境と健康 改訂第4版. 東京: 南光堂, 2014; 145-149.
77. 川上憲人. エビデンスに基づいたストレス対策. 丸山総一郎 (編). ストレス学ハンドブック. 東京: 創元社, 2015; 467-477.
78. 川上憲人, 島津明人, 守島基博, 北居 明. 健康いきいき職場づくり. 組織改革の処方箋. 東京: 生産性出版, 2014.
79. 川上憲人, 橋本英樹, 近藤尚己. 社会と健康: 健康格差解消に向けた統合科学的アプローチ. 東京: 東大出版会, 2015.
80. 川上憲人, 小林由佳 (編著). ポジティブメンタルヘルス: いきいき職場づくりへのアプローチ. 東京: 培風館, 2015.
81. 川上憲人. 第23章 思春期学と社会医学. 長谷川寿一 (監), 笠井清登, 藤井直敬, 福田正人, 長谷川眞理子 (編). 思春期学. :東京: 東大出版会, 2015; 330-342.
82. 川上憲人. 基礎からはじめる職場のメンタルヘルス—事例で学ぶ考え方と実践ポイント. 東京: 大修館書店, 2017.
83. 関屋裕希, 川上憲人, 堤 明純. 職場のラインケア研修マニュアル(CD付き): 管理職によるメンタルヘルス対策. 東京: 誠心書房, 2018.
84. 川上憲人. ここからはじめる働く人のポジティブメンタルヘルス. 東京: 大修館書店, 2019.
85. 医療情報科学研究所 (編), 泉 博之, 江口 尚, 大久保靖司, 岡田邦夫, 荻田香苗, 川上憲人, 北岡大介, 立石清一郎, 田中 完, 津野香奈美, 土肥誠太郎, 濱田篤郎, 廣 尚典, 堀江正知, 宮崎洋介, 明星敏彦, 森 晃爾, 山本健也 (監修). 職場の健康がみえる: 産業保健の基礎と健康経営. 東京: メディックメディア, 2019.
86. 今村幸太郎, 川上憲人. 第8章 インターネットサイトの利用1. 秋山 剛、大野 裕 (編著) これならできる 中小企業のメンタルヘルス・ガイドブック. 金剛出版: 東京, 2018; 161-173.
87. 川上憲人. 第5章 E睡眠・休養, ストレス. 国立研究開発法人 医薬基盤・健康・栄養研究所 (監修). 辻 一郎, 吉池信男 (編集). 社会・環境と健康改訂第6版. 東京: 南江堂, 2020; 158-163.
88. 医療情報科学研究所 (編), 安藤雄一, 石川雅俊, 今村知明, 大磯義一郎, 大嶽浩司, 岡本悦司, 尾崎米厚, 小澤 温, 尾島俊之, 兼板佳孝, 川上憲人, 小風 暁, 小橋 元, 須賀万智, 高宮有介, 竹鼻ゆかり, 西浦 博, 福永龍繁, 村上義孝, 安村誠司, 柳澤裕之, 山本秀樹, 横田裕行, 吉池信男 (監修). 公衆衛生がみえる 2020-2021. 東京: メディックメディア, 2020.
89. 川上憲人. 基礎からはじめる職場のメンタルヘルス 改訂版—事例で学ぶ考え方と実践ポイント. 東京: 大修館書店, 2021.
90. 下光輝一, 川上憲人. 第5章 職場環境等の把握と改善の方法. 中央労働災害防止協会編. 事業場内メンタルヘルス推進担当者 必携 改訂第5版. 東京: 中央労働災害防止協会, 2021; 83-103.

川上憲人先生のご退職にあたって

川上憲人先生のご退職を心よりお祝い申し上げます。川上先生は平成 18 年に本学医学系研究科精神保健学分野の教授に着任され、16 年間に亘って東京大学医学系研究科における研究と教育に貢献して来られました。川上先生の専門分野はメンタルヘルスで、地域住民や労働者を対象とした研究を精力的に展開され、またこの分野に携わる多くの若手を育成されました。そのような人材はアカデミアで活躍されるだけでなく、実務家としても多くの社会貢献をされていると伺っております。精神疾患は社会的負荷の大きい疾患であり、障害調整生命年 (DALY) といった指標においてもその上位 10 疾患の中で 5 つまでを占めることが報告されています。一方で精神疾患の頻度や要因など、その実態を科学的に調査研究することは難しく、精神保健福祉の具体化においてもハードルとなっています。精神保健疫学の国際調査としては世界精神保健調査 (WMH) が良く知られており、川上先生は WMH の日本調査である「こころの健康についての疫学調査」において主導的な役割を果たされました。また平成 27 年から毎年 1 回全ての労働者に対して実施することが義務付けられた、いわゆる「ストレスチェック」制度は、職場でのうつ病などのメンタルの問題を未然に防止する仕組みとして機能していますが、この制度の導入とその後の効果の検証においても川上先生は大きな役割を果たされました。この二つの事例は川上先生のご業績の一部であり、これ以外にも精神保健のフィールドにおいて長年に亘り活躍をされてきました。その業績により川上先生は平成 25 年に日本医師会医学賞、令和元年に厚生労働省大臣表彰、令和 2 年には紫綬褒章を受章しておられます。こうした多くの業績をお持ちの川上先生ですが、医学部内の会議などでお会いする先生はいつも温厚で物腰が柔らかく、その飾らないお人柄が印象に残っています。また川上先生は平成 25 年より医学系研究科の副研究科長を務められ、私も同じ副研究科長として 2 年間ご一緒させていただきました。川上先生は予算の調整や部局内の問題解決など、副研究科長の中でも一番難しい役割を分担されていましたが、そうした案件をいつもスピーディーかつバランスよく解決していかれる様子を拝見し、その判断力と実行力に感嘆しておりました。川上先生にとってはこうした仕事は精神保健の分野で鍛えた実務能力をもってすればたやすい仕事であったのかもしれませんが、川上先生がご退職後も日本の精神保健学の発展とその社会への実装にそのお力を発揮されることを願ってやみません。いつまでもお元気で活躍されることを祈念しております。



岡部 繁男

東京大学医学系研究科・医学部 研究科長・医学部長

川上先生ご退職に寄せて

川上憲人先生は、2006年に本学教授として着任され、翌2007年の公共健康医学専攻（専門職修士課程大学院）の開設に加われました。2013-18年度専攻長として専門職大学院の研究教育の国際的展開に大きく寄与され、ハーバードやハワイ、ハノイ大学など東西のリーディング教育機関との連携を深められました。精神医学に関する研究機関は国内に複数ありますが、Public Mental Healthを指向した研究分野は本邦では今日に至るまで極めて少なく、川上先生はわが国におけるPublic Mental Healthの研究・教育のみならず職場や地域における実践活動を牽引されてきました。

1984年の宇都宮病院事件をきっかけに1987年に精神衛生法から精神保健法へ法改正がなされた時代、精神疾患の状況を調査の対象とすること自体がタブー視される一方、精神疾患に対する偏見への対応が根拠となる数字もなく、イデオロギー的に議論されていました。個人的な話になりますが、そのような時代背景のなか、メンタルの問題を公衆衛生課題として可視化することを指向されていた川上先生（当時本学公衆衛生学講座の助手）のことは人づてながらうかがっていました。その後岡山大学にご赴任中、ひょんなことから客員教員としてお世話になることとなり、ご薫陶を仰ぐ機会をいただき、その後公共健康医学専攻の設置以降、ファカルティの一員としてご一緒させていただくことができたことは大きな喜びです。

川上先生はまた2009-2013年度新学術領域研究「社会格差と健康」の領域代表として、分野横断的な研究体制の構築に尽力され、その成果を「社会格差と健康；社会疫学からのアプローチ」（東大出版会）ならびに専攻教育プログラム「社会と健康IおよびII」として結実させ、パブリックヘルスのスピリットを公衆衛生の研究・実践を指向する学生諸君に系統的に伝えていく基盤を築かれました。これをさらに発展させ、健康を通じて社会を変える力を持った人材育成を継承していくことを以て、先生のご貢献に報いたいと思っています。ありがとうございます。

橋本 英樹

東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻 専攻長・
保健社会行動学分野 教授

川上先生、大変お世話になりました。

川上先生、長い間お世話になりました。私が東大に戻ってきた2012年から、早くも10年経ちました。この間に、さまざまな場面でお世話になったことを思い出します。

川上先生は、副研究科長として健康科学・看護学専攻をご担当くださいました。専攻で検討が必要な課題が生じたときに、相談窓口になってくださったのはまず先生でした。私どもにはよく見えていない大局から状況を把握し、ご助言くださったことに心より感謝申し上げます。

川上先生をはじめとする公共健康医学専攻の皆さんの運営は、健康科学・看護学専攻にとって大変勉強になりました。健康総合科学科をどのように発展させ、その上にどのように専攻を組み立ててゆくべきか、これからも検討が続くことと思います。看護 nursing と公衆衛生 public health が組み合わさった大学院の良さを最大限に活かしつつ、それぞれの発展も期待できるように、今後も検討を重ねたいと思います。

精神保健学・精神看護学分野の先生方の産業精神保健の研究内容は、これからもぜひ参考にさせていただきたいと思っています。私に関心を持っている、長期ケア long-term care の場で働くスタッフのウェルビーイングを検討する上では、職業性ストレスというネガティブな側面だけではなく、ワークエンゲージメントなどポジティブな側面も重要なポイントであり、先生方が開発されている支援方法を今後も学ばせていただきたいと思います。

最後になりますが、私が着任してほどなく、精神保健学・精神看護学分野の皆様のカラオケにお誘いいただいたことは、とてもうれしい驚きでした。当時幼い女の子を育てていた私の「アニソン歌唱力」を何かの折に評価してくださったことと思われまます。残念ながら1回しかお招きいただけなかったのは、やっぱりレパートリーと実力がなかったことがばれてしまったのですね。子どもたちもすっかり大きくなって、私は「懐メロアニソン」しか歌えなくなりましたが、コロナが落ち着いたら、もう一度お誘いいただける日もあるかもと、心ひそかに楽しみにしています。

人生100年時代、どうぞこれからもご活躍ください。先生の健康とご多幸を祈念しております。

山本 則子

東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻 専攻長・
高齢者在宅長期ケア看護学分野 教授



川上憲人先生ご退職に寄せて

川上先生に最初にお目にかかったのは2016年3月で、私の前任の北潔先生（現長崎大学）の最終講義の時のご挨拶だったと記憶しています。私は当時まだ東大の赴任前で、前職の感染研におり、川上先生を存じ上げておりませんでした。私の記憶が誤りでなければ、川上先生が最終講義でご挨拶をされました。そのご挨拶の中で、北先生の研究業績、社会インパクトから人柄に関してお話され、先生が異なる分野の友人教授のことを良く見ておられ、しかもとても暖かく理解されていることにとっても感銘を受けたのを覚えております。その後、2017年初夏に医学部3号館の同じフロアに私達が引っ越して来た際にも、よく言えば多様性に富み、悪く言えば騒々しく行儀の悪い私の大所帯の研究グループを暖かくお迎えくださり、心から感謝しております。毎年冬に行われた精神保健学・保健社会行動学・発達医科学・生物医化学の4つの教室を回遊しながら行われる4階全体の懇親パーティの企画も本当に楽しかったですね。普段は廊下ですれ違うだけの皆さんと、川上先生ご自慢のワインを飲みながらセリ鍋やお好み焼きをつついた団欒が忘れられません。2020年春に叙勲された紫綬褒章のお祝いの会もまだ開けずにいるのが残念でなりません。現在のパンデミックの収束と伴に是非また川上先生とワインを飲みながらお話ししたいです。

さて私儀で恐縮ですが、2021年4月から岡部繁男研究科長の元で副研究科長・副学部長を務めさせて頂いております。これもどういふご判断・お気持ちでご推挙頂いたのか判らないのですが、川上先生からご推薦いただいたと伺っています。川上先生ご自身は2015-2020年度の6年間もの長きにわたって副研究科長・副学部長として執行部の活動に参加されていました。私もまだ月日が浅いのですが、自分で経験してみても初めてご苦労が判りました。概算要求・予算・財務の調整、人事選考、ハラスメント案件への対応などいずれも大変な職責です。代議委員会や教授総会の構成員の揺るぎない信頼がないと3期6年にもわたって務まるお役目ではなく、研究科長、執行部、教授総会メンバーの先生への信頼がいかにか高かったか良く判ります。川上先生が東京大学と大学院医学系研究科のために丁寧なやっつけられたお仕事、先生のご姿勢に本当に頭が下がる思いです。本当にありがとうございました。またご苦労様でした。

川上先生は余人をもって代え難く、先生がいなくなった後の健康総合科学科・看護学科を思うと本当に寂しいのですが、退職後も先生の選ばれた道で益々活躍されることを祈念致しております。またワインご一緒させてください。



野崎 智義
東京大学大学院医学系研究科
国際保健学専攻 専攻長・
生物医化学分野 教授



コメントの仕方

川上先生とは学位論文の審査などでご一緒する機会が多くありました。私が准教授として東京大学に戻ってきて最初に苦労したのは、学生にとっては大変重要な学位審査会という場面でどうやって建設的で適切なコメントをするかということでした。審査会での先生方のコメントの仕方にはそれぞれ個性があり、感情を前面にだしてまくしたてる方、それほど関心のなさそうな様子で控えめなコメントをする先生もいらっしゃいました。そのなかで私が一番参考にさせていただいたのは、川上先生のコメントの仕方でした。切れ味よく鋭い質問をなさるのですが、話し方はおだやかで、学生がそれぞれにどのように対応するとよいかという教育的配慮もあり、審査会の雰囲気もよくなるのが印象的でした。今も、それほどできのよくない論文の審査を担当する際には、なるべく建設的なコメントをするために、川上先生のコメントのご様子を思い出すことがあります。平成25年からは、大学院医学系研究科副研究科長としての重責を担われました。大変な調整も多かったと推察しますが、いつもシャンとしたお姿で穏やかに仕事をすすめるお姿が印象的でした。今後とも、東京大学医学部、特に健康総合科学科における教育・研究活動にご指導・ご鞭撻いただけますと幸いです。僭越ではありますが、川上先生ご自身のさらなるご活躍を祈念しております。

梅崎 昌裕

東京大学医学部健康総合科学科 学科長・人類生態学分野 教授

これまでのリーダーシップに感謝して

職場におけるメンタルヘルス不調の発生が、特に話題になってきた1990年代から、メンタルヘルス対策に取り組む川上先生のことを存じていたのですが、直に接し、一緒に仕事をさせていただくことになったのは、2015年に日本産業衛生学会の総務担当理事になって以降です。川上先生は当時、副理事長で、2017年には理事長に就任された際、私を副理事長に指名いただき、計6年間、勉強させていただきました。学会は、運営を担う側も、サービスを受ける側も会費を支払った会員で構成されます。そのような本質を理解され、学会運営に関わる会員一人ひとりの意欲を引き出されていました。また、リーダーシップ行動は、周囲に影響を与える立場にあるすべて人に必要なものであり、学会の方針として、そのようなリーダーシップの育成をテーマに掲げられ、見事に学会をリードされました。

そのようなフラットなリーダーシップ行動は、川上先生が率いておられる研究室の雰囲気からも感じることができました。2013年から、年1回、東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻で講義をさせていただいていますが、私の希望を叶えていただき、講義終了後には研究室で鍋パーティを開催いただきました。立場に関係なく、メンバーそれぞれが互いを尊重し、とても生き生きとした雰囲気を感じることができました。お会いした皆さんが研究室を巣立ち、方々で活躍されている姿を見て、川上先生の指導者として素晴らしさを実感しています。

さらに、何かが発生した際の行動も迅速です。東日本大震災の際の地域支援やコロナ禍での労働者を対象としたオンライン調査など、社会で発生したことを、すべて“自分ごと”として捉えて取り組まれる姿に、いつも驚きを感じてきました。

そのような、様々な場面でリーダーシップを発揮されている川上先生が、2020年春の紫綬褒章を受章されました。公衆衛生分野の研究者の受章に、この分野の多くの研究者がパワーをいただくことができました。

川上先生には、すべての働く人が、生き生きと過ごせる職場づくりのために、引き続き、ご尽力いただきたいと思っています。今後のご健勝をお祈り申し上げます。



森 晃爾

(公社) 日本産業衛生学会 理事長・
産業医科大学産業生態科学研究所 教授



川上先生一卓越したバランス感覚の持ち主

大学のご退職にあたり、謹んでお祝い申し上げます。

先生が精神保健分野、産業衛生分野の研究を一貫してなされてこれ、一方で、わたくしは生活習慣病の研究を行ってきたことから、研究分野での直接的な接点はありませんでしたが、私が大学の教員になりたての頃から、大学院生、共同研究者を介して、あるいは原著論文を介して、先生のお名前を伺っていました。その後、先生は岡山大学、東京大学で研究を大きく展開するとともに教鞭を取られ、多くの実績を上げて来られたことは誰もが知るところです。わたくしは、精神保健は全くの素人でしたので、2011年から2017年にかけて大阪大学の医学部3年生の公衆衛生学の講義の中で、先生に精神保健の講義を担当いただきました。先生の日本の精神保健・医療に関する歴史的な俯瞰と現代・未来の課題に関して、医学生に語りかける講義に感銘を受けたことを覚えています。先生は、公衆衛生大学院プログラム校連絡会議の世話人として、全国の公衆衛生専門職大学院や大学院修士課程のプログラム担当者との情報交換等を通じて、MPHプログラムの質の向上に努められ、わたくしが実施責任者を務める大阪大学の修士課程プログラムにとっても大きな刺激となりました。また、今年から日本医学会連合の理事、労働環境検討委員会の委員長として活動を始められています。先生の人の声をじっくり聴き、卓越したバランス感覚で、研究や事業を進められる姿勢は、先生自身の素養と精神保健分野での研究を通じた涵養の結果ではないかと思われまます。退職後も様々な方面で活躍されることと思いますので、その中でご一緒させていただくことを楽しみにしております。



磯 博康

(一社) 日本公衆衛生学会 理事長・
大阪大学大学院医学系研究科社会医学講座公衆衛生学講座 教授

わが国の精神保健疫学を大きく進められたご貢献に 敬意を表して

川上先生は、地域住民および労働者の心の健康の実態を明らかにし、それを予防する方法を開発するなどの優れた業績を上げられ、わが国の精神保健分野の学術の発展に多大な貢献をされました。

現代社会において、心の健康は、身体的な健康と並んで健康の重要な側面の1つですが、その実態解明や効果的な対策に関する研究は立ち遅れていました。例えば、1990年代までの地域住民の精神保健の課題は、慢性の精神疾患の治療と社会復帰であり、地域住民のうつ病や不安障害などの実態は分かっていませんでした。また、労働者においては、1980年代から過労死など職業性ストレスによる健康問題が注目されるようになりましたが、わが国では、とくに、職業性ストレスの測定方法が確立されていなかったことから、その研究は遅れていました。川上先生は、これらの分野の研究を、わが国で大きく進められました。

ストレスの概念は、それを扱う学問領域でも多様ですが、とくに疫学分野では、調査票やインタビュー調査で把握される、調査対象による報告—いわゆるソフトな指標—で、多くの調査研究がなされています。私は、川上先生のご業績で強調すべき点の一つは、医学研究の中で、このソフトな指標が、一段も二段も低く見られていた時代に、ストレスのリスクを実証され、本領域の研究を大きく進められたところにあると考えています。現在でこそ、私たちは、一定の誤差を念頭に置きながら、対象者が報告する「ストレス」を把握し、仮説に基づいた検証を行うようになっています。また、臨床研究でもソフトアウトカムも重要性が認識されています。川上先生は、これらソフトな指標が、ほとんど顧慮されなかった「時代」に、当該研究分野を、まさしく切り開いてこられたと言っても過言ではありません。

川上先生は、2001年からこれまで日本ストレス学会の理事を務められ、2015年度から2020年度に日本産業ストレス学会の理事長を歴任されました。わが国のストレス研究を大きく進められ、国際的にも活躍された川上先生は、両学会の発展に計り知れない価値を付加されました。僭越ではありますが、日本産業ストレス学会および日本ストレス学会を代表して、両学会へのご貢献に御礼を申し上げますとともに、ご退職に当たってのお祝いの言葉とさせていただきます。



堤 明純

日本産業ストレス学会 理事長・日本ストレス学会 理事

川上先生の退職に際して

川上先生、教授退職おめでとうございます。このところ、同じ年代の先生方が次々に退職される中で、また一つの大きな区切りを実感します。

私自身、川上先生とは2歳違いの同年代となりますが、がん疫学と精神保健とは関係性が薄かったようで、若い頃の接点はあまりなかったように記憶しています。川上先生には、日本疫学会に関しては2004年から計8年間理事を担当していただいておりますが、私が理事になったのが2011年なので、ここでもすれ違いに近かったようです。むしろ、私が国立がん研究センターから大阪大学に移り、日本疫学会の理事長を担当してからのほうが、接点が多くありました。医学会連合やAMEDなど、社会医学系の学会の理事長が集まる会合では、日本産業衛生学会理事長として、常に幅広い知識と深い洞察に基づく発言をされ、学会の理事長のあるべき像を示されていたと思います。川上先生の経歴を拝見すると、ずっと大学と係わられてきているのに対して、私は阪大医学部卒業以来、9年前に阪大に戻るまで一切大学とは無関係に過ごしてきたため、大学・大学院教育や人材育成の面での知識や経験が極めて貧弱なのですが、公衆衛生大学院プログラム校連絡会議の会合などでの川上先生の活動を拝見していると、ここでも教授のあるべき姿を示されていて、勉強させられることばかりでした。それでいて、皆様ご存知の通りですが、気さくな低姿勢の物言いをされるので、周囲の方々から信頼され尊敬される存在であったことは想像に難くありません。あと、阪大に異動してから環境医学教室で代々引き継がれている産業医を担当することになって（それまで全く産業医とは縁もゆかりもなかったですが）、ストレスチェックなるものの実施者になり、集団分析を行う立場になって、川上先生の業績を再確認することになりました。

わが国の精神保健領域でのトップリーダーとして長年活躍され、また、大学で人材の育成に尽力された功績は、我が国の社会医学系の中でも卓越したものであり、我が国の社会医学のサイエンスとしての立ち位置を高める多大な貢献をされてきたことに、改めて敬意を表したいと思います。まだまだ余力を残されていると思いますので、退職後も引き続きよろしく申し上げます。



祖父江 友孝

(一社)日本疫学会 理事長・
大阪大学大学院医学系研究科環境医学 教授
国立がん研究センターがん対策研究所 副所長

川上憲人教授ご退任にあたって

このたび定年退職を迎えられるとのこと、誠におめでとうございます。

日本産業精神保健学会は、前身は産業精神保健研究会(1989年発足)であり、その後、1992年に設立準備会が開かれ、1993年7月10日に発足しました。また、2016年4月1日より一般社団法人・日本産業精神保健学会として法人化しました。川上憲人教授は、法人化する前から理事としてご指導いただき、現在も理事としてご指導して頂いております。

個人的には、川上憲人教授が、岐阜大学医学部助教授時代に私が非常勤で勤務していた東京の某企業のメンタルヘルスの職員研修で講演された時の印象が今でも強く残っております。わかりやすく、説得力のある、そして聴衆を引き込んでしまう魅力ある講演をされたのが思いだされます。また2013年9月11日および10月13日の日本産業衛生学会&日本学術会議MHWGでの意見交換に関しても同教授が中心となって、第一次予防と第三次予防の推進、メンタルヘルスを支援する専門職の人材確保、これからの行政施策のあり方を踏まえて、職場のメンタルヘルスを推進するための社会的留意点、職場のメンタルヘルスに関する研究の推進等から、日本産業衛生学会&日本学術会議「職場のメンタルヘルス提言」骨子を作成されたことは記憶に新しく、意見交換の場でも同教授の穏やかで周囲を幅広い観点からまとめる力には感銘しました。また、学内でも現場の担当者向け研修である「東京大学職場のメンタルヘルス専門家養成プログラム」(TOMH)は産業保健スタッフや人事労務担当者が職場のメンタルヘルスの技術を体系的に学ぶ同プログラムは産業界に大きな貢献を与えたことと思います。

日本産業精神保健学会でも同様に理事会、代議員会でも学会運営や学術的な問題に適切な発言・ご指導を受けたことは、感謝の念に堪えません。精神保健学の研究、教育、実践が大きく発展する中で、「公衆衛生の精神保健」(Public Mental Health)として教室運営をされてきたことに改めて深い敬意を表し、川上憲人教授が退職後も我々をご指導いただき、さらに産業精神保健学がさらに発展することに寄与・貢献されることを期待しております。

今後益々のご活躍と御家族皆様のご健勝を祈念申し上げます。



黒木 宣夫

(一社)日本産業精神保健学会 理事長・東邦大学 名誉教授

川上憲人教授のご退職に寄せて

このたびは無事のご退職、誠におめでとうございます。平素より若々しく、精力的でいらっしゃるのもうご退職なのかとびっくりいたしました。

私と川上先生の出会いは、労働省の委託研究で実施されていた職業性ストレスに関する研究班に遡るのではないかと思います。私は、当時、東京医科大学の大学院生で、前任の下光輝一主任教授に付き添う形で、研究班のお手伝い(といっても事務的なお手伝いですが)をさせていただいていました。当時、発表にはOHPを使うことがあり、川上先生が発表される傍らで先生のOHPの交換をさせていただいた記憶があります。なぜその場面をよく覚えているのかというと、まだお若い川上先生が大きな課題を任されて、堂々と発表されている姿に、憧れとまぶしさを感じたためではないかと思います。

私は「身体活動」を専門にしているため、職業性ストレスは門外漢ですが、川上先生の研究の進め方はとても参考になるものでした。他分野から学ぶことは時としてとても刺激的で新しい研究のきっかけにもなります。この実感は、ストレス研究から学んだ私の経験に由来しています。先生の最近の研究からも多くを学んでいます。研究のための研究ではなく、実践に生きる研究を実施して、政策や情報発信、ツールへと展開するご業績は素晴らしく、川上先生は少しでも近づきたい存在でいらっしゃいます。普段このようなことをお伝えすることはありませんが、この場をお借りしてお伝えし、感謝の意を表したいと思います。こういった川上先生の素晴らしいご業績の結果だと思いますが、職業性ストレス研究における日本のプレゼンスは世界的にも非常に高いという印象を持っています。

私は現在、日本行動医学会の理事長を務めていますが、川上先生は設立時よりこの学会の中心的存在で、国際行動医学会の理事長も務められました。上記の研究班以外では日本行動医学会が私と川上先生の接点となっています。この学会活動を通して感じることは、川上先生がいかに素晴らしい人材を育ててこられたかということです。理事長に就任後、学会活動を支える各種委員会の委員長を任命させていただきましたが、気が付くと川上先生の門下生が多数を占めており、実際の学会活動でもこれらの先生方のお世話になりっぱなしです。

退任後もストレス研究の第一人者としてご活躍されることと存じます。引き続きのご指導を賜りましたら幸いです。



井上 茂

日本行動医学会 理事長・東京医科大学公衆衛生学分野 主任教授

川上先生とご一緒できた幸運

川上先生、東京大学での長年にわたるお勤め、お疲れさまでした。我が国の精神保健学、産業保健学を先導されてこられた先生の多大なご貢献に尊敬と感謝でいっぱいです。

川上先生と初めてお会いしたのは、私が労働衛生課長になったばかりで、産業衛生学会の理事長であった川上先生が労働衛生課へご挨拶に来られた時でした。大学病院での勤務を辞して厚生労働省に入省後たかだか5年足らずだった私は、今となっては恥ずかしい限りですが、川上先生のことを存じ上げず、また、産業保健という領域についてもほとんど分かっていませんでした。その後、川上先生を始めとする学会や関係する方々との関わりが続いていく中で、産業保健が人と社会との関わりや働き方については生き方とも関係する、スコープの広くて深い領域なのだという感覚が徐々に掴めてきたように思います。川上先生には、行政の関係する研修班や検討会で中心的な役割を担っていただきました。お仲間に入れてもいただきました「健康いきいき職場づくり」の検討会では、川上先生はメンバーのひとりひとりに意見を求め、ひとつひとつの意見を自然な穏やかさで受け取っては、込み入った議論にスッと軸を通すようなコメントを沿えて進行され、知識・経験の浅い私の、まとまりのない発言についても正面から受けとめていただきました。先生ご執筆の原稿を事前に読ませていただく機会もありました。知識も経験も乏しい私の意見など、しばしばまとまりを欠く思い付きに過ぎなかったり、的外れであったりしたに違いないにも関わらず、変わらぬ穏やかな表情で真摯に対応してくださいました。川上先生とご一緒する度に、先生はどのような場面、相手でもそれぞれの様々な立場を大事にされる、自然にそのような態度がとれる方なのだ。広いスコープと人との関わりに対する洞察、産業精神保健の理念を体現している方なのだと感じました。そのような川上先生とお仕事でご一緒できたことは、視野の狭い、経験の浅い私にはとくに大きな幸運だったとしか言いようがありません。この度、川上先生がご退職されるのは私には心細い限りですが、大学から離れられた後も、より自由なお立場になって、これまで以上にご活躍されるに違いない。そしていつかまた、今より多少進歩した私が今と変わらぬ川上先生とご一緒できれば。そんな機会を想像し、今から期待に胸をふくらませています。



高倉 俊二

厚生労働省労働基準局安全衛生部労働衛生課 課長



川上教授のご退職に寄せて

このたびは、川上教授の定年ご退職のお話をお伺いし、一筆御礼を申し上げたく存じます。これまでのご活躍に深く敬意を表しますと共に、ご在任中に賜りましたご厚情とご指導に、こころより深く感謝いたしております。

私は、光栄なことに、2008年から2010年まで、精神・障害保健課の課長補佐として在籍していた時期に加え、その他の担当をしていた時期にも、川上教授にご指導いただく機会を得ることができました。その際、特に、川上教授には、大きく2つの分野で大変お世話になりました。

まず、精神疾患の疫学調査に関しては、国内の第一人者として様々な研究にご参画いただき、ご指導を賜りました。厚生労働科学研究「こころの健康についての疫学調査に関する研究」をはじめ、様々な精神疾患の疫学調査や、東日本大震災後のこころの健康に関する調査研究などにおいて、ご業績が残されており、精神保健に関する政策立案や、国際比較、震災後の被災者支援などに活用されてきました。

また、原爆被爆者援護の分野では、原爆投下後に降った黒い雨の地域の方々の健康影響に関する相談事業の検討に御参画いただき、ご指導を賜りました。難しい課題でしたが、常に温かくお導きいただいたことを大変有り難く感じております。

このほか、私個人として思い出深いのは、川上教授のお計らいで、小職を公衆衛生大学院の講義に呼んでいただいたことです。精神保健分野の政策や、国の政策決定プロセス等について、教授や学生の方々と、活発なディスカッションをすることができました。

川上教授は公衆衛生大学院での人材育成に精力的に取り組み、卒業生には、厚生労働省のスタッフとして活躍されている方もいます。今後は、川上教授のご指導を受けた若手の人材が、教授の後を継いで、我が国の公衆衛生や精神保健をリードして行かれることを信じております。

末筆になりましたが、これまでのご指導に改めて感謝申し上げますとともに、川上教授の今後のご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げます。



林 修一郎

厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部精神・障害保健課 課長

川上先生の思い出

川上先生、これまで日本のメンタルヘルス研究を引っ張ってきて下さりまして、どうも有難うございました。そしてお疲れさまでございました。川上先生は、公衆衛生視点でメンタルヘルス研究と実践を牽引され、公衆衛生×メンタルヘルスを軸にキャリアパスを模索していた私にとっていつも目標となる存在でした。川上先生の思い出はいくつもありますが、2つのキャリアステージから思い出をご紹介します。

ひとつは、福島原発事故後のメンタルヘルスに関する研究事業です。この川上先生が主宰する研究班に私は研究者として参加させて頂きました。東日本大震災後の地域住民の疫学調査にはいくつか関与していたのですが、この研究班は被災された方の精神保健の疫学調査とその支援者のスキル向上を目指した介入研究で構成されており、私は後者を担当しました。研究期間の途中で、私は次に述べる研究行政の領域で働くことになり、この研究は優秀な後輩たちに任せて、私自身の関わりは中途半端になってしまいました。しかし、研究班を通じて、疫学調査で科学的にデータを検証しつつ、現場で活用できるプログラム開発するという両面での研究は、日本の災害精神保健ではなかなか取組まれて来なかったのが、大変心強く思いました。また、川上先生は直接疫学調査を担当されていたのですが、統括に留まらず、率先して現地へ赴き、調査対象の関係者と直接言葉を交わし、調査結果を現場の活動に活かせるようフィードバックする研究姿勢がとても印象に残っています。

もう一つは、実装研究の取り組みです。私は現在、研究費配分側で働いており、国際的な研究動向を見つつ、研究事業を作る仕事をしています。その中で、実装科学、つまりエビデンスのある介入を科学的に社会実装し検証する取り組み、を日本でも普及するように、慢性疾患国際アライアンス (Global Alliance for Chronic Diseases:GACD) と協調した研究事業を担当していました。そこで、日本でも実装科学の研究コミュニティを広げるために、GACD の関係者による実装研究ワークショップを日本で開催しました。当時、川上先生は AMED 研究でベトナムにおける産業精神保健の研究を実施していました。川上先生は、日本におけるこの領域のインフルエンサーとして、ワークショップのファシリテーションや実装科学コミュニティ（保健医療福祉における普及と実装科学研究会：RADISH）の構築、研究会の開催など精力的にご尽力されました。GACD の活動としては一年に一回、GACD と連携して研究を行う世界中の研究者の会合があり、分野横断的に実装研究を促進するための議論が進められました。国際的な話し合いの場では、多様な意見がぶつかり、議論は拡散しがちですが、そのような場でも川上先生は自然と議論を引っ張っていらっしゃり、日本人としてとても頼もしく思いました。会合期間中、サンパウロでお食事を一緒にしたのも楽しい思い出として残っています。

川上先生には、まだまだ精神保健の牽引役として期待されることも多いと思いますが、ぜひ大所高所から精神保健の研究、実践を導いて下さいますようお願い申し上げます。そして、先生のご健康を祈念しております。

鈴木 友理子

国立研究開発法人日本医療研究開発機構
医療機器・ヘルスケア事業部ヘルスケア研究開発課 課長



感謝を込めて：災害研究から実装まで

川上先生、御退職を迎えられるにあたり、これまでのご厚情に感謝申し上げますとともに、パブリックメンタルヘルスの領域におけるこれまでのご業績に改めて祝意を申し上げます。

私は公衆衛生が専門ではありませんが、川上先生とは折に触れ、ご一緒させて頂く機会がありました。個人的に親しくお話しをさせて頂いたのは、岡山大学時代に講演に呼んで頂いたときです。ちょうど WMH 調査の面接データを集めておられる時でしたが、そのチームの方々ともお目にかかり、世界的な研究を非常にくつろいだ雰囲気と和気藹々と実施されている姿が印象的でした。空港まで車で送迎をして頂き、帰り道では時間があるから接待しましょう、とお寿司までご馳走になり、非常に楽しい岡山の思い出を頂いたことをよく覚えております。東京大学に移られてからは、災害と精神保健に関する研究班に何度も加わって頂き、災害という情緒が先行しやすい領域の研究を着実な手法によって牽引され、貴重な足跡を残されました。特に、災害時における自記式尺度の妥当性が平常時とは異なることや、PTSD の受診相談率が 1 割にも満たず、うつ病と比べて格段に低いことは、世界的にも先例のない重要な知見であり、その後の災害時の精神保健医療対応や PTSD 対策の基本指針を策定する上で、大きな助けとなりました。また原爆の被ばく体験者のメンタルヘルス調査でもご一緒させて頂き、特に広島で行われた調査データの検討では毅然としたリーダーシップで取りまとめに当たられました。私たちは 311 震災以来、WHO と協調して災害時の心理的応急処置 (PFA) を日本に導入し、普及に努めておりますが、川上先生の教室の方々にも非常に助けて頂き、お陰様で日本は PFA の普及にもっとも成功した国であると WHO の報告書にも記されております。近年では実装普及研究でもご一緒し、この新しい分野を日本に「実装」する上で多くのご指導を頂いております。人的交流でも、川上先生の御教室の方とは幅広い交流をさせて頂いております。連携大学院制度も始まり、また当研究所出身の西先生が准教授となり、さらに当研究所の公共精神健康医療研究部長にクロスアポイントで就任されるなど、私どもの研究所全体としても、先生との交流は非常に大きな支えとなってきました。

今後、自由なお立場に立たれ、更に力強く活躍の場を広げ、私たちをご指導頂きます様、御願い申し上げます。

金 吉晴

国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 所長

川上憲人教授退職記念集へのお祝いメッセージ

この3月で定年をお迎えになられること、誠におめでとうございます。

東大の精神保健学教室と公衆衛生学教室は以前より、当研究所とのつながりがございました。私の親友の一人である中田光紀先生は前身の産業医学総合研究所に研究員として入られました。平成10年度頃からは、荒記俊一先生の当研究所所長・理事長就任がありました。また、労働安全衛生研究の次世代のあり方を探る協議会では、「メンタルヘルスと産業ストレス」について、川上教授に指揮を執っていただきました。その後、同じく親友の一人である島津明人先生が御教室に入られてからも、海外ゲストによる講演会などにお誘いいただき、知的な刺激を与えていただきました。

なかでも、川上教授が領域代表者となられた平成21～25年度文部科学省科学研究費新学術領域研究（研究領域提案型）「現代社会の階層化の機構理解と格差の制御：社会科学と健康科学の融合」に参加させていただいたのは、素晴らしい経験となりました。具体的には、計画研究A01「多目的共有パネル調査」の職域パネル調査に連携研究者としての関与でしたが、班会議、毎月の定例研究交流会シンポジウム、国際シンポジウムなどでは、各領域の専門家から最新のデータや知見が示され、他では得られない勉強の場になりました。

この職域パネル調査の一環として、職場の一体感（Workplace Social Capital）と睡眠との関連を検証させていただきました。その結果、職場の一体感が高いほど、携帯型活動量計で測定した睡眠の客観的な量と質は良好であったという知見が得られました。多くのご助力により、この成果を欧州睡眠学会の専門誌に論文発表（#）できたことは、私にとって特に忘れがたい思い出となっております。

このほか、公共健康医学専攻精神保健学Ⅱにて、労働者の睡眠とメンタルヘルスに関する講義や、医学部医学科公衆衛生学実習として、睡眠のセルフケア研修のお手伝いもさせていただきました。当研究所では学生と議論できる機会はほぼありませんので、フレッシュで魅力的な発言や活動に対して、いつも感銘を受けることができました。

以上のような知的作業の後にはほぼ必ず、加●屋さんなど本郷三丁目界隈の銘居酒屋に連れて行っていただきました。他の参加者も含めて、とても良いクールダウンとリフレッシュの時間となりました。今年4月からのお仕事でも生活でも、さらに充実したものになるよう、心より祈っております。これまでのご指導、本当にありがとうございました。今後とも、どうぞよろしく願いいたします。

#Takahashi M, Tsutsumi A, Kurioka S, Inoue A, Shimazu A, Kosugi Y, Kawakami N. Occupational and socioeconomic differences in actigraphically measured sleep. J Sleep Res. 2014;23(4):458-62.

高橋 正也

独立行政法人労働者健康安全機構労働安全衛生総合研究所
過労死等防止調査研究センター センター長
社会労働衛生研究グループ 部長



いくつかの感謝のことば

川上憲人教授の退職記念集に寄せて、まずは16年間余にわたり、東京大学精神衛生・看護学教室をご主宰いただき、教室の発展に大きくご貢献いただき、この度定年退職されることに、心からの慰労とお祝いを申し上げたいと思います。また教室の同窓生の一人として、さらには前教室主任栗田廣教授が主宰した教室の助教授として、栗田教授ご退職後、川上先生に対して教室の引き継ぎをさせて頂いた立場からも、心からの感謝のことばを贈らせて頂きたいと思います。

川上先生に対する関係者の皆さま方の感謝は多岐にわたると思いますが、特に私の立場からは、大学院生など教室員の教育・研究指導にご尽力を頂き教室のさらなる発展を導いて頂いたこと、そして同窓生を常に大切に頂き、同窓生のネットワーク形成を強化していただいたことに対して、心から感謝を申し上げたいと思います。

栗田前教授が2005年3月にご退職になり、川上教授が同年10月に前任の岡山大学との兼任教授として第6代教室主任にご就任されました。翌2006年4月に兼任が解けて東京大学が本務になるまでの1年間、私は、微力ながら教室の引き継ぎをさせて頂く役割を担いました。また折しも、教室50周年が間近に迫っていたこともあり、2006年度早々には、50周年記念事業を翌年度に行うことを川上教授がお決めになり、記念事業準備委員会を発足させました。日本社会事業大学に異動していた大島は、準備委員会委員長を仰せつかり、翌年の記念事業開催と記念誌の発行に向けて、川上教授新体制の皆さまと各年代の同窓生が一体となって、当教室の50年を振り返り、これから50年を展望する活動をご一緒させて頂くという、掛け替えのない機会を持たせて頂きました。

川上教授とは記念事業までを含めると、約2年間にわたる長い引き継ぎ期間を持たせて頂いたようにも感じています。何より川上先生は、教室の歴史・伝統と同窓生の思いを常に大切に頂き、教室と同窓生の発展の上に、ご自身の教育・研究方針を上乗せされて、教室をさらに大きく発展に導いて頂いたと思っています。

川上教授在職10余年目に当たる教室60周年を祝うシンポジウムや、その後の同窓会企画の中では、若い同窓生の皆さんが、社会的にも重要なポストに就き、澁刺とご発表される姿には深い感銘を覚えました。

改めまして、川上先生の当教室と同窓会に対する思いと、教室発展へのご貢献に心からの感謝とお礼を申し上げます。長年にわたり本当にありがとうございました。そしてお疲れさまでございました。

大島 巖

東京大学精神衛生・看護学教室同窓会 幹事
東北福祉大学 副学長 教授
日本社会事業大学 名誉教授

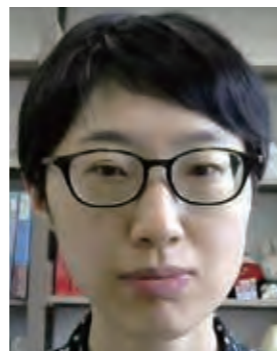
OG より OB になられることをお祝い申し上げます

定年退職を迎えられること、誠におめでとうございます。

16年間大変お疲れ様でした。私は川上先生が着任される1年前、栗田廣前教授が退職されるのと同じ年に博士課程を卒業し、川上先生に初めてお会いしたときから教室OGという立場でした。廊下でたまたま顔を合わせて、川上先生の方からご挨拶いただいたと記憶しています。同じ場面に当時の保健社会学の山崎喜比古先生も居合わせて、急に山崎先生が川上先生に私のことを紹介し始めたので、私の方が驚きました。しかし川上先生は動じることなく、栗田先生のお名前も出して、おおらかに対応していただいたことが印象に残っています。その後も、前の教授の院生があまり出入りすると気分を悪くされないかと最初のうち気にしていましたが、川上先生には全くそういった感じがなく、いつでも明るく迎えてくださいました。私は今年4月から初めて教員になってみて、以前からいる教員や学生との距離感を今もはかりながら毎日を過ごしており、今になって川上先生に感謝の念を新たにする次第です。

私は卒業後は、同窓会の監事という立場で関わらせていただき、ある年には企画をひとつ任せていただいたこともありました。教員の宮本先生と連名でしたので心強くもありましたが、自分がやっていいのか逡巡する気持ちも一方ではありました。その同窓会企画が終わった後、別の日に川上先生と顔を合わせたとき、思いがけず言葉をかけていただきました。そのことが自分でも意外なほど嬉しかったことを覚えています。はらはらしながらも強く口は出さずに見守ってくださったのだなと思いました。

教授として研究室の研究を推進したり、海外との交流を広げたり、論文などの研究業績を飛躍的にのばしたり、といったことについては他の方からきつと言及があるでしょうから、私はちょっと別の方面で思い出を語らせていただきました。本当はOGとしてもっと教室の研究にも貢献していけると良かったのですが、近年は認知症介護の方に軸足があり、なかなか先生方や学生の皆様のテーマに貢献する機会がなく申し訳なかったです。そのように畑違いなOGに対しても、広く受け入れる姿勢で接し続けていただいたことを、改めて御礼申し上げます。今後は川上先生もOBとなられるので、少し仲間が増えるような気持ちで嬉しいです。そして川上先生の新しい生活もきっと充実したものになると確信しております。



中西 三春

東京大学精神衛生・看護学教室同窓会 幹事
東北大学大学院医学系研究科精神看護学分野 准教授

精神保健と研究倫理

川上先生ご退任おめでとうございます。川上先生には感謝申し上げたいことがたくさんございますが、一つに絞って御礼申し上げたいと思います。それは、東京大学医学部の精神保健学領域における研究の倫理の質を大変向上させていただいたことです。

私は、川上先生がご着任される以前から、長く医学部倫理委員会の委員長を務めさせていただいておりました（実は今でも委員長です）。2000年初めのころの倫理委員会にあがってくる研究倫理審査申請書は、大変不十分で、研究倫理を研究者が理解しているか疑わしいものが多くありました。

川上先生の教室は、研究活動が活発で、それは何を意味するかと申し上げれば、倫理委員会に研究審査を提出する申請書が必然的に多くなる、ということでありました。精神保健学分野の領域では、患者さんの大変機微な情報を扱い、また精神科領域の患者さんという、社会的に弱い立場のかたが研究参加者（被験者）になることが多いのが現状かと思います。そのような研究において、いかに研究倫理が重要か、川上先生におかれましては十分な研究倫理についてのご理解を賜り、ご自身の研究室からの申請書にいろいろとご指導いただきました。それらのご尽力のおかげをもちまして、今となつては、（精神保健学に限らず）倫理委員会に提出される申請書は、大変完成度が高いものになりました。

これからも、精神保健学領域の学問の発展のみならず、この難しい領域の研究倫理教育にも引き続きご尽力いただきますようお願いいたしますとともに、ますますのご発展を祈念しまして、感謝の言葉に代えさせていただきたいと存じます。



赤林 朗

東京大学医学系研究科医療倫理学分野 教授

御礼

川上憲人先生、このたびはつつがなくご退職の日を迎えられましたことを心よりお慶び申し上げます。

川上先生が教授になられ、今日に至るまで精神保健学研究の第一人者として名を馳せておられ、特に国内のみならず海外との国際共同研究も盛んに行われ、最近ではAIを用いた精神保健への介入手法は画期的で、研究者の中で知らないものはいません。先生が残された業績は、有形、無形に偉大なものとして後世に引き継がれていくことと存じます。

医学部内では専攻長や医学部執行部での副研究科長など歴任され、川上先生を真近に見て、お人柄にふれ、教えを頂くことができました。教えていただいたことは数え切れず、本当に感謝してもしきれない思いがございます。

今回退職されるにあたり、私はまだまだ先生に教えていただきたいことが沢山あるような気がしてなりません。名残りはつきませんが、どうぞご自重、ご自愛くださいまして、先生のご多幸をお祈り申し上げます。

長い間本当にありがとうございました。



小山 博史

東京大学医学系研究科臨床情報工学分野 教授

川上憲人先生のご退職に際しまして

川上憲人先生、長きにわたりまして、東京大学医学部の精神保健学教室を率い、発展されましたことに、厚く御礼申し上げます。

川上先生は、日本の産業精神保健学を格段に発展させるとともに、WHO との連携により、日本における精神疾患の疫学エビデンスの創出等に多大な貢献をされました。また、新学術領域という大型研究費の領域代表を務められ、社会階層が健康に与える影響、social determinants of mental health の重要性を日本にもたらしめました。こうしたご貢献により、東日本大震災や COVID-19 などの災害等が健康や精神保健にもたらす影響について、日本においても疫学や公衆衛生学者がエビデンスを出す土壌が作られました。

私自身も、東京ティーンコホートという思春期のコホート研究の立ち上げと運営にかかわってまいりましたが、川上先生のご指導がなければ、決して進めることはできませんでした。また川上先生は、多数の精神医学教室の出身者に対しても、親身なご指導を賜り、おかげさまで少しずつ当教室でも精神保健疫学や社会精神医学の研究を進められる人材が育ってまいりました。

また、川上先生は、私が担当してまいりました、医学部学生支援室、課題解決型高度医療人材養成プログラム (TICPOC)、本年度から設立いたしました医学のダイバーシティ教育研究センターなどにおいても、構想の段階から運営に至るまで、副研究科長として多大なご指導、ご支援を賜りました。

川上先生はこのように大変おらかで、いつもおだやかで、飾らないお人柄により、多様な人材を包摂するリーダーとしての資質をすべて兼ね備えていらっしゃる方で、私にとっては決して追いつけません、理想像として尊敬申し上げてきました。精神看護学教室の宮本有紀先生にもお世話になりっぱなしなのですが、川上先生のご人徳に甘えて、こうした厚かましい行動の数々も温かくお許しただけしているのではないかと感じております。

川上先生のご退職は、私にとっては大きなショックではございますが、10年以上にわたり、領域の近い教室の者としてご指導いただけたことは、一回性の人生のうえで、かけがえのない財産となりました。

いったんのご退職とはいえ、引き続きほとぼるエネルギーで、日本の精神保健・精神医学領域をお導きいただけますよう、今後ともお願いを申し上げまして、私の感謝の言葉とさせていただきます。



笠井 清登

東京大学大学院医学系研究科精神医学分野 教授

看護学へのご貢献に感謝！

川上先生、ともに滞りなく定年退職を迎えられることを大変嬉しく思います。

この2020年からのコロナ禍で先生とは直接お話する機会もなかったので、わたくしは、どうしてもお礼を申し上げたいことがあり、この文に託しました。

東大医学系研究科は日々進化していくと常に思っております。それは将来構想委員会が白熱したディスカッションを何度も繰り返して構想を練り上げていく、そんな風土が根付いていたからでしょう。同じ健康総合科学科、健康科学・看護学専攻の所属ではございましたが、精神保健学と老年看護学では接点が少なかったため、先生と頻回にお会いできたのは、学部や大学院における将来構想委員会だったと思います。その結果、学科においては健康総合科学科への名称変更と3専修制度の導入を実施し、看護においてはグローバルナースングリサーチセンター（GNRC）が設置されました。これにより日本初の看護学のポストドコースでナースサイエンティストの養成が東大始まりとなりました。

GNRCの設置に関する是非議論は多々ありましたが、この過程の中で、川上先生は、日本の看護系大学の現状を鑑み、東大における看護学の必要性を実に適切に主張してくださいました。このとき「歴史が動いたと思った瞬間」があります。それは医学部からの概算要求を本部に出すときの順位付けの会議でした。その会議で、GNRCの計画が1位にノミネートされました。川上先生の「看護大学が急増する中（当時250）、研究論文が非常に少なく日本の看護研究は危機的状況であり、看護における研究者養成は急務」とのご意見は、すべての委員が納得するロジカルなご説明でした。おかげさまで、その後GNRCは5年間の時限付き事業から、2021年度より基幹事業としても予算化されました。川上先生のあの発言がなかったら、IFが1を切っていた日本看護科学学会の英文誌であるJapan Journal of Nursing ScienceのIFもたったの2年で1.418（2020）にはならなかったでしょう。GNRCが日本の若手研究者を鼓舞することができたことに、心から御礼を申しあげます。

時々、オフィシャルでない、ある委員会のbeautifulな飲み会を定期的に行っていたのですが、コロナ禍で止まったままですね。先生と真田の定年の時に解散会をすることになっていますが、いつになることやら？

でも、いつか必ずと思い、すでにシャンパンは確保していますからお忘れなくお願いいたします。先生なら、この写真がどこか、きっと思い出してくださいと期待しています。



真田 弘美

東京大学大学院医学系研究科老年看護学／
創傷看護学分野 教授
グローバルナースングリサーチセンター センター長



川上先生のご退任に寄せて

教授ご退任にあたり、心よりお祝いを申し上げます。

長年にわたり、ご厚情とご指導をいただきまして、誠にありがとうございました。

論文審査や入試、会議など様々な場面での川上先生の深い洞察力や見識に基づく的確なコメントやご意見にはいつもハッとさせられるものがありました。しばらく経ってから、こういうことだったのか、と改めてご発言の意図やその先見性を理解することもあり、自分に見えていなかったとことの多さに気づかされることもありました。当教室員の論文審査でも数多く査読をしていただきましたが、修士論文審査の討論の際の質疑やコメントは穏やかで柔らかい口調であるのに、内容はとても鋭く的確で、学生のみならず、教室員皆が緊張して講評を伺ったことは今でも強く印象に残っています。医学系研究科・医学部の副研究科長・副医学部長を務められている際には、専攻全体のみならず、個別の案件に対しても早急に丁寧に相談にのってくださり、適切なご助言をいただいたことも大変有り難く思っております。

またベトナムでのスマートフォンを用いた教育介入の普及と実装（D&I）研究プロジェクトの申請の際にもお声かけいただきましたことも大変刺激的で貴重な機会となり、よい学びになりました。申請の手続きは大変でしたが、D&I研究って何？というところから最終選考審査に至るまで、貴重なご示唆と励ましを頂きました。看護学も助産学も実践科学であるため、臨床課題の解決に向けて、この経験を生かして近い将来にD&I研究を計画・実行したいと考えています。

令和2年春の紫綬褒章のご受章のお祝いを直接お会いした時に改めて申し上げたいと思いつつ、オンラインが続いて、今に至っています。直接お会いしてゆっくりお話しをさせていただく機会を心待ちにしております。

これまで本当にお世話になりました。して下さった一つ一つのことに感謝申し上げ、川上先生のますますのご発展とご多幸をお祈り申し上げます。

春名 めぐみ

東京大学大学院医学系研究科母性看護学・助産学分野 教授



川上憲人先生ご定年によせて

川上憲人先生に初めてお会いしたのは1988年、私が東京大学総合文化研究科広域科学専攻博士2年のときである。修士論文を活字にした「ソフトウェア開発作業における精神的負荷の分析」(労働科学、63巻7号、351-359、1987)の論文を、川上先生が主催する「職場の精神衛生を考える若手研究者の会」(以下若手の会)で発表してほしいというのが依頼であった。当時の私は科学技術の社会への影響を労働者の作業形態の側面から分析していた。作業分析の側面から職場のメンタルヘルスを考えることは、労働科学研究所で行われていた方法論の1つであった。一方で若手の会のほうは、企業のメンタルヘルスを担当する精神科医、カウンセラーの集まりであった。研究会では実際に精神面に影響のたつ労働者のケースカンファレンス等も行われており、私にとっては大変参考になった。同時に「精神負荷」というときの精神と、精神衛生というときの精神とでかなり様相が異なることも実感した。川上先生は私の論文を見たとき、「これこそが若手の会に欠けている大事な視点」と考え、声をかけたとのことだ。川上先生はこのように、研究分野の発展の先を読み、適材を適所に配置する高い能力をもつ。同時に、各成員の自尊心をサポートし、先へいくために励ましの言葉をかける才能をもつ。おそらく、川上研の維持・発展のために、これらの能力は大きく寄与したのではないかと推察する。

私自身の上記研究は、ソフトウェア技術者の職業性ストレスのテーマで博士論文になり、産業衛生学会や国際産業衛生会議(ICOH)で発表をしたので、1993年のニース、1996年ストックホルムの会議で川上先生とご一緒させていただいた。若き日の懐かしい思い出である。その後私は、1996年に東大助手から科学技術庁科学技術政策研究所への異動に伴い、「科学技術の社会への影響を労働者の作業形態の側面から分析」するにとどまらず、「科学技術の社会への影響を人文社会科学の方法論を使って分析」する分野であるSTS(科学技術社会論)のほうに軸足を置くようになった。2000年に東大に戻るときにはSTSの専門家として助教授として着任したので、産業衛生学のほうからは遠ざかってしまった。川上先生はその後、2018年から4年間日本産業衛生学会の理事長も務められ、紫綬褒章も受賞されたと聞いている。私自身、2002年に創立した科学技術社会論学会会長を4年務めたが、たった500人の学会の学会長でさえ心労が多いのに、会員8000人を超える学会の理事長はさぞや大変であつたらうと拝察申し上げる。岐阜大学、岡山大学をへて東大に戻られてから、川上先生は産業衛生の分野での若手をたくさん育てあげ、世界のメンタルヘルス研究者と共同研究を行い、この分野の発展に貢献されたと聞いている。おそらくそのご活躍の原点の1つである若手の会での討論を若き日に共有させていただいたことに感謝するとともに、産業衛生の分野に多くの寄与をされて定年を迎える川上先生に多くの祝福をお送りしたいと思う。ご定年、おめでとうございます。

藤垣 裕子

東京大学大学院総合文化研究科 教授



クアラルンプールと本郷の串焼き屋

栗田先生にご指導を頂き博士課程を修了した後、初めて川上先生にお声をかけて頂いたのは、アメリカで勤務し始めたばかりの頃でした。日本のポストへの転職に興味があるかとお問い合わせを頂き、新天地に到着して間もない頃でしたので、大いに迷ったことを覚えています。一時は日本に帰ることを決心したものの、結局その案件自体がなくなり、そのまま10年近くニューヨークで暮らしました。

今、日本では持続可能な開発目標(SDGs)が話題ですが、当時はその前身ミレニアム開発目標(MDGs)の時代でした。保健分野では、小児死亡、妊産婦保健、HIV等の感染症対策が優先とされ、当時の国連では、精神保健や精神障害について議論されることは殆どありませんでした。これを変えるためのSDGs起草過程における大切な時期、川上先生には大きなお力をお貸し頂きました。中でも、国際地域保健教室ご出身で、当教室のメンバーでもある国連マレーシア事務所の堤敦朗先生と共に、国連初の精神保健専門家会議をクアラルンプールで共催して下さった時のことが印象に残っています。教室からは宮本有紀先生、梅田先生、窪田先生、宮本かりん先生、WHOから瀬戸屋先生も参加して下さいました。この時の成果文書は、各国の国連代表部を通して世界を駆け巡り、SDGsに精神保健を組み込む土台の一つになりました。

クアラルンプールでは、川上先生がオールドタウンにぐいぐいと分け入り見つけて下さった食堂でローカル・フードをご一緒させて頂いたことを懐かしく思い出します。また、私が日本に帰国する度に、今はなき本郷の小さな串焼き屋さんで日本酒と季節のお料理をいつもご馳走して下さい、国際精神保健に関心を持つ若手の皆様と交流する機会を下さりました。

また、その頃から、国際精神保健ウェルビーイングパートナーシップを通して、内外のゲストを迎える勉強会を立ち上げて下さり、教室にも国際精神保健に関心がある学生が増えるようになりました。コロナ禍もあり、世界中が精神保健に注目するようになった今、当時の秘密の作戦会議の日々が遠く、懐かしく感じられます。今では、教室関係者が多く関わったSDGsのもと、先生のもとで教室を巣立った仲間たちが世界中の現場で国際精神保健をめぐる実践を続け、また、飯山さんを始め新しい世代のホープも活躍しています。



川上先生、16年間に渡り、温かくご指導を頂き、心からありがとうございました。今後とも、ご指導をよろしくお願い致します。

井筒 節

東京大学教養学部・
総合文化研究科教養教育高度化機構 特任准教授

尊敬と感謝を込めて

このたびは、ご退職おめでとうございます。川上先生のこれまでの多大なご功績とご貢献に心からの敬意を表し、感謝を申し上げます。

川上先生が取り組んでこられた、健康でいきいきと働くことができる職場づくりは、看護職にとっても最重要課題であり、川上先生や研究室の皆さまの活動や発表からいつも多くを学ばせていただきました。折々に研究活動に声をかけてくださり、貴重な学びの機会をいただいたことにも深く感謝しております。

印象に残っているものの一つに、着任して間もない時期に演者として参加する機会をいただいた「いきいき職場づくりセミナー」があります。東京大学大学院医学系研究科精神保健学分野と公益財団法人日本生産性本部が協同して設立した「健康いきいき職場づくりフォーラム」の定例セミナーで、企業の経営層や人事部門、産業保健、労働組合など様々な立場の方々が研究者とともに事例を紹介し、学び、活発に意見交換していました。現場の実践知がギュッと詰まった発表からは、たくさんの刺激とヒントをいただきました。そして、持続可能な形で協働の場をつくり、多くの企業の参加を実現し、研究で得た知見を実際に人々が働く職場に普及させ、職場を変え、組織の活力を生み出す力に転換していることに感銘を受けました。研究者としての活動の在り方を教えていただいたように思いました。2020年度からは川上先生が研究代表者を務めていらっしゃる「COVID-19 流行後のアジアの看護師のストレスマネジメントに関する国際共同研究」の共同研究者に加えていただき、国際共同研究をどのように進めていくのかを垣間見る機会をいただきました。また、私にとって初めての博士後期課程大学院生の学位審査で主査を務めてくださった際は、最後まで丁寧にご指導くださいました。本質を突く的確なコメントの数々に、大学院生本人と「勉強になるね～」と何度も感謝したものです。

このように、研究者として発展途上の私にとって、川上先生と間近に接し、学ぶ機会をいただけたことは、本当に幸せなことでした。教え子ならぬ「学び子」として、川上先生から学んだことを少しでも今後の研究活動につなげてきたいと思えます。

川上先生がいつまでもお元気でますますご活躍なされることを心よりお祈り申し上げます。



武村 雪絵

東京大学大学院医学系研究科看護管理学／看護体系・機能学分野 准教授

座右の銘と学生への一言から学んだこと

川上憲人先生のご退職にあたり、お礼の言葉を述べさせていただく機会に感謝申し上げます。

川上先生がご着任されたことはまだ大学院生で、先生の教室から発表される修士論文の質の高さにいつも感銘を受けていました。その後教員になり、学科での活動や、教育を考えるアンオフィシャルな会合を通して、先生の人となりを知るにつれ、この明るさと行動力はどこから出てくるのだろうといつも尊敬しつつも不思議でございました。しかし、学科ホームページがリニューアルされたところに川上先生の座右の銘と学生への一言が掲載され、それを見て合点がきました。「なりたいたいものになるよね」を常に考え、「自分がやりたいことを明確にして戦略を立てれば大抵のことは実現します。」の精神でこれまで行動なさっていました。もう学生ではありませんでしたが、この言葉は今でも時折思い出して、自身の行動を振り返り、修正する際の道しるべとなっています。座右の銘にちなみ、カラオケでアニソン縛りにて盛り上がったことは本当に良い思い出です。

先生は、いらっしゃるだけでその場が明るくなる、とても魅力的な先生でいらっしゃいます。そしていつも理路整然と本質をとらえるご発言で議論を進められ、学科、専攻の運営にご尽力くださいました。若手からみて、このように議論を進めていくのだということ背中を見せて教えてもらいましたことは大変貴重な経験となりました。精神保健学、職場のメンタルヘルスの専門性を実社会で発揮される様から、周囲で働かせていただきながらたくさんものを学ぶことができました。このような貴重な経験ができたことは自分にとって大きな財産となっています。先生が残された、介入研究までやり遂げる、成果をグローバルに発信する、そして仲間を大切にする、という文化はこの学科、専攻においてこれからも深く根付いていくことと思えます。

長い間本当にありがとうございました。川上先生から、「仲上先生はアサーティブですね」と言われたことを今でも覚えております。自分では思いもしていなかったことでしたが、ふとした一言で自信をつけさせてくださる、そんな先生に、改めて感謝申し上げます。これからもオフィシャル、アンオフィシャル、様々な機会を引き続きご指導いただけますと嬉しいです。今後益々のご健勝と末永いご多幸を心よりお祈り申し上げます。



仲上 豪二郎

東京大学大学院医学系研究科老年看護学／創傷看護学分野 准教授

有難うございます

大変お世話になっております。いつも気さくに話しかけてくださった先生がご退職されるにあたり、とても寂しく感じております。

SPHの面接では、先生が受験生の個性を引き出すような質問をされていたのがとても印象に残っております。先生のご質問の一つ一つに、受験生がこれまでやってきたことが今後どのような形で発展していくのか、どのように社会に還元されていくのか、という問いかけがあるのを感じ、大変勉強になりました。緊張感が高まる面接であるにもかかわらず、毎回とても楽しみにしており、「今回はどのような展開をされるのか？」とわくわくしておりました。単なる入試に留まらず、人生の節目における一つの発表会のようにも感じられました。

公衆衛生の領域は、一人でできることは本当に限られており、政策を講じたり、集団を動かしたりしながら進めていく必要があると日々、感じております。川上先生の相手に寄り添われる姿勢と、柔らかな語り口に接する度に、周りの共感を得られなければ達成できないことが多々ある中、忍耐をもって取り組んでいらっしゃることを感じ、見習ってまいりたいと決意を新たにしております。

COVID-19のパンデミックによって世界は大きく変わりました。移動が制限されて不便さを実感する一方で、必ずしも対面でなくてもかなりの部分は用が足りる、というのは新たな発見でした。そうはいっても、対面でなければ伝わらないものもあり、海外との行き来もままならず、格段に機能が充実してきたとはいえ、画面が止まったり、音声が悪くなったりする不便さを完全には排除できず、ちょっとした違和感が蓄積していく毎日です。先生はどのように感じられているのでしょうか。退職されて、少しお時間に余裕ができるようでしたら、この辺りのことを、ぜひ、伺いたいです。ゆったりとした口調で、どんなお話をされるのか、今から楽しみにしております。

末筆ながら、どうぞご自愛のほど、お祈り申し上げます。

脇 嘉代

東京大学大学院医学系研究科医療情報学分野 准教授

密かに心酔していた川上先生という人格

面と向かって言うことは、どう考えても恥ずかしいですし、また、これまでこれといったチャンスもありませんでしたので、これまでわたしがおくびにも出さなかった、秘めたる思いがわたしの心にあります。

正直、わたしは川上先生という人格に心酔していました。先生が初めてわたしの心をわし掴みになされたのは、たしかおそらくSPHの新入生歓迎会の日だったとおもいます。川上先生は、こうご挨拶なされました。「公衆衛生というのは、みんなを一挙にハッピーにするものです。公衆衛生というのは、なんと自分にぴったりで、まさに天職だとおもいました」。そのあまりにも率直な表現に、また、一直線ともおもえる公衆衛生とその教育機関たるSPHへの愛にわたしは打たれました。かようなまでの率直な表現が真実を宿しており、「ほんもの」を目にした戦慄すら感じさせられました。それと同時に、なんだかすこし羨ましくなりました。

次にわたしの心が掴まれたのは、たしか健康総合科学科の教員の懇親会のときでした。ご挨拶に立たれた川上先生はこうおっしゃいました。「まず、みなさん、挨拶をしましょう」。あまりの直球に、わたしは正直、びっくりしました。ちょっとよそよそしく遠慮しがちな日常を反省し、それからわたしは、学内で積極的に挨拶をしようと、これまで実践して参りました。

わたしの知る川上先生は、常に皆に繊細すぎるほどにお気を遣われ、ときにおおいに皆を励まし、もちろんときに学問的に誠実なアドバイスをおおくりくださる。川上先生のようなリーダーはほかにいらっしゃらないと思います。

このたび、川上先生が長きに渡ってお勤めくださった東京大学の教授をご退任なさるにあたり、わたしは心からの感謝と尊敬の気持ちを率直に申し上げたいと思います。これまで、本当にありがとうございました。これからも、どうか先生のお人柄に学ばせてください。

中澤 栄輔

東京大学大学院医学系研究科医療倫理学分野 講師



川上先生のご定年を祝って

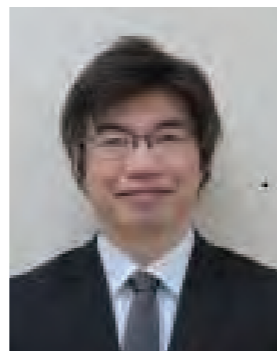
川上先生のご業績に敬意をもってお祝い申し上げます。おめでとうございます！

私は、川上先生が着任される直前に博士号を取得しまして、しばらくの期間を川上先生のもとで客員研究員として在籍しておりました。川上先生がご着任されてからのゼミにも何度か参加して、自分自身の研究活動のことをプレゼンテーションする機会をいただきました。川上先生からの鋭い質問に応答する経験をもたらえることは、早くからアカデミックポストに就いた自分にはとても重要な鍛錬の場でした。この時の経験は、現在の大学院の運営に活かしています。

川上先生のご着任からすぐのころに、私は、職場のメンタルヘルスに関する研究活動にも論文の抄読などを通じて参加する機会をいただきました。Job Demand-Resource モデルなどの職場のメンタルヘルスに関する基盤概念を知る機会をもったことで、概念を整理して測定可能にし、事業化して人々の健康増進に寄与するまでの過程を知る機会となりました。これらの論文を抄読したのは約15年前のことで、この経験が職場のメンタルヘルスに関する理解を早めることになりました。私は2010年から2015年まで岩手県盛岡市にある精神科病院の管理職としてデイケアとアウトリーチの運営を統括することになったのですが、職場のメンタルヘルスに関する概念整理がされていたことで職員のマネジメントがしやすかったですし、2011年に発生した東日本大震災後の東北地方での公的職員のメンタルヘルス支援に職場のメンタルヘルスに関する概念を活かすことができました。

私は2015年から大学に籍を戻していますが、今でも職場のメンタルヘルスに関する概念整理の経験が生きています。というのは、職場のメンタルヘルスに関する概念整理を通じて私が獲得したことは、心理的安全性の構築といった抽象的に見えやすい目標にも具体的な手立ての積み重ねが有効であるということでした。この、手立ての積み重ねを実感したことは、その後の私に大きな影響を与えています。私は、最近の数年間でイタリアやルーマニアの精神保健学の研究者の方々との交流を持っており、精神保健に関する地域包括ケアシステムや自殺予防に関する意見交換を行っています。特にルーマニアの研究者の方々とは、大学間交流協定をつくるまでに至っており、私の重要な連携先となっています。このような海外の研究者の方々との交流でも、メールの応答や会議の設定などの具体的な手立ての積み重ねによって交流基盤がつけられました。抽象的に見える目標や課題であっても、具体的な手立てを積み重ねることが有効という経験を人生の後半に入る前に得たことは、私の財産です。

ご定年までの先生のご業績を拝見できる幸運に感謝しております。ありがとうございました。これからも、先生から学ばせていただきます。



安保 寛明
山形県立保健医療大学 教授

川上先生へお礼の言葉

川上先生が東大を後にする日が来ました。いつも若々しくて、キレッキレの川上先生には、「退職」という言葉が不似合いな気がします。おそらく先生は、いつものようなワクワクした軽い足取りで、新しいご活躍の場へと歩いて行かれるのだらうな、と想像しています。本当におめでとうございます。

私は、川上先生に初めてお会いした時のことを、今日のことのように、よく覚えています。公共健康医学の面接試験で、面倒くさそうに座っている教授陣の中、ただ1人、私に質問をしてくれました。救世主のように見えました。この衝撃的な出会いが、私の人生を大きく変える扉だったとは、夢見がちな私は気づきませんでした。

私が思う川上先生は、頭脳明晰で、現場と人を育てることが大好きな公衆衛生のエキスパートです。クールな印象もありますが、それは柔らかい心と少年のような好奇心をカモフラージュするためのテクニックなのかもしれません。今、自分が教えたり、プロジェクトをハンドルしたりする立場となり、「川上先生のようにやろう」としている私に気づくことがあります。結局、同じようにはできないのですが。そんな時には、自分が川上先生から学ばせてもらったことの大きさと、先生の懐の深さに沈黙してしまいます。「修了したら、指導教官から学んだことを一旦白紙に戻せ」という名言がありますが、私はまだ、川上先生から学んだことがたくさん描かれたキャンパスを握って、白紙にしようと水をかけてみたり、擦ってみたりしている段階です。川上先生から学んだことを土壌に、自分の仕事を花開かせるまで、もう少し試行錯誤しようと思います。

川上先生、長い間ありがとうございました。精神の教室があたたかい家族のような雰囲気だったことは、私の人生の宝物です。大所帯の院生、たくさんの大きなプロジェクトを抱えて、ご苦労も、喜びも、他人が計り知れないほどの大きさだったのではないのでしょうか。東京大学を退職されても、まだまだ社会から大きな役割を期待されることとは思いますが、お気に入りの海外で羽を伸ばしたり、気の置けない仲間と一緒に好きなことをしたりして、人生の新しい展開を楽しめますように！また、お会いできることを楽しみにしています。



梅田 麻希
兵庫県立大学地域ケア開発研究所 教授

川上先生との10年間

川上先生と初めてお会いしたのは、2008年に野見山哲生先生のお招きで、松本市で講演をされた時でした。その時に、野見山先生のお取り計らいでご挨拶をさせていただいたのですが、その時には、川上先生が名刺を切らしていらして、後日、郵送で名刺を送っていただきました。その後、2010年には社会格差と健康の研究班のYoungの会の草津での合宿に参加させていただき色々とお話を伺えたことがきっかけで、当時勤務していた事業所がJ-HOPEのサイトとして参加していただくことになりました。さらに、2011年からは、当時社会人大学院生として在籍をしていた信州大学大学院の社会人大学院生の立場で、特別研究学生として川上研究室に1年間席をいただき、学位論文の作成のご指導をいただきましたし、TOMH研究会のメンバーに加えていただくきっかけをいただきました。無事に学位論文を書き上げて、特別研究学生の期間を終了するときに川上先生から「良く頑張られましたね」という言葉をいただけたことが、一生忘れることのできない思い出です。

恐らく、川上先生との出会いなくしては、今、産業医科大学で仕事をしていることもなかったと思います。川上先生とは多くの時間を共有させていただき、大学人として多くのことを学ばせていただきました。勝手に「恩師」とさせていただいている(笑)川上先生が、理事長をされているときに、日本産業衛生学会の奨励賞を受賞できたことは本当に感慨深く、思い出の一枚とさせていただきます。

今、産業精神保健学研究室という研究室でお仕事をさせていただいておりますが、まだまだ職場のメンタルヘルスの専門家としては半人前です。今後ともご指導、ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願いいたします。



江口 尚

産業医科大学産業生態科学研究所産業精神保健学研究室 教授



先生の背中を追って

私が川上先生に初めて出会ったのは、先生が岡山大学に教授として赴任された2000年7月でした。当時大学院生だった私は研究のやり方もよく分からずもがき、そして大学院修了後にどのようなキャリアをたどるべきか見えない状態でした。そんな中で先生は大学院生に対して研究とは何か、研究者とは何をする人なのかを一から指導してくださいました。その資料を今でも持っています。先生が実際に海外誌の編集部とやり取りした手紙(当時はまだメールではなかった)を示しながら、投稿原稿がどうやってアクセプト・リジェクトされるかを見せてくださったのはとても刺激的でした。漠然とした海外への思いを話したところ、6th International Congress of Behavioral Medicine(2000年11月、オーストラリア)へも連れて行ってくださりました。学位論文を英文で書いた時も、紙が真っ赤な夕焼けのようになるほど懇切丁寧にご指導いただきました。そういった経験を通じ、先生の姿勢や自分の研究を英文論文として書けば世界に伝わること(ついでに学会発表で海外に行けること)に魅力を感じ、先生のような大学教員を目指したいと考えました。2002年3月に大学院を修了した後は助手のポストを高知医科大学に得て赴任しました。従って川上先生のもとにいたのはわずか1年半ほどでしたが、この1年半が私の人生を決めました。先生には感謝してもきれません。

2021年4月から現職を拝命しています(その節は、そして海外留学時も先生には推薦状を書いていただき、ありがとうございました)。当時の先生と同じように、医学部学生や大学院生の研究指導をしています。あの時に先生が私にしてくださったように、私も学生に未来の選択肢を示せる指導をしたいと考えています。それが先生の教えを、間接的にはありますが、次世代に伝えることになると思います。

最後に余談ですが、今年度から日本の地域住民における統合失調症の有病率を推測するという研究に取り組むことになりました。私が先生と出会ったときは、先生は日本におけるうつ病などの精神障害の有病率を明らかにするWorld Mental Health Japan Surveyの準備に取り組んでいらっしゃいました。20年後の今、私が当時の先生と同じような研究に取り組むことに不思議な縁を感じ、うれしく思います。

太田 充彦

藤田医科大学医学部公衆衛生学講座 教授



雲の上のひとつ年下のお兄さん

川上憲人先生、東京大学教授として、このたびご退任の日を迎えられたことを、心よりお祝い申し上げます。

私は川上先生より少し早い時期に、家族看護学分野の准教授として東京大学に戻ってきていたわけですが、川上先生のご着任のパーティのときに、「分野の研究のテーマが近いですね」と声をかけていただいたことを憶えています。私は精神衛生教室の出身ですし、実は心理相談の手ほどきは先輩の福井城次さんや正田マミさんから受けたという意味で、ルーツは産業精神保健領域なのでした。その後、かたや私の教室は常に症例に戻りながら研究をデザインしていくように指導していたのに比べ（地味な研究）、川上教室は常に複数の介入研究を走らせるとともに、産業領域や公衆衛生領域で大規模な国際研究を展開され、すぐに華々しい研究成果を産み出し始められたのです。先生のこの素晴らしいご業績は、令和2年度春の紫綬褒章受賞につながり、私にとってはもう雲の上の人です。

また相当長い期間、私が健康科学・看護学専攻長、川上先生が公共健康医学専攻長を務めたのですが、そのスタートのときに先生が「これからは利害が対立することがあるかも知れませんね」と真剣な面持ちでおっしゃられたこともよく憶えています。私にとっては同盟国だと思っていた隣国から、宣戦布告を受けたような衝撃があったのですが、しかし大きな組織での責任ある役職というものはどういふものなのかを教えてくださいました。先生はじきにさらなる高みへ移られ（副研究科長になられて）、私は3号館の先生のお部屋へ足繁く通わせていただきましたが、いつでも私たちの専攻一特に看護系大講座の諸々の課題に対して親身に相談に乗ってくださいました。私は先生をお兄さんのように、頼りにさせていただいたものです。

早口の英語で留学生を指導なさる先生も、被災地の高齢者と足湯につかっておられる先生も、大衆酒場で学生さんと語り合う先生も、お洒落なレストランでワイングラスを傾ける先生も、どの川上憲人先生もとっても素敵でした。退任なさった後も、きっとお忙しいことと存じますが、それでも大きな責任を全うされたのですから、しばしゆっくりなさっていただきたいと思います。そして環境の不安が軽減されましたら、たくさんの祝杯を挙げましょう！

川上憲人先生、ご退任おめでとうございます！そして、ありがとうございました！



「祝賀会にて」



上別府 圭子

一般社団法人子どもと家族のQOL研究センター 代表理事
(1977年度 卒論生、1978-1983年度 修士課程・博士課程、
2002-2021年 東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野 教員)



川上先生を尊敬する理由

川上憲人先生、ご定年おめでとうございます。

私は、先生の前任の栗田教授時代に精神看護学分野の助教授として勤務し、2004年に聖路加国際大学に転出いたしました。その後現在まで、非常勤講師として学部・大学院に関わらせていただき、川上先生と学生の教育や研究班で一緒にさせていただく機会がありました。本郷で日本酒やワインの美味しいお店を教えていただいたこともあります。

川上先生を尊敬申し上げる理由は数多くありますが、特に2つが印象的です。ひとつは、お酒が強いことです。これは、栗田先生も同様でしたので、精神保健学分野を率いる方の条件なのでしょう。日本酒が特に強いと聞いておりましたが、先生とワインを飲んだ後、自宅近くまで帰ってきてよろけてしまい、「負けた」と感じたことを覚えております。もうひとつは、院生が英語論文を書き、投稿前の指導を希望したときのコメントの速さです。週末でも、光速で返答されているメールを拝見するたびに、先生の院生指導の姿勢を尊敬しました。心からすごいと思える存在と出会えることは、人生の宝だと思います。先生とお会いできたことに心より感謝申し上げます。

多くのお仕事で成果をあげられ、優秀な人材を育てられた先生のご功績を、心より尊敬申し上げ、お祝い申し上げます。今後ともご指導賜りますようお願いいたします。

萱間 真美

聖路加国際大学大学院看護学研究科精神看護学 教授



川上先生の定年退職を祝して

この度は、無事定年を迎えられたこと、お祝い申し上げます。そして、紫綬褒章のご受章、誠にありがとうございます。長年にわたる先生のご功績が広く認められましたこと、教え子として自分のことのように大変嬉しく思います。ご在任中は、私のような出来の悪い大学院生に対しても、ご厚情とご指導をいただきました事を深く感謝致します。

先生との思い出は、何といっても2号館3階全体で季節ごとに開催された懇親会と、本郷界隈で繰り広げられた居酒屋での語りいでしょうか。コロナ禍の今となっては信じられないような光景ですが、修士課程時代の同期を交えて研究について語り明かした思い出が今でも鮮明に思い出されます。私の修士課程の研究テーマはこれらによって生まれたと言っても過言ではありませんし、本当に懐かしく、あの頃に戻りたい今日この頃です。

博士課程へ進学後、私は地域精神保健や精神看護学の発展に寄与する研究テーマに傾いていきました。私が東京大学の大学院生と聖路加国際大学の助教という2つの立場を行き来するなか、絶えず暖かく見守っていただき、そしてご指導をいただきました。2008年に修士課程に入学してから、2016年に博士課程を修了するまで8年と長くかかりましたが、先生が指導教員であったからこそ完遂できたのだと深く感謝しています。

私が2019年に教授としての役割に就いてからは、研究室のマネジメントや大学院生の指導まで、川上先生の真似（多分に中途半端ですが）をさせていただいております。また、同じく指導を受けた修了生とともに共同研究も行っており、現在の私の活動の中にご指導いただいたすべてが息づいています。先生からいただいた指導を、進化させた形でさらに後進に伝えていくことができるよう、今後も精進していきたいと思っております。論文も…ちゃんと筆頭でも書き続けます。

先生には今後とも変わらず大活躍を続けていただきたいというのが本音ですが、趣味や余暇の活動に没頭するお姿も拝見してみたい気もしています。ますますのご健勝と更なるご活躍を心よりお祈りし、今後も様々な機会でお会いできることを楽しみにしております。



木戸 芳史
浜松医科大医学部看護学科精神看護学 教授
(2010年修士修了、2016年博士修了)

仕事の要求度 ーコントロールモデルと「いいんじゃないですか」

私が川上憲人先生のことを初めて知ったのは、今から27年前で、修士課程の大学院生の頃である。とはいえ、直接お会いしたわけではなく、「職場ストレスの健康管理：総説」（荒木俊一・川上憲人、産業医学, 35(2), 88-97, 1993）という論文を通じてであった。

この総説の中で、「仕事の要求度ーコントロールモデル」という職業性ストレスの理論モデルを紹介されていたのだが、働く人のストレス問題を、仕事の要求度とコントロール（裁量権）という、職場環境の2つの要因の組合せで記述する発想に、衝撃を受けた。川上先生はこのモデルを日本に紹介するとともに、日本における職業性ストレス研究をリードする若手のリーダーであった。職場のストレス研究の初学者であった私にとって、川上先生は雲の上の存在であり、スターであった（表現が古いかもかもしれない）。

やがて、学会活動などを通じて川上先生と交流する機会をいただき、科研費プロジェクトやカロリンスカ研究所でのワークショップのお誘いのほか、私の学位論文の学外副査も引き受けていただいた。岡山大学教授時代には、職場のメンタルヘルス専門家養成コースにもお誘いいただいた。当時赴任していた広島大学から毎週水曜日に新幹線で岡山大学に通い、勉強会と懇親会で多くのことを学ばせていただいた。

私の研究者人生にとって大きな転換点となったのは、オランダ・ユトレヒト大学への在学研究である。この留学先を紹介いただいたのが、川上先生であった。当地では、「ワーク・エンゲイジメント」という新しい概念を学び、職場のメンタルヘルス問題をポジティブな視点からとらえ直すきっかけとなった。日本に帰国後、ワーク・エンゲイジメントを日本に広める活動を後押ししてくれたのも、川上先生である。

川上先生が東大・精神保健学分野の教授に着任され、その後、半年遅れて私が准教授として着任した。私がワーク・エンゲイジメント研究を含め「こんな研究をしたい」と相談すると、「いいんじゃないですか」と常に許容された。まさに、仕事のコントロール（裁量権）の体現である。この一言にどれだけ救われ、この一言からどれだけ活力を得たことか。

東大在任中には、日本生産性本部との共同事業「健康いきいき職場づくりフォーラム」の設立をはじめ、様々な活動に関わらせていただいた。発想が柔軟で、新しいものをすぐに取り入れる進取の精神。常に、半歩先、一歩先を進む川上先生に追いつきたいと思いつつ、さらに半歩先、一歩先を進まれる。私にとって、川上先生はいつまでもスターなのである。



2010年6月16日（水）、第4回仕事の心理社会的要因に関する国際会議（国際労働衛生学会主催、オランダ・アムステルダム）の懇親会会場にて。写真右より、川上憲人先生、ロバート・カラセック博士、ウィルマー・シャウフェリ教授、筆者



島津 明人
慶應義塾大学総合政策学部 教授

川上憲人先生に感謝をこめて

川上先生、ご退職おめでとうございます。修士課程・博士課程の5年間、川上先生には本当にお世話になりました。

いつも情熱あふれる川上先生の授業やゼミを通して、とてもたくさんのことを学ばせていただき、刺激に満ちたかげがえのない院生生活を過ごしました。精神保健学Ⅰの授業では、最も素晴らしいプレゼンテーションをしたグループに贈られる「川上賞」を目指して私たちのグループもがんばりました。結果的に入賞には至りませんでした。が、「あなたたちのグループもよくがんばったね」と、思いがけず残念賞のようなものをいただいたことは今も懐かしい思い出で、10年以上も前のことが昨日のここのように思い出されます。

いくつもの大型研究プロジェクトをリードされている川上先生の、研究に対する常に真摯なお姿からは、研究者とはどのように生きていくものなのかを教えてくださいました。また、まだほやほやだった修士論文の研究テーマを「いいね」と後押ししてくださり、論文がアクセプトされたら一緒に喜んでくださり、うまくいかないことがあった時にも励ましてくださり、どんな時にも学生たちの心に寄り添ってくださる川上先生のことを尊敬していました。

早いもので、博士課程を修了してもうすぐ10年が経とうとしていますが、今でも、同窓生と再会すると楽しかった院生生活の思い出話に花が咲きます。その話の中には、川上先生をはじめとする先生方が必ず出てきて、私たちは院生の頃に戻ったような気持ちになります。博士課程を修了した後も、キャリアのことで相談に乗っていただくなど、とてもお世話になって現在の私がいることに感謝しています。

私は教育も研究もまだまだあまりに未熟で、川上先生からいただいた恩義を返せないままですが、川上先生から教えていただいたことを糧にがんばっていくことで、少しでも恩返しになればと思っています。

川上先生の今後のさらなるご活躍とご健勝を、心よりお祈り申し上げます。

今後とも、ご指導・ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。



千葉 理恵

神戸大学大学院保健学研究科精神看護学研究室 教授
(2012年3月修了)



精神保健分野のリーダーに感謝を込めて

岡山県の玉野（宇野港）からフェリーで20分ほどの瀬戸内海に浮かぶ直島は、ユニークなかぼちゃなどのオブジェや美術館（地中美術館は有名）が点在するアートの島としてご存知の方も多いかもれません。周囲16Kmの小島で、香川県の島ですが高松からよりも近く、岡山からのちょっとしたエクスカージョンコースです。2005年4月30日、私は、川上先生から、この島への日帰り小旅行に誘われました。長見まき子関西福祉大学教授（現）もお付き合いただきました。

この年の8月に、川上先生が会長、私が事務局長で、第2回ICOH（International Commission on Occupational Health：国際産業保健学会）仕事とストレスに関する国際会議を開催することになっていました。規模的にはさほどでもないものの国際学会ということで（最終参加者35か国から316名の参加）、私はその準備に追われていました。おそらく、私の余裕がなくなっていくのを、川上先生は見て取られたのだと思います。貴重な一日をつぶして、部下に息抜きをさせたものと思慮しています。



川上先生との出会いは、1994年に下光輝一東京医科大学名誉教授が事務局長として開催に尽力された日本ストレス学会と記憶しています。地域住民コホートで測定していた職業性ストレス尺度の心理特性を記述した初歩的な私の発表に対して、座長であった川上先生が、参考資料をコメントとともに送っていただきました。翌年留学をした私は、10年間地域医療に従事していたこともあり、臨床と研究の間で腰が据わっていませんでしたが、帰国後川上先生からいただいた様々な機会（チャンス）は、その後の私のキャリアを決めることとなります。若輩ながら加えていただいた「職業性ストレスの理論的發展とその測定および実証に関する研究」で得た知見は、その後の研究の指針になりました。また、

川上先生のご縁で親交を結んだ国内外の知己は、とても大切な財産となっています。

その深遠な学識だけでなく、関わられている組織や集まりで、川上先生の、人を大切にする、細やかな心配りに気づかされます。理事または理事長として、国内外の主要な学会の発展に貢献されていることは、皆さんよくご存じだと思いますが、私がとくに印象深いのは、むしろプライベートな勉強会です。なかでも1990年～2000年代に、川上先生がお世話をされていた合宿勉強会（通称「若手の会」）は、当時の職場の精神保健の名立たるメンバーが夜を徹して語り合う会で、（当時の本当の）若手は、今、関連学会の柱として活躍しています。東京大学に移られてからも、研究、実務両面に多くの人を育てられました。ご退職後も社会連携講座で研究を続けられると伺っていますので、また、有意な人材が集われると思います。わが国の精神保健分野のリーダーとして、今後ともご指導をいただければと希望しております。



堤 明純

北里大学医学部公衆衛生学単位 教授

国際精神保健をともに

川上先生との思い出は多岐にわたりますが、国際精神保健に関するお仕事が一番思い出深く残っています。いつも笑顔で応援してくださったことに本当に感謝しています。私がマレーシア在住時代には、国連の「障害、メンタルウェルビーイング、開発に関する専門家会議」にご参加いただき、非常に貴重なご助言を賜りました。現在、持続可能な開発目標（SDGs）は、とても広く知られるようになりましたが、障害や精神保健をSDGsに入れるためのきっかけとなった非常に重要な会議でした（当時はSDGsではなく、Post-2015 Development Agendaと呼ばれてましたね）。このように、先生と国際的な政策枠組を作る仕事に従事できたことは本当に恵まれていたと思います。また、先生が私のマレーシアの自宅で、駐在生活を送る主婦に対してメンタルヘルス調査を行ったことも覚えています。また、マレーシアでは、現地の観光をご一緒したり、美味しいローカルフードをいただいたりと、楽しい思い出もたくさんあります。海外にいながらも頑張れたのは、川上先生がいつもサポートしてくださったからだと思います。いつもサポートしてくださることに安心感を覚えていました。本当にありがとうございます。最近、新型コロナウイルスのために、直接お話ししたり、お食事をする機会がなくなりたいへん残念ではありますが、もっともっと先生からご助言を賜りたいと思っています。今後ともどうぞよろしく願いいたします。



堤 敦朗

金沢大学人間社会研究域 教授



川上憲人先生ご退職に寄せて

川上憲人先生は平成4年より8年余り、岐阜大学医学部公衆衛生学講座に助教授として在籍されました。この講座は、後に改称され、現在の疫学・予防医学分野であります。当時から研究、教育に輝かしい業績を残され、岐阜大学に多大なる貢献をされましたこと感謝申し上げます。岡山大学、東京大学の教授にご就任後も、大型研究費の獲得、国によるストレスチェック制度の導入、幾多の学会の理事や理事長への着任、紫綬褒章をはじめ数ある表彰受賞など、メンタルヘルスの第一人者として目覚ましいご活躍ぶりを聞き及んでおります。まさに、私共の同門会「さんて会」が大いに誇るOBです。

先生が岐阜大学ご在籍中は、私は研究生その後助手として大変お世話になりました。先生は、当時既に国内外で多くの研究を実施されており、ユニークで刺激的な共同研究者の方々が屢々来てくださり、まさしく研究談義に花が咲くという時代を過ごさせていただきました。

研究者としての素晴らしさはさておき、先生は、社交的で、何事も瞬時に見抜く鋭さをお持ちになる一方、さりげなく行動されるという気配りにも溢れています。そんな点を感じて私も見習いたいと切に願いましたが、先生をアシストするはずの助手の私が、気づいた時には先生が先に動いていらっしゃいました。先生の鞆持ちで24時間密着したら何か秘訣が学べるかとも考えたこともありますが、それは甘い、とさすがに思う端から否定しました。海外の共同研究者からの電話も多く、先生がご不在のとき私に対応したことがあります。単純にご不在を伝えたのみですが、支障なく通じたのでミッションコンプリート（先生から頼まれたわけでもないのですが）、そんなときには、少しはお役にたてると気を良くしたものです。ある時、私の在室する大部屋にコウモリが舞い込み、怯えた私は先生に助けを求めました。先生は長箒を振り回して奮闘（これはあまりお得意でないかも？）、その周りをコウモリが大きく旋回する有様です。怖くてたまらない私は廊下に退散してしまいましたが、これでは気遣いの欠如にあたりよろしくないとの認識はあり、「先生大丈夫ですか？」と、これまた掛け声ばかりで、箒とコウモリの旋回にシンクロするかの如く、扉に近づいたり、後退りしたりと繰り返しておりました。そうこうするうちに不意にコウモリが扉から飛び出し、私は大きくイナバウアーし、まるで断末魔の叫び。お優しい先生なので、そんな叫び声など何も聞いていませんよ、というご様子でした。思い出は尽きません。

今も相変わらず至らぬ点の多い私ですが、先生から学ぶ機会に恵まれましたこと、感謝申し上げます。また、今後ともさんて会同様、英知をお貸しいただけますように。そしてますますご健勝にて、一層のご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

永田 知里

岐阜大学大学院医学系研究科疫学・予防医学分野 教授



楽しく有意義な交流をありがとうございました！

職場のメンタルヘルス対策ならびに地域精神保健疫学の分野で、国内はもとより国際的にも歴史に残るご業績を残された川上憲人先生、この度は東京大学でのご職責を全うされてのご定年退職、誠にありがとうございます。

国内外でご活躍の大先生に失礼とは存じながら、お若い頃から存じ上げているものの一人としてお許しただけようでしたら、その明るく茶目っ気のある魅力的なお人柄にも言及させていただければと存じます。私自身は、1987年にIT企業の保健師（当時は保健婦）として働き出してから直ぐに職場のメンタルヘルス対策について深く学ぶ必要性を痛感し、大学の先輩でした原谷隆史先生のご紹介で「職場の精神衛生研究会（通称：若手の会）」に参加させていただき、そこで川上先生にお会いしたのが最初でした。月に1回程度の事例検討を主とした研究会（懇親会付き）と、年に1回程度の合宿（熱海など）に嬉々として参加させていただき、夜遅くまで語り尽くした合宿の帰りにも皆で美味しい海鮮定食ランチを食べながら情報交換の続きをさせていただいたのが昨日のこのようです。今思えば、多職種・多分野での交流・情報交換の走りだったようにも思います。高いご見識に加えて、アイデアマンで、統率力があり、笑顔が素敵で川上先生の周りには、仕事でも遊びでも人が集まってきたのでしょう（皆のお兄さん役でしょうか（笑））。



こちらの写真は、2006年5月に日本産業衛生学会が仙台で開催された直後に、川上先生と島津明人先生、長見まき子先生、私の4名で、「大人の修学旅行」と称して、秋保温泉に立ち寄った時のものです。実家の整理をしていてちょうど見つけた写真ですが、皆、若くてとっても楽しそう！私自身は現在の大学に移った直後でもあり、今後どのように進むべきなのか先生方との交流を通して考えていたように思います。私の力不足のため15年経っても大した歩みができていないのですが、これを機に残りの時間を出来るだけ有意義に使いたいと改めて思います。

川上先生がご定年を区切りに次はどこに向かわれるのか、楽しみでなりません。これまでのご指導ご助言に深謝いたしますとともに、どうぞ益々お元気で思いのままにご活躍されますことを、心よりお祈りいたします。

錦戸 典子

東海大学医学部看護学科 教授



川上先生のご退職によせて

川上先生、東京大学のご定年退職、誠にありがとうございます。

川上先生と初めてお会いしたのは、私が岐阜大学医学部の公衆衛生学教室に助手として勤務していた頃、先生が教室を訪ねていらした時だったと思います。当時岡山大学大学院医歯総合研究科教授でいらっしゃいましたが、非常に「お若い」という印象がありました。

岐阜大学からのご縁で、先生の下で岡山大学にリサーチレジデントとして勤務させていただき、また、助手として雇用していただきました。岡山大学では、教員の先生方、大学院生の先生方、教室スタッフの方々と一緒に勉強したり、課外活動をしたり、非常に楽しい時間を過ごすことができ、今でも多くの思い出があります。特に、2005年に岡山で開催されました国際学会“Second ICOH International Conference on Psychosocial Factors at Work”は、忘れがたいイベントです。教室員だけではなく、学生のアルバイトの方たち、岡山の地域の方々の協力を得て、台風接近の危機まで乗り越えた後楽園でのsocial programは、まるで花火を打ち上げたかのような華々しい記憶として残っています。

世界で活躍される川上先生のおかげで、海外で開催される国際学会に参加する機会を多く得ました。2008年に東京で開催された10th International Congress of Behavioral Medicine (ICBM)の広報活動として、2006年にタイのICBMに浴衣持参で参加したことも良い思い出です。その他にもドイツのマインツ、アメリカのニューポートビーチ、イタリアのミラノ（写真参照）と、大学院生の先生方も一緒に参加することができました。国際学会に参加した際には、social programも一緒に楽しむことを学ばせていただきました。

研究については、職場のメンタルヘルスに関する研究をスタートしたのは川上先生のおかげ以外にありません。川上先生が岡山産業保健総合支援センターで行われた「事業場のこころの健康専門家マップ」の作成を引継ぎ、福山市医師会との共同で福山市版を作成しました。また、大阪産業保健総合支援センターでも大阪版の作成を行い、地域の専門医療機関と事業場の連携を促進するツールとして活用されています。

川上先生には、岐阜大学、岡山大学、そして東京大学までお世話になり、多くの教えを受けることができ、感謝するばかりですが、ご退職後もふとした時間が持てるようでしたら、これからも変わりなく、岡山大学の面々と交流を続けていただければと思っています。

川上先生のこれからの益々のご健勝と、ご活躍を祈念しております。



廣川 空美

梅花女子大学看護保健学部 教授

研究者としてのアイデンティティ

私が書いた国際学会の抄録を添削して下さった時に、川上先生は「頭が痛くなりました。」とおっしゃいました。私としては全力で書いた抄録ですが、きっと、ものすごくイタイ英文だったのだと思います。

私は、国際的な場で研究成果を発表することの意味を川上先生から学びました。私の博士論文の研究テーマは「ひきこもり」で、ドメスティックな課題と考えていましたので、海外の雑誌に投稿しようとは思っていませんでした。川上先生の指導を受ける中で、研究者として自分はどうかありたいのかを考えさせられました。今では、hikikomori の論文は 100 編近くあり、私の博士論文もその中に含まれています。川上先生の姿・活動を見ながら、研究者としてのアイデンティティを身につけることができました。また、出産と育児で学業に専念できなかった私を根気強くサポートして下さいました。心から感謝しています。本当にありがとうございました。

学生さんが書いた論文を、私が読んでコメントする立場になりました。頭が痛いような、嬉しいような、楽しいような気持ちがするものですね。



船越 明子
神戸市看護大学看護学部 教授

川上憲人先生との思い出

川上先生、16年間の東京大学精神保健学分野教授としてのご活躍とご指導、そして何よりも日本の精神科疫学への多大なるご貢献を、まことに有難うございました。ますますのご活躍を期待しておりますが、一切りを迎えられることは事実ですので、実行委員会からのご要請をいただき、先生との思い出を綴らせていただきます。

まず、はじめて川上先生にお会いしたのはいつだったのか思い出そうとするのですが、どうもはっきりいたしません。きっと岐阜大学の公衆衛生学講座の助教授をしておられた頃ではないかと思えます。当時私は名古屋市立大学の精神医学教室の関連病院で働いていたか助教をしていたかの頃で、したがって精神科の臨床医だったわけですが、どういうきっかけだったかで当時川上先生たちが行っておられた産業精神保健関係の伊豆の合宿(?)に何度か参加させていただき、臨床医が経験する世界とはまた違った議論をととても楽しくさせていただいたことを覚えています。

また、たぶんその頃から川上先生は精神疾患の構造化面接の日本語版開発をしておられて(ああ、こちらがそもそものご縁だったかもしれません。1990年代前半私は自分の臨床疑問に答えようと思えよう見まね、おっとり刀で精神科の臨床研究を始めたのですが、当時の精神科の先輩方がやっていた方法論では世界ではほぼ門前払いであることを経験していました。そこで、まずは診断を確定するのに構造化面接なるものを学ばねばならないと言うことで、1995年頃シドニーのGavin Andrews教授のところで行われていたCIDIの訓練に参加したあと、その日本語版を開発しておられると言うことで川上先生にご連絡を取らせていただいたと思います)、その分厚い日本語版を見せていただきました。臨床医の目から見ると、いやはや、これはまた大変な作業だと恐れ入っておりました。

そのような縁もあって、World Mental Health Surveyの末席に連ねさせていただき、いくつか論文を共著させていただいたり、とくにK6, K10については、先のGavin Andrews教授のご好意でRon Kessler教授チーム以外では初めての妥当性検証の論文を書かせていただいていた関係もあって、その日本語版についてもまかせていただいて論文にさせていただきました。この頃、川上先生は既に東京大学精神保健学分野の教授にご就任をしておられて、本郷校内の「保健学科のビル」(今は医3号館と呼んでいるのでしょうか。学生時代、ここに脳研がありまして、脳の切片顕微鏡観察に数ヶ月通った覚えのある個人的に懐かしい建物です)に先生を訪問させて頂き、エレベータとトイレが私の学生時代のままであったのにびっくりしたのを覚えています。

さらに川上先生および今村幸太郎先生が、コンピュータ化した認知行動療法を開発したいという話をお聞きし、ちょうどGavin Andrews教授のチームがその先駆的業績を始めておられましたので、三人でシドニーを訪れさせて頂いたのが2010年頃だったかと思えます。そこからまた川上先生との新しい共同研究が発展してくるのですが、紙数も尽きましたので、私の雑文もここまでとさせていただきます。

川上先生、ほんとうにお疲れさまでした。そして、ぜひますますのご活躍を期待しております!

古川 壽亮
京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻健康増進・行動学分野 教授

私のキャリアに最も影響を与えた人

川上先生とは、国内外の学会や通称「若手の会」や職業性ストレス研究会などを通して、何十年も一緒にしてきましたので、最初にどこでお会いしたのか、あらためて思い出そうとしても、無理でした。ただ、あと数年で先生と出会って30年近くの歳月が経つことは確かです。

川上先生が岐阜大学医学部助教授で、私が東京大学の博士前期課程の院生だった頃に出会いました。指導教員の栗田廣教授のもと、私が博士の学位論文を作成した際には、川上先生に貴重なご助言、ご指導をいただき、無事に博士後期課程を修了できました。私は看護職ですが、川上先生はどの分野の学生や若手でも大切に、チャレンジする機会を与え、サポートしてくださいました。川上先生のご指導、サポートには、今でも感謝しております。

初めて私が学会発表をしたのが、1996年6月の第3回日本産業精神保健学会で、場所は東京大学の安田講堂でした。演題は「看護婦の仕事のストレスと抑うつおよび職務満足感との関連—日本語版NIOSH職業性ストレス調査票を用いた検討—」で、杉下知子先生、原谷隆史先生、川上憲人先生、荒記俊一先生が共著者でした。1999年3月、労働省平成10年度作業関連疾患の予防に関する研究「労働の場におけるストレス及びその健康影響に関する研究報告書」において、「医療従事者（医師及び看護職）のストレスとその問題」についてまとめた際も、ご指導をいただきました。

岡山大学に教員として在職していた際には、川上先生の講座が開催する定期的な勉強会に参加する機会を得ました。堤明純先生、島津明人先生といった豪華メンバーとともに、当時、非常に贅沢な時間を過ごしました。東京大学にご異動なさった後も、精力的に国内外で研究成果を発信し、多くの役職を歴任し、職場のメンタルヘルスの分野では多大なる功績を残されました。個人的に悩んでいた時には、相談にのっていただき、川上先生の優しさに本当に救われました。

以上より、川上先生は、私のキャリアに最も影響を与えた人であり、大変尊敬しております。最後に、退職を記念して、心からの感謝を申し上げます。



三木 明子

関西医科大学看護学部・看護学研究科 教授

川上劇場

川上憲人先生、日本製鉄・東日本・君津の宮本俊明です。
長い間、本当にお世話になりました。

最近では日本産業衛生学会理事長として卓抜した手腕で学会を運営され、浅学菲才の小職を業務執行理事に引き上げて下さり、コロナ禍での職場の対策ガイド作成をはじめとするコロナ担当理事業務邁進を支援して下さったことが強く思い出に残っているところです。

私自身の心残りは、産業ストレス学会の大会長を、どうしても多忙すぎてお引き受けできなかったことで、川上先生のお顔に泥を塗ってしまったのではないかと今でも申し訳なく思っているところです。

記憶をたどると、川上先生と初めて仕事でお目にかかったのは、1998年の「作業関連疾患の予防に関する研究」（加藤正明班）の健康影響評価研究グループによる、「産業医・保健婦等との結果検討会」でした。これは仕事のストレス判定図の妥当性検証や、事業所のストレス対策のチェックリストの作成に絡むもので、川上先生が岐阜大学時代でしたが、その後の現在までつながる多大な成果物に影響したことは論を待ちません。研究成果物の妥当性を実務者で検証することはこの後の川上先生の十八番で（それ以前から用いられていたのかもしれませんが）、「長時間労働による疲労蓄積度自己チェックリスト」の時は小職の事業場でもトライアルを行い、2009年から2011年の新職業性ストレス調査票といきいき職場づくりの開発の時も、実効性検証のステークホルダー会議に呼んでいただき、ここで「健康いきいき職場づくり」という言葉が誕生したことも思い出深いところです。特に2012年12月17日の「健康いきいき職場づくりフォーラム設立記念シンポジウム」での中締め挨拶にご指名頂き、これまでで一番受けたスピーチをしたことは良い思い出です。話がそれましたが、この研究成果物を実務家による妥当性検証で有用性と有益性を高めるという手法は、コロナ対策の業種別マニュアル作成の時も用いられて、まさにKawakami methodという感じで、現代日本の産業保健の骨幹を作り上げているのだと強く感じるところです。そこに20年以上も関わることができたのはとても幸運でした。

振り返ると私の関係するほうでは千葉県産業衛生協議会で2010年にご講演をいただきました。遡れば2001年には岡山大学時代ですが鉄鋼産業医会議でもご講演をいただきました。

本当に節目節目でお世話になっているのだと改めて思いました。日本産業衛生学会や日本産業ストレス学会でのご交流はまだ続きますが、定年退職されるとは言っても、手塩にかけて育てた後輩や教え子が成果と手法を引き継いでいきます。何より、働く人と事業者のWin-Winのみならず産業保健職も存在価値が高まってHappyになる「3方よし」の方法を模索する研究者のSpiritを引き継いでいき、日本をさらに良くしていくことでしょう。研究者も国も含めて「5方よし」となれば、もちろん川上軍団は史上最強です。

こんな最強の研究者・実務者集団を育て上げた川上憲人先生は、やはりただ者ではありません。きっと定年退職後も新しいことや多くの人にメリットをもたらす何かを仕掛けていくのでしょう。もうしばらく我々後輩を楽しませて頂けると嬉しいです。川上劇場の続きを楽しみにしています。



宮本 俊明

日本製鉄（株）東日本製鉄所 統括産業医

川上先生、また岡山でお待ちしております

川上先生、長い間お疲れ様でした。ご退職とお聞きし、時間が経つのは本当に早いなど驚いております。そして、退職記念集への寄稿の機会を頂き、恐縮しております。折角ですので、岡山大学における川上先生のご功績を紹介させていただき、メッセージとさせていただきます。

1. 岡山大学におけるご功績

岡山大学医学部 150 年誌には在任中の川上先生のご功績に関して、下記のように記載させていただいています。昭和 55 年から平成 12 年まで教授としてご活躍された、故青山英康先生の教室を発展させ、その後現在に続く教室の基盤を築き上げていただきました。教室を代表して、まずはお礼を申し上げます。

『第 4 代 川上憲人教授 (平成 12 年－ 17 年)』

平成 12(2000) 年 7 月、川上教授が着任。平成 13(2001) 年 4 月には部局化により教室を医歯学総合研究科衛生学・予防医学分野と改称。多くの大学院生が入学し、平成 17(2005) 年時点の大学院生数は 26 名。在任中には多様な疫学研究を実施し、特に大規模コホートによる職業性ストレスの健康影響、ストレス対策の介入研究が進展した。また WHO・ハーバード大学との共同研究である世界精神保健日本調査を、岡山市を含めた全国 11 市町村の住民を対象として実施した。これらの研究成果は JAMA を含む 35 編の英文原著論文として公表。平成 17(2005) 年 8 月、国際産業保健学会 (ICOH) 職場の組織と心理社会的要因科学委員会 (WOPS) の第 2 回国際会議を川上教授が大会長として岡山市で開催。平成 17(2005) 年、東京大学医学系研究科精神保健学分野に異動。』(岡山大学医学部 150 年誌より抜粋)

2. 個人的な関わり

また、個人的には、2003 年に博士課程に入学の許可をいただき、岡山大学にて勉強をする機会をいただきました。最初の授業で川上先生から頂きました、研究や論文の書き方などを説明したミニコースの資料は今でも手元に持っており、現在同じような授業を大学院生にも行っています。川上先生にご指導いただいた、自分で考え、自分で研究計画を立て、自分で研究を行っていく、そのような土壌は、当教室の根幹として力強く残っております。

川上先生は、このような指導の面においてだけでなく、大学外でも私たち院生と対等に付き合ってくださいました。医局対抗のボート大会と一緒に参加したこと、一緒に飲みに行かせてもらったことなど多くの思い出があります。大学院生だった当時、教授室を訪ね、川上先生にご相談させていただく際は、とても緊張していたものでした。私が教授を拜命し、同じ教授室に席をおくことになりました。現在も、あのときの情景を鮮明に思い出します。また、研究室に飾っております川上先生を含めた歴代の教授の先生方のお写真を拝見するたびに、身が引き締まる思いがいたします。

3. 最後に

東京大学ご在任中はお忙しく、なかなか教室へお越しいただくことは叶いませんでした。ご退職後はゆっくりされ、ご実家もある岡山へお越しの際は、教室へも是非お立ち寄りいただけたら嬉しく思います。これまでのご指導に対し改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。今後とも宜しく願いいたします。



頼藤 貴志

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科疫学・衛生学分野 教授

川上先生との16年を振り返って

この度は、無事にご定年の日を迎えられましたことを心よりお慶び申し上げます。長い間のご勤務、本当にお疲れ様でございました。川上先生と初めて出会ったのは2005年10月の教室ゼミで、当時、私は卒論生として精神保健学分野（精神衛生・看護学教室）に所属していました。翌年は大学院に進学し、引き続き、精神保健学分野に所属することは決まっていたものの、大学院進学後の方向性や将来のビジョンが全く定まっていなかった状況でした。そのような中、川上先生が教室ゼミで発表された「職場のメンタルヘルス」は、当時の私にとって、とても新鮮な研究テーマで、大学院では「職場のメンタルヘルス」をもっと深めていきたいと思い、すぐに川上先生のお部屋にお伺いしたことが昨日のことのように思い出されます。



第9回国際行動医学会（バンコク）開催時の1枚（2006年12月撮影）

大学院進学後は、特論の中で「職場のメンタルヘルスコース」を開講いただき、職業性ストレスの理論・測定・対策から、精神保健疫学の研究の進め方、事例対応・職場復帰の支援に至るまで、職場のメンタルヘルスの研究と実践に必要な知識を体系的に学ばせていただきました。修士論文の作成時は、小規模な調査ではございましたが、金沢の企業まで一緒に出向き、対象者の方に1人ひとり調査の説明を行い、データを積み重ねていったことも大きな思い出です。当時は「職場のメンタルヘルス」を専門にしていた先輩も少なく、川上先生には、研究計画から論文作成に至るまで、ほぼマンツーマンでご指導いただき、今振り返っても、とても贅沢な院生時代を過ごさせていただきました（同時に、私の飲み込みが悪く、幾度となくご迷惑をおかけ致しました…。この場をお借りして、深くお詫び申し上げます）。

大学院修了後は、幸運にも地元の大学で職を得る機会に恵まれましたが（「職場のメンタルヘルス」をテーマにしていなければ、このような機会にも恵まれなかったと思います。その意味でも、川上先生との出会いとご指導に感謝しております）、TOMHをはじめとする研究会や勉強会で引き続きご一緒させていただく中で、研究者・指導者として、常に長期的なビジョンを持ち、その実現に向かって邁進される川上先生のお姿を拝見し、いつも勇気付けられると同時に大きな刺激を受けております。ご定年という1つの節目ではございますが、これからは私たちを導いて下さる道標として、ご指導を賜ることができたら、大変嬉しく思います。

限られた紙面の中で川上先生とご一緒させていただきました16年間を書き尽くすことは叶いませんが、これまでのご指導に改めて感謝を申し上げますとともに、川上先生の益々のご発展とご健勝を心よりお祈り申し上げます。

井上 彰臣

産業医科大学 IR 推進センター 准教授/副センター長



川上先生に教わったこと

私が川上先生に初めてお会いしたのは、大学院受験の相談に伺った時でした。宮本先生にも同席していただき、研究室について説明していただいたのを覚えています。その際に川上先生は、「国際的に活躍する研究者を育てています。」とおっしゃっていたのですが、不躰ながらも「国際的に活躍する研究者とはどんな人ですか？」とストレートに質問してしまいました。看護師として病棟業務をこなす日々を過ごしていた私は、研究者という存在のイメージが思い浮かばず、説明の途中から「？」で頭がいっぱいになっていたのです。「毎日論文を読んで、論文を書いている人です。」と川上先生はお答えになったのですが、やはり「？」は解消されず、「地味…」と内心思っていました（すみません）。入試の面接が終わった直後に、「高野さんは臨床が好きな人なんですね。」と言われたのもよく覚えていて、それはつまり、「研究には向かない」ということなんじゃないかと解釈し、一人落ち込んでいました。大学院に入ってから、自分が研究者になるという実感は全くなく、授業の課題をこなすのも苦労ばかりで、先輩方のように研究できるようになるとは到底思えない日々でした。博士課程でも、



出産を機に休学し研究から離れることが度々あり、研究を続けることに悩んでいた時期がありました。そんな時にふと、入学前に川上先生がおっしゃっていたことを思い出しました。毎日論文を読んで書くことがこんなに大変だったとは…と身をもって経験したわけですが、あまり難しく考えず、とりあえず論文を読んで、とりあえず書くことを続けていけばいいんじゃないかと思いつきました。その頃から、どんなにうまくいかなくても、他のことで忙しくても研究から離れないことを目標にするようになりました。そして、今は教員として、「論文を読む、書く、研究から離れない」ことを大学院生に伝えています。

特任助教の時期には、部下としてもお世話になりました。東大を離れて教員として働く中で、研究室の運営という点においても、先生に教わったことがたくさんあったのだと気づかされました。要約すると、仕事の分担や情報共有、信頼関係やサポート体制を作るといった当たり前のことなのですが、案外こういったことを自分が主体となって意図的にやろうと思うと大変です。東大にいた頃は、ハード面にしてもソフト面にしても、川上先生が築き上げてきた環境に守られていたのだということを実感しています。これからは自分でそういった環境を作っていけないといけないのだと思いつつ、いつか川上先生の苦労話も聞いてみたいと思う今日この頃です。

私は大学院生・特任助教の期間合わせて9年間、川上先生にお世話になりました。人生の中でも変化の大きな、大事な9年間でした。院生としても部下としても、貴重な時間をいただき、本当に多くのことを教えていただき、ありがとうございました。そして本当にお疲れ様でした。先生の今後のご活躍をお祈り申し上げます。

高野 歩

東京医科歯科大学精神保健看護学分野 准教授



恵まれた環境の中での1年間

この度は定年退職、誠におめでとうございます。

13年ほど前、審査後の博士論文の修正が、なかなか進まず、審査員の先生方とのやり取りも難航しており、病院を辞めて1年間、卒業した教室に再びお世話になる機会がありました。そこで新しく教授になられた川上先生にご指導頂きながら、無事に博士号を取得することができ、大変感謝しております。

博論審査で大変ではあったのですが、いろいろと勉強させて頂き、とても恵まれた1年間でした。当時新しく着任された島津先生や、先輩でもある宮本先生にも温かくご指導頂きながら、時々森先生のゼミに参加して臨床を振り返ったり、教室の院生さんやスタッフの皆さんのやさしさに癒され、刺激を受けながら、新たな交流やつながりも生まれ楽しかったです。

私の博士論文のテーマが、看護職のメンタルヘルスだったので、川上先生のご研究や社会に大きな影響力のある様々な取り組みを拝見した時、とても興味深く影響を受けたことを覚えております。看護職のストレスは見えにくく、自分自身で気づきにくいのですが、きちんと評価したり、起きていることを言葉にしていくことで、職場に伝えたり、対策を立てることもつながり、今も先生のご研究や書籍、様々な取り組みを参考に、活用させて頂いております。

東大に足を運ぶ機会も減り、すっかりご無沙汰しておりますが、またどこかで川上先生の研究を拝見したり、どこかで一緒できたら嬉しいです。どうぞこれからもお元気で、今後ともよろしく願いいたします。



立石 彩美

順天堂大学医療看護学部精神看護学 准教授

ご退職おめでとうございます

川上憲人先生

この度は、ご退職おめでとうございます。

川上先生とはお仕事の中で一緒に働く機会が残念ながら無かったのですが、いろいろとお世話になりました。

精神看護学・保健学教室については、卒論テーマガイダンスや、大学院ガイダンスの説明会などで、教室の紹介をなさる度に、なんて楽しそうな教室だろうと思っておりました。そして大人気の教室であることから川上先生のお人柄がうかがえます。

私自身、家族形成期のメンタルヘルスに関心がありますので、先生のご専門領域とは遠くないところに身を置かせていただいていると思っておられます。現在は家族看護学にありますが、看護管理学領域での仕事を7年やっておりました関係で、産業保健領域の川上先生のご研究に触れることが多く、たくさんの重要なことを学ばせていただきました。

学部卒業後、普通に会社員となり、バブル期の最後の方だったのですが、猛烈に働きました。その後も厚労省で今では想像できないほどの長時間勤務でした。振り返るとよくメンタルに持ったなあと思います。川上先生の教えをもっと早く存じ上げていれば、ワークとライフの統合など生きる上での方策により活かされたのにとったりいたします。日本のみならず、世界を俯瞰して、日本の特に働く人の心の健康に関するストレスチェック制度の設計にご尽力されたことはすばらしい功績で心から尊敬申し上げます。

どうかお体に気を付けて、ご家族と共に次のステージをエンジョイされてください。今後ともますますのご活躍をお祈り申し上げます。



池田 真理

東京大学大学院医学系研究科家族看護学 教授

研究の面白さと信頼することの重要さを 教えて下さった川上先生

川上先生と初めてお会いしたのは2007年、私が大学4年生の時にSPHの大学院説明会に出向いた時でした。「職場のメンタルヘルスのスペシャリスト育成コースを開講する」という情報を聞きつけ駆けつけたものの、研究テーマが全く定まらない私の話を辛抱強く聞いて下さり、その温かかつ的確なアドバイスに「この人の元で学びたい」と強く思ったことを覚えています。

SPHに入学した後、やはり一番印象に残っているのは、M1を対象とした論文の書き方講座です。論文の読み方、論文の書き方を実践しながら学んでいるうちにすっかり研究の面白さに夢中になり、また川上先生に「研究者に向いている」と言われたことを真に受けて、M1の秋には博士課程に進学すること、そして修了後は研究者として生きることを決意しました。その時の論文の書き方講座の資料は、今でも私のバイブルとなっています。あの時、川上先生から研究や論文執筆の面白さを教わったおかげで今の私がありますし、自分が持つ知識や技術を余すところなく次世代に伝える川上先生の教え方も、私の指導方針の礎となっています。

川上先生は、院生にも様々なチャンスを与えてくれました。修士論文の調査協力先として自治労をご紹介して下さった後は信頼して私にやり取りを任せて下さり、現在に至るまでお付き合いが続くことに繋がっています。2011年に川上先生が大会長をされた第17回日本行動医学会では大会運営方法を学ぶ機会となり、教員となった後に大会運営に関わる際に大きく役立ちました。また、2011年の厚生労働省「職場のいじめ・嫌がらせに関する円卓会議」ワーキンググループではオブザーバーや委員代理として会議に出席することを許して下さい、その後厚生労働省関連の検討会に委員として呼ばれるようになることに繋がっています。川上先生の「様々なことを経験させる」「若手であっても、信頼して任せる」という関わり方は私を大きく成長させてくれましたし、指導者としてのロールモデルにもなってくれました。

大学院に入学してからこれまで、川上先生からは本当に多くのことを学びました。いつも温かく時に厳しく成長を見守って下さる姿は、私にとっては指導教員というより、研究の世界における“お父さん”のような存在でした。特に、精神的に辛かった時、私の話を否定せずに聞いて下さったこと、私のことを信じて下さっていたことは、感謝してもしきれません。あの時、川上先生が味方になってくれていなかったら、きっと私は心が折れていたと思います。そういう意味では、川上先生は単に恩師であるだけでなく、命の恩人でもあります。私も1人でも多くの人の心の支えとなれるように、精進して参りたいと思います。

これまで、教え子が活躍することが川上先生への恩返しになるのではないかと思います、研究や教育、そして研究成果の社会還元に邁進してきました。まだまだ未熟者ではございますが、今後も、川上先生からの教えを通じて次世代の育成や研究活動に取り組むことによって、少しでも社会に貢献できたらと思っています。今後ともご指導頂けましたら幸いです。末筆ながら、これまでのご功績に心から敬意を表し、これからのご健康とご活躍をお祈り申し上げます。



写真は、第73回日本公衆衛生学会総会（2014年）で優秀演題賞を受賞した時のもの



津野 香奈美

神奈川県立保健福祉大学大学院ヘルスイノベーション研究科 准教授
2008～2010年 専門職学位課程院生
2010～2013年 博士課程院生
2013年～現在 客員研究員

川上先生 お疲れさまでした。

この度はご定年おめでとうございます。

産業精神保健に関わるようになり、本などを読んでみたりするもの分からないことが多く、色々調べていくうちに川上先生のお名前とご研究を拝見するようになりました。この分野について詳しい方も周囲におらず、困っておりましたので、思い切ってメールでご連絡した際に、早速、丁寧なご返答いただき、精神保健学/精神看護学教室にお邪魔するようになったのをよく覚えております。更に、SPHでもお世話になり、産業保健だけでなく、公衆衛生の全体像を学ぶ機会を得ることができました。SPHに入った年は、ちょうど東日本大震災の直後であり、東京大学全体の入学式が中止されるという予想外のことが起こりました。節電のため、街も大学も何となく暗かった記憶があります。そのような中でも、SPHでは様々なバックグラウンドの方たちと交流することになり、これも貴重な体験でした。今にして思えば、貴重な機会を生かしきれないうちに年限が終了してしまったように感じます。産業衛生学会などで、その時に知り合った方々のご活躍を拝見し、あの教室から多くの人材が育って行ったのだと思い、川上先生のご指導の賜物かと存じます。

自分自身の近状を申し上げますと、帝京大学公衆衛生学教室などを経て、現在は宇都宮大学保健管理センターに勤務し、学生と職員の保健活動に関わっております。私の他に、スタッフは所長（内科）、看護師3人、非常勤カウンセラー5人と事務補佐員2名で2つのキャンパスで活動しております。同時に、千葉県庁知事部局の産業医や厚生労働省千葉労働局にて労働災害審査医員もしており、何とか川上先生にご教授いただいたことを実務・社会で役立てようとしております。研究に関しては、医療系学部の無い大学なので、情報へのアクセスが限られ、相談する相手も学内に少なく、効率的に進めることが難しく感じる場合があります。改めて東京大学の恵まれた環境を思い起こします。幸い、最近、公的保健制度の変更と精神療法実施数の関係について論文がPsychiatry and Clinical Neuroscienceに掲載されました。今後も、精神保健の研究についても充実させていこうと考えております。

長い間ご指導いただきまして誠にありがとうございました。今後の益々のご健康とご活躍をお祈りしております。



原口 正
宇都宮大学保健管理センター 准教授

川上先生ネットワークに支えられて

川上先生の教室には、2016年8月から2021年3月までの5年弱、川上先生が主任研究者として東日本大震災後から続けてこられた環境省の放射線の健康影響に係る研究調査事業をお手伝いするかたちで、特任研究員としてお世話になりました。実はそれより10年ほど前、学部と修士課程も東大精神保健学教室におり、(学部は前任の教授でしたが) 修士課程の2年目も川上先生にお世話になったのですが、そのときはなんとか卒業させていただいたものの、院生としての学びの機会をほとんど生かせない残念な学生でした。今考えるとなんてもったいないことをしたのかと思います。卒業から約10年を経て特任研究員として教室に戻り、そんな残念だった学生時代をやり直す機会を与えてもらった5年弱でした。



「福島調査事前研修」



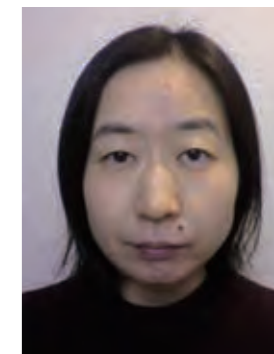
「大槌町支援」



「大槌町支援」

特任研究員としては、川上先生が福島で続けてこられた住民調査のお手伝いを主に担当させていただき、そのデータの解析、論文の書き方はもちろん、研究班のマネジメントや環境省でのプレゼンのしかた、評価委員会でのふるまいなど、一流の研究者というのはこういうものなのかと、本当に多くのことを教えていただきました。またゼミでは、院生の研究に対し、いつも本質的なコメントをし、あちこちで学ぶ機会を作ってください、メールの返信がすごく早く、何かやる時は励ましてくれ、人を育てるってこういうことなのかと、感動の連続でした。私は川上先生のお仕事のごごく一部しか存じ上げませんが、そんな川上先生に育てられた方々が全国に、そして海外にもたくさん散らばっているのを想像し、ひたすらすごいなぁと思うばかりです。

私は東大での任期が終わった後、福島県立医科大学に職を得たわけですが、それも川上先生が福島でのお仕事で作られた縁によるもので、そして今も、川上先生を慕う方たちと福島で一緒に仕事をしており、たまに川上先生の話をしたりします。きっとそんなかんじで、全国、各国に散らばった川上先生の教え子の方たちが、東大にいたときはもちろん、外へ出てからも支えあいながら仕事をしているのだろうと思い、そんなネットワークを作り上げた先生を尊敬し、そして自分もそのネットワークに支えられていること、心より感謝しております。これからはますますのご活躍をお祈り申し上げます。



深澤 舞子
福島県立医科大学健康増進センター 准教授

川上憲人先生からご指導いただいたこと

このたびはご定年退職、誠にありがとうございます。

私が健康科学・看護学科を卒業した2006年に、川上先生が精神保健学分野・精神看護学分野にご着任され、指導教員として修士・博士課程を通してご教授いただく幸運に恵まれました。博士修了後は、第一子の出産と夫の留学に伴う渡英を経て帰国後、学術支援職員として教室でお仕事をさせていただき、第二子の産休明けの2018年4月から2021年3月まで、特任助教としてお世話になりました。先生に対しては、いつまでも大学院生のような心持ちでいたなという反省も（今も）ありつつ、初めての常勤職をいただいて一緒に教員としてお仕事をさせていただく中で、改めて先生のご研究やご指導の姿勢から多くのことを学ばせていただきました。ご在職中に賜りました並々ならぬご厚情とご指導に、心より御礼申し上げます。

川上先生から掛けていただいた言葉の中でも特に印象に残っているのが、「北詰さんは自分の足で駆けずり回って、泥んこになったら帰ってきたら良いです」「RCTをやるならRCTを究めること」「名誉欲や出世欲がなくても、今のままやっていけば職は後で付いてくるから大丈夫」。修士論文も博士論文も、先生方にご紹介もいただきながら自分の足で臨床の方々にご依頼に伺ってデータを収集するという介入研究に取り組み、へとへとになるときもありましたが、その言葉を思い出しながら最後までやり遂げることができましたし、その後も研究を続けることができました。

陸前高田市消防団員の方々へのこころの相談事業では、私事都合で現地にご一緒にすることは叶いませんでしたが、立ち上げからの初期にコーディネーターチームとして参加させていただき、研究者・教育者だけではない先生のお顔を垣間見ることができたように思います。また、アニメ好きのご縁から、ジブリの久石譲コンサートのチケットを譲っていただいて先生のお嬢様と一緒に鑑賞に行ったり、先生が行かれた箱根のエヴァコラボ店の写真を（このときばかりはぐいぐいとお願ひして）送っていただいたことなども、思い出に残っています。

川上先生はつねに研究者・教育者としての広い視野をお持ちで、研究に取り組み推進される精力的な姿勢、たくさんの学生に真摯にご指導くださるシャープなまなざしに、いつも尊敬の念を抱いておりました。私も当教室で学生・教員として学ばせていただいたことを胸に、やっと一人立ちといえますか、まだ羽をばたばたさせているところではありますが、大学教員としてこれからも励んでいきたいと思っております。

川上先生がご退職されるということにまだまだ実感がありませんが、長い間お世話になり本当にありがとうございました。そして今後とも何卒ご指導いただけますと幸いです。これからはますますのご活躍と、先生とご家族の皆さまのご健康をお祈り申し上げます。



2008年 教室旅行



2009年 修論打ち上げ会



2019年10月30日 今村先生壮行記念写真



2020年3月24日 卒業生歓送会



稲垣（北詰） 晃子

東京医療保健大学医療保健学部看護学科精神看護学 講師

川上先生への感謝

川上先生、16年の長きにわたり大変お疲れ様でした。川上先生に初めてご挨拶させていただいたのは、確か2013年11月に仙台で開催された日本産業ストレス学会の会場でした。初対面にもかかわらず、図々しくも「私の祖父と川上先生の出身高校が同じ」ということをお伝えしたような気がします。そんな無礼な私に対しても、大変優しく、フレンドリーに接して下さったことがとても印象的でした。

その後、論文執筆のご指導、ストレスチェック研究班のお仕事、TOMHレビューチームでのご指導と、様々な場面で川上先生にご指導いただく機会に恵まれました。私は、大学、大学院ともに他大学の出身ですが、そのような立場でありながら先生にご指導いただきましたことを、大変感謝しております。現在も毎月参加させて頂いているTOMHレビューチームでは、川上先生のご指導はもとより、川上先生の門下生の先生方や大学院生の皆様の議論に、毎回大きな刺激を受けています。議論についていけないことも多い(ついて行けていないことがほとんど?)ので、毎回「もっと勉強しなくては!」と感じ、モチベーションを上げるきっかけになっています。

また、コロナ前には何度か飲み会の席で一緒にさせていただいたのも良い思い出です。本郷の中華料理屋さんで一緒にさせていただいた際、私が執筆した論文について、「結構citationされていて、素晴らしいね!」とお褒めの言葉をいただきました。とても驚き、恐縮するとともに、非常に嬉しかったことを覚えています。コロナが落ち着きましたら、もう一度先生と一緒にお酒が飲める日が来ることを心待ちにしています。ご退職後、少し時間ができましたら、ぜひ北九州へお越しいただき、海の幸と焼酎をご堪能いただければ幸いです。

最後になりましたが、川上先生の今後の益々のご活躍、ご健康をお祈りしています。これからもご指導のほど、どうぞ宜しくお願い致します。



日野 亜弥子

産業医科大学産業生態科学研究所産業精神保健学研究室 学内講師

川上先生、本当にお疲れ様でした。

川上先生、この度は本当におめでとうございませう。お祝いの気持ちを伝えようと思っても、何から始めてよいか、まったく整理ができない気持ちです。乱文をお許しください。

私は健康総合科学科の博士課程における3年間と、助教としての3年間、精神保健学教室でお世話になりました。短いようでもあり、長いようでもあった期間でした。はじめに、川上先生に出会って、人生が変わったと思います。職業人生のみならず、人生全般において、私が持っていた価値観とは全く違うものを、先生は与えてくださいました。それは時にわくわくするものであり、挑戦的であり、あるいは苦しいものでしたが、すべて含めて今の私の糧になっています。

また、研究者としてのロールモデルをお示し下さったことにも、深く感謝申し上げます。ロールモデルといっても、自分がそこにたどり着ける気は全くしません。しかし、そこにあるものとして意識をしながら、今後も仕事を続けていきたいと思ひます。

指導や学務をこなす以外に、プライベートな側面でも多くの時間を共有させていただいたことも思ひ出深く残っています。頻回に行われる飲み会はもちろんのこと、国際学会の合間の社会見学、また自分の結婚という節目にも立ち会っていただきました。これらも、川上先生との思ひ出をより深くする要因になっていると思ひます。

さて、定年退職という年齢上のイベントは、川上先生の研究者人生においては通過点に過ぎないのではないかと考えています。ご一緒にさせていただいている研究の中に、今でも走っているものはたくさんありますし、今後の計画も多く耳にしております。私たちよりも元気が有り余るように見受けられる先生の勇姿を、これからも後ろから追いかけてください。



渡辺 和弘

北里大学医学部公衆衛生学 講師

川上先生、大変勝手ながら人生の恩師と呼ばせてください！

川上先生、ご退職誠におめでとうございます。

私は2007年4月に修士課程に入学しました。当初は他研究室の配属でしたが、研究テーマ変更等のご縁で川上研究室配属になりました。修士2年から配属変更となり無事に修了できるかと不安ばかりでしたが、川上先生はじめ研究室の方々が優しく接してくださったのが昨日のように思い出されます。私の初仕事は「教室旅行の企画サポート」でした（当時M2が幹事学年でした）。高校の友達と旅行に行くノリで同期と旅のしおりを作り、旅行先の湯河原近くの海で先生と泳いだりするなかで「なんて居心地の良いところに来たんだ」と実感した新たな研究室生活でした。

いうまでもなく教育研究は世界最高水準。修士から英語論文を書くノウハウも学び、自身も修士論文を英語で書くという人生は想像もしていませんでした。国内外のゲストスピーカーを迎えたセミナー後、集会室での懇親会も研究室定番イベントで大変良い思い出です。博士課程までしっかりお世話になり、卒業後も学内外で先生とお会いするたび、いつになっても到底及ばない高いお立場ながら、時間のかぎり私や大学院生・学部生一人一人に声をかけてくださる姿勢をみて、いつも尊敬の眼差しを向けておりました。

一番印象深く残る思い出は、2011年3月11-12日に川上先生が大会長をされた第17回日本行動医学会学術総会の時のことです。初日のシンポジウム中、東日本大震災が起きました。会場の鉄門記念講堂も大きく揺れ、大変な事態となりました。どうにか無事に会場外に出て、解散後に学会を手伝っていた研究室スタッフは集会室に戻り、翌日の学会開催はどうするのか、余震はないかとネットニュースを見つつ不安な時間を過ごしました。

時間だけが経過していたある時、川上先生が「そろそろお腹も空くし気分を変えて飲みに行きましようか」と提案されました。多くのスタッフは判断に迷っていたところ、私が「行きます！」とつい言ってしまい、川上先生と大学近くの居酒屋「たまや」で飲み始めました。先生と2人で飲んだのは最初で最後でしょうか。時間とともにスタッフが一人、また一人と集まり、どこかで気持ちの整理がつかない部分はあるがいつもの教室の懇親会となりました。

博士号取得後も、私の当時の仕事関連で大変お世話になりました。ネパール大震災（2015年）後に現地の大学でレクチャーをお願いしたり、民間事務局を務めた「厚生労働省保健医療2035」では政策提言とりまとめの際、メンタルヘルス部分について急遽コメントも頂戴しました。

最近（2021年11月）に院生時代の友人 Roseline と久しぶりに研究室訪問しましたが、変わらず多忙ではあるが元気な姿を見られて大変嬉しかったです。人生100年時代。益々のご活躍を心より祈念いたします。本当におめでとうございます。

窪田 和巳

東京大学医学部附属病院企画情報運営部 特任助教



少年力とフットワークの軽さ

定年退職おめでとうございます。先生には、たくさんのことを教えていただき、学ばせていただきました。教えていただいたといいますか、私が勝手にすごいなと思うところは、先生の少年力です。先生は本当に、目を輝かせて研究に取り組んでいる姿がすごく印象的でした。それは、子供が目を輝かせて虫取りをしているようで、私の子供もすごく楽しそうに目を輝かせて虫取りをしているのですが、それと重なります。新しい発見を求めて、少年のようにイキイキと研究に取り組む先生のことを尊敬致します。

もう1点私がすごいなと思うところは、フットワークの軽さ、身軽さです。一緒にベトナムに行かせていただいた時ですが、リュックサック1つで、キャリーケースを伴わず、ベトナムに来られたときには痺れました。世界中をフットワーク軽く、飛び回っているのだと感じました。

若くイキイキした姿を見せていただき、研究者としての根幹を見せていただいたように感じます。

ご在任中はひとかたならぬご厚情とご指導を賜り深く感謝いたしております。今後ますますのご健康とご活躍を祈念しております。

栗林 一人

東京医科歯科大学精神保健看護学分野 助教



川上先生の更なるイノベーションを 心より楽しみにしております！

川上先生、ご退職おめでとうございます。精神保健の分野の第一線で常に輝かれている先生のお姿は、私が SPH 8 期に入学した時から、全く変わらず、むしろ年々勢いを増して、今後更に大きなイノベーションを起こされるのだなあ、と心から楽しみにしております。

医学の専門的なバックグラウンドのない私が、SPH に魅力を感じ、更に産業保健の分野に惹かれ、博士課程まで進むことができたのは、川上先生のお姿があったからだと心から思っております。「SPH は家族のようなところですよ」と、川上先生が SPH のオリエンテーションで仰った時に、とてもワクワクしました。卒業した今でも、本当に家族のような繋がりのあるところだと思っております。私が修士 1 年の時に、「櫻谷さんの良いところは、自分の分かったことや分からなかったことを、言葉にできることです。」と川上先生に仰っていただいた言葉が、何だかとても嬉しく、忘れられない言葉になりました。川上研究室で博士課程までに沢山の経験をさせていただきましたが、まだまだ分からないことだらけで、日々格闘しています。そんな時は、自分の強み(?)である、「何が分かっているかをはっきり言葉にする」ことを意識して、周囲に伝えて適切な知識や情報を得るようにしています。自分が川上研究室を卒業してから、いかに川上研究室の環境に守られていたかを痛感しながらも、川上先生に頂いたお言葉や指導を思い出して、今でも助けられています。



川上先生とメルボルン



川上先生とメルボルン2

TOMH 基礎コースに初めて参加した時、川上先生の「職場のメンタルヘルスは愛と法律からできている」という言葉に、(受講生の方と同様に)とても感動し大きく心を動かされました。産業保健の分野で、数え切れないほどの多くの研究を重ね、ご自身の倫理観を深められた先生は、このような境地まで達するんだ!!と感激したのと、ワクワク感が止まりませんでした。真摯に研究に向かわれ、自分の言葉で産業保健を語っている川上先生のお姿は、本当にかっこよく、心から尊敬致します。あれから、毎年、TOMH 基礎コースに関わらせていただき、川上先生のこのお言葉を伺う度に、今でも同じような感動の気持ちが沸きます。私は産業保健のほんの一部をかじったような研究しかできていないけれども、川上先生と同じ年齢になった時に、このような境地に達することはできるのか? 学生の時も、今でも、考えさせられることです。TOMH 基礎コースという、大きなプロジェクトを続けてこられた

川上先生のエネルギーや、リーダーシップは、多くの人に感動を与えていると思っております。

自分のことばかり述べてしまいましたが、私の中で、川上先生の存在は、常に大きく、いつもいつも追いかける存在、追いつくことはできなくても、一番の理想の先生だと思っております。今後の更なるご活躍をお祈り申し上げます。

櫻谷 あすか

東京女子医科大学医学部医学科衛生学公衆衛生学講座 助教



仰げば遙かに

先生とお話しする時は、いつも自分の背筋が少し伸びるのを感じました。

それは教員の前では学生は緊張するもの、という訳からではなくて、自分が普段は曖昧に済ませたり、目を背けてしまっている、多くは自分自身に関する問題が、先生との対話のなかでは明らかなものとして浮かび上がってくるからだったように思います。

例えば、難しい課題に取り組む日々の過ごし方。がむしゃらに頑張れば良いとは思いません。休むこと、楽しむことは頑張り続けるために必要なことです。

ただ、一切は過ぎていきます。

望んでいることがあって、そのための努力が嫌なわけでもなく、でも手が動かない。誰にでもあるそんな時間も、長く降り積もると次第に重くのしかかって、身動きが取れなくなることがあります。そして、そのまま長く過ごしてしまうと、いつの間にか機会が過ぎ去ってしまうこともあるかもしれません。

そんな時、先生は優しい言葉をかけるのではなく、厳しい指摘をぶつけるのでもなく、たった一つ、シンプルな問いかけをされます。

「もう限界ですか?」

違う、そんなことはない。単純な私はあっさりと積もった重石を忘れて立ち上がり、抗弁したくなります。問題の所在は分かっています。解決方法も、万全ではなくても選択肢くらいは、およその整理がついています。私はまだやれます、と。

では来週、進捗を報告してくださいと言って先生が去り、私の前には自ら明らかにした課題と、奮い起こされた気持ち、そして少し短めの期限……。

今回の記念集作成で、私の他にも同じような経験をした人が沢山いたことを知ることができました(実行委員のみなさま、本当にありがとうございました)。

教育で一番大切なことは本人をやる気にさせること、とよく言われますが、研究者としてのあまりに大きい功績のすぐ傍に、先生が教育者として残したものも、今になって遙かに仰ぎ見ることができたように思います。

今は私も教員として、足りないところがどれだけ多くても、課題と向き合っ一つ一つ進めていく人間でありたいと思います。長らくのご指導に心からの感謝を、そして今後とも鞭撻のほど、よろしく願いいたします。



下田 陽樹

岩手医科大学衛生学公衆衛生学講座 助教

川上先生のこと～大きな背中と早口に支えられて～

川上先生、このたびはご退職、おめでとうございます。「ひとまずの」、という留保付きの表現とはなりますが、これまで様々お世話になりましたこと、御礼申し上げます。

先生と初めてお会いしたのはいつだったのでしょうか。おそらく、東京大学大学院医学系研究科精神保健分野と、私の属する（公財）日本生産性本部の共同事業である、「健康いきいき職場づくりフォーラム」の発足に関する打合せの関連だったでしょうから、ちょうど10年ほど前だったかと思われます。覚えているのは、当時渋谷にあった社屋の会議室に、大柄な先生がリュックサックを片手に、「こんにちは～」という感じで気軽に入ってきた姿です。その後、先生から「健康いきいき職場づくり」についてのレクチャーをいただき、意見交換をしたわけですが、「東大教授」という肩書に似合わぬ？ カジュアルな姿が、やや高めで早口な語り口と共に印象に残っています。

その後、フォーラム活動を通じ、先生と接する機会が増えることになりましたが、ご一緒するたびに感じたのは、人に寄り添おうとする姿勢と知的好奇心でした。フォーラム内のある会合に出た際に、当方が準備不足で立ち往生しかけた時、横に座った先生が、「本間さん、僕にできることはありませんか」と声をかけてくださったとき、その大きな背中から出る温かみに心が支えられたことを今でも記憶しています。先生は覚えていないと思いますが、改めてありがとうございました。また、何か琴線に触れるものがあると、「お～、それは面白いですね～」「ん～、それはどういうことでしょうか～」、と早口で問いを重ねられる姿に、「ああ、この先生は常に何かに学ぼうという姿勢を持っている方なんだなあ」といつも感心させられました。

当方は仕事柄、フォーラム活動の会合や研究会等で進行役を務めることが多いのですが、「川上先生はどのようにお考えでしょうか」と予告なしに無茶振り？をしても、いつもの確なコメントを返してくださいました。その大きな背中や早口に、フォーラム事務局一同がどれだけ支えられてきたかわかりません。最近では、当方が異動の関係でフォーラム活動から数年離れ、再び戻ってきた2020年春に、おりしも起きたコロナ禍に関連して緊急セミナーを企画したとき、すぐに反応いただいた際にも、それを実感したものです。

そのほか、酒の席での楽しい語らいなど、エピソードには事欠きませんが、紙面が尽きましたのでこれくらいにいたします。まだまだお世話になることも多い中こういった原稿を書くのは面映ゆくはありますが、改めてこれまでのご指導の諸々に、フォーラムのメンバー共々感謝申し上げます。

本間 友貴

公益財団法人日本生産性本部 ICT・ヘルスケア推進部 主任研究員



川上先生と、「健康いきいき職場づくり」フォーラムと、私

この度のご退職、誠にありがとうございます。これまで、大変お疲れ様でございました。川上先生との出会いがなければ、今の自分はない、という方が多数いらっしゃると思いますが、私も間違いなくその一人です。先生と一緒に取り組ませていただいた「健康いきいき職場づくり」の活動は、職場のメンタルヘルス活動を大きく動かし、その動きは現在も続いています。先生とこの活動をご一緒させていただいたことは、私の職業人生において、大きな財産です。この場をお借りして、深く感謝申し上げます。

川上先生と初めてお会いしたのは、2007年7月、所属する日本生産性本部（当時は、社会経済生産性本部）主催の「メンタルケア研究会」にご出講いただいた時でした。職場のメンタルヘルスケアの問題を、福利厚生としてではなく経営課題として捉え、いきいきと働ける職場づくりを行うことで課題解決しようというコンセプトの月例研究会で、先生からは「マネジメントと健康の両立」というテーマでご指導いただきました。私は事務局ながら参加者同様に勉強させていただいておりましたが、学んだ内容を、感謝とともに先生にお伝えしたところ、すぐに励ましと勇気づけの言葉をお返しくださいました。この時のご返信はとても嬉しく、今でもはっきり覚えています。

その後2011年11月に、再びメンタルケア研究会にご登壇いただき、ここで私は「健康いきいき職場づくり」の構想を伺います。職場のメンタルヘルス活動を、本格的に一次予防へ、さらにはポジティブな方向へむけていきたいとの思いから、ぜひともこの活動を、企業や労働組合など、働く現場に広げていきたいとお願いしました。

ありがたいことに、川上先生からご快諾を頂戴し、島津明人先生と一緒に、また経営学の視点から一橋大学（現在は学習院大学）の守島基博先生にもご賛同いただき、東京大学と日本生産性本部の協働という形で、2012年12月に「健康いきいき職場づくりフォーラム」を立ち上げることができました。それから10年にわたる活動の中で、川上先生からいただいたお力は計り知れません。専門のご知見を提供いただくばかりでなく、多くの方々とのつながりを作っていただき、またイベントの度に開く懇親会では、楽しいお酒もご一緒させていただきました。

私はその後、総務部に異動し、フォーラム活動をご一緒することは叶わなくなりましたが、今は現場で、ストレスチェックを活用しながら、健康いきいき職場づくりを進めていこうと取り組んでいます。

川上先生とご一緒させていただき、フォーラムを企画し、動かしていったこと、とてもとても楽しかったです。振り返れば、事務局として至らないことばかりでしたが、常に温かくご指導くださり、また多くのことを教えてくださり、本当に、本当にありがとうございました。

これからも、引き続きフォーラムへのご指導のほど、よろしくご依頼致します。そしてまた何か新しい活動を、どこかでご一緒できることを心より願っております。



「健康いきいき職場づくりフォーラムのシンポジウムでご登壇の様子」



「フォーラム後の飲み会にて」



中村 美紀

公益財団法人日本生産性本部 総務部 課長

¡Muchas gracias!

La única emoción que deseo transmitir es la gratitud! Estoy deseando trabajar con usted, por favor.



有馬 秀晃
品川駅前メンタルクリニック 院長



いつも素敵な“わくわく”をありがとうございます！

ご退職おめでとうございます。

修士時代に先生と一緒にさせていただいた時（飲み会がメインだったかもしれませんが…）から早くも15年が経ちました。もともと博士課程へ進学することは考えていませんでしたが、先生方が岡山で実践されていた“現場に寄りそった研究”“実践を学べる場”“高度な専門職を養成する課程”に強く惹かれて、気がつけば受験勉強をはじめていました。先生との出会いをきっかけに、多職種で物事を作り上げる楽しさ、実践に根ざして粘り強く研究を行うことの重要性について知れたことは、私の人生にとってとても大きな経験でした。

博士課程へ進学した当初、先生から「東京には慣れましたか？」と聞かれたことがあります。その時の私は、心配には及ばぬと「慣れました！」と大きく答えましたが、先生は「いや、まだでしょうね」と呟いて、かわいいイラスト入りの“根津千駄木猫マップ”を渡してくださいました。細かな点まで気にしていただいたこと、今でも感謝しています（猫巡り、居候先の友人と楽しませていただきました!）。

博士課程の3年間、失敗ばかりでうまく過ごせたタイプではありませんが、学びを得て今に残ることはたくさんあります。大きな組織をまとめて1つのものを作ること、チームで動くこと、信念を貫くこと、自分のできることを着実にこなすこと、慌てず熟考する時間をもつこと、生活（わくわく）を楽しむこと、世界で行われていることに目を向けること、その場に参加するにはアクションを起こすということ、意見を言うこと、質問をするということ、それができるだけ知識を得るということ。苦労はいい経験であるということ。たまに父キャラを出すこと。

湯島のラーメン屋で一緒にいた時、ワクワクしながらずっとしゃべっていたら、案の定「よくしゃべるね」と突っ込まれ、自分についての気づきも深まりました。お土産にいただいたMIND THE GAPキーホルダーのインパクトも大きかったです（笑）。

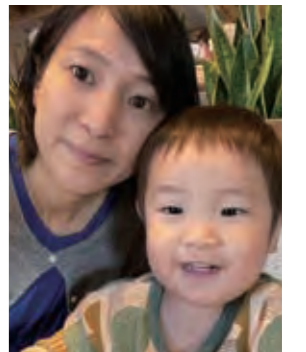
今でも、「わかりやすく伝えるには」ということに迷ったときは、こっそり先生の講演や発表に触れて、エネルギーをもらっています。

現在、私はEAPコンサルタントとして、質の高い取り組みを少しずつ着実に、誠実に実践しながら、京滋におけるあたたかな産業メンタルヘルスのネットワークを作っていくことを目指して活動をしています。地方での小さな取り組みではありますが、実践と研究を続けながら、自分らしい貢献のあり方を模索しているところです。

先生におかれましては、既に新たな活躍の場で、わくわくする取り組みを始められることをお聞きしました。これからもどうぞお体を大切に、引き続き情報発信いただけることを楽しみにしています。私はもちろん、変わらずこっそり学ばせていただきます。

馬ノ段 梨乃

京都府立医科大学大学院医学研究科精神機能病態学／株式会社ハピネス・アイ
客員講師／EAPコンサルタント



川上先生からの助け舟に感謝しています

川上先生、定年ご退職おめでとうございます。

私は先生が教室にご着任間もないころ、大変お世話になりました。ご多忙の先生には御記憶ないことと思いますが、私個人だけでなくある学会の国際化推進に貴重なきっかけを与えていただきました。

この学会は経営行動科学学会といい、組織行動論や人的資源管理を中心テーマとしています。先生が東大ご着任時、私はこの学会の国際学術交流担当の新米理事で、海外の研究者をお招きした国際学術講演会を年数回開催するミッションを与えられておりました。引き継ぎで、学会予算は限られているため、講師は海外から招聘せず国内に滞在中のしかるべき方を見つけて依頼せよと告げられ、滞日中の研究者をいったいどう発掘するのかと頭を抱えておりました。そのような折、川上先生がハーバード大のKawachi先生を教室50周年記念事業にお呼びするという情報が舞い込んだのでした。厚かましいなあと思いつつも、恐る恐るご連絡をさせていただきましたところ、Kawachi先生にもちょうどよいでしょうと、面識のない私の一方的なお願いをご快諾くださったのでした。

ご来日まで2週間余りというまさに泥縄状況でしたが、Kawachi先生との打ち合わせもほとんど拍子で進み、基調講演用のスライドもあつという間に届きました。ご講演のテーマは、Work Environment, Stress and Health: Japan versus West Comparative Perspectiveで、「経営行動科学」第20巻第3号、363-374(2007)に詳細が紹介されております。指定討論者のお一人は、同窓の原谷隆史先生がお引き受け下さいました。

学会としても異例の短期間での開催準備となりましたが、関係者の強い開催意欲に助けられ、また開催周知とともに参加申し込みが次々と舞い込み、通常の参加者数を大きく上回り大盛況となりました。怒涛のごとくすぎた2週間でしたが、講演会当日、勤務先最寄りの大岡山駅にKawachi先生をお出迎えしたときには、担当理事としてほっと胸をなでおろしました。

ご講演後の懇親会では、Kawachi先生が好まれた辛み大根蕎麦と八海山で大いに盛り上がり、その懇談をきっかけとして、学会での国際共同プロジェクトやシンポジウムの企画、国際学会との学術交流などが徐々に整備され定着していきました。本学会の国際化推進に向け、このような多くの可能性を秘めた貴重な機会を与えて下さった川上先生に、学会からもこの場をお借りして心からの感謝を申し上げる次第です。大変お世話になりありがとうございました。

末筆ながら、先生の今後のますますのご発展とご健康を心より祈念しております。16年間、本当にお疲れさまでした。



江川 緑
経営行動科学学会 顧問

「これは意外といけますねえ」

川上 憲人先生

ご退職おめでとうございます。

16年の長きに渡り、東京大学にて日本における職場のメンタルヘルスの領域を牽引してくださったこと、厚く御礼申し上げます。

先生にはじめてお目にかかったのは2004年6月16日。とある企画に際して上司の松本桂樹と共に岡山大学へ伺いました。貴重なお話を拝聴しただけでなく、その後の飲み会まで同席させていただき、帰りはなんと最終の新幹線でした。仕事で行ってどんだけ楽しんどるんだと、当時の自分に冷や汗を感じます。

その時も先生は産業領域で活躍できる人材の育成について話されていました。先生からのメールに「プレゼンの技術もぜひ拝見したい(笑)」と書かれていたのを先ほど発見し、「当時見せてなくてよかった…」とこも冷や汗です。

その後、松本や私が他の先生方からご指導を受けているのをそっと慰めてくださったこともありました。そのお言葉は、実は今も大事に保存しています。

一番鮮明に覚えているのは、若手の会の熱海合宿です。深夜、私どもワカゾー集団が固まって飲んでいるところに先生が入ってきてくださり、酔った私が先生のコップに酎ハイか何かを適当に混ぜて注いだものを、「これは意外といけますねえ」と言いながら笑って飲んでくださったのです。「先生に何を飲みとんだ！」と周りからドツかれながら、私は先生の懐の深さに感服していました。当然、これも冷や汗です。

研究面での社会貢献が全然できず、「現場で頑張る」と思ってやって来た私ですが、川上先生は偉大なる憧れとして、でも自然と親しみを感じさせてくださる存在として、自分の中にあります。その気さくさ、厳しくも温かい、懐の深さ。自分もいつか誰かに「意外といけますねえ」なんて優しく言えればいいなと思いつつながら、おこがましくも、心の師匠の一人として勝手に敬愛しております。

働き方が変わられても、これから益々のご活躍を確信しておりますが、お身体はどうぞお大事に、いつまでも素敵な笑顔で私たちを勇気づけてくださいませ。

長い間、誠に疲れ様でございました。

そして、これからもどうぞよろしくお願い致します。



榎本 正己
株式会社ジャパンEAPシステムズ 代表取締役

恩師との思い出

川上先生に初めてお会いしたのは2000年の秋でした。当時、先生は日本初となるメンタルヘルス指針をまとめられ、それを実践する専門職の育成を検討されていたらしやいました。私はというと心理学研究科の修士2年の学生で、働く人の心の健康に貢献したい、予防的な活動がしたい、との思いで、学ぶ場所を探していました。知人をつたって日本産業ストレス学会の懇親会で御紹介いただいた時、川上先生は私の話を聞きながら丁寧に聞いてくださり、翌年度、博士課程の学生として受け入れてくださいました。その年は川上先生が岡山大学に教授として赴任された翌年でしたので、自分は職場のメンタルヘルスを学ぶために川上研究室に入った初めての学生だったと思います。

専門職育成のプロトタイプとして、入学後は基本的なことから教えて頂きました。臨床を知るために、クリニックやEAPのインターン、認知行動療法の専門家のスーパーヴァイズを受ける道をつけて頂きましたし、視野を広げるために様々な専門家や海外の研究者の集まりや研修会へ参加する機会を与えてくださいました。知識やスキル向上のための「職場のメンタルヘルス(TOMH)コース」では、どのような内容が専門職養成に必要なかを一緒に検討させて頂き、当時准教授でいらした堤明純先生や、広島大学にいらした島津明人先生(川上先生を紹介して下さった恩人)と、2年間のコースにまとめていった日々がとても懐かしく、有意義な時間でした。仲間も増え、先生方と院生とで研究会後に毎週食事に行き、職場のメンタルヘルスのこと、お互いのこと、将来のことを熱く語り合ったのも良い思い出です。

コースが一通り終わり、鉄鋼会社で勤務をするようになってからも、先生にはケースや活動の一つ一つを御相談させて頂きました。「あなたの責任で自殺者が一人でも出たら、すぐに人を替えますよ」という厳しい御言葉に震えながらも、先生の指導を受けて必死に向き合ったからこそ、実戦形式で多くのことを学ぶ、大変貴重な機会になりました。ちなみにその後、事業場では自殺既遂者は出ませんでした。それまでの事業場の状態は決して良くはなく、休職の必要な従業員が続出して休復職の大きな山が生じましたが、これがまさにメンタルヘルス対策を初めて行うときに見られる「掘り起こし効果」でした。

その後、大手自動車製造業でも経験をさせて頂きました。川上先生が依頼を受けた全社のメンタルヘルス方針と体制づくりについて、専属の専門家として派遣された形でした。先生の御指導のもとで全社統一の方針と体制を作り、各事業場の産業保健スタッフや人事担当者を教育し、3年後に全社で復職成功率を向上させることができました。

出会った頃には学生だった自分も結婚し(披露宴での主賓挨拶では、お話の面白さから私の友人が大勢、川上先生のファンになりました)、気づけば当時の川上先生のお年を上回ってしまいました。川上先生の教えを受けた者として、今後はその理念を伝えていく側になっていくことが私の使命だと思っています。これまで20年余りにわたって一緒に活動をさせていただいておりますことをとても幸せに感じます。



小林 由佳

東京大学大学院医学系研究科精神保健学分野 客員研究員

川上憲人先生、ご定年おめでとうございます

長きにわたるお勤め、誠にお疲れ様でした。

これまで、元旦も深夜も関係なく 365 日 24 時間フル稼働で働かれてこられたかと思いますが、ご退職を機に、お身体を休める時間が生まれましたら幸いです。

偉大な川上先生にご師事頂けたことは、この上ない幸せでした。川上先生への感謝は語り尽くせないのですが、修士課程での感謝はこれまでもお伝え済みとし、修了後に感じた多くの感謝のうち 2 つを挙げさせていただきます。

私が博士課程への進学と一般企業への就職を迷っていた際、就職の背中を押して頂きありがとうございました。ずっと進路を迷っていたのですが、川上先生に「一旦就職するのも良いのではないですか」と一言頂けたこともあり、就職を選ぶことができました。実際に就職してみて、自分が思い描いていた理想が、如何に理想かということを感じています。過重労働が蔓延る企業で働き、環境改善しようにも業務量が多すぎてどうしようもない状況や、人事・産業保健スタッフに相談しても労働環境が改善されるわけではない状況を目の当たりにし、深い学びを得ています。

また、ストレスチェックをはじめ、川上先生が労働者のメンタルヘルス対策を推進してきてくださったことを、一労働者として感謝申し上げます。今は「メンタルが…」と上司に言うと深刻度を察してもらえるようになっていますが、それでも上司の「ワーク・ライフ・バランスって何のことか理解できないけど、そういうのがあるらしいね」、「残業時間の制限をかけるっていう考え方が昔はなかったからね」という言葉を聞くと、昔が恐ろしくなります。メンタルヘルスという言葉が普及しているのは、ひとえに、川上先生や川上先生がこれまで協働してこられた皆さまのご尽力の結果であると、感謝しております。

川上先生は今後も様々な形でご活躍を続けられると存じますが、いつかまたご一緒させて頂きましたら嬉しいです。その際に先生のお力になれるよう、これからも、川上先生から教わったことを社会に還元し、人々の幸せのために力を尽くしていきたいと思っております。

大変お世話になりました。末長いご多幸をお祈り申し上げます。



佐藤 菜々

PwC コンサルティング合同会社 コンサルタント

川上憲人先生へ 感謝とお祝い

川上先生、この度はご退職されるとのこと、大変お世話になりありがとうございました。心よりお祝い申し上げます。川上先生には、私が大学院の頃、“若手の会”や関連学会、研究会などを通して、はじめてお話させて頂き、論文で拝見していた川上先生と直接お話させて頂いたことは私自身のその後の産業保健や研究への関わりにおいて、大変大きなモチベーションとなりました。大学院生の私にとって、雲の上の存在であった川上先生が話しかけてくださったこと、多くのことと教えてくださっただけでなく、同じ目線でディスカスして下さる姿勢に大変感銘を受けました。研究は、文献を読み、緻密に解析を重ねていくだけでなく、現場を見て、広く意見交換し、視野をより広く、学際的視点を持つことこそが、研究の深みを増すことなど、学ばせて頂きました。先生と最初にお仕事させて頂いたのは、川上先生が中心となりご研究をされていた労働省「作業関連疾患の予防に関する研究」で、モデル事業の 1 つとしてお声かけ頂き、報告書の一部を記載させて頂く機会を提供いただいたことでした。研究成果をいかに社会に還元していくか、研究者としての信念として持つべきところと、社会への還元のために折り合いをつけていくところ、バランスをとっていくことの重要性も学ばせて頂きました。その後、20 年近くが経過いたしますが、学会や研究会など、様々な機会でお声をかけていただき、また、ご指導くださる中で、研究に真摯に向き合うことの大切さと、楽しさ、ともに教えて頂きました。貴重なご助言、ご指導をくださいましたこと、私にとっての大きな財産となっております。本当に長い間、ありがとうございました。心より感謝申し上げます。今後のさらなるご活躍をお祈り申し上げます。



島津 美由紀

ソニーピープルソリューションズ（株）臨床心理士

川上先生にいただいたもの

この度は川上教授のご退職、誠にありがとうございます。

川上先生の16年間の精神保健学教室でのご功績に、そして先生がなされたことそれぞれが社会に資するものになっていることに、心からの敬意を申し上げます。

たくさんの方が先生の偉大なご功績を述べられていると思いますので、私は自分の体験を通じて、先生への感謝を記したいと思います。

私は川上先生が着任された2006年夏に大学院受験をしました。初めて先生の研究室を訪問した日、先生は私の社会人経験で感じた想い、育児しながらの30歳の挑戦を、笑顔で歓迎して下さいました。あの時先生が前向きに受け止めてくださらなければ、今の私はいないと、改めて深く感謝しております。

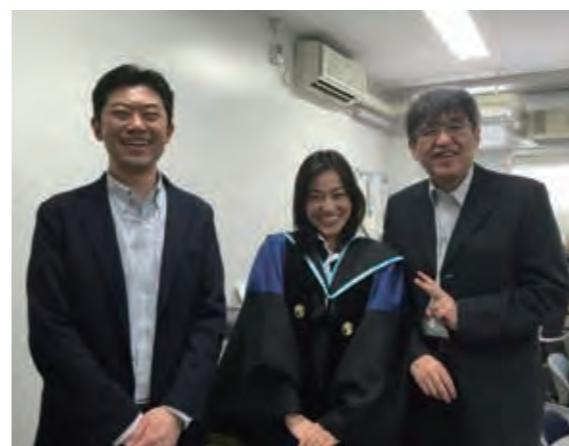
川上研究室にお世話になった8年間で3回、出産を経験しました。となると在学中、私はほとんど妊娠・出産・授乳を行っていたこととなります。私にとって研究と家庭との両立は非常に困難でした。決して優秀ではない上に、教室に滞在できる時間も研究に割ける時間も限られました。今考えると、先生は真逆の境遇（＝優秀かつ男性）でいらしたにも関わらず、私の状況を真からご理解くださっていました。それはその後、育児される院生が多く所属され、しかもその方々がのびのびとご活躍なさっていることから、お分かりいただけると思います。

もう1つ、修士論文に関して、印象深くありがたい思い出があります。

論文作成のイロハも知らずに入学した私は、指導教官である島津明人准教授に大変お世話になりました。特に初稿の頃は、自分の文章がどこにもなくなる程、真っ赤な添削をいただきました。ただいつも島津先生と密なやりとりをしていたため、川上先生のご指導を受けている印象はないままでした。ある日、何気なく川上先生とお話した際に、先生が私の論文内容を、詳細に把握されていることに驚きました。その時は不思議だな、と思うだけでしたが、なんと川上先生は、多くの研究や論文指導を抱えていらっしゃる中、私の知らないところで、私の論文にまで赤を入れてくださっていたのです。修論も終盤に差し掛かる頃、その事実を島津先生からお聞きしました。ありがたくて涙が出ました。

私は今、大変微力ではありますが、川上先生から戴いたものを少しずつ世の中に還元するべく、精神保健を社会で実践する活動をしています。在学中幾度となく川上先生が口にされていた「フラット」という言葉そのままの、あたたかい雰囲気である精神保健学教室で学んだこと。そこで出会った方々のご縁。全ては川上先生から戴いたプレゼントです。心から御礼申し上げます。

これからの川上先生の益々のご健勝とご活躍を、心より祈念しております。この度は本当におめでとうございました。



島田 恭子
一般社団法人ココロバランス研究所 代表理事

3つのきっかけに感謝して。

川上先生、このたびは、大事なお仕事のひとつの区切りを迎えられましたこと、おめでとうございます！

先生と出会えたことは、私の人生を変えてくれました。せっかくの機会ですので、なかなか言葉にする機会のない感謝の気持ちを伝えたいと思います。先生とは3つのきっかけでご縁をいただいたと思っています。

先生に初めてお目にかかったのは、2008年2月の京都でした。電話カウンセリングプロジェクトのLudman先生のワークショップで、先生と背中合わせで、「もしもし」とロールプレイをさせていただきました。修士課程1年だった私は、まだ川上先生のこともちんと存知上げず、その後、産業領域に進みたいという気持ちが強くなってきて初めて、日本の職場のメンタルヘルス研究を牽引している先生なのだと知りました。2つ目のきっかけは、理化学研究所筑波事業所の心理士募集のタイミングです。筑波大学大学院の研究室のドアの求人紙の張り紙を見て、物凄く興奮したのを覚えています。先生と同じ事業所で、近くで産業精神保健の現場に携わっていることは私の宝物です。3つ目のきっかけは、就職のときに、先生にお声がけいただいたこと、そして就職してからの3年間に様々なプロジェクトに関わらせていただいたことです。

最初に任せていただいたTOMHプログラムの立ち上げと、陸前高田市消防団のプロジェクトは、教わろうと思っても教わる機会をいただくのが難しい企画運営やコーディネーターとしての役割を、経験しながら学ばせていただきました。就職して初めて購入した書籍は、心理学の本でも職場のメンタルヘルスの本でもなく、大学に提出するTOMHプログラムの企画書を書くための「企画書の書き方」についての本でした。あの3年間で経験したことのひとつひとつがあるからこそ、今の自分があると思っています。そして、客員研究員という立場になってからも、続けて関わらせていただいているプロジェクト、新たなチャレンジングなプロジェクトで先生とご一緒できることは、ワクワクしたり、やりがいを感じながら力を尽くせる、本当に幸せな場です。

他にも、知床や奄美、上海、ソウル、アデレード、アムステルダム、メキシコシティやグアダハラなど、ここには書ききれないくらい、国内外さまざまな場所で仕事の話もそれ以外の話をする機会にも恵まれました。ご退職に際して、改めて心からのお祝いとお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございます。そして、新たな先生のページが開かれる瞬間でもあると思っています。これから益々の活躍を心から願うとともに、これからもご一緒させていただく機会を楽しみにしております！



関屋 裕希

東京大学大学院医学系研究科精神保健学分野 客員研究員

東日本大震災の被災地訪問のこと —福島第一原発見学と双葉郡楢葉町役場訪問—

川上先生には、当 NPO 法人・保健科学総合研究会（初代会長・青山英孝、現会長・清水嘉与子）に所属して産業看護職に支援いただいております。

東日本大震災は大きな出来事で、同じような大変なことを日々受け生きている私たちは、川上先生の明るく前向きな姿勢と人間性に多くを学んでいます。

私は厚労省定年の年に、被災地派遣は長期でないと進まないということで、迷わず福島県に行きました。住居が確保できないまま寝袋をもって、住民優先の仮設なのに「仮設でいいです」と恥ずかしい発言をしていました。1年間のつもりでしたが、5年間原発のある町楢葉町役場で支援しました。

仮設訪問は単独です。東北住民との初めての出会いは、初老のなんでもお見通しという方で怖かったです。「こんにちは、楢葉町に来ている保健師の多田です。・・・とっても、大変なことがあったのに、いい顔をしていますね。・・・役場にいますので、こんな人がいると知ると話もしやすいのでご挨拶です」というと「おーいお母さん、この人は違うよ。同じことを聞かないよ。」と妻を呼んでくれました。うつの妻との長き付き合いの始まりでした。「私の力は小さい、でも一人の人が良かったと思えることを積み重ねていこう」と一歩が踏み出せました。

仮設に閉じこもっている男性陣を引き出す、椅子作り、しめ縄作り、柿の収穫など、住民同士に先生になってもらう発掘役となった私は、顔を見ただけで安心、声がきけるとほっとするという存在で、血圧等自分たちで測りあって健康は互いに確認してもらいました。そうしたら住民の情報が入ってくるようになりました。「もろもろ塾」と命名したこの会は、今も町づくり役を担っています。

そう、川上先生と教室の生徒さんたち、NPO 研究会が見学の際、車で案内してくれたのはこの塾の人でした。

日時：平成 29 年 10 月 14 日 福島第一原子力発電見学 双葉郡楢葉町住民福祉課との懇談

参加：川上先生と研究生 NPO 法人清水会長ほか 総勢 10 名

- ・原発は、今どうなっているのか、どうするのか興味があり、見学できるとは知らなかったので実現。
 - ・現地の生の声が聞きたい、放送されていない部分などもあるのではないかと思います。
 - ・福島医大との協力で、福島県の一般（避難区域外）自治体の住民の健康調査を過去 6 年間続け、その中で「放射線健康不安」がゆううつや PTSD 症状と関連していること「放射線健康不安」は改善しつつあるがそのスピードはゆっくりであるなど見いだした。元である福島第一原発が今どうなっているのか一度自分の目で見ておきたいと思った。
 - ・国のエネルギーの施策である原子力事業のリスクをしっかりと見ておきたい。
- 第一原発は、
- ・一步一步であるが廃炉に向けて取り組みが進んでいる ただ終わりになき作業であるとも感じた。
 - ・まったく処理が進んでいない第一号基、線量計の針が振り続ける二号基を見ると巨大なる負の遺産との戦いがあと何十年も続く、廃炉に向けて、日々努力している従業員に感謝。
 - ・水素爆発のあったすぐ近くまでバスで入ることができた。

楢葉町役場では

- ・多額の復興予算を少ない人数で回す大変さ、若者がまちづくりに結集し取り組んでいる姿に感動。
 - ・予算は膨らむが、正規人員の雇用には回せず、職員に業務負担が重くなる仕組みになっている。
- 町を活性化するには住民や NPO、事業者などを活用することが大事であると理解できた。
- また課題は、「放射線健康不安」ではなく「原発トラウマ」（また原発が制御不能になるのではとの不安）なのかと思いました。未帰還住民の方のトラウマを減らすお手伝いができるといいのですが考えてみます。
- ・6年半たっても、まだ生々しい被災地だった、津波の被災地と全く異なる。
 - ・毎年とはいかなくても、長く訪れ続けたい。
 - ・楢葉町、あるいは楢葉町の NPO などに、東京大学の学生にインターンシップに行かせてもらえると、学生にとってもいい経験になると思いました。またご相談させてください。



楢葉町役場にて



多田 芳江

NPO 法人・保健科学総合研究会 専務理事

川上憲人先生のご退職に寄せて

川上先生には日本産業ストレス学会や日本産業精神保健学会に参加し始めた2003年か2004年頃から、節目節目で幾度となくお世話になりました。今でこそこれらの学会には産業医科大学の関係者が多数参加していますが、当時はまだ多くなく、産業医科大学以外の方々とネットワークを構築する他流試合のつもりで参加していました。

川上先生は直接の教え子にあたらぬ私にも気さくに接していただき、2006年3月から計3回、熱海での「若手の会」合宿に参加させていただいたのは、いま振り返ってもたいへん貴重な機会でした。三柴丈典先生など様々な方と知り合ったのもこの合宿でした。

2008年末には岡山での忘年会に誘っていただき、当時の勤務地であった愛知から福岡へ帰省する新幹線を途中下車して出席しました。ほとんど飲酒しない私でも、ウイスキーの香りの違いはある程度わかりました。

2010年夏、厚生労働省労働衛生課で働き始めたときは、ちょうど「職場におけるメンタルヘルス対策検討会」(全6回)の途中で、後のストレスチェック制度につながる議論が始まっていました。この検討会の参集者には、産業医科大学からは堀江正知教授が、そして川上先生をはじめ学会や研究会でお世話になっていた方々が複数いらっしゃいました。当時の私は厚生労働省職員としては右も左も分からなかったものの、産業保健分野出身の人事交流者として、当初案であった「うつ病のスクリーニング」と最終的に採用された「ストレス要因とストレス反応の評価」の違いなど、論点および参集者のご意見が関係各所に正確に伝わるよう努めました。

その後、川上先生が日本産業ストレス学会の理事長、さらには日本産業衛生学会の理事長に着任され、現場の産業医に戻った私も両学会の会員として毎年何らかの形で一緒にいる機会がありました。特に産業ストレス学会においては、学会主催の研修会を年1回から2回に増やすなどの変革を主導され、教育研修委員長の種市康太郎先生らと一緒に私も2期6年間にわたって活動させていただきました。そうしている間に川上先生がもうすぐ定年と初めてうかがったときは「もうそんなに年数が経ったのか」と驚き、この原稿を書いている2021年11月時点でも実感がわかりません。

川上先生、長い間お疲れ様でした。そして、遠くないうちに場を変えてまたご指導いただく機会があるかと存じますが、そのときは改めてよろしくお願いいたします。



田原 裕之
沖縄科学技術大学院大学 産業医

ピッと凛々しく生きてゆきたいです

定年退職、おめでとうございます！これも川上先生にとっては通過点であり、今後益々活躍されることと思いますが、この場を借りて育てていただいた感謝とそれを反映させた今後の抱負を述べさせていただきます。



私は川上先生の前任校である岡山大学で博士課程の学生として先生の指導を受け始め、2006年からは、特別研究学生や客員研究員として教室の方で研究活動をさせていただきました。次の時代を担う優秀な院生の方々やサポートティブなスタッフの皆様、国内外の著名な研究者と交流できたことなど、とても恵まれた環境で博士課程を過ごすことができ、自身の人生の大切な土台になりました。

特に、世界精神保健調査のプロジェクトに関わらせていただき、ハーバードのKessler教授とも一緒に論文を書いた経験は、今後自分がどんな道に進もうとも、揺るがない強みとして残りますし、次の世代にも何らかの形で伝えていきたいと思えます。研究者として、また教育者としても川上先生のマネジメント

の偉大さを身近に学べ、研究者人生のよいスタートを走り出すことができました。

そんな得難い経験をさせていただきながら、現在私は論文を書き続ける研究者の道から移行し、1民間企業のサラリーマンとして、雑多な業務に埋もれる日々を送っております。そんな中でも博士課程で培ったデータ分析技術や精神保健疫学、職場メンタルヘルスの知識が業務で活用できています。前職の労働安全衛生総合研究所で経験した、学術知見を政策に結びつける仕事でも、川上先生より受けた教育を可能な限り活用し、社会に還元することができました。今のような環境、また今後別の環境に移行したとしても、博士課程を通して得た矜持を持って、人々のメンタルヘルス向上のために活動し、次世代に伝えていければと思います。それがどういう形になるかはまだ模索中ですが、まずはデータ分析技術をさらに磨きつつ、技術系同人誌作家としての活動から始めます。

人生の幸福につながるものは何かについても、多くのことを学びました。川上先生が時折開催されていたアニメカラオケの会に参加させていただいた経験も、自身の生きたい道を見つけることに役立ったのです。就職する前に、もっと凛々しくあるためのポリシーを奮い立たせる応援歌を歌って頂いたことは一生忘れません。今後どんなピンチに遭遇しようとも、あの歌を口ずさみながら飛び込んでいこうと思っています。



土屋 政雄

株式会社アドバンテッジ リスク マネジメント 主任研究員

ご退職、おめでとうございます！

川上先生、定年退職おめでとうございます。長きに渡るお勤め、お疲れ様でした。

先生に初めてお会いしたのは、2014年に井筒先生にご紹介していただいた時でしたが、大学院は川上先生にお世話になりたい、とその場で決意したことを今でも鮮明に覚えています。

運よく入学させていただいてからの2年間はとても密度の濃い時間で、川上先生からはたくさんのことを学ばせていただきました。特に私は、大学が文系だった上研究をしたこともなく、文字通り右も左も分からないところからのスタートでしたが、入学当初から先生が丁寧に指導して下さったことが、今の私の人生に繋がっていると実感しており、深く感謝しております。

また、川上先生が国内外の研究者やパートナーとのコミュニケーションを取っておられる姿は印象的でした。相手へのリスペクトを全面に出しながら、研究者としてのご自身のスタンスは明確に伝えた上で、目的に向かった議論を進められる様子を何度も間近に見せていただくことができたのは、とても大きな学びとなりました。現在私は本業の傍らで院生時代からの活動でNPOを運営していますが、その時の学びが今も血肉となって生きています。

川上先生に感謝していることは書ききれないのですが、最後に、私の自由奔放な生き方に対しても、常に温かいお言葉をかけていただけたお陰で、今の私があると思っています。研究を続けていくべきか、社会で実装側に回るか悩んでいた時も、「社会実装を進める人材を出すのもSPHのあるべき姿だ」と背中を押していただきましたし、その後も教室にお呼びいただいた際なども、折に触れてこのような生き方についても認めていただけたことは大変ありがたく思っております。私事で恐縮ですが、お陰様で、21年12月からは、医療分野を担当する部署の管理職として、研究者と共同でサービスの検討、実装を進めることとなりました。どのような立場でも、川上研の卒業生として恥じぬよう精進し、先生の教えを忘れずに公衆衛生に資する活動を続けていきたいと思えます。

改めて、先生の方で学ばせていただいたことに感謝申し上げるとともに、ご退職後のさらなるご活躍と、ますますのご健勝と末永いご多幸を心よりお祈り申し上げます。



任 喜史

アクセンチュア株式会社 ビジネスコンサルティング本部 マネジャー

川上先生との御縁を振り返って

川上先生この度は御退職おめでとうございます。精神保健学・精神看護学分野の教授に加え、専攻長、産業衛生学会の理事長等学内外での多岐にわたるお仕事大変お疲れ様でした。

私自身は川上先生にお世話になる経緯と在学時よりも修了後大変お世話になっている点で特殊な事例と思いますので、これまでの先生との関わりを振り返りながら日頃の感謝を申し上げさせて頂きたいと思います。

川上先生とは2007年に公共健康医学専攻（SPH）の1期生として入学して以来の御縁となります。私の入学年度は当時の健康科学・看護学専攻の入試で受験した者と、新設のSPH入試を受験した者が入学後に合流する特殊な年度で、私は前者の入試で精神保健学分野とは別の教室を志望して合格し、その教室でお世話になっておりましたので、入学後の精神保健学Ⅰの講義が川上先生との御縁の始まりと記憶しております。

上記の精神保健学Ⅰの内容が非常に興味深かったことと、SPH入学後にさまざまな心境の変化があったこともあって、1年の夏にSPHとして所属教室を再度志望する制度となったため、仮配属になっていた教室から精神保健学教室に移らせて頂いたのですが、その際に元の教室にも川上先生にも根回しをすることなく半ば押しかけるような形でお世話になりましたので、川上先生にはいろいろな面でご苦勞をおかけしたのではないかと考えております。正式に精神保健学教室所属が決まった日に教授室にて川上先生よりメールアドレスの発行等の教室での受け入れのための手続き面の対応をして頂いて、安堵した気持ちになったのを記憶しております。当時の川上先生に受けた印象として記憶に残っているのは、休日早朝深夜問わずメールのレスが非常に速いことと、統計学や統計ソフトの実務にもお詳しい点でした。また、教養学部の卒論で扱っていたのが項目反応理論という非常にマニアックな統計手法だったのですが、ユトレヒトワークエンゲージメント尺度(UWES)の原著と日本語版の項目反応理論を使った尺度特性比較というぴったりの研究テーマを与えて頂きました。当時はモチベーション面で調子が良くない時期でしたが、先生方のサポートもあり何とか課題研究を完成させることが出来たと記憶しております。

修士修了後は金融関連の分野に就職したため、一旦川上先生との接点もなくなりましたが、4年後にEAP会社に転職をした頃から学会等お目にかかる機会が増えました。ちょうどストレスチェック制度義務化の検討が始まった時期でもあり、厚生労働省の検討会で識者としての川上先生の姿を見ることが多くありました。

その後、行動科学やHRテックを活用した企業を創業し、創業間もない実績のない段階で共同研究などにお声掛け頂き、大変有難く思っております。企業との共同研究で一緒して、川上先生が共同研究先の企業の担当者と巧みにコミュニケーションされているのが印象的でした。弊社としては機械学習や高度な統計解析の人事や産業保健分野への応用が主業務なのですが、川上先生はそういった新しい技術にも理解を示して頂けるので私としては非常に有難く思っております。

今後も諸方面でのさまざまなお仕事があるのだと推察致しますが、どうかお体にはお気をつけて頂き、今後のますますのご活躍とご健勝を心よりお祈りし、お祝いの言葉とさせていただきます。

宮中 大介

株式会社ベターオプションズ 代表取締役



2003年11月のある日、私達は出会った

2003年11月のある日、私は岡山大学医学部鹿田キャンパスの基礎研究棟7階にある衛生学教授室を訪れた。次年度からの大学院コースの内容を確認し受験したい意向をその時の教授にお伝えするためだ。年齢38になってから、卒業大学の大学院ではない基礎研究の大学院（ましてや社会人入学ではなく専攻での）入学は、当時、私が知る限りでは、すでに臨床を経験した医者としては稀なキャリアパスだった。が、私は詰んでいた。

小児科医として卒業大学の医局に入ったものの、あまりの労働環境に、「立ち去り型サボタージュ」してたのだ。医事新報で見つけた生命保険会社での仕事に就いていたものの、医師たるものに期待される業務に、「これは一生続ける仕事ではない」と気づき、この先どうするかと考えていた時、メンタル的に病んでいく社員の対応に支社産業医として係わり、「これかもしれない」と思った。

そういえば、寝ずの当直明けに普通に日勤業務している時に「医者だって労働者だよな？ 労働者としての医者の働き方、だれが管理してくれているんだろう？ この働き方、普通じゃないよね。だけど誰もそんなこといわない、ユニオンもないし、どうしてなんだろう」って思っていたじゃないかとさらに覚醒し、「産業医、メンタルヘルス、(忘れたがその他いくつかの語句)」というキーワードで、勉強・研修できるところ検索したら、ヒットした。それが、岡山大学衛生学川上憲人教授の教室だったのだ。

どきどきで挑んだ教授との面談、何をどのようにアピールしていいのかわからず、とりあえず、自分の小児科医としての経歴と腎疾患のサブスペで研修していた旨伝えたところで、目の前の教授は不機嫌そうに「それがこの教室とどういう関係があるわけ？何がしたいのかまったくわからない」と告げられた。(終わった・・と思ったが、気を取り直して)産業医の研修を一からしたいこと、医療現場(とくに医師)のメンタルヘルスについて勉強し医師の労働環境を変えるための何かを提言したいことを伝え、最後に蛇足的に、「一度、1年半ほどイギリス圏へ語学留学しています、経歴に穴が開いているのはそのためです。なので、この年齢ですが、ある程度の英会話に慣れましたし、大学院入試科目である英語の試験は大丈夫かと思えます」と伝えたところ、目の前の教授の顔色がサッと変わり、以降、かなり好意的に対応していただけた。(教室に無事に入学した後に思ったのだが、2004年以降、教室は国際学会を開催するなど非常に海外の先生方との交流が多く、英会話がある程度できる大学院生を増やしたかったのか・・と)

こうやって川上教室で勉強することができた私は、「目から鱗」の知己、経験に触れることができた。「集団として評価し介入する」疫学的アプローチは、医学部での勉強や小児科実臨床ではまったく知らなかった。EBMが声高に言われる時代となり、それともマッチして、私は全く抵抗なく自分にとっての新しい学問：疫学、産業ストレス学(産業現場でのストレスを心理学的に測定し評価する手法の研究と介入法の研究)に触れ、没頭した。その後の数年は、川上先生の知るところでもあるが、先生がもっと上を目指して東大へ移られ、私も無事、大学院を卒業させてもらってからは、だんだんと疎遠になり、今に至っている。

現状の私は、大学院入学当時の思いも薄くなり(博士論文で、医師の労働環境に対して一定の提言

をさせてもらったが)、川上門下生としては非常に劣等生の道を歩んでいる。もう先生には忘れられた存在かもしれない。このメッセージを書くにあたり、このような現状であるため最初はかなり躊躇したが、私の人生の中で、普通に臨床医をしていただけではわからなかったことを知り、様々な出合いや知己を増やす機会を与えてくれた、懐深い川上先生に、心からの感謝の意を表すため、重い筆をとった。



梅原 桂

兵庫県予防医学協会 パート健診医

川上憲人先生退職お祝い

川上先生 御退職おめでとうございます。

ご無沙汰しております。本当に温かく見守って頂き、ありがとうございました。思い返してみますと、昨日のように感じますがもうずいぶん時間は経ってしまいました。今でも先生の優しく穏やかな笑顔が懐かしく思い出します。

2002年に岡山大学大学院、衛生学・予防医学分野の教室の窓口担当の先生にメールを送り、自分の様な経歴のものでも受験は可能でしょうかとおたずねいたしました。受験資格は大丈夫ですが、教授に聞いてから再度連絡いたしますとの返事をいただきました。その後、教授が面接をしますので教室に来てくださいと、日時を指定して下さいました。当日、とても緊張して伺ったことを思い出されます。待っている間、年甲斐もなく心臓がドクドクしておりました。ところがお会いした川上先生は、気さくで、穏やかで、ホットしたのを憶えております。学問の道を歩んで来られた方の懐の深さを感じたものでした。翌年2003年4月には無事、先生の研究室仲間となることができました。乗車時間2時間半の通学のJRも通っている間には、楽しみの火曜日の研究会に二度ほど台風、霧の影響で行けなかったことがありました。毎週火曜日の研究会は、新たな考え方や、他の研究室仲間の発表など刺激をうけました。

研究だけでなく、旅行、花見、レガッタ、同門会、国際学会出席、さらに教室主催の国際学会開催なども大いに刺激を受け、良いおもでとなっております。苦しいときもありましたが、先生と研究室仲間と共に、充実した学生生活を送ることができました。思い出の写真も一緒にとのことですが、他の研究室仲間は先生とのツーショットがありますが、私は後ろだったり小さかったり良いがありません。またお会いできましたら、必ずや先生とのツーショットを撮りたいと思います、その日を楽しみにしています。

一つの節目でありますので、退職のお祝いの言葉とさせていただきます。今後益々のご活躍をお祈りしております。



下司 政代

岡山大学大学院医歯学総合研究科衛生学・予防医学分野博士課程修了生

感謝

川上先生、ご退職誠にありがとうございます。

私は、2001年より岡山大学大学院衛生学・予防医学分野に在籍させていただきました。当時の私は北海道大学大学院社会医学分野博士課程の大学院生で、論文作成途中で休学をしていました。復学に際して、岡山大学の特別研究学生として受け入れていただき、また、川上先生にご指導いただいたおかげで、無事に博士課程を修了し、学位を受けることができました。

その頃の教室の様子を振り返ると、先生が教授に就任されて2年目で、大学院生が増えていく活気ある時期でした。疫学や統計学などの勉強会に参加させていただいたり、学会発表の機会を与えていただいたり、多くの経験を積むことができました。私は職業性ストレスとストレスホルモンについての研究を行っていましたので、以前から川上先生が執筆された多くの論文を読み、そして、その先生からご指導いただいた年月は、求めても得がたい貴重な時間でした。本当にありがとうございました。

2005年には川上先生が会長をされたICOHの国際会議の運営に参加させていただき、2007年には「職場におけるメンタルヘルスのスペシャリスト Book」の編集に関わらせていただきました。プロジェクトには川上先生を中心に一致団結し、打ち上げにも一致団結、盛り上がり楽しかったです。川上先生が東京大学に移られた後には、職場のメンタルヘルス専門家養成プログラム(TOMH)の「疾患別の対応」の講義を2012年から2016年まで担当させていただきました。川上先生に出会ってからのことを思い返しながら、いかに多くの成長する機会を与えていただいたのかを改めて実感しています。

私は、現在、一般財団法人淳風会の精神科外来とメンタルサポートセンター(EAP)で仕事をしています。外来では精神科医として、メンタルサポートセンターでは産業医として、それぞれの立場で、今も職場のメンタルヘルスに関わる仕事ができていることに感謝しています。私が精神科医になった頃は、精神科医療は三次予防が中心だったように思います。今では、高ストレス判定を受けた方にセルフケアを伝えたり、職場の勧めで早期に受診された方を診察したりなど、一次予防、二次予防が中心になってきています。この精神保健・医療における大きな変化は、川上先生の偉大なお仕事の成果であり、多くの働く方々がその恩恵を得ていることを日々の仕事の中で感じています。

ご退職された後にも、川上先生は日本だけでなく世界の産業精神保健を牽引し続けていかれることと存じます。先生の今後のご健勝とますますのご活躍を心からお祈りしています。



近藤 恭子

一般財団法人 淳風会
メンタルサポートセンター長

川上憲人先生に感謝をこめて

川上先生ご退職おめでとうございます。私は社会人として入学し、川上先生から研究の指導を受けました。今でも大学での教育に従事できているのは先生のお陰です。研究に取り組むことの難しさや楽しさを教えていただきました。と、言っても入学時は英語論文の読み込みが難しく、最初の課題である [brief report] が書けなくて、自身の英語力のなさに落ち込む毎日でした。博士論文を英文で仕上げる過程で簡単な文法に間違いがあり何回も指導をしてくださり、できの悪いおばさん学生の指導は大変だったと思います。でも、不快な表情は一度も見せないで、根気強く指導をしてくださいました。先生の指導姿勢は私の学生指導に活かしています。

大学の院生部屋には勉強するコーナーと、院生や先生方と交流するコーナーがあったのですが、学ぶ時間とリラックスする時間といったオンとオフの切り替えの大切さを教えていただきました。今でも仕事に行き詰まった時やアイデアが浮かばない時は、気持ちの切り替え方法がうまくいっているかを自分に問いかけています。

在学中は国際学会に参加する機会を与えてくださいました。川上先生がシンポジストとして英語で何不自由なく議論している姿にあこがれ、自分も英語力を付けなくてはと思ったのですが、いまだに向上していません。ある国際学会では、おばさんパワーを全開し、身振り手振りでポスターセッションに参加していたのですが、その様子を見ていた川上先生に驚かれたことを今でも懐かしく思い出されます。

博論の研究テーマを見出すまでに時間がかかり、何回もテーマの見直しをしましたが、関連したキーワードを的確に指摘して下さり、日本人女性コメディカルワーカーへのストレスマネジメントに関する内容に取り組むことができました。この研究が基礎となり保健福祉従事者を対象とした職場のメンタルヘルスに取り組んでいますが、方向性に迷った時は先生の執筆論文や書籍を手にとり、少しずつ前に進めています。

川上先生や川上研究室で出会った先生方、同期や先輩の方々に出会えたことは私の宝となっています。ある方が、「研究者として一番油が乗っていたのは70歳の時だ」とおっしゃっていました。ご退職されても、ご健康に留意し、研究者としての益々のご発展をお祈りいたします。



谷口 敏代

島根県立大学看護栄養学部
岡山大学大学院医歯学総合研究科衛生学・予防医学分野博士課程修了生



川上憲人先生との思いで

川上憲人先生、ご退職おめでとうございます。

私が最初に川上先生にお目にかかったのは2000年7月、先生が岡山大学衛生学教室の教授として赴任された直後でした。岡山県産業看護部会の世話人として國本さんと二人で先生のお部屋にお邪魔し、ご挨拶をさせていただきました。先生が岡山県津山市出身とお聞きし勝手に親近感を覚えた記憶があります。



2004年4月、新見公立短期大学地域看護学専攻科（1年の保健師課程）の教員になると同時にご縁をいただき、岡山大学医歯学総合研究科、川上先生の教室で博士課程を学ばせていただくことになりました。私は年齢も重ねており、教室で学んだその時は分かった気分になっていても帰宅するとすべてリセットされてしまい、博士課程の優秀な学生さんの中で、なかなか皆さんについていけないもどかしさを感じていました。そのような時、川上先生から「福岡さんはプライドが邪魔しないと思われるので、大学院生を指導係としてつけましようか？」と声をかけていただきました。私は神にすがるように気持ちで即座に「お願いします」と返事をしました。出来の悪い私の指導係になってくださった院生はなかなか大変だったと思いますが、丁寧に教えてくださり、そのおかげでなんとかついていくことができ学位も取得できました。川上先生のご配慮に今でも感謝しています。

2005年8月に川上先生がICOHの「仕事とストレス」の学会長を務められた時には、先生から「新見の学生さんにアルバイトで何人か学会のお手伝いをしてもらえませんか？」とのお話がありました。そこで、短大側と交渉し、新見から岡山までの交通費を負担してもらい、全学生15名が授業の一環としてお手伝いさせていただくことになりました。丁度、娘が愛媛県の某大学の保健師課程で学んでいたので、その友人2名も福岡家に宿泊してお手伝いをさせていただきました。お揃いの赤いTシャツを着て何枚も記念撮影をしたことが思い出されます（別途写真参照）。学会では英語の苦手な私がかの有名なKarasek教授のそばで担当することになりました。一生懸命覚えた私の英語の出番はほとんどありませんでしたが、最後にKarasek教授が『COULD I GET some TEA』と書かれたメモを私に手渡されました。このメモは記念に大切に保存しています。学会後、日本三大名園である後楽園でバンケットが開催されました。30年近く懇意にしていた呉服屋さんのご夫婦に浴衣の着付けをしてもらい、教室の大勢の方が浴衣に着かえて各国のお客様を接待したことがよい思い出です。

私は授業などで川上先生を紹介する時は、ICOHで学会長や理事を務められ、また多くの国際学会でご活躍されていたことから「世界の川上憲人先生です」とお伝えしています。このような権威ある先生であるにもかかわらず、先生は常に周囲の方々へのお心遣いをされ、いつもにこやかで、温かいお人柄を尊敬しています。少しでも先生に近づけるよう日々努力していきたいと思っています。たまには岡山に帰省してください。その時には岡山のゼミ仲間と年甲斐もなくはしゃぎたいです。

福岡 悦子

元山陽学園大学看護学部 看護学部長



今までもこれからも最高の恩師です

この度は、川上先生が定年退職を迎えられるにあたり、心よりお慶び申し上げます。

私が川上先生に初めてお目にかかったのは、先生が前任の岡山大学衛生学教室に在職されていた平成14年3月のことでした。他大学の院を修了後、研究や仕事へのビジョンもはっきりとしないまま、不躰に訪問した日のことを思い出すと恥ずかしくなります。それでも先生は、適当にあしらうでもなく、懇切丁寧に話を聴いて、可能な限りの選択肢を与えてくださいました。大袈裟でなく、先生の元を訪ねたあの日が、私にとって人生の分岐点になったことは間違いありません。その後、衛生学教室の客員研究員として学びながらWHO世界精神保健調査日本調査の事務局の一人として関わらせていただき、その翌年からは大学院生として職場のメンタルヘルスコースでご指導いただきました。毎週水曜日の職場のメンタルヘルスコースは、当時准教授としていらっしゃった現北里大学教授の堤明純先生、当時広島大学にいらっしゃった現慶應義塾大学の島津明人先生をはじめ、時には、第一線で活躍の先生方をゲストスピーカーとしてお招きするといった大変贅沢な環境でした。産業精神保健の最新トピックの現場と研究に触れながら、楽しくも必死で学んだあの数年間は、今思い出しても眩しすぎます。

また、先生の甚大なるお力添えをいただきながら岡山の健診機関でEAPの立ち上げに至ったことは私のキャリアにおいて最大の経験です。その時から今も変わらず「現場のニーズをくみとり、最大限出来ることをする」という先生の教えが常に心にあります。先生からそのような表現で直接教えられたかどうかは定かではありませんが、いつも周囲へのサービス精神をたやさない先生の背中を見て学んだ姿勢かもしれません。

一人ひとりの個性をみて、それぞれが強みを活かして輝ける場所へと導いてくださり、時には家族のような距離感で、公私にわたって力になってくださった川上先生は、私にとってまさに最大の恩師であります。

これからもますますお忙しく邁進されることと思いますが、どうかどうかお身体にはご自愛いただき、いつまでもお元気で活躍いただけますことを心より祈念しております。そしてまた、岡山に帰省された折には、岡山組と一緒に、楽しく思い出話ができますことを心より楽しみにお待ちしております。



峰山 幸子

オフィス・マインドシェア 代表

岡山大学大学院医歯学総合研究科衛生学・予防医学分野博士課程修了生



川上先生のリーダーシップに感謝申し上げます

川上先生、ご退職おめでとうございます。SPH 13期の荒川です。長きに渡り東京大学大学院の教授として、そして公共健康医学専攻の二代目専攻長として、東大SPHの躍進にご尽力いただき、本当にお疲れ様でした。

私が川上先生とはじめてお話をさせていただいたのは、おそらく2019年4月にSPHの公共健康医学概論で、MPHホルダーのコンピテンシー、リーダーシップのお話を頂いたときだと思います。今から思えば公衆衛生の世界を何も知らず実績も無い自分が、リーダーシップを発揮して世界を変えてきた大先輩に、失礼な発言の数々をしたと恥ずかしく思います。今更ながらご無礼をお許しください。そんな自分に対して、否定せずむしろ意見を聞き入れていただき、リーダーシップに関する知見のプレゼンをする機会まで頂き、懐の深さにただ敬服する限りです。更にTOMHのプロジェクトに関わらせていただき、成長の機会まで与えていただきました。このプロジェクトを通じて、更にリーダーシップに関する知識を深めるきっかけになり、産業保健のメンタルヘルスに関わる皆様と親交を深めることができ、本当に感謝申し上げます。まだ実践が伴っているわけではありませんが、この機会を提供いただいたことは、自分の人生に大きなプラスになっていると確信しています。

このプロジェクトで2020年1月に直接インタビューをさせていただいたとき、川上先生が成し遂げて来られた物事の経緯をお伺いしたことは、とても印象的でした。特に、シナジーが起きる人の出会いや場をデザインして、コアになるメンバーを選んで巻き込み、成し遂げたいことを実現するためにチームを構成していく話、そのチームが成長していく体験を重要視している話など、多くの学びがありました。おそらくこのインタビューがなければ、社会に影響を与えるような大きな事業を創り上げる過程や、その都度考えられていたことを知ることはできませんでした。TOMHリーダーシッププロジェクトに加えていただいたおかげで貴重なお話を聞くことができました。自分だけがおいしい思いをするのはもったいないので、折に触れてMPHホルダーに伝道していきたいと思います（インタビュー記録を聞きながらこれを書いています）。

あらためて、ゼミ生でない自分をプロジェクトメンバーに加えていただき、誠にありがとうございました。多くの人を巻き込みチームを作って社会を変えてきた、川上先生の生き方を心から尊敬しております。自分も一人のMPHホルダーとして、リーダーシップを発揮してよりよい社会の実現に邁進したいと思います。退職後も様々なプロジェクトを進められていくことと思いますが、ぜひこれからもご指導ご鞭撻いただければ幸いです。

川上先生の益々のご活躍をお祈りいたします。本当にありがとうございました。



荒川 裕貴

東京大学大学院医学系研究科 大学院生

パブリックヘルスマインド

ご退職、まことにおめでとうございます。

SPH9 期生の宇田和晃と申します。当時、精神医学 1 を受講し課題やグループワーク発表が多く圧倒されてしまいましたが、同時に先生の熱意あってこそその講義であったと、とても印象に残っております。

講義以外で関わらせていただく機会が少なかったのが残念ですが、先生のお人柄や指導の熱心さについては研究室所属の友人からよく聞いておりました。先生の講義や先生の活動を見聞きして学んだパブリックヘルスマインドは私の研究者人生の指針になっております。

今後とも、ご家族とよりいっそう充実した日々をお過ごしください。



宇田 和晃
筑波大学ヘルスサービス開発研究センター 研究員
(東大 SPH9 期)

「舞台は世界」と教わった研究室の日々

私が川上先生にいただいた最も大きな財産は、日本生まれ、日本育ちで井の中の蛙の私を世界へと誘って下さったことです。なかでも、WHO 世界精神保健調査の年次会合（米国ロードアイランド）に日本代表の一員として参加させていただいたのは、その後のキャリアを決定づける大きな経験でした。日本代表として発表する川上先生はもちろん、世界各地から集まった一流の研究者が自信とユーモアたっぷりに発表する姿に、「かっこよい！私も専門知識を身につけてあなりたい！」と心から感動したことを覚えています。お酒を交わしながらの懇親の場で参加者の輪の中心で和やかに談笑する先生の姿は、立ち振る舞いがわからずオドオドする私の目にとってもカッコよく映ったことを記憶しています。また教室には海外からも多くのお客様が訪れました。メキシコからの研究者が来た際には先生の提案でダンス&テキーラパーティーや東京観光ツアーを行いました。この時も先生自らお客様との交流を誰よりも楽しんでおられました。仕事は真剣に、遊ぶときはとことん楽しむ大人として大切な姿勢を教わり、今も大事にしている私の生き方となりました。

修了後、私はアフリカやアジアの発展のために仕事をしました。今では外国の方を前にしても物おじせず伝えたいことを伝え、議論し、懇親の場でも遠慮せず人の輪に入っていけるようになりました。20 代の若いうちに一流の世界や憧れの世界に触れる経験をし、活躍の舞台は日本に限らないことを先生に教えて頂いたことが財産となりました。研究指導に留まらず、将来に悩む学生の話真剣に聞き、一步を踏み出すためのアドバイスをし、歩み始めた学生をうしろからそっと見守り続ける、そんな安心できる空気がいつも精神保健学教室にはありました。卒業後も私を気にかけて時折お酒を飲みながら話を聞いて下さり、精神保健学教室が第二の我が家のようにいつも私の心の支えになっていました。先生に応援頂きながら、のびのびといつも私らしく過ごせましたこと心から感謝しています。この度はご退職、誠にありがとうございます。



岡本 真澄
神奈川県立保健福祉大学 研究員

退任おめでとございます！

川上先生におかれましてはお努め本当にお疲れ様でした。今回はせっかくの機会なので先生の時代について思い巡らした事を（少しサビ入りで）書きたいと思います。

川上先生が教授になられる事を聞いた時には非常に驚きました。正直に言うと教授にはやはり東大精神科出身の医師にしかなれないと思っていたからです。院生についても最近では他学からの入学者が多く私の在学時に比べると随分入学し易くなったのかなと思います。そして、当時私が感じていたような他学出身者への差別もないようで、それは素晴らしいなと思いました。

さて、私は川上先生の事を大学院の時から一応知っており、また、私は元々「ストレスやこころの病気の予防」方面の公衆衛生に関心があり、先生と共通の関心があったためとても身近に感じていました。私も東大の保健学はほぼ公衆衛生に近似だと思いますが、同じ公衆衛生でも、私の指導教授だった佐々木先生はストレス系の公衆衛生は頭から否定し、その了見の狭さには腹立たしいものでした。そんな事もあり、川上先生には本当の公衆衛生としての精神保健がどのようなものかと楽しみにしていました。

ただ、平成17年の先生が就任して初めての同窓会での二代教授の土居先生の話が少し気になりました。土居先生のお話は、川上先生が「精神科ではない精神衛生をやりたかった…」といった内容の話を受けてだったと思いますが、「そういうのがない精神保健ってあるのかな？」と話されました。私は「精神科実践・臨床がない精神保健？」なんてさすが土居先生だと思いました。川上先生はこの点についてあまり違和感を感じなかったかも知れませんが、案の定、私から見ると教室の性質は土居先生が危惧した方向性になってしまったように感じます。

最近先生は私とのあるやりとりの中で、私の論文（故飯田の論を基にしたもの）について「私の門外漢で評価ができない」「現在の保健学博士には不適當ではないか」とおっしゃいました。これについても川上先生にはあまり違和感もないようで、私には誠に残念でした。歴代の先生方が作り上げてきたものを「土台」として出発したはずの川上時代はいつの間にか、教室の伝統と歴史を「踏み台」にして発展し、その後それを無いものとしたように感じるのです。そしていわゆる公衆衛生学出身の川上先生の精神保健は、私には「疫学精神保健学」に近いのではないかと思います（外部からもそう見えていそうです！）。しかしこれは、土居先生のご察しに加えて、私の言葉で言えば、今の教室は「なんか半分」になってしまったと感じます。川上先生は公衆衛生学から入った精神保健学の専門家ですが、歴代の先生方は長年人を診たり実際に重ねた後に公衆衛生学・保健学の視点に行きついた先生方と言えないでしょうか。川上先生にはこの微妙な差異が分からなかったのではないかと感じます。

故吉松先生がかつて私に、「母子保健や精神保健は臨床を抜きに考えられないから」とお話しくれました。また、いつの間にかかつてはあった臨床心理・実践方面への学生の出口も減り、修士ではつぶしがきかなくなったのは確かでしょう。その代わりに多くの方々が博士に進学し、努力して博士を取得すれば多くの方々が公衆衛生やその他の教官職につき、この背景にはさすがに川上先生の偉大さを感じます。と同時に正直に言うと、「今の院生は楽に入れていい仕事につけて楽でいいな！」と思います。努力すればそれが実るようで、かつての私を考えると夢のように思います。

さて、川上教授時代についての私の経時的な感想を書いてきました。今後の教室が私の感じる「どこか半分」ではなく、元々持っていた「あれとかこれとか」いろいろなものを含む包括的な精神保健学となって行くことを願っています。

川上先生の今後の益々のご健康とご発展を願っております。また飲みにご誘ってください！



清川 雅充

東大 SPH の父！！

川上先生と出逢った経緯をはっきり覚えています。

場所は新横浜スタバのテラス席、時刻は陽が落ち辺りが暗くなってきたときでした。秋に差しかかる季節だったと思います。当時まだ薬剤師をしていた私は、いろいろあって絶望の淵に立ち、本当の自分を探すためにもがいていました。興味や関心が強く惹かれ、成就を望む—自己成就の意味ではなく、いまから考えると、あのときから私の公衆衛生が始まっていたのかもしれませんが—社会のすがたを思い描きながら、PCに向かっていくつかのキーワードをGoogleに打ち込みました。

「健康 情熱 予防 …」今となっては、当時入力した言葉をはっきりと思い出せませんが入力、検索、消去、再入力を繰り返して、何度目かのEnterを押したとき、ふいに東大SPHが検索上位に現れました。HPを開いた時、私は息を飲み、目を大きく見開いて、一瞬時が止まった体感がありました。そこにあったビジョンは、目指す私のあり方をものに表したようだったからです。直感的に「あ、これだ。やっと見つけた」と感じ、私の魂に再び火が灯りました。私の生きる道はここだ、ここに仲間がいるんだと（孤独感も相まって妄想が加速し笑）、それまでどん詰まりに暗かった目の前が急にひらけていく感じがしました。まぶたの裏に光がさし、金色に輝いたのを今でも良く覚えています。誰に対しても東大SPHの扉は開かれている、それは、入学後も強く実感しました。

そうして、それからはご存知の通りですが、川上先生に初メールとご面談をさせていただき、その帰りに当時大学院生だった櫻谷さん、研究相談中の今村先生とお会いして、そこからご縁が、私の公衆衛生が広がっていきました。当時、周りに一切知り合いがいない状況でよく勇気を出した…いえ勇気を出したというよりも、勝手に運命を感じて無意識的に身体が動いたという感覚でした。

卒後は、主体性を発揮できる環境だったから、川上先生がそれを整えて下さっていたからと考えることができます。公衆衛生を学んで得ることができたこの視点は、私の活動の礎になっています。自己発現がしにくいなかの社会背景の可能性を考え、社会はどう変わるか、どうより良く関わられるのかを共に考えていくこと。そこにあるのは愛であり、誰も自ら立ち上がれると信じる情熱です。だからこそ私はたまたま公衆衛生が好きです。失意の私がもう一度立ち上がったように、今度は私が、関わる誰かの力になりたいと思います。

最近では、本人が自己/意思を発現しやすく、本人の自分を肯定する感覚や主体性を発見できる環境とはなにかと、そんなことをずっと考えていたからか、自己肯定感や主体性形成プロセスに寄り添う支援の必要性を強く感じ、自然と導かれたように先月（2021年10月）、インタビューの個人事業を開始しました。川上先生の「矢野さんはインタビューがお得意のようですね」というありがたいお言葉が脳裏に蘇ります。ビジョンは、語りの文化をつくることです。ビジョンを描き生き抜く大切さを意識しておくことと、お守りの意味でも、私のスマホ待受画面は川上先生から頂いたメール文面「矢野さん ああ、いいですねー。頑張ってください！！ビジョンのために笑って進んでください（笑）」（2019/6/3）です。この文章を書きながらまた泣いていますが（涙）、いつもいつも励ましてくださる川上先生にはこれまで幾度となく背中を押していただき、心から感謝しています。偶然に、スーパー帰りの居酒屋さんを通りすぎたときや、竜岡門前など、私がもうダメかもしれないと思ったその度

に、川上先生が現れて下さるといふ不思議なタイミングとご縁を多々授かりました。セレンディピティ以外のなにものでもない幸運のおかげで、見てくださる人はいるんだ、きっと大丈夫だ、また頑張ろうとその都度立ち上がることができました。そして周りを見渡せば、SPHの仲間たちがそれぞれの分野で活躍しています。たまに連絡を取り合い、仲間の存在を身近に感じながら、私の魂は燃え続けています。

川上先生は、たくさんの人たちの魂に火を灯してこられました。川上先生の生き様を見て、私も私の…いえ、私たちの公衆衛生ビジョンを、私たちが共に目指し、作っていきたくと思います。

川上先生、本当にありがとうございます。これからも、ありがとうございます！！



矢野 真沙代

ICHIGO-ICHIE / NPO 法人 Healthy Aging Projects for women (HAP)
代表 (対人支援サービス ICHIGO-ICHIE ナラティブインタビュー)
薬学・公衆衛生学アドバイザー (HAP)
(東大 SPH 11 期生)

川上教授のご退職に寄せて

川上先生、定年ご退職、心からお祝い申し上げます。

TOMH（職場のメンタルヘルス専門家養成プログラム）1期生として学ばせていただいたこと、つい先日のことのように思い出されます。

教室の熱気、今でも忘れません。

背景も資格も様々な、多種多様な受講生。まさにダイバーシティ。

それを率いる川上先生の求心力に感服いたしました。

そのような中で、国際動向や最新の知見をご教示いただきながら、職種横断的に、個別対応から組織対応まで、包括的に学ばせていただけたことは本当にありがたく、その後、産業保健への向き合い方が、大きく変わりました。

本当に感謝の気持ちで一杯です。

今では社内研修の依頼もいただけるようになり、TOMHでの学びを存分に発揮させていただいております。

TOMH修了生であることを誇りに思います。

川上先生のご活躍に期待しております。

益々のご活躍祈念しております。



盛合 久美子
アサヒグループホールディングス(株)
TOMH 基礎コース受講生

川上先生のご退職に寄せて

この度はご定年を迎えられ誠にありがとうございます。

これからも益々活躍される川上先生に対し、この時点でご退職おめでとうございますと申し上げるのは、まだ時期が早いのではないかと感じておりますが、現職でのご勤務に一区切りがつくという意味で心よりお祝い申し上げます。

川上先生との思い出は何と言っても2021年度のTOMHですが、実は最初にお会いしたのは2014年12月18日に遡ります。この日、「健康いきいき職場づくりフォーラム」の「成果発表シンポジウム」が開催され、光栄なことに弊社が企業経営者講演を行う機会を頂きました。当時私は健康経営を推進する企画担当者として参加しており、その日の懇親会でご挨拶をさせて頂く機会がありました。お話しできたのはほんのわずかの時間でしたが、その頃より「いきいき職場づくり」でもお世話になっていたと思うと、勝手ながらとてもご縁を感じます。

さて、TOMHの話に戻ります。コロナ禍において、10期（2021年10月～11月）の開催方法が対面かオンラインか未決定のまま6月の募集時期を迎え、9月には全てオンラインでの開催になる旨の通知がありました。正直に申し上げますと、講義内容が多岐にわたりグループワークも多いこのコースにおいて、オンラインのみの開催で果たして実りのあるものになるのだろうかという不安がありました。終わってみれば杞憂に過ぎませんでした。

開講日のオリエンテーション時に受講者の紹介パートがありましたが、川上先生自ら、各受講生の志望動機を読み込んだ上で、全受講者をコメント付きで紹介してくださいました。実際にお会いできない状況で、少しでも受講者にとって良い講座にしようというお気持ちが伝わり、大変感動したことを鮮明に思い出します。

また、私は医学的専門知識をもたない企業の人事労務担当者であり、このコースの受講者として相応しくないのではないかとこの気持ちがありました。その気持ちに対しても「誰も取り残さない」精神でご指導頂き、講義についていくことができました。

コースは6日間で修了ですが、感染が落ち着くことを見越し、当初予定のなかったオンサイトスクーリングを企画してくださいました。講師や事務局の皆様、同期の受講生とお会いする機会を設けて頂いただけでなく、直接川上先生から修了証を授与して頂くことができました。

エピソードを挙げるときりがありますが、川上先生が東京大学ご在職となる最後の年度にこのコースに参加できたことは掛け替えのない経験となりました。この場を借りて改めて深く御礼申し上げます。

末筆とはなりますが、川上先生の末永いご健康とご多幸を祈念しております。



海野 賀央
SCSK 株式会社人事・総務本部労務部給与課
TOMH 基礎コース受講生

ご退職おめでとうございます

川上先生

この度は、定年ご退職、誠にありがとうございます。

長年に亘り、職場のメンタルヘルスに関わる私たちをお導きいただき、本当にありがとうございます。

TOMH 2期の同窓生を代表し、先生のご退職の記念集に寄稿させていただきますこと、大変嬉しく存じております。

少しだけ、先生との出会いと思い出を振り返ってみたいと思います。川上先生のことはもちろん、産業保健の世界の足を踏み入れてすぐから、存じ上げてはいたのですが、初めてお話ししたのは、TOMHを知る少し前のことでした。先生が産業衛生学会でポスター発表をなさっていた時に、お呼び止めして質問させていただいたところ、とても丁寧に教えてくださって感激したのを覚えています。実は、こんな初歩的なことを聞いていいのだろうか・・・と、緊張しながら質問したのですが、先生の温かいご対応に安心し、お聞きしてよかった！と心から感じました。そして、教えていただいたことは会社の中ですぐに活用することができました。

その後、2013年にTOMH基礎コースの存在を知り、東大で川上先生から学ばせていただくという夢のような機会を得ることができるということで、迷わず、想い熱めの志望動機をしたためて応募いたしました。ここでも、ドキドキしながら東大の門をくぐりましたが、最初の先生のご挨拶と笑顔ですぐに緊張はほぐれたような気がします。あのよう、仕事に直結する学びの場であったというだけでなく、お互いに刺激や影響を与え合うことができるかけがえのない仲間を得ることができたのは、川上先生を中心として愛情と熱意あふれる皆さんが集まっている場だったからこそだと感じています。

川上先生とは、学びの場だけでなく、懇親の場でも大変お世話になりました。お恥ずかしながら、どうやら私の当初のイメージは、保健師としてよりも飲み席でのインパクトの方が強かったようで(笑)、楽しい時間もたくさん過ごさせていただきました。これもTOMHの魅力の一つですね！今はなかなか、そのような懇親の場が持てない日々が続いていますが、ご退職された後もまた、そういったお席でも一緒できることがあるとうれしいです！

先生はきっとこれからも、ご自分のお時間も大切になさりつつ、ますます健康にいきいきとご活躍されることと存じます。引き続き、学ばせていく機会も多いかと存じますので、今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

※先生から「キラキラ・仲よし」と言っていた、素敵な2期メンバーとの思い出の写真をいくつか掲載させていただきます！

楠本 真理
三井化学株式会社
TOMH 基礎コース受講生



Thank You for the Life Changing Experience

川上先生、ご定年、おめでとうございます。

長きに渡りご活躍された川上先生に、心からの敬意とお祝いを申し上げます。

川上先生はこれまでの素晴らしい功績で、多くの人々、組織、そして社会に大きな影響を与えてられました。近年でもSDGsに沿った、コロナ禍のニューノーマルも味方につけて、明るく楽しく、そして進化する健康いきいき職場を築いてくれたと思います。

7年前の2014年にTOMH3期で川上先生に出会ってから、私も先生に感化され、私の人生は大きく変わったと言っても過言ではありません。先生その時の教えを今も忘れていません。「学んだことによる責任を全うすること」そして、「なりたいたいものになるよね」。

先生に出会うまでは人の前に立ってリーダーシップをとることなんて考えられませんでした。TOMH受講中もまだまだ圧倒されていましたが、受講後の業務の中で自分自身のミッションを実感し、気がつけば夢中になって学んだノウハウやスキルを実践していました。

先生の著書「職場のメンタルヘルス」にサインをいただいた時に、書いていただいたメッセージが「なりたいたいものになるよね」でした。そのメッセージを受け取り、気がつけば私は通訳未経験の身分で、シャウフェリ先生のワークエンゲイジメントの基調講演の通訳までさせていただいていました。先生からいただいた教えやメッセージはかなり大きな力になると実感しました。

今は私にできることは何か、どんなことが役に立ちそうか、そんなことを常に意識しながらアンテナをはり、産業保健活動を続けています。これからも川上先生からの学びを胸に、今の、そしてこれからの健康いきいき職場作りに貢献していきたいと思っています。

これからもどうぞお元気で、川上先生のご活躍を心よりお祈りしています。



松本 綾
株式会社ジャパン EAP システムズ
TOMH 基礎コース受講生



エビデンス、つながり、ビジョンをありがとうございます

この度はご退職おめでとうございます。長年にわたり数多くの産業保健現場で使えるエビデンスを私たちに分かりやすく示していただきありがとうございます。そのエビデンスは産業保健現場にいても大変ありがたく活用させてもらっております。

さて、私が川上先生を最初に知ったのは、私が産業保健の世界を何も分かっていない大学卒業の頃に、産業医大にいたジアンドウソップ先生から「川上先生というメンタルヘルスの研究をずっと追及しているすごい先生がいる」と伺っておりました。実際に、「メンタルヘルスといえば川上先生」という状況がすでにあり、産業衛生学会の会場などで川上先生を拝見しても、大変人気のある先生なので、お話することはなかなか難しかったところでした。そんな折に、東大 SPH の産業精神保健学の講義で学ばせていただいたり、さらには多くの産業保健の仲間と知り合い、勉強することのできた TOMH という学びの場が本当にありがたいものでした。TOMH は川上先生の魅力がいっぱい溢れているフィールドであり、そこで多くの仲間と出会い、つながり、ずっと学び会える仲間ができたという大きな財産をいただくことができました。まさに人生を変える TOMH ！だと思います。



川上先生からの教えの中で、私にとって印象深い講義は、産業保健で働くものとして、どんなリーダーになるか、どんなビジョンを持つか、という“自分の旗づくり”というユーモアな内容でした。本気と遊び心を持って夢を描くことができたと思います。さらに、産業衛生学会の中でのリーダー論の講演もとても刺激的でした。学会で「リーダー」について語る先生は今までにいなかった

のではないのでしょうか。また、ある年の産業衛生学会の廊下で川上先生とお話をさせていただいた時に、川上先生が日本・世界にメンタルヘルスを届けたいという思いで今まで仕事をしてきたと伺うことができました。ちょうど数年前から、ストレスチェックが始まった頃であり、賛否あるストレスチェックでしたが、日本のメンタルヘルスの底上げを図ることに関与できたことはとても良かったとおっしゃっていました。これらを通じて、メンタルヘルス分野における川上先生のリーダーとしての姿勢やビジョンの一角を伺うことができました。ビジョンを持ち、それに向かって仕事をしていくことの大切は、自分自身の産業保健職としての取り組み方に大いに勇気を与えるものとなりました。

この度、長年勤められてきた大学教授職をご退職される時期が来たことで、とても寂しく感じます。しかし一方で、今後はさらに身近な存在として、産業保健の世界をさらに魅せてくれるのではないかと引き続き期待しております。いつまでも笑顔いっぱいの川上先生でいらしてください。そして、私たちに川上先生ならではの「エビデンスとユーモアあふれる刺激と勇気」をいただければと思っております。この度はご退職おめでとうございます、そして今後ともよろしく願い申し上げます。



坂本 宣明
ヘルスデザイン株式会社
TOMH 基礎コース受講生

川上憲人先生への LOVE ♥ LETTER

長きにわたるご活躍の末でのご退職にあたり、僭越ながらメッセージを送ります。

川上憲人先生、これまで本当にありがとうございます。TOMH を通し、先生に出会ったことで、魔法がかかったように私の人生は豊かなものになりました。TOMH という場をつくっていただいたこと、今もなお続けていただいていることに心より感謝いたします。

TOMH は、川上先生と志を同じくする素晴らしい講師陣と、おもてなしの心をもった事務局の面々が迎えてくれるので、何もかもがスペシャルです。そんじょそらの研修とはわけが違います。どこを切り取ってもプライスレスです。初日から最終日まで、川上先生が朝、自ら出欠確認をしてくれていた立ち姿、いまでも思い出します。Welcome な雰囲気づくりを体現されていると感じていました。ロールプレイでちょっとした被り物をするこも、なりきるだけでなく、まじめな議題にほっと一息入る感じがして、心地よかったことを覚えています。15分に1回は笑いを取る先生ならではの隠し味が、私はとても好きでした。相手を楽しませたい、あわよくば笑いを取りたいと思う気持ち、私も大切にしています。

ご退職されるとのことですが、先生はこれまでと同様、もしくはこれまで以上に活躍されることだと思います。一息つく間もなく、忙しい毎日をお過ごしになるのではないかと心配もありますが、いつまでもお元気で私たちに魔法をかけてほしいと思っています。TOMH もカタチを変えて続けていただけるとのこと、是非、末永くお願いします。同窓生の私たちも、未来のステキな仲間に出会えることを楽しみにしております。

最後になりますが、おこがましいとは知りつつも、川上先生のエッセンスを自分なりに取り入れて、笑いもとれるスーパー保健師を目指したいと思っています。しかも、それなりに本気です。笑いのレクチャーを含め、これからもご指導のほど、何卒よろしく願い申し上げます。



白田 千佳子
株式会社エクサ
TOMH 基礎コース受講生

ご退職をお祝いして ～ サラダボウルと呼ばれた TOMH6 期生

川上憲人教授、この度は退職を迎えられること心よりお喜び申し上げます。そしてこの様な記念誌に寄稿させていただき、非常に光栄に思います。ありがとうございます

TOMH6 期として東京大学で受講したのは 2017 年 9 月 23 日～ 10 月 28 日の 6 日間でした。受講当時、失礼ながら、私は先生のことを詳しく存じ上げておりませんでした。受講生の多くは、先生が主宰されている研修だから参加していますが、私はそうではありませんでした。健診機関の責任者として、ただ単にストレスチェックの仕組みを知りたいだけで受講したのが理由でした。そんな不純な動機で参加したにも関わらず、先生は常に暖かく迎えていただき、様々な質問に対して、真摯に向き合ってくださいました。

『人生が変わる TOMH によろこそ!!!』と講習初日に言われたとき、これは奇妙なところに参加してしまったと、やや後悔したのを今でも記憶しております。しかし TOMH6 期受講中のみならず、終了後も、知り合うことのなかった産業保健の中心にいる方と交流を持つことができ、様々な知識や考え方を学び、日々、人として、また、産業医として成長をさせてもらっています。まさに TOMH に 6 日間参加して人生が大きく変わりました

さて、我々 6 期は、北は北海道、南は熊本と全国から集まった 6 期 42 名、個性の強いメンバーでした。歴代、最も大変な期であった事は間違い無いと思っております。お菓子部屋から休憩時間が終わっても戻らず、先生が呼びに来られたり、講義が始まっても、ザワザワしたり、先生に最も迷惑をかけた期でありことは間違いなく、この場を借りてお詫びしたいと思います

そんな我々ですが、今でも密に連絡を取り合う関係にあるのは、先生が我々の象徴であることはもちろん、TOMH6 期に参加した全員が受講したことが有意義であったことの証明ではないかと思っております。東京大学の教授は退職されますが、我々の象徴であり続けることは間違いのないことで、これからも先生が掲げる旗をめぐり我々は集まり続けるものと思っております。そして、愛を持って、1 人でも多くの労働者に笑顔を与えることが出来るような仕事出来る様に日々精進をしたいと思っております。



山口 宏茂

一般社団法人日本健康倶楽部和田山診療所
TOMH 基礎コース受講生

川上先生と TOMH との出会いを通じて

川上先生、ご退職おめでとうございます。TOMH の 7 期会長として関わらせて頂き 3 年が経過しましたが、今でも貴重な経験ができています。あらためまして感謝申し上げます。私は産業医科大学を卒業後、2 年の初期臨床研修を終えてから今まで産業医として活動して参りました。そのような環境に身を置いていたこともあり、実務におけるメンタルヘルス対策を経験する機会は数多くあったのですが、それらと TOMH での学びが結びついたときのアハ体験は強く記憶に残っています。それまで「この施策は人事担当者と連携したほうがうまくいく」「この面談は保健師の方に任せると強みが活きる」と頭では理解してはいました。しかしながら実際は専属産業医として力技で仕事を乗り切ることが多い状況でした。意地もあったのだと思います。その折に TOMH の講義で川上先生が他職種と協働することの重要性についてお話され、不思議と胸のつかえが下りました。講義後に少し薄暗くなった大学の構内を抜けながら懇親会の会場に歩いて向かう途中、その腹落ち感を川上先生にお伝えした時にウンウンと頷かれていた姿を今でも覚えています。正直なところ今でも力技で仕事を行う場面はあります。それでも他職種と連携することを意識するようになったことで、仕事の時間的な負荷は下がりましたし、周囲の方のコミット力がグッとあがりました。いきいきとする場面も増え、結果として自職場の職場環境改善にもつながっています。このように川上先生と TOMH の皆様からメンタルヘルス対策の実務にフォーカスした学びを頂くことができました。言葉にすると大げさですが、この学びをより多くの方に伝播していくことは私のミッションの一つと思っています。川上先生のように所属する事業所を越えてリサーチを通じた貢献や実務への支援を行えるよう努力して参ります。

川上先生のさらなるご活躍とご健康をお祈り申し上げます。そして引き続きご指導よろしくお願ひ致します。

柳 延亮

三井金属鉱業株式会社 総務部 健康管理室
TOMH 基礎コース受講生

感謝！感激！感動！

川上先生、今までお疲れ様でした。

TOMH8期生として、先生にご指導いただいた日々は2年という日々を経ても色あせず、大切な宝物です。

TOMHのコアメッセージとして、“愛と法律”が卒業生に浸透しているかと思います。しかし、TOMH卒業生の共通言語として、一番は川上先生のご存在だと思います。卒業生同志で話しているときも、川上先生への想いがあふれていますし、理事として事務局の皆様と関わらせていただいているときも、やはり川上先生への愛に満ちています。それも、川上先生がお忙しい中、TOMHに時間、労力、愛情を注いで、我々を育て下さったからだと思います。

TOMHで人生が変わる！！この言葉を諸先輩方からお聞きしたりしてましたが、実際、川上先生と出会うまでは正直、眉唾だと思ってました（笑）。しかし、初日の冒頭のレクチャーで、誰も置いていかないのがTOMHとのメッセージ。僕の生きてきた中でも一番刺さるメッセージでした。そして、川上先生はその言葉だけでなく、行動、気遣いなど様々な面で、そのメッセージが本当であることをTOMH受講中も、それ以降も継続いただけたところが、本当に嬉しかったです。

実は、このメッセージは、自分自身の大事な言葉だけでなく、自分が関わる社員さんにもここぞという場面で活用させていただいてもおります。コロナ禍前のリアルでの管理職研修の際に、アイスブレイク後に、私自身も参加いただいた管理職に、川上先生になりきった気持ちで、語りかけたことがあります。「今日、参加いただく管理職の皆様にお伝えしたい内容はこのスライドになります。管理職として、皆様をお願いすることは少なくなく、やや部下のサポートに不安を抱いたり、面倒に感じたりするかもしれません。でも、皆さんは一人ではありません。今日、管理職研修として、大事な時間をいただく限り、僕自身も専門家として、部下の健康面での困りごとなどに対して、管理職の皆様を決して一人にはしません。一緒に伴奏できたらと思っています。今日参加いただく管理職の皆様を誰一人、置いていかないとつもりです。」そうすると、大げさでもなく、空気が変わりました。管理職研修最終日の最終コマとかなり疲れていた管理職の皆様が一瞬にして、全集中して、研修に取り組もうとするエネルギーを感じました。研修後にオブザーブしていた保健師も感動してくれていたのをいまだに覚えております。これも川上先生のパワーワードの力を借りて、管理職の皆様にご魔法をかけることができたからと感謝しております。

川上先生は周りを元気にさせる、ワクワクさせるエンターテイナー的な要素もいつも感激しております。関わるメンバーを大きな体同様、包み込んでくれるやさしさとワクワクとモチベーションしてくれる川上先生のようなリーダーを目指したいと日々思い、TOMHでの最終ワークで作ったフラッグは、常に自分の席に掲げております。高すぎる目標ではありますが、川上先生のような憧れをもつ存在がいてくださることは、私自身としても、TOMHとしても、日本の産業保健においても感謝しかありません。出会ってくださり、ありがとうございます。今後ともよろしく願いいたします。



大塚 創平
株式会社村田製作所
TOMH 基礎コース受講生

ご縁と TOMH マインドを紡いでいきます

川上先生、この度はご退職、心からお祝い申し上げます。

TOMH9期にて、川上先生から直接ご指導いただくことができ、また産業保健にかける想い「天職」だとの話をきかせていただくことができたことは、私にとって大変貴重な機会であり、恵まれていたのだと感じております。

9期受講中は、オンラインでしかお会いしたことがなく、ずっと直接お会いしたいと願っていましたが状況が許さず、10期をファシリテーターとして関わる機会をいただいたことで、感染状況が落ち着いていたこともあり、期間中東京にいたことができれば、もしかしたらお会いできるチャンスがあるのかも！！と切に願っていました。その願いが届き、直接お会いできたことは、一生の思い出と言っても過言ではない程、感極まり、こらえきれず自然と涙が溢れてきました。

直接お会いできない期間が長かったからこそ、より一層直接お会いできることがどんなに貴重で素晴らしいことであるのかを身に染みて感じることができました。何より、川上先生の温かなお人柄を直に感じる事ができ、皆様がお慕いする理由がよくわかりました。

9期は、まだ全員で直接会ったことがありません。9期生が川上先生と直接会える機会を計画し、修了時に「繋がってこー」といただいたお言葉通り、いただいた貴重なご縁が繋がり続けるために役目を務めていきます。

産業保健の中で、「縁」を感じる機会が多くあります。TOMHを知り、ご縁をいただきこうして修了生として活動できることを誇らしく思っております。そして、ご縁と繋がりを大切に、TOMHで学んだことを活かしながら、産業保健師として活躍することができるよう、自己研鑽を続け、TOMHマインドを紡いでいきたいと感じています。

これからもお身体にご留意され、益々のご活躍とご多幸を心よりお祈り申し上げます。



後藤 豊美
日通商事株式会社仙台支店
TOMH 基礎コース受講生



川上先生から教えていただいたこと

川上先生、ご退職おめでとうございます。川上先生には、とてもとても長い間、お世話になりました。川上先生がご着任され、医学部三号館ではじめてお会いしたときに、大きくて前向きな先生だなあ！とまぶしく感じた時からいつの間にか15年もたってしまったことに驚いております。

川上先生に教えていただいたことは数えきれません。職場の精神保健、精神保健疫学、国際精神保健、災害精神保健等、さまざまな領域のメンタルヘルスに関する研究や実践の内容についてはもちろんのこと、世界中の仲間とつながり、その領域全体を育ていかれる過程も含め、さまざまな形で川上先生や先生のチームから養分をいただきながら学ばせて頂きました。

川上先生は、社会に貢献することや社会的な活動も大切にされ、教室員にも参加の機会を提供して下さいました。クアラルンプールでの国連のエキスパートミーティングへの川上先生のご出席に同行させていただいたときの、会議中だけでなく会議場への往復の車中でもなされた障害やウェルビーイングについての意見交換は、その後の私自身の活動に大きな示唆をいただきました。また、震災後の陸前高田市消防団との健康教室関連活動に参加させていただいたことも私にとって大きなことでした。健康教室の準備や陸前高田への往復の道中でたくさんお話をさせていただき、考える機会、行動する機会、さまざまなつながりを得る機会をいただきました。

川上先生はまた、教室員や院生、学部生が仲間と仲良くすることも応援してくださっていました。先生が率先して集会室での鍋や打ち上げなどを楽しむ姿を見せてくださり、さまざまな行事があったおかげで、メンバーの知らなかった一面を知ったり打ち解けたりすることができました。年始めのお餅の会で、先生が岡山で仕入れてきてくださるお餅を毎年楽しみにしていたのは私だけではありません。教室での交流について、印象的なことがたくさんありすぎてここには書き切れませんが、アニソンのカラオケに行く皆様をいつもうらやましく見ていた時期に、本郷三丁目駅前のカラオケ屋さんにご一緒させていただき、花の子ルンルンを皆で一緒に歌わせていただいたことは、とても懐かしい思い出です。

自由に発言・行動してしまう私のことを制限することなく見放すことなく、いつも明るくあたたく見守ってくださっていたこと、困ったときはすぐに手を差し伸べてくださったこと、心より感謝しております。

川上先生の今後ますますのご健康とご発展をお祈り申し上げます。今後ともどうぞよろしくお願いを申し上げます。



「20120525_3年生を励ます会
川上先生と宮本」

宮本 有紀
東京大学大学院医学系研究科
精神看護学分野 准教授



川上先生のご退任によせて

川上先生がご退任を迎えられますことを心よりお慶び申し上げます。

私はもともと臨床精神科医をしていましたが、精神科医療とは別の方法でメンタルヘルスをよくしたり疾患を予防したりすることに関心を持つようになり、ぜひ川上先生から学ばせていただきたいと思うようになりました。そこで2012年に先生にお願いして教室の客員研究員に登録していただきました。以後、少しずつ先生や教室の先生方と交流させていただく機会が増え、それにつれて研究者としての素晴らしさだけではなく、heart-warmingでhardworkingな方々が集まるこの教室の文化を作り上げてこられたことに対しても、大きな敬意を持つようになりました。

2017年の秋、私がヒマラヤを旅行していたときに、准教授候補の1人としてあげてよいですかというメールを先生からいただいたことは、ヒマラヤの壮大な風景や凜とした空気と相まって、私の人生のなかで忘れられないシーンの1つになっています。

2018年に准教授として当教室に着任させていただいたときは、教室運営や授業のことについて、私ひとりに説明するためだけに十枚程度のパワーポイントのスライドを作ってくださいと少し感動しました。ゼミ等では先生の高度な論理的な思考力、数理統計の素養、歴史的な研究から最新の論文に至るまでの豊富な知識、世界の潮流に関する見識等に圧倒されました。また、大変ご多用であるにもかかわらず、私なら秘書さんにお任せしたくなるような事務的な業務もご自分でこなされたり、1人1人の大学院生のことをとてもよく見ておられたりすることにも驚きました。先生は決してご自分のことを大きく見せようとされないのが、客員研究員として少し離れたところから見ていたときには気づかなかった先生の様々なすごさを、肌で感じることでできた4年間でした。

この4年間で、着任させていただく前には想像できなかったほどに私自身の研究の幅が広がり、教室の方々を中心に多くの方と新たに協働させていただけるようになりました。先生のもとで准教授を務めさせていただかなければ、このような広がりを経験することはなかったと思います。改めて、心よりお礼を申し上げます。大変ありがとうございました。

コロナ禍で、先生の紫綬褒章のお祝いのパーティーがまだできていないこと、また退任記念祝賀のパーティーも中止となったことは大変残念に思っています。また、個人的にも川上先生と飲みに行かせていただいた機会がそれほど多くないのが少し心残りです。しかし、コロナが落ち着いたらぜひみんなで集まれる機会があればと思っておりますし、先生の大好きなハワイにもぜひ一緒させていただきたいと願っています。

ご退任後も、これまでとは違うお立場で精神保健学の発展や人々の精神健康増進のために貢献され続けることを確信しております。これからもご教導の程、どうぞよろしくお願いいたします。



西 大輔
東京大学大学院医学系研究科精神保健学分野 准教授

川上先生のもとで職場のメンタルヘルスを学んだ 14 年間

川上先生、この度はご退職誠におめでとうございます。私が 2008 年に公共健康医学専攻専門職学位課程に入学し、精神保健学分野に所属させて頂いてから、今年で 14 年が経ちました。その間に、職場のメンタルヘルスの研究と実践で本当に多くのことを学ばせて頂きました。

研究では、私の主要な研究テーマである労働者を対象としたインターネット認知行動療法プログラムの開発と効果評価に取り組む道を示して頂きました。2011 年に、当時インターネット認知行動療法研究に先進的な取り組みをしていたオーストラリアニューサウスウェールズ大学の Gavin Andrews 教授の訪問に同行させて頂いたことは、私にとって世界に視野を広げる最初のきっかけとなりました。それまで日本を出た経験が無かった私にとって、初の海外が川上先生と古川壽亮先生と 3 人の出張だったことは、今振り返ると大変恐れ多いことですが、現地で買ったワインをホテルの屋上で飲みながら 3 人でお話させて頂いたことは今でも大切な思い出です。

研究外でも、川上先生とは本当に多くの時間を過ごさせて頂きました。振り返っても数えきれないくらい飲み会にご一緒させて頂きましたし、2012 年には私の実家のある北海道にもお越し頂きました。2019 年に私がオランダのアムステルダム自由大学に留学していた際には、ご多忙の業務の合間を縫って訪ねて頂き本当にありがたく思いました。その後は新型コロナウイルス感染症の流行によりそのような機会が無くなってしまい大変残念に思っておりますが、状況が落ち着いたらまた今後も飲み会等ご一緒させて頂けたらとても嬉しく思います。

川上先生とお話させて頂くと、いつもたくさんの気づきやアイデアを頂きます。一方で、いつまでも川上先生に教えて頂いているわけにはいかない、との思いもあります。川上先生とお会いして以来、川上先生を道標としてこれまで進んで参りましたが、これからは自分で道を切り開いて行く、という気持ちを強くしています。また、それが僅かながらでも川上先生から頂いたご恩をお返しすることにもつながると思っております。もちろん、今後も多くのご指導ご鞭撻を賜るかと思存しますが、いつか川上先生のように職場のメンタルヘルスの研究と実践の両方に大きな貢献ができる人材になることを目指して精進していきたいと思っております。

末筆ではございますが、川上先生の今後ますますのご健勝と末永いご多幸を心よりお祈り申し上げます。これからもどうぞよろしくお願い致します。



今村 幸太郎

東京大学大学院医学系研究科精神保健学分野 特任講師

川上憲人先生のご退職に寄せて

川上先生、この度は、ご退職まことにおめでとうございます。先生の長いご研究生活、教育生活の、ほんの一部とは存じますが、間近で拝見し、様々なご指導をいただき勉強をさせていただきましたこと、大変ありがたく、私の人生においては奇跡のようなことだと改めて感じております。

修士課程に入学し、教室でお世話になるようになってから、8年が経とうとしております。研究の字もわからない私を、教室に迎え入れてくださった先生の懐の深さに、今更ながら敬服いたします。そればかりか、博士論文執筆中の、もうあとがないと思詰めてばかりの日々の中、教室にとお声掛けくださったことは、感謝してもしきれません。その恩返しもできぬまま、先生のご退職を迎えることとなりました。この8年に思いを巡らせると、先生との思い出の場面が鮮明に蘇ります。

本日は、せっかくの機会をいただきましたので、これまでお伝えできなかった「秘かに思い出してはいつでも励まされる川上先生の思い出ベスト3」を、こちらに書かせていただきます。

第3位 博論の苦しみの中で

博士論文の執筆は、私にとって、とても苦しいものであり、大変なものでありました。私にはさしたる生産性もなく、申し訳なさと共に、ただひたすらに博論と向き合う毎日でした。そんな私に、川上先生はいつも温かいお言葉をかけてくださいました。中でも、忘れられないお言葉が二つあります。詳細を申し上げるのは憚られますが、ひとつは私の経済面に、そしてもうひとつは私の健康面に関することでした。そのお言葉をかけていただいたとき、そのような細かいところまで気に掛けてくださったことに大層驚き、一気にやる気が漲る感覚がしたことを、今でも鮮明に思い出します。そして、思い出すたびに、秘かに励まされております。

第2位 ご講義の中で

きっと誰もがそうであるように、私は川上先生のご講義が大好きです。年度の初めの教室ゼミでの川上先生のお話は、私にとっては夢のようなお話だけれども、実際にはどれも現実のご研究であり、研究者としても、労働者としても、そしてひとりの人間として、とても前向きな気持ちにさせていただける、初回ゼミです。そして、ご講義はとても愛情に溢れていて、平易な言葉で表現いたしますと「困っている人」「支える人」「仕組みを作る人」の誰に対しても、大きな愛情が感じられ、勇気づけられます。ほかには、ご講義ではありませんが、先生が今年ご出演なさったラジオ番組での最後のお言葉「(職場の環境は) やっぱり自分で変えた方がおもしろいですよね」がとても印象に残っており、私自身、研究をする際には、そのように思っていただけのようにしていきたいと改めて思い、励まされるのでした。

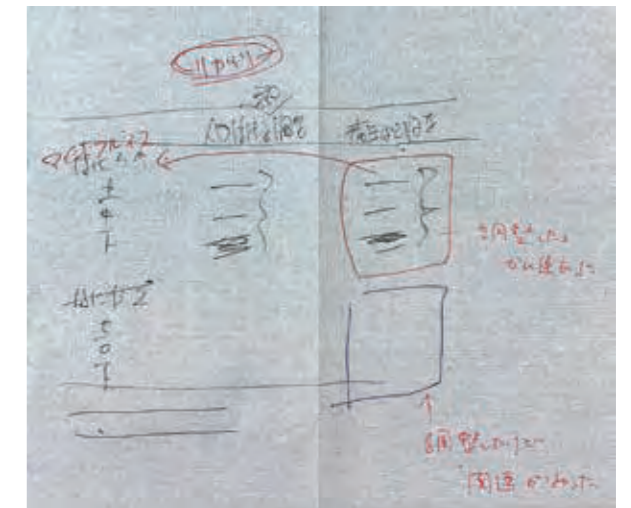
第1位 ジャングルの中で

今思えば、私は今もずっとジャングルの中にいるのかも知れません。何がジャングルかと申しますと、先生の伝説のご講義「精神看護特論Ⅰ」(当時はⅡ)の初回講義で「研究の手順」をご説明くださった際に「ジャングルの様、すごく時間がかかる」とお話くださり、その時に、まさに、鬱蒼と茂るジャングルの中で途方に暮れる自分の姿がありありと想像でき、空恐ろしさを覚えたのでした。そして、特論の課題作成に苦戦し、集会室でひとり途方に暮れていた私に、川上先生は、近くにあったペーパー

タオルにサッと解説のテーブルを書いてご説明くださいました。そのとき私は、まるでジャングルの中で光を見つけたかのような感覚を覚えたのでした(未だ出口は見つけておりません)。いまでもそのペーパータオルはお守りとして大切に持っており、思い出しては秘かに励まされるのです(写真)。

以上、私が密かに励まされている至極個人的な思い出を、思い切って書かせていただきました。先生の、人や、研究、学問に対する愛情の深さを、改めて感じております。

川上先生のご功績に敬意を表し、今後ますますのご健康とご多幸、そして益々のご発展を祈念いたします。私は、先生に教えていただいた「めげずに淡々と」の精神で、精進して参る所存です。今後とも、ご指導ご鞭撻を賜れましたら幸いです。



澤田 宇多子

東京大学医学系研究科精神看護学分野 特任助教

川上先生、今までありがとうございました。

川上先生、この度はご退職おめでとうございます。川上先生は私が人生で出会った方の中で最も尊敬すべき人の一人で、そんな先生に専門職学位課程（SPH）で1年、医学博士課程の4年、そして特任助教として1年の、計6年間も手厚い指導を受けることができ、とても光栄だと感じております。

SPH在籍中、「今後研究を続けていくなれば、色々なステークホルダーと接し、視野を広げ関係を作っていくべきだ」とアドバイスをいただき、私が児童相談所や子どものNPOで働くきっかけとなりました。そういった場で私が研究者としても、臨床医としても貴重な経験を積むことができたのは、先生のおかげだと思っています。また、研究については、いつも細やかかつ厳しくご指導いただきました。川上先生に私の論理的思考の甘さを適格に指摘されると、時に落ち込むことはありましたが、論文が受理された時や、学位審査を合格した時は喜びもひとしおでした。

近年はコロナ禍のため、教室メンバーで集まることもできずにいますが、以前は教室旅行や教室行事で先生と何気ないお話をするのも非常に楽しかったです。先生や教室の皆さんと我が家で楽しく飲み会をしたのも、今ではとても良い思い出です。

川上先生が生き活きと研究の楽しさを語られ、他分野の知見を聞くと常にご自身の研究分野での応用を考え、貴重なお休みの日にも論文をたくさん書く時間ができて嬉しかったとお話されていて、研究者としてあるべき姿を見せていただきました。先生はこれからも社会に貢献する研究を次々に繰り出していかれるのだと思いますが、私も先生の「社会に優しく、自分に厳しく」の姿勢を見習い、少しでも社会に貢献できる人になろうと思います。本当に今までご指導ありがとうございました。



帯包 エリカ

東京大学医学系研究科精神保健学分野 特任助教



ご退職おめでとうございます。

川上先生、この度はご退職おめでとうございます。SPHから博士課程まで、本当に長い間お世話になりました。ありがとうございました。

川上先生に温かく指導をいただき、世界精神保健日本調査に参加し、何もわからないところから解析手法、論文作成まで幅広く学ばせていただきました。大学院の頃には、研究成果を得るまでの道のはこんなにも辛いものかと感じたこともありましたが、先生がいつも親身に丁寧に指導して方向を示して下さいのおかげで、研究生生活を充実して過ごすことができ、感謝しております。

先生の素晴らしい業績の陰には、多くのご苦勞があったことと思いますが、先生の研究者としての姿勢、好奇心や新しいことにいつも楽しみながら挑戦されているご様子に、いつも感銘を受けておりました。先生の研究室で学んだことやpublishできた論文は、今の私の財産になっております。また、世界精神保健調査のハーバードの研究会に先生と参加させていただき、さまざまな国の先生方と交流し、多くの経験をさせていただいたことは、一生の思い出です。これからも先生のより一層のご活躍をお祈りしております。



石川 華子

東京大学大学院医学系研究科精神保健学分野 客員研究員

川上先生のご退職に寄せて

川上憲人先生におかれましては、2006年にご就任以来16年間にわたる教授職を終えられ、無事ご退任を迎えられたことに対し、心よりお祝い申し上げます。また、数々の研究成果に加えて、多くの学生の教育・指導及びメンタルヘルス研究の発展に御尽力され、多大なご功績を残されたことに心より敬意を表します。

公共健康医学専攻を修了し、研究職として業務に携わるようになったことで、精神保健学分野で受けた研究教育がいかに優れたものであったかを日々実感しております。大学卒業後20年以上経ってから研究に携われるようになり、スタートの遅かった私にとって、精神保健学分野に在籍できたことは幸運なことでした。そのような教育を受ける機会をいただけたことに改めて感謝申し上げます。

最も印象に残っているエピソードは、研究職に応募する際に推薦書を書いていただいたことです。あまり接点のない私の推薦書を書くのはご難儀であろうと心苦しく思っておりましたが、私自身気づいていない研究室での立ち居振る舞い、研究への姿勢について言及していただき、多くの学部生、大学院生が在籍する中、どのような立場の学生に対しても目配りをされていることに感銘を受けました。

現在は博士課程への進学を視野に、研究業務に邁進しております。川上先生のもとでもう一度学ぶことができればよかったのですが、残念ながらそれは叶いませんでした。しかしながら、どこかでステップアップし頑張っていることを風の噂でもお届けすることができれば、少しでも恩返しになるのではと思っております。私が社会人になった頃は、企業のメンタルヘルス対策はほとんど行われておらず、気にも留められていなかったと記憶しております。現在、当たり前のように対策が行われ、メンタルヘルスの正しい理解が進んでいる状況を見て、川上先生のご功績の大きさを実感します。私も研究対象者の方のお役に立つような研究ができるよう、努力を重ねてまいります。

これからも積極的に新しいことに取り組まれると伺っております。川上先生の益々のご活躍とご健勝をお祈り申し上げます。

片岡 真由美

東京大学大学院医学系研究科精神保健学分野 客員研究員

川上先生と SPH、そしてパブリックヘルスマインド

ご退職おめでとうございます。

長年に渡り勤めあげられ、ご活躍が続けられたことをお祝い申し上げます。

私は11期として公衆衛生学大学院（SPH）に入学し、修了致しましたが、その間川上先生は専攻長を務められておりました。初めて飛び込んだ世界に自然と参加していける仕組みをご用意くださり感謝しております。ご一緒頂く機会に恵まれ、数多くの思い出を頂きました。入学初日の履修の相談、精神保健学Ⅰ、山本先生の歓迎飲み会、公衆衛生学会、ソウルで行われたソウル大学・北京大学との合同会議 PeSeTo、進路相談、どれもが私にとって影響のある重要な出来事、楽しい思い出です。

特に精神保健学Ⅰはメンタルヘルス研究の世界を学び SPH の支え合う雰囲気を感じることでできる入学当初の私にとって貴重な場でした。バックグラウンドの異なる学生が集まり、研究手法を学びつつ新しいプロジェクトをみんなで考え出すことで、皆で何か新しいことができると思えました。SPH の雰囲気は川上先生がリーダーシップをとられたものであり、授業の様子を今思い返すと企業人としても学ぶことが多いと感じます。自分の関心のみにとらわれず広く学ぶことができ、学習の幅を広げることができました。ご指導誠にありがとうございました。

医療者ではない私にとって公衆衛生という世界の扉を開いてくださったのは川上先生でした。繰り返し仰られたパブリックヘルスマインドという言葉は、私の理解では皆が健康的に生活するためにどうしたらよいかという視点と心構えであり、それを持つことは、公衆衛生の世界で自分がどのように役立つべきかの重要な考えであり、研究に迷った時の立ち返る場所になっております。メンタルヘルス研究の大きな世界に私はまだその入り口に立っているにすぎませんが、自分の特徴をみんなのために使えるよう精進したいと思います。

川上先生が専攻長の SPH に入学しご縁を得たことを幸運にまた光栄に思います。ご退職後も益々のご活躍をお祈り申し上げます。

竹野 肇

精神保健学・看護学教室 客員研究員
(東大 SPH 11 期)



川上先生への感謝と尊敬の気持ちをこめて

川上先生、ご退職誠におめでとうございます。博士課程の4年間にわたり、あたたかくも厳しくご指導いただきましたことを、心より感謝申し上げます。川上先生の授業をはじめて受けたのは、もう14年ほど前になるかと思います。その頃より、温和でやさしく、どっしりとした貫禄のある先生だと感じておりました。先生は学生に大変人気でしたので、卒論指導はいつも多くの学生から応募があったと記憶しています。紆余曲折を経て、私が教室の門をたたいた時、先生に「産業医をしながら研究をするのもおもしろいよ」とお声がけいただきました。博士課程入学後は、まさにその通りだと感じられるほど、先生にたくさんのチャンスとご縁を与えていただきました。ベトナムとの共同研究や、実装科学のワークショップ、労働者コホート調査（E-COCO-J）のアレンジなど、自分にできるのか心配になるような挑戦も、先生のご支援のもとで新しい世界をみることができたのは本当に貴重な経験でした。川上先生の論文指導のスタイルは、システムティックで論理的、端的で、「科学に誠実」でした。まだまだその通りにしっかり書くことができない私ですが、その研究者の先生方との交流や、査読をさせていただく機会を通じて、自分が川上先生から世界最高水準の教育を受けてきたのだと実感することが増えてきました。今までは教育を受ける当事者の目線ばかりでしたが、「研究者を育てることがいかに大変か」ということを聞き、川上先生の指導者・教育者としてのすばらしいお力の恩恵にあずかったのだと、あらためてありがたく感じています。

先生から学んだことを今後の研究や教育に活かしていくことが恩返しと思い、精進したいと思えます。精力的な先生と、まだまだこれからもいろいろな研究で一緒にできるのでは、と楽しみにしております。（また海外でおいしいごはんを食べながら、おいしいお酒が飲めることも楽しみにしています！）



佐々木 那津
東京大学大学院医学系研究科精神保健学分野 医学博士課程 4年

ご定年、ご退職おめでとうございます。

川上先生、ご定年、ご退職おめでとうございます。大学院4年間にわたり、ご指導いただき、ありがとうございました。世界精神保健日本調査セカンドや思春期主体価値研究を通じて、川上先生から論文作成技術を学べたことは一生の財産になったと感じております。また、博士研究を通じて、一つのことを粘り強く突き詰めていく力が養われたことは、今後の人生において、とても有用であると考えております。さらに、川上先生の研究室を通じて、多くの新しい人と出会い、色々な楽しい思い出ができました。どれも川上先生との出会いがなければ経験できなかったことであり、大変感謝しております。研究者としては、まだまだ未熟ではありますが、川上先生から教えていただいたことを基本とし、今後も地域精神保健に関わる研究を、細々とですが行っていきたくと考えております。川上先生の、これからのご健康と、ますますのご活躍をお祈り申し上げます。これからもお付き合いさせていただきますと幸いです。よろしく願いいたします。



安間 尚徳

東京大学大学院医学系研究科精神保健学分野 医学博士課程4年

心から感謝しています

川上先生、定年御退職心よりお祝い申し上げます。修士課程・博士課程合わせて7年間、言葉にできないほど多くの学びを頂き、心から感謝しています。

川上先生にお会いして、私の人生は大きく変わりました。特論の授業で、初めて学術論文世界の仕組みを教えていただいた時は、鳥肌が立って夜も眠れないほど感動しました。また、先生のおかげで、研究の中に美しいものやキレイなものがあることを知ることができ、すっかり研究に魅せられてしまいました。そして、世界精神保健調査などを含む先生のご活躍を拝見して、論理だけでなくアーティストのような感性をもって研究をデザインされていることに感銘を受けました。入学して直ぐに「自分も川上先生のような研究がしたい！」と強く思うようになり、そのころの気持ちは今も変わらず、日々の大きな原動力となっています。

実際の川上先生のご指導は大変厳しく、褒められた記憶はほとんどございません。でも、いつの間にか私の中にどんな鋭いコメントにも動じない強靱な心が出来上がっており、今はコメントがないと逆に残念で、もし研究のことで褒められたら不安になるかもしれません。とにかく、先生のご指導のおかげで私の今と将来があり、本当に、本当に感謝しています。

先生は、飲み会や教室旅行など研究の話以外の時には、いつもとても面白くて優しく、色々なことを気にかけてくださり、また休学中も含めて困った時には必ず助けてくださいました。MIDJA / MIDUS 研究会で京都に行った時、その頃もビシバシと研究指導いただいておりましたが、「よく早起きできましたね」と褒めていただいたことは、とても驚いたので鮮明に思い出すことができます。大学院生活を素晴らしいサポートおよび環境で過ごさせていただき、感謝の念がつきません。

私は、先生に多くのご指導をいただいているながら、まだまだ思うように研究をすることができません。しかし、最近では私も先生のお考えやもしご相談したらなんとおっしゃるか少しは想像ができるようになり、先生の弟子の一人として頂いた教えを守っていかれたらと思っています。私の師匠はこれからも川上先生です。これからはずっとお元気で川上先生らしくいてください。今後ともどうぞよろしく願い申し上げます。



岩永 麻衣

東京大学大学院医学系研究科精神看護学分野 博士後期課程3年

川上先生へ 5年間の感謝を込めて

大変お世話になっております、精神保健学分野博士課程3年の駒瀬優です。この度は、川上先生のご退職に際しまして、改めて感謝の気持ちをお伝え出来ましたら幸いです。

川上先生とは、2017年4月に研究室に入学して以来、修士課程2年間、博士課程3年間、ご指導いただくことが出来ました。入学当初の職場ゼミでは、支離滅裂なアイデアを提示する私に対して、途中で話を遮ることなく、最後までご説明をお聞きいただき、その上で不十分な点について、優しくご指導くださいました。また、修士課程の早い段階より、産学共同研究に携わる機会をいただき、そのことは私の人生の大きな転機であったように考えております。

添付させていただいております、2枚の写真は2017年10月28日、当時私がM1だったときのもので、まだ1年目で、緊張感も強かった時期ではありますが、親しみやすい距離感で関わっていただきました。また、研究室メンバーとの懇親の機会を多く設定くださりましておかげで、先生方や他の院生の方々とも緊張することなくコミュニケーションがとれるようになりました。

私にとって、川上先生は恩師であり、また、こうありたいと感じる(はるか遠くの)目標です。「自分がやりたいことを明確にして戦略を立てれば大抵のことは実現します。」は、川上先生の言われた言葉ですが、その戦略の背景には、これまで先生が築かれて来られたつながりや、実績やスキル、信念などがお在りなのだろうなと感じておりました。私は、いずれも未熟ではございますが、先生からの教えを胸に、精進してまいりたい所存です。

最後になりますが、川上先生は形容しえないほど「ハイパー」ではございますが、こなされてらっしゃる業務量もまた膨大なことと存じます。ご退職されて以降も、くれぐれもお身体をご自愛いただけたら幸いです。来年度以降は、いまの精神保健学教室は離散してしまうこととは存じますが、チャンスがありましたら、ぜひとも川上先生と関わらせていただければ幸いです。大変に幸いだと考えております。今後とも、ご指導・ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い致します。



駒瀬 優

東京大学大学院医学系研究科精神保健学分野 博士後期課程3年

3号館での学生生活への感謝

この度は、ご退職おめでとうございます。ご在任中はひとかたならぬご厚情とご指導を賜り深く感謝いたしております。

私は修士課程の学生時代に、他の研究室に所属しておりましたが、「精神保健学Ⅰ」を受講させていただいており、そこで初めて川上先生とお会いいたしました。川上先生は、終始、学生に寄り添う形で講義を進めて下さり、学生とのインタラクティブな講義が展開されていたことに深く感銘を受けたことを覚えております。

私は、博士課程から当研究室に入学いたしました。そこで、川上先生が信念を持たれて、研究活動をなさっていらっしゃるお姿を拝見し、自分もそのように研究を進めて参りたいと身が引き締まる思いがいたしました。当研究室は、とても恵まれた素晴らしい環境で、産業保健学領域の第一人者である、川上先生のポリシーを体現していらっしゃるなど、この3年間の博士課程での学生生活をもって体験させていただきました。このような素晴らしい環境で、研究をさせていただけたことへ改めて御礼申し上げます。

廊下ですれ違った際や、懇親会などでも、とても温かく接していただき、先生のお人柄、研究への情熱を感じさせていただきました。先生からお話を伺ったことは、私の財産であり、大変貴重な経験をさせていただき、感謝いたしております。当研究室で川上先生から学ばせていただいたことを胸に、私は今後、様々な形で医療現場はもちろんのこと、地域で暮らす方々のメンタルヘルス向上に寄与できる活動に邁進して参りたいと思っております。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



野沢 恭介

東京大学大学院医学系研究科精神看護学分野 博士後期課程3年

川上先生、ありがとうございました。

川上先生、ご退職おめでとうございます。私が当教室に修士課程で入学したのは2015年4月、受験時には想定外の妊娠7ヶ月でした。アカデミックな環境も出産も解らない事ばかりで不安しかない中、先生をはじめ教室の方々があたたかく迎えて下さり、支えられたことを覚えています。

先生が拓いてくださった研究の世界とその歩き方は私には大きな衝撃を感じるもので、その感覚は今も尚新鮮さをもって私の襟を正させてくれるような体験でした。そして研究と社会の橋渡しをなさる先生の取り組みを拝聴し、社会へ還元するにあたっては、理論の正しさだけでなく、心が結ばれたチームを動かしていくことの大切さを感じ、学びました。

先生の的を射るようなご指導に痺れた修士課程では「登ろうと思っていた山の場所を確認した」に過ぎないことを思い知り、歩みを進めるのか決断が必要でしたが、そのような時に、先生が授業やゼミで本当に楽しそうにご教授下さるお姿や、研究だけでなく学部や社会への教育普及活動等、あらゆる方面に熱心に心を傾けていらっしゃるお姿は強く背中を押して下さいました。研究の世界を歩き歩くスタミナにはやや欠ける私ではありますが、この道を自分なりに諦めずに今歩めているのは、その世界を最初に示して下さいましたのが川上先生だったからだと思います。

そして、先生の神様のようなお言葉に一喜一憂したり、何とか懐に潜り込んでみようと画策したり、そんなことも懐かしいです。教室旅行の花やしきBBQで、修論のテーマが決まらず二次解析を勧めて下さった先生にまさかの抵抗をしたこと、修論の概念の定義は上手く出来なくても、旧岩崎邸の散策中に娘に天井と屋根の違いについて訊かれたときの返答に、傍にいた先生が「ああ、その定義は確かにそうかもしれませんね」と仰っていただいて救われたこともありました。三専攻の飲み会でお酒の力を借りて先生に近づき、「先生にPECOは何ですかと訊かれるのが怖いです！」という話から、「PECOTシャツを作って(書き込み式、倫理申請済のチェックボックス付き)ゼミ時はみんな着る」「RQを変えたら新しいTシャツを先生の所に1000円で買いに行く」なんてファンタジーを、いいですねと一緒に笑ってくださったこと等、先生にはほんの些細な時間だったと思いますが、私にはとても楽しい思い出です。修論発表会の前には、藁をもすがる思いで神田駅近くの喫茶店に「海苔トースト」を食べに行き、先生のパワーを分けていただいたつもりで本番に臨んだことも、です。

先生と出会えたこと、そして先生が築き上げたこの教室で出会えた皆様は、私にとってかけがえのない財産です。これからも先生のご活躍とご健康を祈念しております。いつまでもお元気でいらしてください。本当に、ありがとうございました。



森田 康子

東京大学大学院医学系研究科精神看護学分野 博士後期課程3年

川上先生への感謝の気持ち

川上先生、ご退職誠にありがとうございます。そして、4年間温かくご指導をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。

先生は、研究について右も左も分からない状態で入学した私がどこに向かっているのか分からなくなる度に、ゴールを意識して進むことが出来るよう、いつも的確なコメントをくださいました。職場ゼミやメールでいただくご指導に加え、研究計画や申請書類、論文執筆などで困っている時には要所要所で直接ご相談に乗って下さり、そのたびに前に進む道を見出すことが出来ました。博士課程に進学して直接の指導教官でなくなってからも、変わらず親身になってご指導をいただきましたことも、感謝してもしきれません。また、修士課程1年の時に「研究者として世界をどう変えるか」というお話をした会のことは、特に印象に残っています。先生の研究者としての想いに触れ、自分自身の研究者としてのビジョンについて深く考えるきっかけとなった機会でした。

TOMH事務局では、職場のメンタルヘルスについて学び、現場の方々との貴重なご縁をいただいたことはもちろんのこと、人として成長する大きなチャンスをいただき、大変感謝しております。先生は、人前に出るのが苦手な私に、「うまくやるのではなく、おもてなしの心を持つことが大切」ということを教えてくださいました。

そこから2年後、今年基礎コースでは受講生の方へのホスピタリティがよかったです、とお声かけをいただいた時は、先生からいただいたご助言で少し成長できたこと、そして先生が成長を見守って下さっていたことが、とても嬉しかったです。

私はまだ研究者の卵ではありますが、この4年間川上先生に教えていただいたことすべてが財産となっています。たくさんのご指導をいただき、貴重な経験をさせていただき、本当にありがとうございました。まずは博士号を取得し、今後、先生と研究をご一緒出来ますよう、精進して参りたいと思います。

先生の益々のご活躍をお祈り申し上げます。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。



飯田 真子

東京大学大学院医学系研究科精神看護学分野 博士後期課程2年

川上先生へのお祝いのことば

川上先生、ご退職おめでとうございます。これまでのご功勞に敬意を表し、心より感謝申し上げます。川上先生とは、修士課程入学時の恒例であった中華料理の龍藏でのお食事会で、お向かいに座ってしまい、目をくりくりさせてニコニコしていた先生を前に、何を話してよいのか戸惑った、というのが最初の思い出です。そして何やら分析のお話が弾む中、無知な私はPython？パイソン？とキョトンとして何もわからなかったあの頃ですが、その頃から今も無知具合は変わってはいないのですが、優しく見守っていただきまして本当にありがとうございました。

入学時の顔合わせ会のその後、主に職場ゼミに参加の方より、そこでは容赦ない川上先生のご指導が繰り返されているという話を聞き、あの笑顔は…と恐れおののいたこともありましたが、厳しい指導の裏には、院生の成長と将来を思う気持ちがあってこそそのものだと、卒業された先輩方へ先生が接しているお姿や、飲み会で下さったさりげない一言で感じ入ったことがありました。

また、海外研究者との国際共同研究のプロジェクトでのお手伝いをさせていただいた際、プロジェクトチーム内で扱う変数についてのディスカッションがあったのですが、その時に強気の社会心理学者への疫学者としての見事な一本背負いの切り返しのシーンなど、印象深かったことを、すがすがしい気持ちで思い出しております。我々が教授のプライドやバイタリティに敬服する一幕は多々ございましたが、そのように強いエネルギーをお持ちの先生が、ご退職の後にのんびりゆったりとしたお時間を果たしてお過ごしになれるのか、多少心配してしまうほどです。

ご退職後は長年こなされてきた激務でのお疲れを癒しながら、また新たに充実した日々を過ごされるだろうことを疑う余地もございませんが、僭越ながらいつまでもお元気でいらっしゃることを心よりお祈り申し上げまして、お祝いの言葉にかえさせていただきたいと思います。



須藤 美恵

東京大学大学院医学系研究科精神看護学分野 博士後期課程 2年

川上先生への感謝の気持ち

川上先生、ご退職をまことにおめでとうございます。ご指導をいただきましたこの3年間に本当に多くの事を学ばせていただきました。研究について未熟な私をいつもご丁寧にご指導くださり、心より感謝申し上げます。

論文のご指導の際には、私が研究仮説を考えることをじっくりと待ってくださるとともに、論文掲載まで常にお優しくご指導をくださり、研究や論文執筆につきまして多くの事を学ばせていただきました。職場ゼミに参加させていただき、産業保健や研究について学びを深めることができました。教室ゼミでの川上先生のご発表やいただきましたご助言・ご質問は、私の一生の教科書として大切にしていきたいと思っております。また、研究だけでなく、川上先生の日々のお姿から教育者・研究者として重要な事をたくさん学ばせていただきました。

本教室にて学ばせていただきました3年間は私にとって、恵まれた環境にて成長できた、宝物のような時間でした。入学前には私のような未熟者が入学しても大丈夫だろうかと不安に思っていたのですが、川上先生にお会いでき、この教室にて学ぶことができ、本当に良かったと思っております。学ばせていただきましたことを胸に、これからも成長できるように努めてまいります。研究者・教育者として成長し、社会に貢献することが恩返しと思ひ、日々精進してまいります。また、これからも教室に在籍続けられる人材として、川上先生のご退職後も川上先生が築いてくださったこの素晴らしい教室を今後も続けられるように努めたいと思っております。

川上先生への感謝の気持ちや学ばせていただきました事は、こちらでは書ききれないほどに沢山ございます。この教室にて川上先生にご指導をいただきました日々は、私にとって大切な幸せな時間です。この日々を胸に今後も精進してまいります。心より感謝申し上げます。

川上先生の今後のご健康と益々のご活躍をお祈り申し上げます。本当にありがとうございました。



浅岡 紘季

東京大学大学院医学系研究科精神看護学分野 博士後期課程 1年

教え、導いてくださったことに 心からの感謝の気持ちを込めて

川上先生、ご退職誠におめでとうございます。卒論生・修士課程の3年間ご指導いただきまして、心より感謝申し上げます。

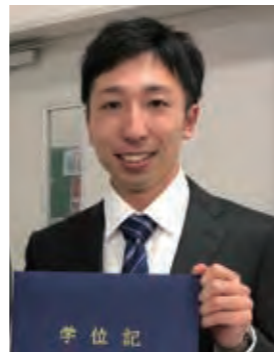
川上先生との思い出としては、先生としてたくさんのことを教えてくださっただけでなく、リーダー・モチベーターとして何度も勇気づけてくださったことを思い出します。川上先生の「シミュレーション研究って、なんだか秋山くんに似合うと思うんだよね」というコメントに導かれ、ふわりとチャレンジしてみたシミュレーションを使った課題研究。勉強・研究を始めた当初はたくさんの不安もありましたが、先生のご指導のおかげで漠然としたものから研究仮説がどんどん形作られていきました。シミュレーション研究をすすめる中、本当にたくさんの解析・パラメータの設定などが必要で、自分のキャパシティを超えているのではないかと心が折れそうになることも多かったのですが、先生の“Be a knowledge creator”の言葉を支えになんとかアイデアを形にしていけることができました。

また、川上先生がPMHゼミで、私の進捗報告をいつも笑顔で聞いてくださったことも本当に心の励みでした。「川上先生がニコニコしていたから、きっと間違った方向には進んでいないぞ！今週も頑張って進めて、川上先生の笑顔をまた見よう！」と、そんな気持ちで毎日過ごしていました。Preciliaさんと「川上先生は研究者として、教育者として、そして私たちのリーダーとして、本当に素敵な人だよ」と話し合ったことも記憶に残っています。たくさんの人にとって素晴らしい環境を先生が作り上げていたことに改めて感銘しつつ、そのような場で学ぶことができたこと、本当に感謝しています。

川上先生から教えていただいたこと、いただいたお言葉、背中を押してくださる温かい空気、どれ一つとっても私にとって宝物ばかりです。この宝物を握りしめて、この先の様々な場面で活かしていきたいと思います。本当にありがとうございました。川上先生の今後のご健康と、ますますのご活躍をお祈り申し上げます。

秋山 浩杜

東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻 専門職学位課程2年



川上先生から学んだこと、そして感謝の気持ち

川上先生、この度はご退職誠におめでとうございます。これまでたくさんのご指導をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。

先生と初めてお話をさせていただいたのは、学部2年生の頃に海外研修についてご相談した時だったと記憶しております。2年生のトンガ研修、3年生のニュージーランド研修と2度、研修の内容や方向性について悩んでいる際にご相談にのっていただきありがとうございました。海外の精神保健を学ぶ際に必要となる視点や、事前に学習しておくべきポイントを教えていただいたことで、現地での学びを深めることができました。充実した研修を実施することができ、その後の研究にもつながる貴重な経験となりました。

卒業論文や課題研究においては、先生にご助言・ご指摘をいただくことで、ぼんやりとしていたことが鮮明になっていき、進むべき道が明るく照らされ、研究を前に進めることができたように感じております。また、私自身が何をやりたいか、どのように進めていきたいかを常に問うてくださいました。主体的に物事を進めることが得意ではなかった私ですが、先生がたくさんのアドバイスをくださりながらも、自分で決められるように進めていただいたおかげで、取り組みたいテーマに取り組むことができました。

先生のもとで精神保健について学びたいと思い健康総合科学科に進学してからこれまで精神保健学教室で過ごしてきた時間は、私にとって忘れることのできない大切な時間となりました。今後は研究とは離れた道に進むこととなりますが、社会人人生においても、研究を通し川上先生から教えていただいた「物事に取り組む姿勢」を忘れずに成長していきたいと思っております。

川上先生の今後の益々のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。本当にありがとうございました。

池山 萌香

東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻 専門職学位課程2年



川上先生への感謝をこめて

川上先生、ご退職を誠におめでとうございます。入学時より2年間にわたりまして温かくご指導を賜りましたこと、心より御礼を申し上げます。

この2年間の中で、川上先生のお元でこそさせていただけるような大変貴重なご機会を数多く賜り、勉学の面だけでなく人としての生き方全般に関して様々なことを学ばせていただきました。

私の入学と共にコロナの流行が始まってしまい、先生と直接お目にかかることや対面でお話をさせていただくご機会はなかなかございませんでしたが、ゼミや講義にてご指導を頂く際や、オンラインでの交流の場などでご一緒させていただきました折に、川上先生の温かなお人柄を拝見し、私もいつかは先生のようになりたい、と憧れておりました。先生の温かさに触れて一番嬉しかった思い出は、オンラインでの交流の場で少人数に分かれてお話をする機会に、先生が私の講義内での発言を覚えてくださったことです。ほんの些細なことでしたが、当時は一人で上京してコロナ禍に見舞われ、孤独を感じているさなかでしたので私のことも温かく見守ってくださっているんだと感じ、嬉しかったことを今でも鮮明に記憶しております。

また、毎週の職場ゼミでは、2年間という期間では上手にご報告ができるようにはなりませんでしたが、たどたどしいご報告しか差し上げられずとも、耳を傾けてくださり、鋭くも温かいお言葉を賜りましたこと、改めて御礼を申し上げます。職場ゼミにて先生のご指導を賜るほか、私より長く川上先生のご指導を賜っておいで先輩方のお姿を拝見しつづけたことで、私自身は入学前よりもずっと、問題を深く多角的に考える力や、逃げずに食らいついていく力が強くなったと感じております。

入学時は、川上先生のお元で学ばせていただくということに対する期待もありつつ、不安な気持ちも大きかったですが、諦めずに入学を決意して本当によかったと思っております。

研究室においで先生方や先輩方、先生とお繋がりのある皆様方が、大変温かく迎え入れてくださり細やかにご指導をしてくださいますのは、川上先生のお人柄ゆえのことと感じております。こうした皆様とご一緒させていただき、先生のお元で過ごさせていただきましたことは、私の人生にとって大きな宝物です。

川上先生の今後のご健康と、益々のご活躍をお祈り申し上げます。

ありがとうございました。



大藪 佑莉

東京大学大学院医学系研究科精神看護学分野 修士2年

ご退職誠におめでとうございます

ご退職おめでとうございます。ご在任中はひとかたならぬご厚情とご指導を賜り、深く感謝いたしております。

研究に対する真摯なお姿に、いつも身が引き締まる思いでした。

特に私は、川上先生から、学生への思いやりと新しい変化を常に起こそうという姿勢の大切さを学びました。

学生への思いやりに関しましては、特にゼミの中で感じました。どんな私の拙い発表にも次の指針やヒントになるコメントを下さったこと、本当にありがたく、川上先生の思いやりにはどんなに救われたことかわかりません。

また、常に新しい変化を起こそうとアイデアを持ち、実現に向けて動かれていらっしゃるお姿も非常に印象的です。現状に満足せず、もっと良くなるにはどうしたらよいか、常に考えていらっしゃるお姿を2年間近くで拝見することができて、自分自身大変影響を受けました。

学生への思いやりと、研究に対する真摯な姿勢はもちろんですが、個人的に川上先生に感謝をしておりますのは、電子メールの返信のスピードです。自動返信メールかと思う位のスピードに毎回圧倒されると同時に、どんなに困った状況でも電子メールをお送りすると、すぐにメールをご確認いただき、次の一手を示すご返信をいただいたこと、これは本当に助かり、大変感謝をしております。

コロナ禍の2年ではございましたが、川上先生からは多くのことを学ばせていただきました。2年間、川上先生からご指導いただいたこと、人生の宝です。私の中の川上先生イズムは永遠にあるものですし、これからも語り継いでいきたいと思っております。

そしてこれは、個人的な願いですが、いつか川上先生とリアルでお会いしてお話をさせていただきたいと誠に勝手ながら思っております！

川上先生、ご指導を頂き本当にありがとうございました。これからもお元気で、またご指導戴く機会を頂戴できましたなら幸甚です。

今後ますますのご健勝と末永いご多幸を心よりお祈り申し上げます。



友永 遥

東京大学大学院医学系研究科精神看護学分野 修士2年

川上先生との出会いが人生の大きな転機となりました

川上先生、ご退職誠にありがとうございます。「人生が変わる」というキャッチフレーズの TOMH8 期に参加した 2019 年秋以降、本当に私の人生は大きく変化しました。川上先生が作ってくださった学びの場で熱いパッションやリーダーシップを持つ産業保健の先輩や仲間たちに出会えたこともさながら、東大 SPH 進学が気になっていたものの勇気がなかった私にとって、「東大 SPH と精神保健学研究室で川上先生からもっと学びたい」という想いが強まる転機となりました。

TOMH4 日目に私が 1 番前の席で受講した日、川上先生から講義の途中で「キラキラした目で学ばれていますね」というコメントをいただいて、気恥ずかしくなったことをよく覚えています。私にとっては産業保健の現場で科学的根拠をもとにしたメンタルヘルス対応を実践することは、まさに望んでいたことで、1 つでも多くを学んで吸収したいと思って受講していたように思います。

SPH15 期 2 年コース生として、無理を言い 1 年だけでも精神保健学研究室でご指導を賜うことができまして、本当に心から感謝をしております。振り返ると、必死でもがいていただけのようであったという間の 1 年で、産業保健の現場に MPH ホルダーとしての学びや視点を今後どのように活かし還元していけるのか、今でも日々模索中ではありますが、4 月末にお時間を取ってお話いただいた際に川上先生からご提案された 3 つの選択肢のうちの 1 つを自分の強みとして身に付けられるよう精進したいと思います。まだまだ研究者としては未熟すぎる不出来な私ですが、川上先生の常に新しいことにチャレンジし続けようとする姿勢、大きなビジョンを描いて世界のメンタルヘルスや産業保健に貢献されていらっしゃるお姿を私自身も遥か先の目標の 1 つに掲げ、研究と実践をつなぐことができるように努力を続けたいと思っています。今後ともご指導ご鞭撻を賜りましたら幸いです。

ご退職後もきっと「趣味」とおっしゃられていた産業医活動や、デジタルメンタルヘルスの分野で引き続きご活躍されることと思います。川上先生の益々のご活躍を楽しみにしておりますとともに、これからも素敵な充実した人生となりますようお祈り申し上げます。



小川 明夏

東京大学大学院医学系研究科
公共健康医学専攻 専門職学位課程 1 年



川上先生への感謝をこめて

私が川上先生に初めてお会いしたのは、大学 2 年時に参加させていただいた大学院入試説明会の時でした。丁寧でわかりやすいご説明を伺って、職場のメンタルヘルスについて大変ご活躍されている川上先生のご講義を是非受けたいと思いましたし、メンタルヘルスについて研究したいと思うきっかけになりました。

入学後は、職場ゼミ、授業、共同研究など、様々な場面でお世話になりました。精神看護学特論のご講義は特に印象に残っています。論文がどのようなブロックに構成されているかや、論文投稿までの流れなど、今後の研究活動において大変重要な知識をわかりやすくご教授いただきました。英語論文を読むことへのハードルが高かった私にとって、論文の要点の探し方をこちらのご講義でご教授いただけたことは、大きな力になりました。ご講義資料をこれからもバイブルとして、何度も見返して勉強したいと思います。

職場ゼミでは、私の曖昧なご質問に対しても大変明確な道標を示してくださいました。ご助言のどれもが印象に残り、ゼミの度に疑問が解消され新たな発見がありました。共同研究では、詳細を説明する前に全体像を説明することの重要性をご指導いただいたことが特に印象に残っています。いつも川上先生のご作成された資料は全体像がはっきりしていて要点が理解しやすく、どうしたらわかりやすい資料の作成やクリアな説明ができるのかのヒントがたくさん詰まっており、いつも勉強させていただいておりました。ミーティングの際には、私にも発言の機会を設けてくださるなど、ご配慮をいただきました。学びの場を多くいただき大変ありがとうございました。また、メールでのやりとりの際に可愛い絵文字をつけて送ってくださるときがあり、心が和みました。

実際に教室でお世話になったのは 1 年間と、とても短い期間でしたが、川上先生に直接ご指導いただけたことは大変幸運でした。今後ともご指導を賜りたく、どうぞよろしくお祈りいたします。



土肥 由莉

東京大学大学院医学系研究科
精神看護学分野 修士 1 年



川上先生に感謝を込めて

川上憲人先生、ご退職誠におめでとうございます。1年間という短い間ではございましたが、温かくご指導いただきましたこと、心より感謝申し上げます。

入学して間もなく、先生がご担当された精神看護特論Ⅰの授業がありました。私は研究に関して右も左もわからない状態でしたが、先生より、一つ一つ丁寧に説明をいただき、少しずつ理解を深めることができました。研究について、今まで以上に興味関心を高める契機となった授業であったと感じております。また、授業の最終回に、同期より劣っているのではないかと不安を述べた時も温かく励ましてくださり、大変嬉しかったです。先生からいただいたお言葉を大切に、また、立ち止まった時には授業の資料をしわになるまで読み込み、より良い研究ができるように努めて参ります。

まだまだ先生からご指導いただきたいことがあり、非常に残念ではございますが、先生の意思を引き継いだ先生方や先輩方からお話を伺いながら精進していきたいと思っております。これまで激務の中に身を置かれてきたことと存じます。これからはお体を労りながら充実した素敵な人生を歩まれますことを祈っております。

本当にお世話になりました、ありがとうございました。



北條 理子

東京大学大学院医学系研究科神看護学分野 修士1年



川上先生、ありがとうございました！

川上先生、長きに渡り教室にご尽力いただき、大変お疲れ様でした。

川上先生のメンタルヘルス研究を培っていらした年月と情熱にただただ敬服いたします。

さて、川上先生のご退職に際して、何をお伝えすればいいやら。

お伝えしたいメッセージは沢山ありそうなのですが、多くは取るに足らないメッセージのような気がしています。そこで、誠に僭越ながら、私視点から“川上先生との関わり”を述べさせていただくことにしました。

私が教室に就いたきっかけは東大HPの事務職員の公募でした。医学部という硬いイメージの職場で自分が活かせるのかは不確かでしたが、10年間東大で事務をしてきた経験だけを頼りに応募したのが始まりでした。

しばらくして川上先生からメールをいただいた時は、思わず小さくガッツポーズをとりました。採用が決まるまで何回かメールのやりとりをし、面接で川上先生と初めてお会いした時は、多くの役職を持ちながらも、気さくで優しくさだ感じました。

しかしながら、前職場の教授に私の働きぶり？をご確認された時は、さすが医学部の重鎮：川上先生、秘書を選ぶにも凄く慎重だと思いました。（後から、そうでもないと知りましたが。）

どうにか採用されたようで、着任してからは「なんだかんだとあり・・・」でした。今の立場は公募内容とは違うようで・・・。（ちょっとだけ、恨み説ですね。）

同じ東大内であるにもかかわらず、やはり部局ごとに事務の回し方が違い、初めは訳がわからず、とにかく聞いては進むといった具合で、川上先生にも事務のことで色々聞いてしまいました。私の質問によく先生が言われた、「うーん、何言っているかよく分からないな。」や「今のは情報が多すぎて、よく分かりませんでした。」は、言葉を端折ってしまったり、矢継ぎ早に話してしまったりする私の話し方に対する教訓として持っています。

川上先生の言葉はストレートで時に凹みましたが、何人かの応募者から選ばれたのだからと無理矢理自分を励ましたものです。一緒に仕事をしていて共感を持てたところは“せっかちさ”。私もせっかちですが、川上先生もせっかちなようで、その“せっかち”同士で仕事を進めてきた感があります。日常の先生からの簡潔な仕事の指示メールに「下記、承知いたしました。」だけの短い返信を例に。

あっという間の5年間でした。前職場では、経験のない仕事も多々あり、その都度戸惑いながらも川上先生や教室の支えがあり、何とかこなして来ました。

そして、本当に多くの事を学ばせていただきました。言葉、仕事、対人関係、狭義な所では東大という職場、教授のお立場、秘書の立場・・・etc. それらにおいて川上先生から特に学ばせていただいた点は、「ブレない」ということだったと思います。

人生いろいろ迷うことがあります。迷って真っ暗になった時、ブレない言葉を思い返し、ブレない自分を信じれば、なんとなく先が見えて、少しでも光が差すと思うのです。ブレない川上先生だからこそメンタルヘルスの研究を究められたのですね。大いに尊敬しております。

川上先生の下で働かせていただき、仕事がこうも楽しく、苦しいものだったかを、今更ながら思い出させていただきました。

最後になりましたが、ご在任中のご指導に感謝申し上げますとともに、今後のますますのご健勝とご多幸を心よりお祈りいたします。



「川上先生 20年ぶりの白衣 (2021.8.21)」



南澤 三恵子

東京大学大学院医学系研究科精神保健学分野・精神看護学分野 秘書

夢追い人

初めて川上先生とお会いしたのは、事務補佐としての面接の時でした。一通り履歴書に沿ったお話や職務内容、待遇など、よくある人事面談の後に、川上先生が一言、「あなたの夢は何ですか？」と。

正直、戸惑いました。20代後半でそれまで目標としていたことに挫折し、メンタルヘルスもやられて、とにかくがむしゃらに就職し、職場でも挫折に遭った矢先に出会った主人と結婚し出産、さて人生これからと言う時に子どもの難病が発覚し、仕事を辞め、命を救いたい一心で移植などを経て、子育ても山あり谷ありのなか、ようやくようやく落ち着いて気がついたら、40代後半にさしかかっていました。その間にいつしか「夢」を考えることも、語ることもなくなっていました。強いて言えば、「子どもが健康であること」だけを考えていた十数年間でした。そして、いつしか「中年」を過ぎた自分が「夢」をなんて…という自虐的でネガティブな考えが当たり前になっていたようです。そんな自分を見透かしたのか、川上先生の「あなたの夢は何ですか」の問いに、どう答えたか今では覚えておりませんが、「私のこれからの夢は何だろう？」と考えるようになりました。

精神保健学教室で秘書となり、自分の夢を…と考え始めた矢先に、またもや我が家では次から次へと大きな人生の出来事に襲われておりますが、そのたびに小さな夢として、目の前の問題がクリアされ、家族が穏やかに過ごせるようにと心のバランスを保ち、未曾有のコロナ禍のなかで、大きなトラブルに直面しても、20代の頃とは違い、メンタルが保てたのは、小さな夢を持ち、小さいながら一つ一つ叶えて行ったからかもしれません。

今でもまだ「私の夢はなんだろう？」と、ふっとした時に思います。はっきりした「夢」はまだ見つかっていませんし、この先も見つかるかどうか分かりません。でも、「夢追い人」ならぬ、「夢探し人」として生きる日々は以前よりもポジティブにさせてくれました。

ご退職、誠におめでとうございます。今後のご健康をお祈り申し上げます。



呉 心之

東京大学大学院医学系研究科精神保健学分野・精神看護学分野 学術専門職員

祝 ご退職

川上先生、16年間もの長きに渡り精神保健学と精神看護学教室をご牽引なさりお元気でご定年を迎えられましたことを、心よりお慶び申し上げます。

約2年間と短い期間ではありましたが、私の精神保健学教室での勤務は長い期間の仕事のブランクから久しぶりに社会に出て働く機会となりました。在職中は川上先生や他の先生方、同僚の職員の方々に仕事に関することや研究室に関することを色々と優しく教えて頂いたり、授業や研究の合間に私達職員の仕事場にあるコピー機を使いに来たり何かの質問に来た国内学生さん、留学生さん達と時折話す機会もあり良い刺激を受けながら仕事をさせて頂き感謝しております。嬉しいこともつらいことも両方経験したように思いますが、時間が経ち振り返りますと良かったことをたくさん懐かしく思い出します。

在職中は、研究室業務をサポートさせて頂く側の職員も教室内で起こっていることを把握するためにと私も最初の頃に他の職員の方と時々ミーティングに参加させて頂くことがございました。

川上先生と研究室の先生方が直近の精神保健学や精神看護学の研究室の授業やイベント等の振り返りをなさったり、より良い進め方についてご相談なさったり、生徒さん達がスムーズに研究を進めているかお互いに情報を共有なさったりしながら必要な時に必要と思われる人達へのきめ細やかなサポートを心がけておられて感銘を受けました。川上先生はお忙しい中でも教室全体を見渡すご姿勢を崩さず精力的に活動なさっていたのが印象的でした。

ご退職までの最後の約2年間は長引くコロナ禍で誰もがつらく不安な日々を過ごすことになりました。おそらく、川上先生も教室の皆様と協力しながら悩んで苦しむ人達の気持ちに寄り添っていらっしやっただのではないかと思います。長い間お疲れ様でした。

ご退職なさっても、お元気で充実した人生を過ごされることを願っております。

酒井 理花

Kawakami, Karasek, and the JCQ (Job Content Questionnaire) Through The Years

For over three decades Norito has been a core co-collaborator on psychosocial workplace risk factors and health – and in particular has been a critically important supporter of the JCQ Center and the international process to define the coming JCQ 2.0.

We probably first met when Norito and I made a scientific presentations in the same session at the First - yes the First - international Conference on Behavioral Medicine in Uppsala Sweden in June 1990, where Kawakami then first noted his interest in translating the JCQ into Japanese for use in Japan.

Norito was always an important person in our international dialogues for further JCQ development: a constant participant in the many JCQ2 international conference workshops – where we spent many internationally-fruitful meetings to assess what the JCQ1 was missing and what the JCQ2 should include in (See photo of the JCQ International Workshop group in 3rd International ICOH conference in Dusseldorf, Germany, with Norito next to me in the first row.

One of my favorite personal photos was taken at a scientific conference in the Netherlands – about 1998: with Norito, myself and Irene Houtman, who was a chair-person for the conference activities.

One important JCQ2 workshop was hosted by Norito in August 2005 in Okayama, the Second ICOH International Conference on Psychosocial Factors at Work - where Norito was full conference organizer, supported by an army of red T-Shirted assistants. Here the first Chinese JCQ 2 Pilot study was proposed by Dr. Jian Li (now a Professor at UCLA).

Norito Kawakami's JCQ User's Fee payment in 1994 from Gifu University to the JCQ Center at University of Massachusetts Lowell was a generous amount (the Japanese government was quite wealthy and ambitious at that point). This payment was the critical “start-up” evidence to demonstrate to our university that the JCQ Center could be a free-functioning research center.

Simultaneously in Japan, Norito established and administered a Special “JCQ Sub-Center” to administer the JCQ in Japan. This functioned well and can be a good model for our future JCQ 2 activities.

There were delightful social events as well:

Norito arranged a great dinner at a historic local palace for the 2005 conference core group– I believe it was in Okayama or Kyoto - with a lovely and delicious dinner, and a photo of Norito, myself, and Ichiro Kawachi of Harvard.

Later in the conference my daughter and ex-wife attended a great Kawakami apartment party - a Very Popular event I was told “100 persons per square meter” (but I missed it - perhaps I could not fit in the door···).

Norito came to visit me at my house in Cambridge, Massachusetts where we had a nice dinner on the outdoor porch. I asked Norito to review a document I had just then written (Rational for a New JCQ 2.0). Said Norito: “Wow, Bob, that could be a very big new - and possibly demanding - undertaking,” but little did either of us know then just how big and how long it could take.

And so now Norito Kawakami and I along with our many other colleagues from so many countries - are still on the long but hopefully green, green, .. and greener.. pathway toward the healthy psychological workplace of the future.



Robert Karasek

Director, JCQ Center and Øresund Synergy; & Prof. Emeritus,
Work and Organizational Psychology,, Copenhagen U.,
Denmark & Prof. Emeritus, Work Environment, U. Massachusetts Lowell, US

Dear Norito,

Life is shaped by sequences, and as the sequence of retirement starts, this is a very significant experience for all of us who devoted so much of our life to academic work, to research and education. I am convinced that in your case, this transition will be very smooth as you look back to an extraordinarily flourishing, successful, and gratifying academic life. You devoted decades of your scientific activity to the development of work stress research in your country and beyond, and you initiated important policy programs to prevent stress at work and to promote worksite mental health. I am sure that this rich treasure of knowledge and experience will be helpful in preparing your active, challenging and stimulating (post)professional future!

It has always been a special pleasure and honour to meet and work with you. You achieved significant advances in your different roles as active original Researcher, as President of ISBM, as Chair of an ICOH committee, as journal Editor-in-chief, as Head of the School of Public Health and of the Department of Mental Health at Tokyo University - to name just those activities that are well known to a larger audience. Your own research has substantially enriched the field of work stress research, not only in Japan, but internationally. With your seminal input, you contributed, among others, to the improvement and diffusion of the effort-reward imbalance model, not least by a highly cited early review paper, together with Akizumi Tsutsumi.

More recently, the council of ISBM granted you a well deserved, Lifetime Achievement Award' for substantial contributions to behavioral medicine. I was pleased to see that we both were given this honour simultaneously, and it is unfortunate that the pandemic prevented us from a mutual congratulation.

Dear Norito, I take this opportunity to send you my best wishes for a healthy, happy, mentally and spiritually satisfying life as an Emeritus Professor, and I do hope that we will find an opportunity of meeting again in person. Please take my sincere regards!

Johannes Siegrist

Professor emeritus of Medical Sociology, Faculty of Medicine,
Heinrich-Heine-University Düsseldorf, Germany



Norito Kawakami, a dear friend and an excellent colleague

In 1998 I was responsible for organizing the First International ICOH Conference on Psychosocial Factors at Work in Copenhagen, Denmark together with my colleagues, Bo Netterstrom and Martin Nielsen. In those days there was a small group of distinguished researchers that often gave key-note presentations at conferences on psychosocial factors. We agreed that we would like to introduce the participants to new and eye-opening perspectives, and we also agreed that a young Japanese researcher with the name Norito Kawakami would be the right person to do this.

The two central characteristics of Norito's key-note presentation in Copenhagen were quality and relevance, and at the same time he demonstrated a splendid overview of the topic combined with deep insight. Overview without being boring and insight without going into irrelevant details. On the top of all this, he demonstrated a good deal of humor. As far as I know, this was one of Norito's first international key-note presentations. A splendid début for a 41 year old person.

I had met Norito before but for me this conference became the beginning of a life-long professional and personal relationship, where we had the chance to meet each other in many different countries. In this connection I will focus on two events: My visit to Japan in 2003 and the Second International ICOH Conference on Psychosocial Factors at Work in Okayama in 2005.

I am almost 80 years old now, but I can honestly say that my one-week visit to Japan in 2003 is one of the dearest memories of my professional life. I was invited by professor Teruichi Shimomitsu in close collaboration with Norito, Akizumi Tsutsumi and Yuko Odagiri. Yuko was my outstanding host who guided me on my trip for the whole week. During this trip I gave a number of presentations and workshops and was everywhere impressed by the high scientific level of the Japanese research already at that time. One of the specific features of the Japanese psychosocial research was that it was very inspired by Scandinavia (Sweden in particular) and not so much by the US. This gave the Japanese research a strong emphasis on structural and organizational factors and less on individual characteristics.

It also impressed me that so many colleagues were familiar with our work in Denmark. In particular people knew about the Copenhagen Psychosocial Questionnaire (COPSOQ) and the "Soft guidelines of COPSOQ" that were translated into Japanese. I found out that much of this dissemination was due to the effort of Norito.

In Okayama Norito and Akizumi showed me the conference site for the conference to be held in the city in 2005 and in the evening they hosted an amazing traditional dinner at a place where the Japanese emperor had eaten at a historic event. Norito once told me about the characteristics of a good host: "A good host knows what kind of beer you prefer, and he has it ready for you when you come to see him". Norito is such a host.

As I mentioned, the Second ICOH International Conference on Psychosocial Factors at Work

was held in Okayama in 2005, and needless to say it was a great success where I had the privilege to witness the great progress of the Japanese research in this field over the years.

In 2007 I was invited to Taiwan by Yawen Cheng, and much to my surprise I had a new opportunity to meet Norito who came to Taiwan together with Akihito Shimazu. At this occasion it became clear to me that Norito not only was an inspirational force for Japanese researchers but also for young researchers from Vietnam, Korea, Thailand etc.

Norito is now retiring from his chair as professor at the university in Tokyo, but if I know him right he will not spend the coming years in idleness. I am looking forward to seeing what he will choose to work with. I am sure that it will be a privilege to work with him – also in the years to come. He is leaving as professor but thanks to him there are numerous excellent Japanese researchers who will be able to carry the torch further.



Tage Søndergaard Kristensen
Professor, Task-Consult

Dear Norito,

It is a pleasure and a great honor to write some personal words now you are going to retire (Although I can hardly imagine what 'retirement' means to an ever hard working and engaged person as you are). We met for the first time at the ICOH-conference in Okayama back in 2005, where I was invited to deliver a key-note speech as a stand-in of Steve Sauter, whose daughter – when I remember well – was going to give birth to a baby. In a way, this occasion changed my life. It was the first time that I visited Japan and I instantly fell in love with this beautiful, interesting and mysterious country. The mystery for me still being that on the one hand Japan feels familiar because it is a prosperous, highly developed, western-style country where you can easily find your way and get around. Yet, on the other hand, the ancient, traditional beliefs and customs are quite difficult to understand and you sometimes really feel an outsider, coming from another planet. This is extremely fascinating to me.

I remember that we talked a lot about this. You have been an important teacher for me who helped me to understand the 'Japanese soul'. You played the role of teacher so well – as a real sensei –because you are also very familiar with western culture. For instance, you have visited my country – The Netherlands – many times and I know that you are interested in understanding our way of life as well. This is illustrated by the picture that was taken in 2010 in the garden of my place in Utrecht where I organized a Japanese-Dutch party with our Japanese guests who visited yet another ICOH-conference in Amsterdam and my team of Utrecht University (plus my family). Being a Japanese medical doctor, you once explained me that many Dutch words are still used in Japan like *メス* (from the Dutch *mes* – knife) because Dutch doctors from Deshima introduced western-style medicine in Japan in the 16 th century. So our countries and cultures are connected for many centuries.

You invited me a couple of times to your institute at Tokyo university and stimulated the collaboration particularly with Akihito Shimazu, who also visited Utrecht for a 9-months sabbatical. I am very grateful that you enthusiastically endorsed the academic exchange between Utrecht and Tokyo, which has been very fruitful and resulted in many joint papers, book chapters, conference presentations, symposia and guest lectures. Most importantly, it boosted the scientific and societal interest in positive psychology in Japan, most notably work engagement. I witnessed how you have embraced this alternative perspective on occupational health, which illustrates your broad mindedness, then it is not that obvious at all for a traditionally trained occupational physician to focus on positive health and well-being instead of stress and burnout.

But perhaps most of all, I enjoyed your warm, hospitable personality that made me feel 'at home' at your institute right from the start. Working with you is a real privilege, not only at a professional but also at a personal level. I wish you all the best for the future as a retired professor and I'm sure that – in one way or another – you will continue to contribute to Japanese and international occupational health.



Wilmar Schaufeli

Professor emeritus of Work and Organizational Psychology
Utrecht University and KU Leuven

Thanks for almost a quarter of a century of scientific friendship

In my memory we first personally met at the first ICOH-WOPS conference in Copenhagen, 1998, although we might have met before, since we have been chatting all along the preconference drink in the hotel where the conference was held. At that conference you held a very interesting key note in which you – amongst other things- discussed (and illustrated in a very funny way) how Japanese respond to a survey as compared to Americans. With very much humor you explained how easy Americans would answer a question using the negative answering category, as opposed to Japanese who would hesitate to do that, often even avoiding the negative answering category.

We met at many other conferences (including the ICOH-WOPS in Okayama, Japan), in many countries and cities all over the world. You were chair of ICOH WOPS when the conference was held in Amsterdam, organized by TNO and member of the scientific board of a European project. At that time you even visited my home, went to see the palace of our queen in Peter's red 'duck' (2CV Citroen), and had dinner with us at the beach of The Hague. We go back together for some time, as the photo's attached to this text will tell!



And now you will have your pension soon! I hope you will be able to keep your contacts, travel the world, meet and discuss with your scientific friends when you want to, all in your own pace and that of your family. I still hope to discuss psychosocial risks at work with you, as well as their impact on our physical and mental health. All the best to you and your loved ones! And hope to meet again at some day!.

Yours sincerely,



Irene Houtman
Senior researcher,
TNO, the Netherland



Happy retirement and thank you Norito!

I met Norito through my work for ICOH. I collaborated closely with him as the Secretary of the ICOH Work Organization & Psychosocial Factors Scientific Committee while he was the President. It was a pleasure working with Norito and his work has undoubtedly contributed to promoting knowledge and practice in this important area. He also organized an ICOH-WOPS conference that everyone who attended remembers very fondly since it was a great experience. Norito also invited me to Japan and I spent about 2 weeks filled with interesting meetings, presentations and stakeholder workshops. His hospitality was indeed heart-warming and I thoroughly enjoyed meeting him and other colleagues during my visit. I wish Norito a very happy and enjoyable retirement. He deserves it having worked restlessly so many years to promote occupational health. I'm sure we will continue to find ways to collaborate going forward. Thank you Norito for your leadership and contribution!



Stavroula Leka
Professor of Work Organization & Well-being
University of Nottingham, UK and University College Cork, Ireland

Report of the 3rd Asia Pacific Expert Workshop on Psychosocial Factors at Work

The 3rd Asia Pacific Expert Workshop on Psychosocial Factors at Work was held on 3rd-4th August 2012 in The University of Tokyo, Japan, chaired by Dr. Akihito Shimazu (Associate Professor, The University of Tokyo). This workshop followed the previous successful two workshops, which had been held in Darwin in 2010 and in Johor Bahru in 2011.

In the previous two workshops, experts from Australia, New Zealand, Malaysia, and Japan constituted the network. This year, this network has been expanded with new experts from China, Korea, and Thailand. In total, 22 experts from 8 countries (including Germany and France), 16 members of local organizing committee in Japan, and 5 volunteers from Japan participated in the workshop.

The program consisted of a keynote address, a keynote workshop, 18 oral presentations, 7 poster presentations, and round-table discussion (See Appendix for the content of the program). In the keynote address, Prof. Norito Kawakami (The University of Tokyo) talked about research and practice in psychosocial factors at work in Asia. In the keynote workshop, Dr. Kazuhiro Yoshiuchi (Associate Professor, The University of Tokyo) talked about the applications of computerized ecological momentary assessment in behavioral medicine research with small group discussion. In the round-table discussion, participants chose one of the following three topics and participate in a relevant group for the discussion: (1) Bridging research and practice, (2) Education and training for psychosocial factors at work, and (3) Innovations in work stress theory, research, and practice. A coordinator from each group presented the summary of the discussion in the final report to develop the overall future research agenda.



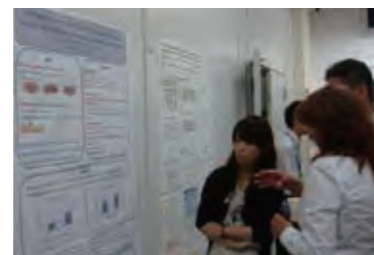
Picture 1: Keynote Address by Prof. Norito Kawakami



Picture 2: Keynote workshop by Dr. Kazuhiro Yoshiuchi



Picture 3: Oral presentations



Picture 4: Poster presentations

In the final resolution, Prof. Maureen Dollard (University of South Australia) proposed foundation of the academy in the Asian Pacific region, and all of the participants endorsed it. As a result, the Asia Pacific Academy for Psychosocial Factors at Work was officially launched (Friday 3rd August, 2012). It was also announced that the next workshop would be held in Thailand in 2013 chaired by Dr. Sara Arphorn (Assistant Professor, Mahidol University) and then in Adelaide in 2014 integrated as part of the International Commission of Occupational Health, Work, Organisation and Psychosocial Factors (ICOH-WOPS) September 17th -19th. After the whole program of the workshop, we had the farewell party, "Japan night", at Japanese restaurant, followed Karaoke party.

Finally, I would like to appreciate all members of international and local organizing committee and volunteers for their efforts in managing this workshop. Also, I would like to appreciate that this workshop was supported by The University of Tokyo School of Public Health and Japanese Society for Occupational Health Psychology, and sponsored by Ds's Mental Health Labo.



Picture 5: Japanese lunch box



Picture 7: Final resolution



Picture 6: Welcome reception



Picture 8: Japanese night



Maureen Dollard
University of South Australia

We need more "Noritos"

"What did I find when I had the fortune to meet Dr. Kawakami? I met a person who managed to inspire me to do more, to be better and to go beyond my own expectations. His outstanding professional dedication and humbleness are two rare qualities to find in such an achieved person. Dr. Kawakami is therefore a rare person. He uses his talents to support others, and along his path he always leaves a trace of something good to find for those who will follow in his footsteps.

It has been not only a privilege, but also a great pleasure for me to have walked alongside him during his professional journey. Moreover, I can say now, with great certainty, that the world would be a better place with more Noritos in it."

Warm congratulations on your upcoming retirement



Manuel Pando Moreno
President,
Instituto Internacional de Investigación Social,
Ambiental y de Salud Ocupacional (IIISASO)

Hello, Norito!

Dear Norito,

It is a bit surprised to hear that you are going to retire! In my mind, you are always a supportive, energetic, and mid-aged scholar and brother 😊

Still, I remember the first time of our meeting at the 5th APA/NIOSH Work, Stress and Health Conference in Toronto, Canada in March 2003, when I was a PhD student. Thank you so much for your encouraging words during my career development in this field. Since then, we met many times at international conferences, and I really enjoyed time and dinners with Japanese colleagues and friends. Without any pre-arrangement, we coincidentally met again in front of the Teotihuacan Pyramid, after the 6th ICOH International Conference on Psychosocial Factors at Work in Mexico in September 2017. What a magic day!

In June 2021, it was exciting to know that you received the International Society of Behavioral Medicine (ISBM) Lifetime Achievement Award! I also realized that we have known each other for nearly 20 years. Time goes fast!

I would not repeat how successful your scientific career is and how wonderful you are, everything is evident in your CV and our memories. However, it is regretful that we do not have research collaboration and joint publication yet. Let's do it in the near future!

All in all, I am grateful for your kind support, and I wish you a happy retirement!



Jian Li
M.D., Ph.D., Dr.rer.sec.
Professor of Work and Health
Fielding School of Public Health, School of Nursing
University of California Los Angeles, USA



Congratulations *to your new life chapter!*

From HUPH team to Professor, Norito Kawakami

*A man of many roles, a mentor, a sponsor, a colleague, or a guiding light...
as the many years you have provided.*

**Believing is hard since time flies so fast,
Our memory still fresh like yesterday we met
Always on our minds, collaboration you guide
Gratitude, respect, and admiration we express
Diligent and fair, dedicated and wise,
Supportive and kind, considerate in line,
Sometimes "selfish", shoulder most works
Not mention "greed", aim for perfect.
Although not long, we gain great achievements
We're sincerely grateful to work with you in person
Although not close to strengthen our collaboration
However, we know limitations've been solved**



*So many things we want to stress
But upon all we wish you best,
Like morning comes the sun will rise
This chapter ends, come new surprises.
May laughter light your days,
And good times never fade,
May happiness warm your nights,
and chases all worries away.
Eat, drink and be merry,
Play hard; enjoy life freely.
Now is the time to show the world
That you're amazing at whatever you do.*

Dear Professor, Norito Kawakami,

May the years of your retirement be rich, rewarding and kind,

If possible, please be in touch with Thuy as a representative of HUPH team (thuy4tytcc@gmail.com)
If you ever plan to come to Vietnam, please let us know.
We would like to have your new email and affiliate

Congratulations for Retirement: Professor Norito Kawakami

I could remember that I and Professor Norito Kawakami first met in the 15th Asian Conference on Occupational Health (ACOH) in Kuala Lumpur in 1997. Since then we have continued our friendship and collaborations until now for over 25 years. In 2009, he kindly accepted my invitation to be the guest speaker of the "International Conference on Psychosocial Factors at Work: Job Stress Prevention and Work Ability Promotion" in which I was the chairperson of the organizing committee. I really appreciate all of his support. Moreover, we always see each other at the conferences of both ICOH and ACOH for many years. He has been my favorite speaker so I am always looking forward to attending his session in the conferences.

Currently, we are together conducting research on an international collaboration study of stress management for nurses in the post COVID-19 epidemic in Asia. Thanks Professor Kawakami for inviting me to join this excellent project. I am so proud to be a part of this project. It is a very good opportunity for me and my colleague to learn from his experiences.

My warmest congratulations and wishes him all the best, happiness and healthy life as he starts a new chapter of his life.



This is the photograph of the guest speakers of the International Conference on Psychosocial Factors at Work from various countries, including Professor Norito Kawakami. It was taken in 2009.

Orawan Kaewboonchoo,
Faculty of Public Health, Mahidol University, Thailand

Happy Retirement Norito Sensei!

Greetings! As a student of a great teacher, I am respectfully writing this letter to you. Owing to your great teachings, I successfully graduated from the University of Tokyo on time (2015 AD). Under your guidance/supervision, I could open my eyes to the scientific world and dive into it. Importantly, I noticed that I am able to see things through the eye of science. Even to this day I am implementing your given knowledge and I assure you that I will continue it. Your caring and motivating attitude helped me to overcome hard times and difficulties during my stay in Japan and the University. Your teachings won't be forgotten and hope to see you soon in Nepal. Happy retirement and good luck further onwards!



Bimala Panthee
Assistant Professor
Patan Academy of Health Sciences,
School of Nursing and Midwifery, Sanepa, Nepal

World Mental Health Surveys Initiative

Dear Norito – So many years have passed in our long and productive collaborations that it’s hard to know where to begin in writing this note. I guess the first thought I must get out of my head and onto the page is: I cannot believe that you are retiring! You are so young and energetic in your ideas and interactions that it’s shocking to pause and realize how many years you have been working. But then I look back and realize that you have done enough in the research domain for two careers. And you did this while at the same time bearing the responsibility of running a department at a major university. It has been 16 years now since you took the reins at the Department of Mental Health at UT. And then taking on the additional responsibilities of being a dean and at the same time running a department.

And you somehow managed to maintain your own research productivity all the while in addition to nurturing the careers of many young scholars. Norito, it’s a phenomenal record. And you did it all with consistently good humor, generosity, and integrity. In addition, your research is notable not just for quantity but also for high quality and for a great instinct to know what the important questions are. Examples include your work on disasters, workplace mental health, and most recently, digital mental health, all of which have subsequently become areas of immense importance to the field.

As I think of your willingness to be the first person to embrace new areas, I think back to many years ago when WMH was having a group dinner in Netherlands at a restaurant on a peninsula jutting out into the North Sea. John Fayyad sat down at a piano and started playing. Kathleen Merikangas, who was a bit tipsy at the time, stood up and sang and then Bedirhan encouraged everyone to get up and sing national songs. No one wanted to do it and you no less than the others. But we needed someone to start the process and you, bless you, did so, getting all your people to come up with you to sing a rousing rendition of Kanpai. You and your people were so wonderful, put

so much gusto into the rendition, and the song was so great that you created a stampede of people from other countries singing national songs. To my amazement, John knew how to play all these songs. And that was the beginning of our greatest WMH tradition of singing at the closing dinner, with all of WMH now embracing Kanpai as the Japanese song and everyone from all countries singing along with you each year. I enclose here some pictures over the years from the WMH meetings.

Norito, I very much hope that you get your new Department of Digital Mental Health off the ground. The world has changed greatly due to the COVID-19 pandemic. Mental health treatment is needed more than ever before in our lives. Digital interventions are the only viable solution. But the digital revolution has also created challenges, such as the solidification of extremism and intolerance. These can cause extreme distress, as we have seen during the lockdown phase of the pandemic, when remote communication replaced face-to-face communication. I guess every innovation has the potential for good and for bad. Innovations in digital communication are no exception. I am excited by the prospect of you tackling the many challenges involved in that domain in your new Department. Indeed, I am hoping that with your retirement we will have a chance to work with you more than in recent years and to profit from your great wisdom and energy. So here’s to many years to come of continued collaboration my dear friend Norito.



At the WMH annual meeting in Boston in 2016, with Ron Kessler (3rd from left) and WMH colleagues



Singing 'Kanpai', at the 2013 WMH meeting, Mackinac Island, Michigan



... Singing again the 2015 WMH meeting Boston



WMH meeting at Harvard Medical School in 2019



Ron (Ronald C. Kessler)
 Director, World Mental Health Surveys Initiative
 Harvard Medical School, Boston, Massachusetts, USA

Thank you so much

Dear Norito,

During the last meeting of the WMH initiative you told me that you will be retiring. I was surprised, because you are such a productive researcher and it feels you still have so much to contribute to mental health science, that it will be a major loss to the community of scientists in this field in Japan, but also across the whole world.

We have been working together for many years, and I remember well when you came to my lab in Amsterdam that we discovered that we have so many interests in common.

But apart from your important professional contributions to the field, you are also a warm and stimulating person and an important mentor for young researchers. It was also a pleasure to have one of your young researchers, Kotaro Imamura, for a visit of a couple of months in my department. This has certainly further strengthened our collaboration.

But of course I fully understand when you want to retire, although it is a major loss for the field. You have contributed so much in your working life that you have more than deserved to retire now. But I understand that you may continue to work on digital mental health, and if this will indeed happen I hope we can collaborate in this area too, as we have done extensively in the past too.

I wish you and your family all the best for this new phase in your life.

Warm regards,

Pim Cuijpers
Professor of Clinical Psychology
Department of Clinical, Neuro and Developmental Psychology,
Vrije Universiteit Amsterdam



Message from John McGrath

Dear Norito,

It has been a great privilege to work with you as part of the remarkable World Mental Health Survey Group.

You should feel very proud of your achievements – in particular you have made really important contributions to building research capacity in psychiatric epidemiology in Japan.

It has been a great pleasure working with you. I am eternally grateful for your kind hospitality during a visit to Japan in 2002. Looking back on some old photos today made me realize how lucky we all are to have you as a member of international psychiatric research community!

Good luck with your new projects!!

Cheers

John

Professor John McGrath
Queensland Centre for Mental Health Research, Australia
Niels Bohr Professor, Denmark



Norito's Triumph

Dear Norito,

It is a pleasure and a great honor to write some personal words now you are going to retire (Although I can hardly imagine what 'retirement' means to an ever hard working and engaged person as you are). We met for the first time at the ICOH-conference in Okayama back in 2005, where I was invited to deliver a key-note speech as a stand-in of Steve Sauter, whose daughter – when I remember well – was going to give birth to a baby. In a way, this occasion changed my life. It was the first time that I visited Japan and I instantly fell in love with this beautiful, interesting and mysterious country. The mystery for me still being that on the one hand Japan feels familiar because it is a prosperous, highly developed, western-style country where you can easily find your way and get around. Yet, on the other hand, the ancient, traditional beliefs and customs are quite difficult to understand and you sometimes really feel an outsider, coming from another planet. This is extremely fascinating to me.

I remember that we talked a lot about this. You have been an important teacher for me who helped me to understand the 'Japanese soul'. You played the role of teacher so well – as a real sensei – because you are also very familiar with western culture. For instance, you have visited my country – The Netherlands – many times and I know that you are interested in understanding our way of life as well. This is illustrated by the picture that was taken in 2010 in the garden of my place in Utrecht where I organized a Japanese-Dutch party with our Japanese guests who visited yet another ICOH-conference in Amsterdam and my team of Utrecht University (plus my family). Being a Japanese medical doctor, you once explained me that many Dutch words are still used in Japan like *メス* (from the Dutch *mes* – knife) because Dutch doctors from Deshima introduced western-style medicine in Japan in the 16th century. So our countries and cultures are connected for many centuries.

You invited me a couple of times to your institute at Tokyo university and stimulated the collaboration particularly with Akihito Shimazu, who also visited Utrecht for a 9-months sabbatical. I am very grateful that you enthusiastically endorsed the academic exchange between Utrecht and Tokyo, which has been very fruitful and resulted in many joint papers, book chapters, conference presentations, symposia and guest lectures. Most importantly, it boosted the scientific and societal interest in positive psychology in Japan, most notably work engagement. I witnessed how you have embraced this alternative perspective on occupational health, which illustrates your broad mindedness, then it is not that obvious at all for a traditionally trained occupational physician to focus on positive health and well-being instead of stress and burnout.

But perhaps most of all, I enjoyed your warm, hospitable personality that made me feel 'at home' at your institute right from the start. Working with you is a real privilege, not only at a professional but also at a personal level. I wish you all the best for the future as a retired professor and I'm sure that – in one way or another – you will continue to contribute to Japanese and international occupational health.

Prof. Dr. Ronny Bruffaerts
Head of Public Health Psychiatry, KU Leuven, Belgium



Representative of Japan

Dear Norito,

I had not in my life before sat next to someone from Japan so many times in conferences. I did not have that chance. And the impression I got about Japanese people is from you almost exclusively. So, I generalized. So lucky to keep this impression: serious, well-composed, super polite, super professional with a genuine devotion to the task ahead with very little distraction. And this I observed year after year during our WMH meetings all over the world put together by the truly exceptional and inspiring Ron Kessler. Japan and Lebanon sat close (alphabetically!) so it was a sure thing every year to see you next to me.

And then I read the news about you retiring: a very strange concept for me in the world of academia. I understand that younger people have to take over the reins, but I always wondered about this rule which seems to favor the young and yet, creates a disadvantage for the departments in so many ways and of course the older generations, especially if they are leaving their departments permanently: a purely employment-based strategy which deprives academia of the huge experience that age builds in so many soft and hard ways.

So, I hesitated before I decided to congratulate you for the retirement. I was sad at first. Then I saw you are moving to something new. It is a novel concept, and I can imagine it can be a wonderful new opportunity to embark on something new and not simply be frustrated and look for some new path we are forced to choose, leaving behind a project we nurtured for many, many years.

I truly hope that you will be enjoying the new job! Watching you over the years makes it very, very likely that you will, with the same qualities of devotion to the task and your super professionalism and above all your kind smile.

The problem is that I do not know how to say goodbye to people I know who are still alive. You see, my country (Lebanon) is battling every day with people leaving for good: it is painful in so many ways. Well, I hope I could see you again, who knows? And GOOD LUCK my friend: what a wonderful occasion to have met maybe the best representative of Japan.

Elie Karam
IDRAAC
Beirut - Lebanon



WPA meeting – Nara

Dear Norito

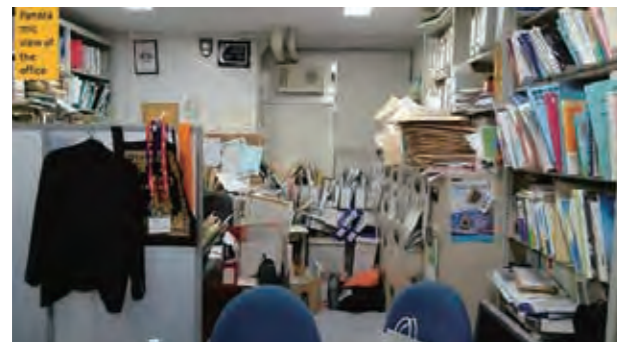
I would like to add some few words and illustrations to the very nice letter of Ron. First, to add on your very much appreciated participation at the song show, where nobody could replace you.



I very much appreciate your humor and kindness. Having had the chance to meet you with your students, I could see the quality of the teaching and the relationships you maintain with them.



I also had a chance to visit your office, which is, in my opinion, a true piece of art.



I could not figure out how possibly you will be able to leave your office. I guess this is all your work. The highly sophisticated classification method impressed me very much. It testifies to your many centers of interest and ultimately the digitalization may solve the move.

This very nice invitation was concerning the measurement of child mental health, in the context of work pressure on their parents, which is a key point in the work stress.

However, the most important event we did together was the organization of the World Psychiatric Association (WPA) epidemiology and public health section in Nara. The site was a dream, we had a *Noh* theater transformed into a conference hall in the middle of an historic park adjacent to very ancient temples. The theme was “trauma and mental health epidemiology”. Thanks to you, this was a unique encounter, in the context of the recent trauma of Fukushima which culminated at the session that you have chaired on nuclear disasters. Worldwide scientists who have worked on nuclear traumas were present and local people were talking as well. This was very emotional as well as thoughtful, and of the highest level of scientific quality. The section was so grateful to you for having made it possible.

And to close the event we could see the traditional Japanese dancers and singers. You became then vice president of the section and your presence there has been highly appreciated, thanks to your openness and scientific knowledge. This is without mentioning the pleasure to attend many WMH workshops with you, among them the group on religion and the one on services.

I heard you are turning toward digital medicine; this is great and I hope the retirement will not prevent you from continuing to bring to the field what it deserves.

Thanks for everything,



Viviane Kovess Masfety
Professor, Psychiatry & Epidemiology
Université de Paris, France

Distinguished Professor of Psychiatry and Public Health

Dear Norito,

Sincerest congratulations on your retirement. I have valued our collaboration on the World Mental Health (WMH) project and on the impacts of Fukushima on the well-being of people affected by the catastrophic triple disaster in Northeast Japan. Your work uniquely shines a light on the mental and social well-being of the Japanese population, and on the needs of the clinically vulnerable. It is a treasure for Japan and for world epidemiology.

We first met during the earliest days of our careers at an occupational mental health symposium in Texas in the 1980s!! So meeting you again when the WMH started, watching the difficult undertakings you pursued in Japan, and then working with you on epidemiologic studies of the stresses of Fukushima, seemed like natural extensions of our long-ago meeting. I've enjoyed seeing you at the yearly WMH meetings. I will always treasure our discussions during my visits to Tokyo and Fukushima. You and your colleagues had a unique lens into the effects of the shattering events of 2011 then and even now. Your papers are uniquely important.

I hope that your retirement brings you joy, peace and the deep satisfaction of knowing that your work has had an impact on mental health research and policy in Japan and throughout the world.

My very best wishes to you. It's an honor and a privilege to work with you side by side.

Evelyn J. Bromet
Distinguished Professor of Psychiatry and Public Health
Department of Psychiatry and Behavioral Health
Renaissance School of Medicine at Stony Brook University
Health Sciences Center



Best wishes to a valued colleague

I am delighted to say a few words about Professor Norito Kawakami on his retirement. It has been a pleasure collaborating with Norito for several years as a colleague on the World Mental Health Surveys Initiative of which he has been a consistent and effective member. Norito is a pleasant team player, always conscientious in making his contribution to team efforts. Outside of the Consortium, I have also enjoyed working with Norito and appreciating his expertise in occupational health as we both served as members of the WHO Landscape Forum on Mental Health in the Workplace. Given his energy, knowledge and international reputation, I am sure that Norito will continue to make important contributions to knowledge in the years to come. I therefore look forward to more opportunities to work with him in the years ahead.

Oye Gureje
Professor
University of Ibadan, Nigeria

WMH Memories

Dear Norito:

I have such fond memories of the early days on World Mental Health, and remember clearly your first CIDI training in Ann Arbor. You were eager to launch the study in Japan and you knew it was important to do it correctly. Your presence will be missed at our annual meetings -- your humbleness, kindness, and always good intentions to help other researchers. I'm very glad we were able to work together again this year to plan the new Japan study!

I wish you the very best in your retirement -- enjoy!



Stephanie Chardoul
Director, Survey Research Operations/
WMH Data Collection Coordinating & Training Centre
University of Michigan

Happy Retirement 川上先生

川上先生、ご無沙汰しております。ご退職おめでとうございます。

今までご指導どうもありがとうございました。感謝な気持ちがいっぱいです。2012年にベルギーのWMH会議で初めてお会いしてから以来、先生からたくさんの応援及びサポートをいただきました。また、すき焼きまで一緒に歌わせていただきました。それ以来、一緒にカラオケするのは毎年恒例の伝統となり、いつも先生から勉強させていただきました。毎年のWMH会議を楽しみにしていました。

先生が私を研究者にしてくださいました。それは、先生からいつもいい刺激を受けました。また、私の「悪い」日本語を訂正してくださいました。2017年に埼玉で開催されたWCE学会に参加させ、東京大学で発表をさせていただくことがきっかけとなり、博士課程に入学することになりました。

寂しくなりますが、先生がお忙しくならなくなり、いつか一緒に共同研究をしませんか。



Carmen Lim
PhD candidate
The University of Queensland, Australia

2006 to 2022



川上憲人教授 退職記念写真集
精神保健学・精神看護学教室での16年間の歩み



2006年

Mueser先生来日時、集会室での1枚。
日付がプリントされているのが懐かしい...!



2007年

Fisher先生に来日していただきました。
毎年のように、外国の先生を招待し、
研究をアップデートし続けてきたことを
感じます。



2008年

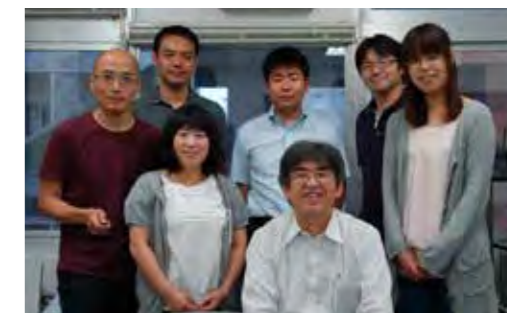
保健学同窓会での川上先生のご講演。
No health without mental healthは、
この教室の誰もが読んだ論文です。



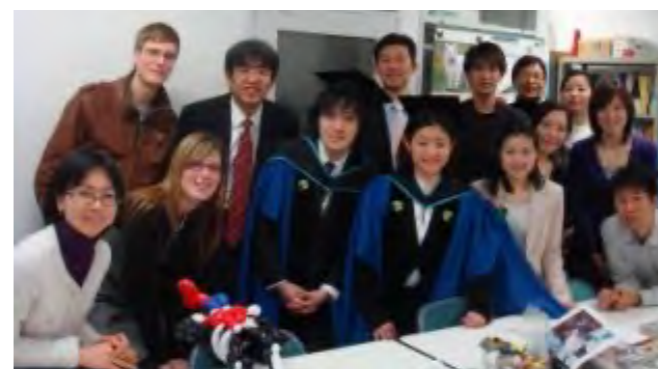
2009年

学部3年生とのイベント、題して
「3年生を励ます会」
集会室はずっとみんなの交流の場でした。

2010年 社会階層と健康 Youngの会 ワークショップ in草津



学部生さんも囲んでの実習打ち上げ



SPH修了式

2010年度のSPH修了式後のお写真。

アカデミックガウンを着ている
お二人のうち、左側は今村先生!

2011年度 日本のあちこちを

川上研は学会などの研究活動でも、教室のみんなとの交流でも、日本のあちこちを飛び回ってきました。2011年度は教室旅行で勝沼に行ったり、江ノ島に行ったり。よく学び、よく交流してきた教室なんだなあと感じます。

勝沼での教室旅行



みんなで江ノ島にも行きました

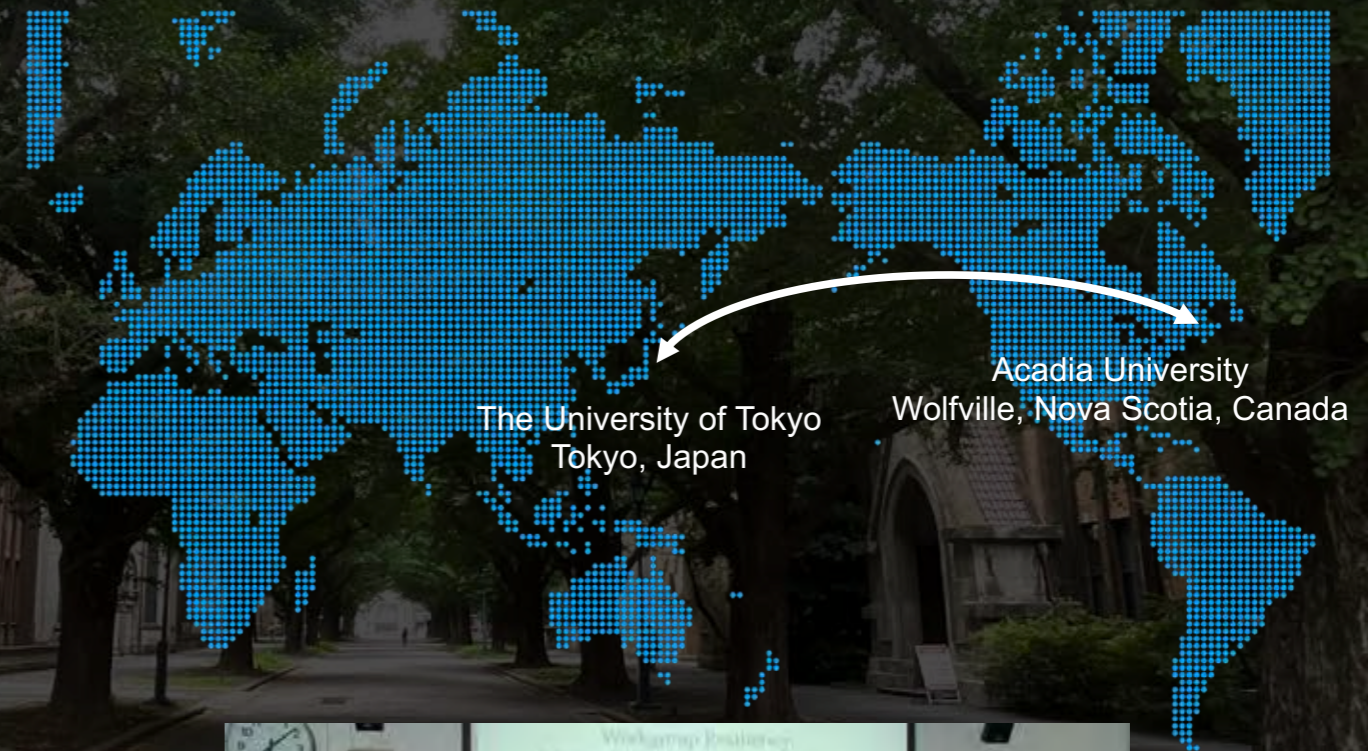


2012年度 世界ともつながって

国際学会に出席したり、世界の研究者とつながったり。常に世界の精神保健・精神看護の研究拠点として、知識を発信し、アップデートしてきた川上研。

2012年度はカナダのAcadia大学のMichael P. Leiter先生を東大にお招きし、職場のメンタルヘルスに関して学びました。

職場のメンタルヘルスを多様に捉える姿勢は、この研究室に一貫している軸の1つです。



Acadia大学（カナダ）のMichael P. Leiter先生との集合写真
この教室の職場のメンタルヘルス研究の歴史は長いですね



2013年度、川上先生が日本医師会医学賞を受賞しました。

「地域および職場における心の健康の実態、関連要因解明および対策に関する研究」として、日本医師会医学賞を受賞しました。また、第66回日本医師会設立記念大会で受賞講演を行いました。「科学的根拠と現場をつなぐ」というビジョンを共有する川上先生の背中を見れたことは学生にとって本当に素晴らしい学びの時間でした。



お祝いの色紙とお花を川上先生に手渡す宮本先生・島津先生。本当にいい笑顔！



宮本先生 ベストティーチャーアワード受賞！

このときにはじめて、川上先生とのツーショットを撮っていただいたのでした！
ありがとうございました！（宮本）

今でもたくさんの人にとって、ベストティーチャーな宮本先生！授業を受けた誰もが宮本先生の虜になっています。私がまだ高校生のこの頃から、変わらずずっと素敵なんです！！
これからも、いろいろな人の人生を変えてくださるような、ベストティーチャーでいてください！
（2021年度 健康科学・看護学M1 飯山）



2014年度 CREW研修会



大学院に入ると、想像すらしていなかった
すごい体験ができるのだと、感動した
研修会でした。

このときのワクワクを胸に、
これからCREWに取り組みます！
（澤田先生）



2014年度、教室メンバーと 東京ドームへ野球観戦！

私が精神保健学教室に配属となった直後に、教室の皆さんで東京ドームまで行き、野球応援したことは、とても衝撃的でした！試合の結果は覚えていませんが（笑）、楽しかった思い出です。
（2020年度博士課程卒 櫻谷先生）

応援も忘れ、とにかくみんなで一緒に楽しむことに一生懸命な秋の夜でした！
（澤田先生）



2015年度も、よく学び、よく笑いました！



集会室での素敵な2枚をピックアップ。
川上研のみんなにとって、意見を交換したり、楽しく会話したり、みんなとご飯を楽しんだり。
いろいろな思い出がたくさん詰まっている場所が、集会室なんだなあと思います。



2015年 精神保健学 I 最終発表後

みんなの中心になって、笑顔いっぱいの川上先生。
グループ発表会に向けて、どのグループもアイデアを練って頑張りました！
楽しかった夏の思い出です。（2020年度博士課程卒 櫻谷先生）

2016年度 島津先生のご栄転

2006年10月から川上先生と一緒に精神保健学教室を作り上げてきた、島津先生が2017年3月に北里大学へご栄転されました。

職場のメンタルヘルスについて、研究を深めつつ、実践への橋渡しも行ってきた島津先生。
本当にたくさんの方のことを教えて下さいましたし、
今もなお、たくさん学ばせていただいている先生です。



島津先生がおふたり…！？

2016年度 TOMH研究会の打ち上げ

川上先生 還暦お祝いの会

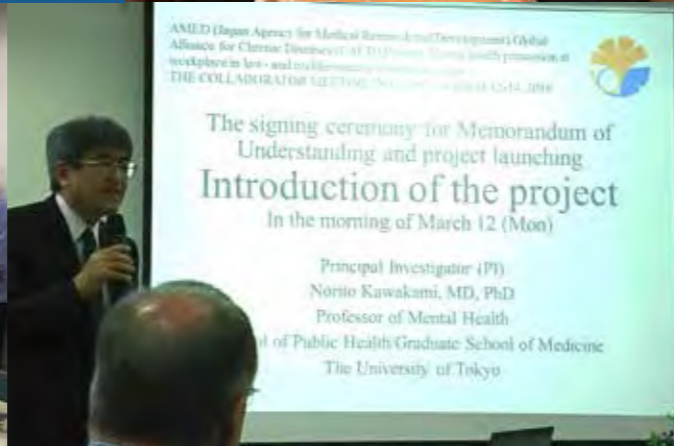


2017年3月2日
川上先生の還暦のお祝い会
記念アルバムも作成しました！





2017年度



世界のさまざまな機関と連携し、世界の国際拠点として活躍

川上研は世界のさまざまな領域で活動してきました。

2017年には、北京大学・ソウル大学・東京大学の公衆衛生系大学院が研究・教育・実践の連携のもと第10回PeSeToシンポジウムがソウルで開催されました。また、2017年度末には、ベトナムでのプロジェクトが開始されました。国内外問わず、さまざまな機関・研究施設と連携してプロジェクトを推進している川上先生を見て、いつも「自分も頑張ろう！」と勇気をいただいていた。



2018年度

2018年度は教室にとって変化が多かった年だと思います。馬場先生のご栄転や、西先生のご着任。また2018年度末には、川上先生が6年間務められた公共健康医学専攻 (SPH) の専攻長を退任されました。

とはいえ教室の雰囲気は変わらず、楽しく学ぶ！



伝説のイベント、カクテルパーティー

当時まだ研究室に在籍していない学生でさえ知っている、カクテルパーティー。教室の歴史を語る上で外せない！話を聞けば聞くほど、いい教室だなあ、とほっこりしてしまいます。

ここで参加したお二方のコメントを紹介！

メニューまで用意され、Bar Imamuraの夜は忘れられません！（帯包先生）

It was a very fun night!!
今村先生のカクテル超美味しかったです！（飲みすぎに注意！）（南澤さん）



2019年度



教室旅行 in 鎌倉

研究室の教室旅行は、お子様も大歓迎な温かい雰囲気ですよね。初めて参加したときは、本当に和気あいあいとした様子に驚いた思い出があります。

2019年度もたくさんのメンバーと楽しい時間を

2019年も教室のみなさまとたくさんのイベントを楽しみました。

毎年恒例、新入生歓迎会。今年もお鍋を院生が作り、新しい学生たちと交流を深めました。

納涼会も例年通り開催されました。「お酒飲みながら、研究の話もするんだ!？」と驚く学部生もいたようです。

忘年会では、今村先生のオランダ留学を送り出すために、院生による演奏もありました。ピアノ・ヴァイオリンと、本当に素敵な演奏でした!

2019年度も川上研は多くを学び、共有し、助け合う1年となりました。

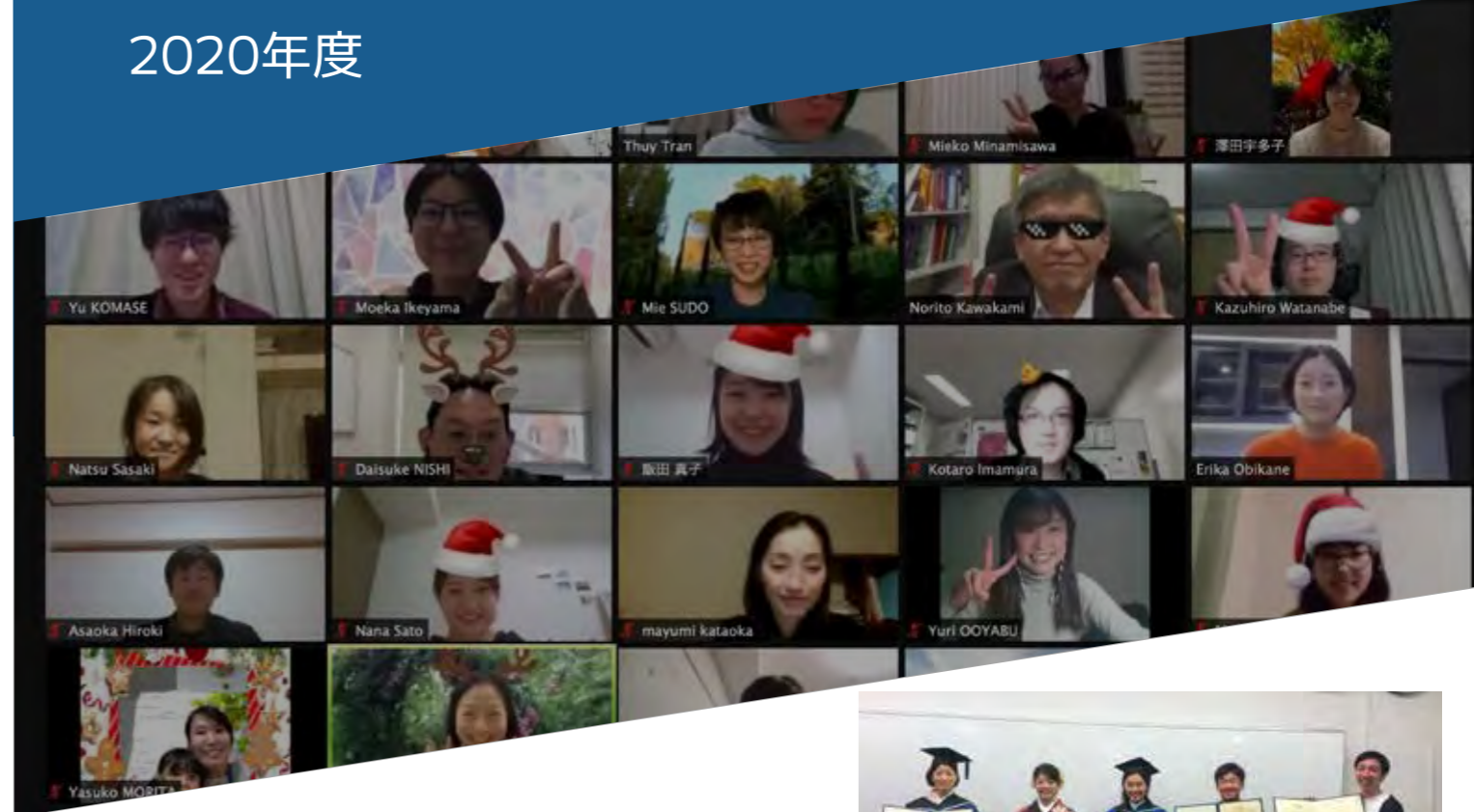
教え子の旅立ち

学部生・院生と合わせて多くの学生が川上先生の下でたくさんのことを学び、旅立っていきます。

川上研は先生からのご指導に加え、学生同士の交流・助け合いも活発なところも良いところだな、いつも感じます。学ぶこと・助けあうこと。たくさん吸収して、社会に羽ばたく教え子たちです。



2020年度



変化の多かった2020年度

COVID-19の感染拡大とともに、歓迎会・忘年会などの教室イベントに加え、学位審査などもすべてオンラインになってしまいました。

また、稲垣先生・渡辺先生・深澤先生のご栄転もあり、教室の中でも変化が多い年だったと思います。

しかしながら、気持ちはいつも教室のみなさまとつながっていました! コロナ禍でも、学び合い助け合う1年となった2020年度でした。



川上先生、紫綬褒章受賞!

地域住民・労働者を対象とした多くの研究に基づき、心の健康問題の実態解明と対策立案への貢献が評価され、紫綬褒章を受賞されました!

「自分が信じていることができるビジョンを掲げ、成長を共有するんだよ」と川上先生は講義でお話していました。こうした受賞の場で「科学的根拠と実践をつなぐ」というビジョンをいつも見せてくださる川上先生は、社会の中でのリーダーシップも教えてくださっていたんだな、と改めて気付かされるイベントでもありました。

本当に、おめでとうございます!



2021年度



2021年度

2021年度は川上先生の最後の年度ではありましたが、いろいろなチャレンジやアップデートも行われました。

引き続き、オンライン中心のコミュニケーションでしたが、M1さんが開催した納涼会はとてもおもしろい企画でした。Zoomでお話するだけでなく、「この夏したいこと」というお題でみんなで書き出す企画も用意してくれました。いつも以上に楽しい時間となったことを覚えています。

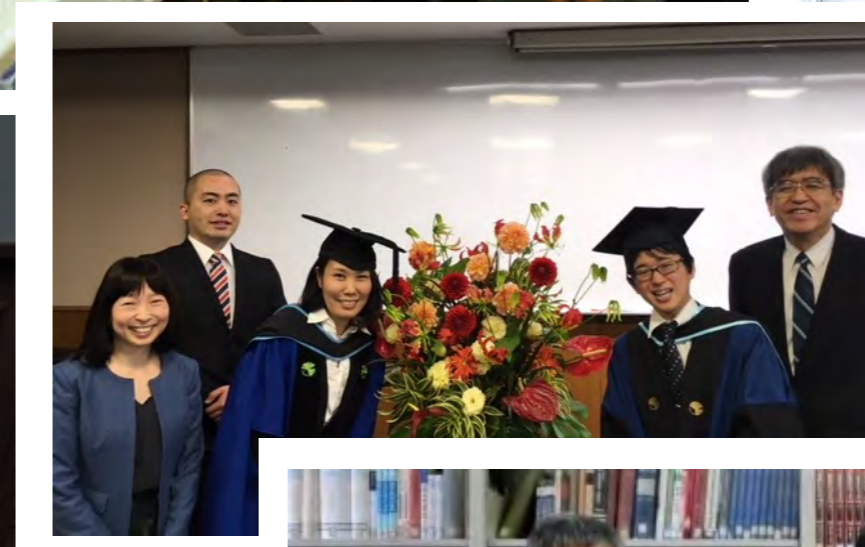
学生同士の助け合いも活発だったと思います。Rを使った分析に関する講義を院生が企画して、オンラインで助け合ったりもありました。コロナがあってもなくても、川上研は川上研ですね！

川上先生の退職に向けた作業もありました。とてもさみしい気持ちもある一方で、いろんな思い出話も登場し、いつも通り楽しい時間となりました。



教室整理をしてくださった川上先生と院生おふたり。廊下にはたくさんの本と報告書が並びました。

川上先生と数々の卒業生たち



コロナ禍でも国際拠点として

コロナ禍で留学などが難しくなる中でも、川上研は国際的な連携を続けていました。

2021年では、約8ヶ月の実習のためにカナダから来日した学生を受け入れました。

本当にいつでも門戸が開かれていて、国内外問わず、たくさんの方のことを学ぶことができるんだな、と感じました。



川上先生と数々の卒業生たち



三四郎池にて



安田講堂前にて



先生・スタッフの皆様



Public Mental Healthゼミ



職場ゼミ



看護ゼミ



学部生最終講義



最高のカメラマン窪田先生と
ちいさなカメラアシさん



医学部3号館前



川上先生、本当にありがとうございました。

川上先生、私たちに研究の素晴らしさを教えて下さり、ありがとうございました。
探究心を持ち続け、物事の本質をどこまでも掘り下げる先生の姿勢、
これからもお手本にしていきます。今後のご活躍も楽しみにしております。



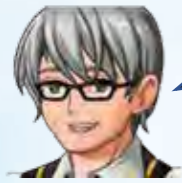
記念アルバム作成チーム



帯包エリカ 小竹理紗 秋山浩杜 辻利佳子

大学院生企画

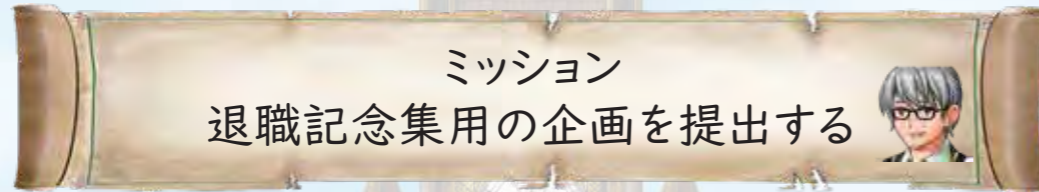
精神保健学・精神看護学
大学院生一同



さて、今年度で私も卒業です。

(寂しい…)

(ちゃんと論文出して、先生と一緒に卒業できるかな…)



卒業された先輩たちとも楽しめるものがないな

ん~

!



川上先生のご講義(精神看護学特論)で毎年紹介される
 Research Map¹⁾をオマージュし、
 先生との、時に厳しく、時に暖かいエピソードを
 Role-Playing Game: RPG 風に作成できるかな…
 という見切り発車で始まった院生企画です。
 紙面上でも、実際のRPGとしても、
 暖かな目でお楽しみいただけましたら幸いです。

1) Harburg, Ernest. (1966). Research Map. American Scientist, 54, 470.

大学院生企画 (RPG風)



←こちらのQRコードを読み取ると、
ゲーム公開ページにとびます。

ログインはせず、→
画面の×ボタンを押していただくと
ゲームが始まります。

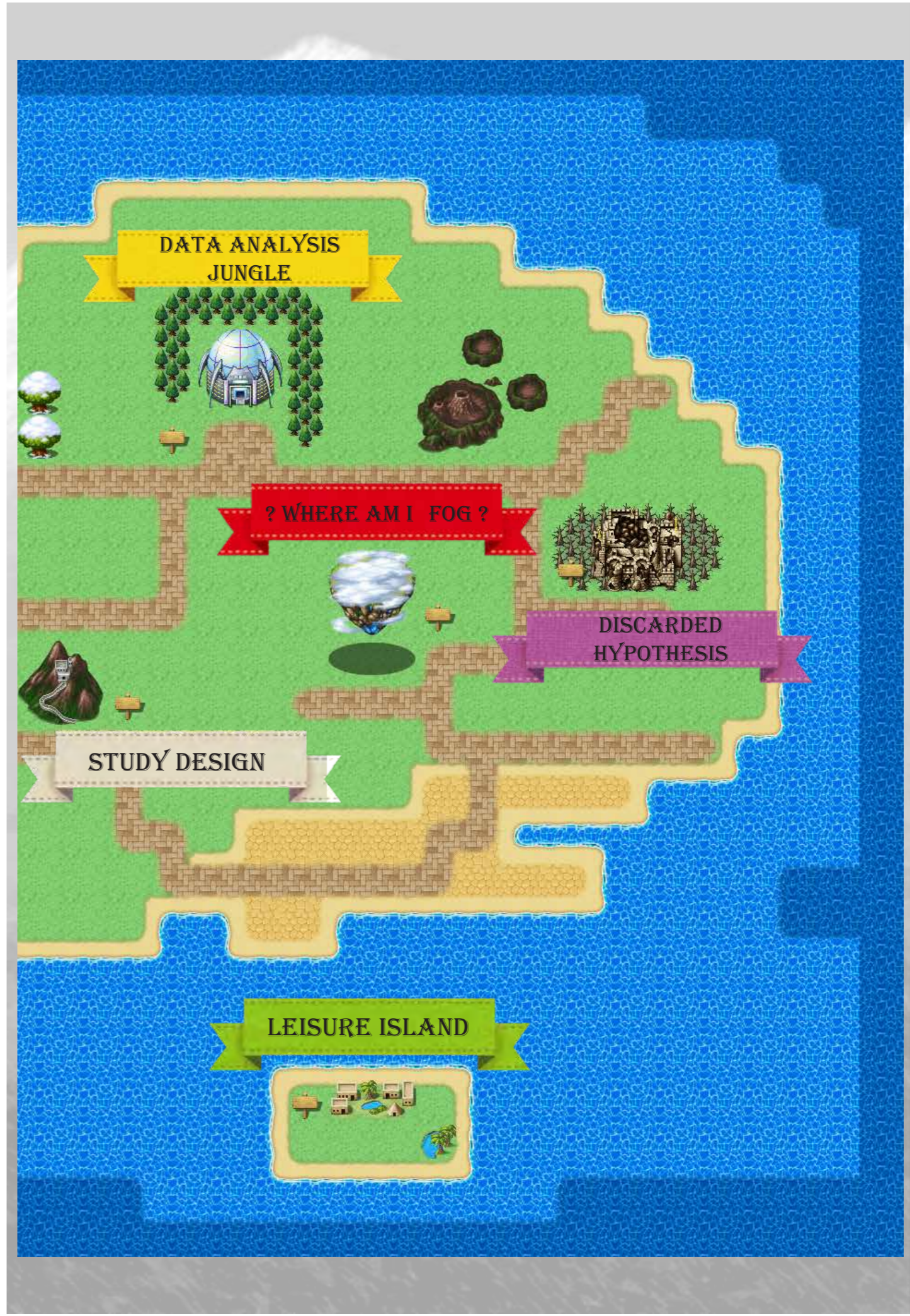
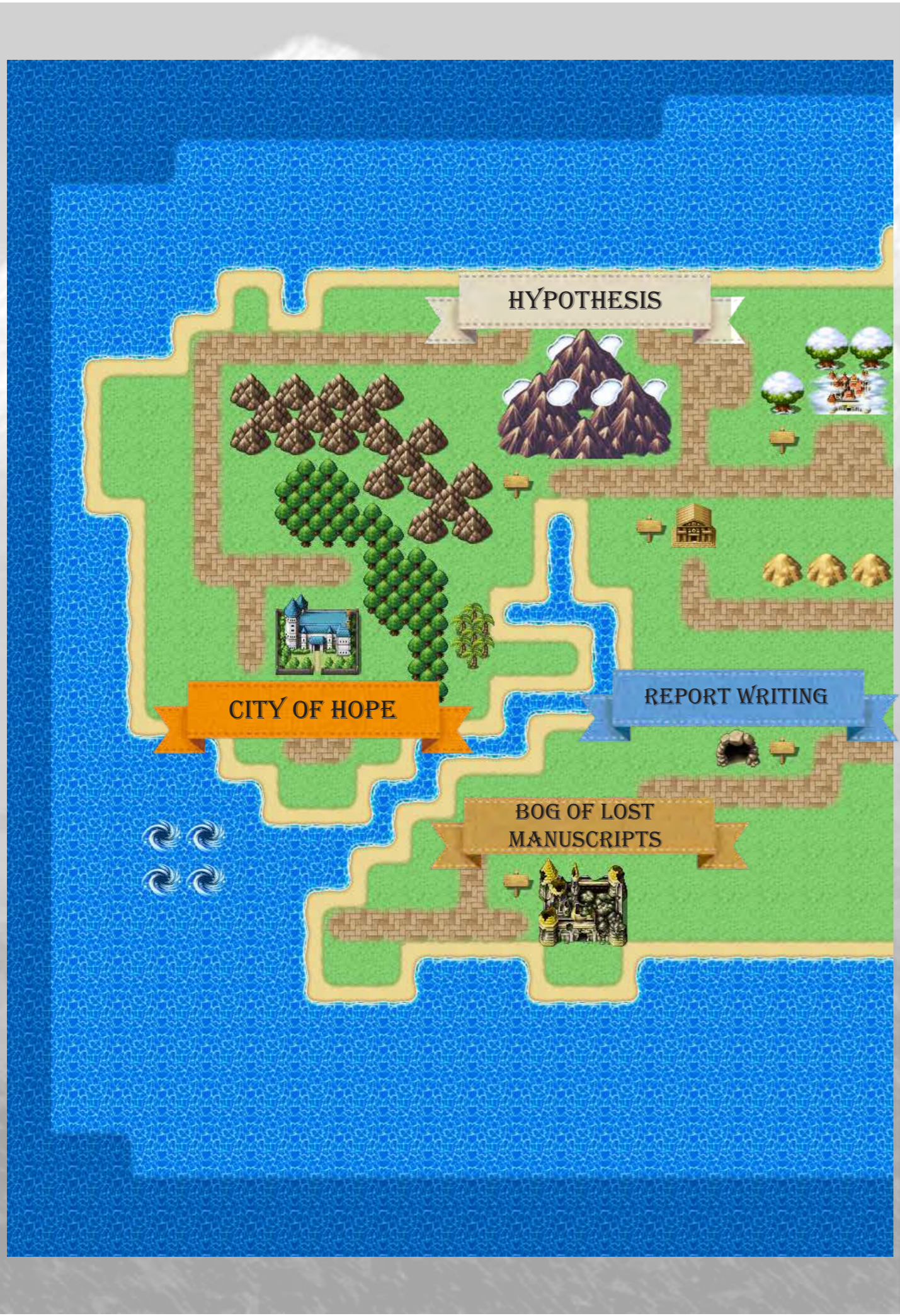


これはかつてのあなたの物語
もしくは、これからの物語。

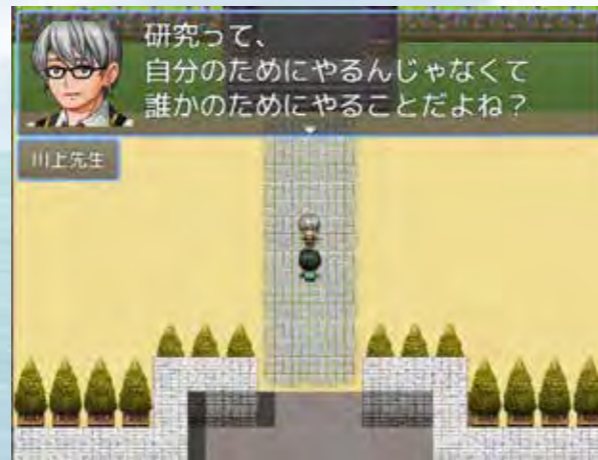
かつて、研究の道を志した研究者の卵は
仲間とともに研究を進め、
その成果によって世界に平和が訪れた。

それからXX年、
新たな課題が誕生の兆しを見せ、
こころの健康への関心はさらに高まってきた。

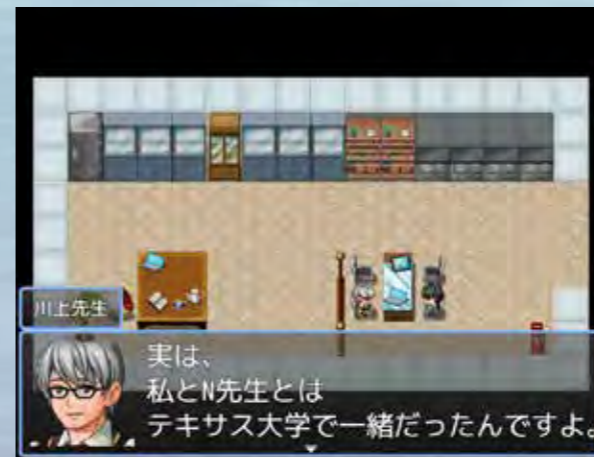
20XX年、
研究というフィールドに心惹かれ
新たに扉をひらくのは……



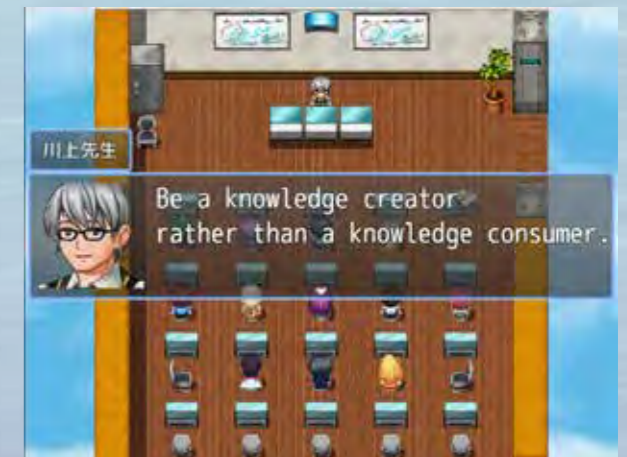
迷える(子)羊



世～界は、せ～まい



洗礼



ストレングスマodel



占い師？



諦めたらそこで…



動け、動け、動け



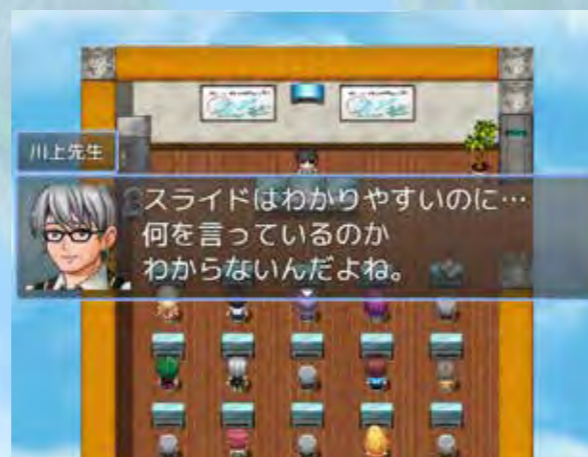
† モーゼ †



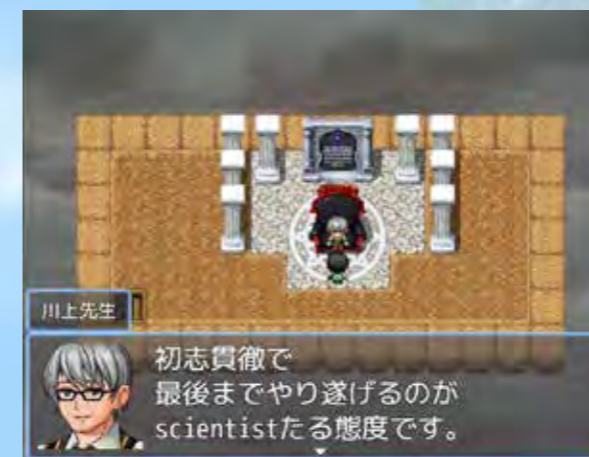
頻出問



あれ、皆にも刺さってる…？



研究者道



敵/味方は、自分



ツルン♪



大志を胸に



救し



表現の泉



書き続けること



論文の査読が返ってきたー。



解析方法に指摘が…。
先生、
このあたりの文献が使えるでしょうか。



それでは、
ちょっと読み込んでみましょうか。



はい！



川上先生

論文を真剣に書くこと
リバイズすることは大事ですね。



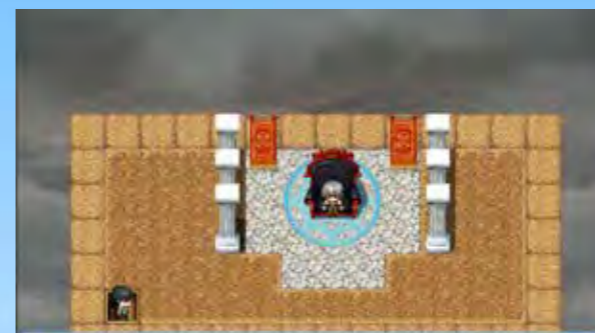
川上先生

論文を書かない研究者は
時代遅れになってゆくと思います。



本当にその通りだと思います。
量産までは行かないにしても、
コンスタントに論文を出すようにしましょう。

This is the moment



5誌目もリジェクトされてしまった…
次こそ…！



先生、アクセプトされました！



川上先生

論文アクセプト
おめでとうございます！



ずっと丁寧に指導してもらい
アクセプトも一緒に喜んでくださり
本当にありがたいな。



おめでとうー！！



も、主役のお出まし！

エイヒレには、マヨ七味



よく頑張りましたね。



の鍋会。

いよ、研究者の仲間入りだね。
んなテーマを考えてるの？

こうして、
またひとつ、世に新たな研究が生まれた。
世界のどこかで
誰かに読まれ
研究の道はつながっていく。
これは、研究というフィールドに
心を惹かれ、集い、
時に泣き、
時に笑い、
大志を抱き、
歩いてみたり、立ち止まってみたり
また歩き始めたり、
そんな誰かの物語。

謝辞

東京大学大学院
精神保健学 / 精神看護学分野の皆様
卒業生の皆様
川上先生と皆様の出会いがなければ、
この作品は生まれませんでした。
最大級の感謝をこめて。

we dedicate this game to
PrOfessor Norito kawakami.

Thank you for All.

終
制作・著作
院生有志

川上 憲人教授退職記念集

2022年3月 発行

発行元 川上 憲人教授退職記念事業実行委員会

実行委員メンバー：

西 大輔，宮本 有紀，今村 幸太郎，
澤田 宇多子，帯包 エリカ，南澤 三恵子，
浅岡 紘季（院生代表），小竹 理紗（院生代表）

アルバム製作：秋山 浩杜，辻 利佳子，
小竹 理紗，帯包 エリカ

大学院生企画：小竹 理紗

原稿編集：飯田 真子，浅岡 紘季，
大藪 佑莉，小川 明夏，
澤田 宇多子，帯包 エリカ

特設ホームページ：

<https://plaza.umin.ac.jp/heart/kawakami/>

編集・印刷 江戸クリエート株式会社

東京大学大学院医学系研究科
精神保健学分野・精神看護学分野
〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1
電話: 03-5841-3364
FAX: 03-5841-3392

